

語学研究所論集

第23号

2018

研究ノート

Quizás と「たぶん」	川上 茂信	1
---------------	-------	---

特集「否定、形容詞と連体修飾複文」

まえがき	風間 伸次郎	17
------	--------	----

研究ノート

ウルドゥー語の否定、形容詞と連体修飾複文	萬宮 健策	39
----------------------	-------	----

データ：「否定、形容詞と連体修飾複文」

ドイツ語	成田 節	49
アイスランド語	渡邊 萌	61
フランス語	秋廣 尚恵	69
イタリア語	久保 博	77
スペイン語	喜多田 敏嵩, カテリネ・シフエンテス	89
ロシア語	阿出川 修嘉	109
ポーランド語	森田 耕司	123
ウクライナ語	小川 暁道	131
チェコ語	浅岡 健志朗	139
ブルガリア語	菅井 健太, チャラコヴァ・マリア	145
ラトヴィア語	堀口 大樹	151
リトアニア語	櫻井 映子	159
フィンランド語	坂田 晴奈	169
エジプト・アラビア語	長渡 陽一	181
マレーシア語	野元 裕樹, ムハッマド・ファリス・シノン・ビン・マスニン	189
メエ語	青山 和輝, 黒島 規史	201
中国語	加藤 晴子	211
朝鮮語	黒島 規史	219
タタール語	菱山 湧人	229

モンゴル語 (ハルハ方言・チャハル方言)	ホリロ	235
ナーナイ語・エウエン語・ソロン語	風間 伸次郎	247
グイ語	大野 仁美, 中川 裕	267

特集補遺「情報標示の諸要素」

データ:「情報標示の諸要素」

ドイツ語	成田 節	279
------	------	-----

Journal of the Institute of Language Research

No. 23

2018

Note

Quizás and tabun Shigenobu Kawakami 1

Special Issue 1 :

“Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification”

Foreword Shinjro Kazama 17

Note

Negation, Adjectives and adjoint modification in Urdu
..... Kensaku Mamiya 39

Data

German Takashi Narita 49
Icelandic Moe Watanabe 61
French Hisae Akihiro 69
Italian Hiroshi Kubo 77
Spanish Toshitaka Kitada, Katherine Cifuentes 89
Russian Nobuyoshi Adegawa 109
Polish Koji Morita 123
Ukrainian Akimichi Ogawa 131
Czech Kenshiro Asaoka 139
Bulgarian Kenta Sugai, Maria Chalakova 145
Latvian Daiki Horiguchi 151
Lithuanian Eiko Sakurai 159
Finnish Haruna Sakata 169
Egyptian Arabic Youichi Nagato 181
Malay Hiroki Nomoto, Mohd Farez Syinon bin Masnin 189
Mee Kazuki Aoyama, Norifumi Kuroshima 201
Chinese Haruko Kato 211
Korean Norifumi Kuroshima 219
Tatar Yuto Hishiyama 229

Mongolian (Khalkha dialect, Chakhar dialect)	Hao Rile	235
Ewen, Solon and Nanai	Shinjro Kazama	247
Glui	Hitomi Ono, Hiroshi Nakagawa	267

Special Issue 2 : Supplement “Markers of information structure”

Data

German	Takashi Narita	279
--------	-------	----------------	-----

<研究ノート>

Quizás と「たぶん」 *Quizás and tabun*

川上 茂信
Shigenobu Kawakami

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨:

スペイン語のモダリティ副詞 *quizá(s)* はしばしば「たぶん」と訳され、多くの学習者向け文法書には *quizá(s)* を含む「疑いの副詞」の説明に「たぶん」が用いられている。しかし、筆者の印象では「たぶん」は *quizá(s)* よりも高い蓋然性を示し、適切な訳語ではない。学生に説得力のある説明をするため、スペイン語話者が *quizá(s)* を含む文に感じる蓋然性のデータと日本語話者が「たぶん」に感じる蓋然性のデータを集めるインフォーマルなアンケート調査を行った。その結果、筆者の印象が裏付けられ、「たぶん」は *quizá(s)* の訳語として相応しくないことが確認された。また、アンケート結果から、スペイン語の「疑いの副詞」の研究のための示唆がいくつか得られた。

Abstract:

The Spanish modal adverb *quizá(s)* is often translated to *tabun* in Japanese, and many grammars for learners of Spanish use *tabun* when introducing “adverbs of doubt”, which invariably include *quizá(s)*. However, our impression is that *tabun* expresses too high a degree of probability to properly translate *quizá(s)*. To dissuade our students from using *tabun*, we conducted two informal questionnaire surveys, aimed at gathering data on impressions that Spanish and Japanese speakers get of the probabilities shown in sentences containing *quizá(s)* and *tabun*, respectively in their own language. The comparison of the results confirms our supposition and shows that *tabun* is not a right word to translate *quizá(s)*. The results also give suggestions for further studies of Spanish “adverbs of doubt”.

キーワード: モダリティ副詞、叙法、スペイン語、日本語

Keywords: modal adverbs, mood, Spanish, Japanese

1. はじめに

スペイン語の *quizá(s)*¹ は、伝統的に「疑いの副詞」と呼ばれるグループに分類され、西和辞典では「たぶん」という訳語が当てられている。しかし、日本語母語話者であるスペイン語学習者としての私の語感では、「たぶん」は *quizá(s)* よりも「疑惑度」が低く、訳語として相応しくない。授業で学生が *quizá(s)* を「たぶん」と訳したら、「たぶん」は(確信度が)強すぎると思う、と説明している。しかし、これは個人的印象の域を出るものではなく、辞書を疑うことを知らない学習者も多いので、今までのところ効果的な指導はできていない。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deedja>

¹ この語には *quizás* と *quizá* という異形態がある。本項では *quizá(s)* を使うことにする。

しかし、これでは少なくともスペイン語教育の観点から望ましくないと考え、学生たちを説得するためにインフォーマルなアンケートを実施した。内容は、スペイン語教育に携わるスペイン人を対象とした、スペイン語についてのものと、スペイン語を学習する日本語話者を対象とした、日本語についてのものからなる。記述的に十分な根拠をもって *quizá(s)* と「たぶん」を対照するためには、両者が持つモダリティ的価値をきちんと分析する必要があるが、今回のアンケートはそれを目指したものではない。しかし、当初の目的を達成できる結果が得られただけでなく、*quizá(s)* を含むスペイン語の「疑いの副詞」について議論を深めうる論点が見つかったので、研究ノートとして報告することにした。

スペイン語の「疑いの副詞」の多くは、動詞の叙法として直説法とも接続法とも共起する。そして、接続法との組み合わせでは疑いの度合いが増すと説明されることが多い。しかし、従来の学習文法の記述は、この叙法の交替に目を奪われて、それぞれの副詞の働きに十分注意を払って来なかったように思われる。

以下、第2節では日本語でなされてきた *quizá(s)* の記述をいくつか紹介し、第3節で2つのアンケートの結果を報告する。最後に第4節でアンケート結果が示唆する論点を挙げることにする。

2. 日本における *quizá(s)* の扱い

2.1. 学習辞典

東京外国語大学でスペイン語を専攻する学生が多く使っている辞典は、白水社の『現代スペイン語辞典』（宮城 & 山田 1999）と小学館の『西和中辞典』（高垣 2007）である。

まず宮城 & 山田 (1999: s. v. *quizá(s)*) は「たぶん、おそらく」の訳語を与えている。多くの学習者はここだけ見て「たぶん」を使っているものと思われる。しかし、この辞典では用例を直説法のものや接続法のものに分け、後者は「疑念が強い」と注記しており、日本語訳でその違いを出そうとしているようだ。なお、これ以降挙げる全ての例文において、原文にあるイタリック・太字・下線などは無視し、“~”による省略は適宜補った。そして、直説法の動詞はイタリックで、接続法の動詞は太字で示すこととする。

- (1) *Quizá(s) hará buen tiempo mañana.* 明日はたぶん晴れるだろう。
- (2) *Quizá(s) no lo **creas**, pero es cierto.* 君は信じないかもしれないが、それは本当だ。

一方、高垣 (2007: s. v. *quizá(s)*) は「おそらく、もしかしたら」という訳語を与えている。用例には、接続法のもを挙げている。

- (3) *Quizá **sea** posible ese cambio.* おそらくその変更は可能だろう。

その上で、「動詞は接続法を取ることが多いが、話し手の確信の度合いが強いと直説法を用いることがある」と述べ、宮城 & 山田 (1999) と異なって、叙法の選択に頻度の差があるとしている²。

² スペインとラテンアメリカの書き言葉を調べた Woehr (1972: 322) によれば、スペインでは直説法 34 例/接続法 65 例、ラテンアメリカでは直説法 32 例/接続法 45 例で、多少の地域差があるにせよ、接続法 110 例は全体の 62.5 パーセントになる。しかし、スペイン・ラテンアメリカの話し言葉を対象にした DeMello (1995: 350) によれば、直説法 197 例 (64 パーセント) に対して接続法は 113 例 (36 パーセント) だった。また、メキシコの話し言葉を対象にした Bayerová (1994: 65) によれば直説法 10 例に対して接続法 9 例。スペイン王立アカデミーのコーパス CREA から口頭と雑誌のデータを対象にした寺崎 (2011: 213) によれば、直説法 (寺崎の「直説法」と「推測法」を合算した数値) が 52.3 パーセント、接続法が

(4) Quizá es la única solución. 多分唯一の解決法だろう。

用例にあてた訳語は、接続法が「おそらく・・・だろう」、直説法が「多分・・・だろう」で、訳し分けが確認できる。

2.2. 訳し分ける学習文法

伝統的に、日本でのスペイン語教育で quizá(s) が導入されるのは接続法の用法のひとつとして「疑惑文」が取り上げられるときだ。例えば福畠 (1995a: 336) は、「単文での接続法」を説明する中で「疑惑文は、「たぶん、おそらく」を意味する quizá, tal vez, probablemente などの副詞に導かれるが、疑いの程度が少ないときや、これらの副詞が後に来るときは、直説法を用いる」と述べて、次のような例を挙げている。

(5) Quizá lo sepas. ひょっとしたら君はそれを知っているかも知れない。

(6) Quizá lo sabes. たぶん君はそれを知っているだろう。

福畠は、まず quizá の意味を「たぶん、おそらく」としているのだが、例文の訳には、動詞が接続法の例 (5) では「ひょっとしたら・・・かも知れない」を使い、直説法の例 (6) には「たぶん・・・だろう」を用いている。一方、同じ著者が別の箇所では quizá と接続法の組み合わせを「おそらく・・・だろう」と訳している。

(7) Quizá tengas razón. おそらく君の言うことは正しいだろう。(福畠 1995b: 418)

また、上田 (2011: 224) は「主節の接続法」の中で「«Acaso / Tal vez / Quizá(s)+ 接続法» で「疑惑」(「たぶん、おそらく」) の意味を示すとし、「直説法を使うと事実として認識されるので、より実現性が高くなる」と述べて、以下の例文を挙げている。

(8) Quizá llueva esta tarde. たぶん今日の午後は雨になるでしょう。

(9) Date prisa. Tal vez vamos a perder el tren. 急いで。列車に乗り遅れるかもしれないよ。

上田は quizá と接続法の例 (8) を「たぶん・・・でしょう」で訳している。直説法の例 (9) は quizá ではなくて tal vez との共起だが、叙法によって訳し分けていると考えて良いだろう。私には、上田が直説法にあてた「・・・かもしれない」の方が「実現性」はむしろ低いように感じられるが、日本語母語話者の間に存在する感じ方の違いの例として興味深い。

2.3. 訳し分けない学習文法

手元の学習者向け文法書を見ると、quizá(s) と共起する叙法の違いを訳し分けない (あるいは訳し分けが確認できない) ものの方が多い。高橋 (1967: 311) は quizás に対して接続法の例文のみを挙げている。例 (7) と実質的に同じ文だが、「たぶん・・・だろう」で訳している。

47.7 パーセントだった。CREA の 2004 年以降のデータを見た土井 (2009) の調査でも、スペインでは接続法が 55 パーセントだが、ラテンアメリカでは 37 パーセントにしかならない。従って、実際には「接続法を取ることが多い」とは言えない。

(10) Quizás **tengas** razón. たぶん君のいうとおりだろう。

小林 & Gallego (2009: 203) は「「予測」を表す次の副詞 (句) が文頭にあれば、一般に接続法が続きます。しかし、しばしば直説法も見られます」と述べている。

(11) Quizá(-s) los dos se **conozcan** ya. 多分 2 人はもうお互い知ってるよ。

(12) A estas horas, quizá(-s), *hay* mucho tráfico en el camino.

例 (12) は quizá(s) が「文頭でなければ、直説法が用いられ」る例として挙げられている³。日本語訳はつけられていない⁴。

西川 (2010: 221) は「独立疑惑文は、「たぶん、おそらく」を意味する *quizá, tal vez, acaso, probablemente* などの副詞に導かれる」とし、「現在および未来に関する疑惑は、接続法現在を用い」、「疑いの程度が低い場合には直説法が使われる」と説明している。例文の訳には「たぶん」を使っている。

(13) Quizá Marta no **llegue** a tiempo. たぶんマルタは時間通りには来ないよ。

(14) Quizá *conoces* a esa bibliotecaria. たぶん君はその司書を知っているよ。

寺崎 (1998: 220) は「疑惑文は、ある事象に対する話し手の推測を表す」として、「可能性を意味する副詞が文頭に置かれ、[*quizá / tal vez / acaso / posiblemente* + 接続法] の構造をとる」と述べ、「現在または未来の事象を推測する場合、動詞は接続法現在が普通であるが、接続法過去または条件法未来や直説法現在が用いられることもある。ただし、直説法現在を用いるのは規範的に見て正しくないとされる」と説明している。また、直説法の場合は「可能性の高い意味合いを帯びる」と言う。例 (16) は「発話時点よりも前の事象を推測する (p. 221)」場合で、直説法現在完了形の使用は「口語」とであると説明している。

(15) Quizá él **venga** esta mañana y tal vez no disponga de mucho tiempo. たぶん今日の午前中に彼は来るでしょうけど、おそらくあまり時間はないでしょう。

(16) Quizá *has recibido* noticias de Venecia... たぶん君はヴェネツィアからの知らせを受け取ったのだろう・・・

三好 (2016b: 65) は「いくつかの疑いの副詞で推測の意味が表現できます。単なる想定の内容なら接続法になります。直説法現在や直説法未来も使われます」と述べて、直説法と接続法の動詞を単一の例文に埋め込んでいる。

³ この説明は誤り。正しくは、問題の副詞が文頭でなくても動詞の前にあるときは叙法の交替があり、後にあるときは直説法になる。例えば «Un pan dividido quizá **alimente**, pero dividido en doce se convierte en migajas (RAE & ASALE 2009: §25.14)» 「切り分けたパンは栄養になるかもしれないが、12 に分けたらパン屑になってしまう」のように、*quizá* が文頭になくても後続の動詞が接続法の例がある。

⁴ 文意は「この時間には、*quizá(s)*、道は混んでいる」のようになる。

(17)

- a. {Probablemente / Posiblemente / Quizá / Tal vez} {llueva / llueve / lloverá} mañana.
- b. Acaso llueva mañana. おそらく明日は雨だろう。

(18) Quizá venga Carmen mañana. カルメンはたぶん、あした来るでしょう。

Quizá を含む文には訳がないが、*acaso* の文の後についたものが両文の訳となっていると考えて良いだろう。なお、別の箇所 (p. 61) にある例 (18) は接続法だけの例で、「たぶん・・・でしょう」を使って訳されている。

三好は叙法の違いによる意味の違いがあるかどうか明確に述べていないが、意味の違いを説明した上で単一の文に直説法・接続法の動詞を埋め込んでいるものもある。高垣 (2018: 125) は「「疑いの副詞」には *quizá*, *quizás*, *tal vez*, *acaso*, *a lo mejor* などがあります。どれも「たぶん、ひょっとしたら、おそらく」を意味する副詞 (句) です。内容が事実だと思ふ度合いにより直説法 (より確実) と接続法 (より不正確) を使い分けます」として、以下の例文を挙げている。

(19)

- a. Quizá venga (*viene*) más tarde. ひょっとしたら彼 (彼女) はもう少しあとで来るかもしれない。
- b. quizá たぶん、きっと
- c. venga は *viene* より不確かな気持ちを表します。

(20) Quizá Pedro venga (*viene*) mañana. たぶんペドロは明日来るでしょう。

例文の語釈では *quizá* に「たぶん」だけでなく「きっと」を入れているのが注意を引く。「ひょっとしたら」と「きっと」の間にはかなりの差があるので、学習者が困るかもしれないが、著者はむしろ意識的に単一の訳語で学習者に誤解を与える (例えば「たぶん」だと思ひ込む) ことを避けようとしているのかもしれない。なお、高垣は別の箇所 (p. 123) でほぼ同じ例 (20) に「たぶん・・・でしょう」をあてている。

また、訳語に「たぶん」などの副詞的要素を使わず、文末の表現だけで処理している文法書もある。廣康 (2016: 338) は、「次のような疑念を表す副詞は、いずれも「多分」「おそらく」といった意味で、疑いの程度によって、直説法と接続法を使い分けます」として、以下の例を挙げる。

(21) El niño está muy caliente; quizá tiene / tenga fiebre. この子は熱いね。熱があるのかもしれない。

一方、(西村 2014: 105) は「接続法を用いたほうが断定がより弱いことが示されます。また、(...) 推量を表す未来形と結び付くこともよくあります」と述べて3つの動詞形を埋め込んでいる。

(22) Quizá no {haya / hay / habrá} más remedio. 他に方法がないのかもしれない。

東京外国語大学スペイン語専攻用の教科書も、同じ方式を採用している。

(23) Quizá {viene / venga} más tarde. (彼は) あとで来るかもしれない。

私自身の学習者としての経験から言えば、*quizá(s)* が直説法と共起するときと接続法と共起するときで、日本語で訳し分けられるような違いがあるかどうか分からない。違いがあったとして、それぞれに

適切な日本語訳は思いつかない。そこで、「Quizá(s), tal vez, probablemente, posiblemente などの副詞 (句) は事実かどうか不確実と見なす事柄と共に用いられる。直説法または接続法が用いられる (意味の違いはとりあえず気にしなくて良い) (東外大スペイン語 2019: 76)」という記述を採用している⁵。訳語の「かもしれない」は、私の学習経験から「たぶん」ほど強くない表現として選んだものだ。

2.4. 辞書・文法書のまとめ

ここまで日本の学習辞典や文法書による quizá(s) の扱いを見た。各著者が叙法の交替による意味の差異も視野に入れて例文の訳を工夫していることが見てとれるが、訳語の選択には個人差があり、「たぶん」を直説法の例にあてる人と接続法の例にあてる人がいる。また、quizá(s) を含む副詞の説明に「たぶん」を使っている例が目立つ。これは、宮城 & 山田 (1999) が与える最初の訳語が「たぶん」であることと関連があるかもしれない。

すでに述べたように、本稿は詳細な quizá(s) の記述や日本語との対照研究には立ち入らないが、上に挙げた著者たちの説明を、スペイン語圏の規範文法の記述を交えて整理しておきたい。

スペイン語の quizá(s) は伝統的に「疑いの副詞」に属するが、これは *adverbios de duda* の訳にあたる。現在のアカデミア文法では «*adverbios de duda y de posibilidad* (RAE & ASALE 2009: §25.14i)» と呼んでいて、「疑い」に「可能性」が並置されている⁶。寺崎 (1998) は可能性を意味する副詞、小林 & Gallego は予測を表す副詞としている。

そして、「疑惑文」は *oración dubitativa* の訳だと考えられる。これは、平叙文、疑問文、感嘆文、命令文、願望文と並ぶ伝統的な文の類別のひとつだが、あり得る文のモダリティを網羅しておらず、例えば「疑惑」はあっても「可能性」が拾われていないという (RAE & ASALE 2009: §1.13h)。疑惑文の性格づけとしては、上田や西川が「疑惑」を表すとしているのに対して、寺崎 (1998) と三好 (2016b) は「推測」の意味が表現されると言う。叙法の使い分けについては、疑いの程度、事実だと見なす程度、という言い方での説明が多いが、三好は「単なる想定」であれば接続法、西村は「断定がより弱い」のが接続法としている。

伝統的な「疑い (*duda*)」という用語から理解される範囲内で説明しているものが多いけれど、別の観点からの説明を試みているものもある。学習者向けにいかに分かりやすく説明するかが、それぞれの著者の腕の見せ所のはずだが、もしかしたら学習者は説明の始めの方に出てくる「たぶん」にしか注意を払わないかもしれない。そうしたら、工夫を凝らした例文の訳が無駄になりかねない。

3. アンケート調査

3.1. 概要

今回実施したアンケートは、日本語話者を対象とした「たぶん」に関わるものと、スペイン語話者を対象とした quizá(s) に関わるものの2つに分かれる。前者を EncJ、後者を EncS と呼ぶことにする。それぞれのアンケート内容は次ページに示す。

⁵ ただし、今回のアンケート調査の結果を踏まえて、より具体的に「意味の違い」に言及することを検討すべきかもしれない。

⁶ この表現には、「疑い」の副詞と「可能性」の副詞が別々だと読む余地がある。仮にそうだとすると、具体的なグループ分けが明示的に示されている訳ではないが、アンケート結果のところで述べる *-mente* の副詞とそれ以外の区別が意図されている可能性はある。原文は注 8 参照。

***** EncJ *****

次のそれぞれの文について、「来る可能性」をパーセントで表してください (文の右に数字で書く)。こういう言い方はしない、という場合は×を書いてください。

- | | |
|------------------------|----------------------------|
| 1. (彼は) 多分来る。 | 16. (彼は) ひよっとしたら来る。 |
| 2. (彼は) 多分来るだろう。 | 17. (彼は) ひよっとしたら来るだろう。 |
| 3. (彼は) 多分来るかもしれない。 | 18. (彼は) ひよっとしたら来るかもしれない。 |
| 4. (彼は) 多分来るんじゃないかな。 | 19. (彼は) ひよっとしたら来るんじゃないかな。 |
| 5. (彼は) 多分来たりして。 | 20. (彼は) ひよっとしたら来たりして。 |
| 6. (彼は) きっと来る。 | 21. (彼は) もしかしたら来る。 |
| 7. (彼は) きっと来るだろう。 | 22. (彼は) もしかしたら来るだろう。 |
| 8. (彼は) きっと来るかもしれない。 | 23. (彼は) もしかしたら来るかもしれない。 |
| 9. (彼は) きっと来るんじゃないかな。 | 24. (彼は) もしかしたら来るんじゃないかな。 |
| 10. (彼は) きっと来たりして。 | 25. (彼は) もしかしたら来たりして。 |
| 11. (彼は) 恐らく来る。 | 26. (彼は) 来るだろう。 |
| 12. (彼は) 恐らく来るだろう。 | 27. (彼は) 来るかもしれない。 |
| 13. (彼は) 恐らく来るかもしれない。 | 28. (彼は) 来るんじゃないかな。 |
| 14. (彼は) 恐らく来るんじゃないかな。 | 29. (彼は) 来たりして。 |
| 15. (彼は) 恐らく来たりして。 | |

***** EncS *****

¿A qué tanto por ciento de probabilidad te suena de que venga? Pon la cifra al final de cada oración. Si la oración no te suena o si no la usarías, pon una X.

1. Quizá *viene*.⁷
2. Quizá **venga**.
3. Quizás *viene*.
4. Quizás **venga**.
5. Tal vez *viene*.
6. Tal vez **venga**.
7. Acaso *viene*.
8. Acaso **venga**.
9. A lo mejor *viene*.
10. A lo mejor **venga**.
11. Posiblemente *viene*.
12. Posiblemente **venga**.
13. Probablemente *viene*.
14. Probablemente **venga**.
15. Seguramente *viene*.
16. Seguramente **venga**.
17. *Vendrá*.

⁷ 文例のイタリックと太字はアンケート原文にはない。本稿の例文における直説法と接続法の扱いに合わせた。

EncJ の文例は「多分、きっと、恐らく、ひょっとしたら、もしかしたら、 \emptyset 」と「 \emptyset 、だろう、かもしれない、じゃないかな、たりして」の組み合わせで作った。これらの形式の選択は、事前の調査等に基づくものではなく、2 段組で用紙 1 枚に収まる範囲の数を、私自身が思いつくままに挙げたものだ。また、問いにある「来る可能性」についても、回答者の何となくの印象を得るといふ以上の意図はなく、特定のモダリティを念頭に置いているわけではない。

EncS のパタンは EncJ と共通で、*quizá, quizás, tal vez, acaso, a lo mejor, posiblemente, probablemente, seguramente* と、動詞 *venir* 「来る」の直説法現在 3 人称単数形 *viene* と接続法現在 3 人称単数形 *venga* の組み合わせで作ってある。また、推量の用法を持ち、「だろう」で訳されることの多い直説法未来形の *vendrá* を加えた。副詞には RAE & ASALE (2009: §25.14i) で叙法の交替があるとされているものを選んだ⁸。なお、EncS では *la probabilidad de que venga* 「来る蓋然性 (確率)」を問うていて、EncJ の「可能性」とは異なるが、話者の何となくの印象を得ることが目的であり、両者の結果を比較する妨げにはならないだろう。

EncJ は 2018 年 12 月に、東京外国語大学スペイン語専攻 1 年次の授業において行った。アンケート用紙を配布し、その場で回答してもらい、回収した (54 人)。同 3 年次生 (4 人)、大学院生 (3 人) に同様のやり方でアンケートを行ったものを加え、合計 61 人分のデータを得た⁹。

EncS は 2018 年 12 月から翌 1 月にかけて、日本でスペイン語を教えているスペイン人 10 人の協力を得て実施した。用紙を渡してその場で回答してもらったものと、メールで回答を得たものがある。

以下、それぞれの結果を報告し、いくつかコメントを加える。

3.2. EncJ 結果

EncJ の結果を次ページの表 1 に示す。数値は左から、パーセントを答えた (×ではなかった) 数、平均値、最高値、最低値、最頻値。

まず、副詞があり動詞が言い切りになっている形において平均値が 70 パーセントを超える「きっと (78.4)、恐らく (75.9)、多分 (73.5)」と、30 パーセント台の「もしかしたら (33.3)、ひょっとしたら (30.7)」に大きく分かれる。前者は「来たりして」との相性が悪い点でも共通する。

次に、文末表現については、副詞のない形において平均値が高い方から「だろう (84.4)」、「じゃないかな (66.7)、かもしれない (55.0)」、「たりして (26.3)」の 3 グループに分けることが出来そうだ。「多分」との組み合わせで最初の 2 グループの区別が判然としないが、他との組み合わせでは維持されているように見える。「じゃないかな、かもしれない」のグループ内では、「もしかしたら」との組み合わせ以外では「じゃないかな」が高い数値を示す。

以上のことから、これらの副詞と文末表現は、ある程度独立して「来る可能性」の高低に関与している可能性を考えることができる。ただし、これがどのようなモダリティであるのか、幾つのモダリティが関与しているのか、などは勿論分らない。

⁸ RAE & ASALE (2009: §25.14i) は、*quizá, quizás* を使って叙法の交替にかかわる制限を説明した後、*tal vez, acaso, a lo/la mejor* ならびに *posiblemente, probablemente, seguramente* などに同様の制限がある («Esta restricción se extiende a *tal vez, acaso y a {lo ~ la} mejor* (§25.14n), así como a *posiblemente, probablemente, seguramente, y otros adverbios similares*») と述べている。もしかしたら *así como* の前と後で副詞をグループ分けしているのかもしれない。また、このリストは閉じられたものではないということも分かる。なお、*a lo mejor* の異形態 *a la mejor* は扱わなかった

⁹ 全問に回答しなかったものは集計対象から除いた。

表 1

		数値	平均値	最大値	最小値	最頻値
1	(彼は)多分来る。	60	73.5	100	20	80
2	(彼は)多分来るだろう。	58	67.6	90	20	70
3	(彼は)多分来るかもしれない。	39	45.3	80	5	50
4	(彼は)多分来るんじゃないかな。	60	59.4	90	10	60
5	(彼は)多分来たりして。	26	24.2	50	1	10
6	(彼は)きっと来る。	61	78.4	99	25	90
7	(彼は)きっと来るだろう。	58	74.6	99	10	80
8	(彼は)きっと来るかもしれない。	27	56.3	85	15	40
9	(彼は)きっと来るんじゃないかな。	56	64.0	90	20	80
10	(彼は)きっと来たりして。	12	18.0	60	1	20
11	(彼は)恐らく来る。	59	75.9	99	10	90
12	(彼は)恐らく来るだろう。	58	72.5	99	5	80
13	(彼は)恐らく来るかもしれない。	21	55.3	80	2	60
14	(彼は)恐らく来るんじゃないかな。	56	62.9	90	10	70
15	(彼は)恐らく来たりして。	11	26.8	50	10	30
16	(彼は)ひよっとしたら来る。	50	30.7	60	5	30
17	(彼は)ひよっとしたら来るだろう。	35	30.0	60	5	30
18	(彼は)ひよっとしたら来るかもしれない。	56	25.9	50	1	20
19	(彼は)ひよっとしたら来るんじゃないかな。	53	26.3	60	1	20
20	(彼は)ひよっとしたら来たりして。	36	17.1	50	0	10
21	(彼は)もしかしたら来る。	48	33.3	70	5	20
22	(彼は)もしかしたら来るだろう。	36	32.9	65	10	20
23	(彼は)もしかしたら来るかもしれない。	60	28.0	65	2	20
24	(彼は)もしかしたら来るんじゃないかな。	51	27.7	65	2	20
25	(彼は)もしかしたら来たりして。	35	18.1	60	0	10
26	(彼は)来るだろう。	60	84.4	100	25	90
27	(彼は)来るかもしれない。	61	55.0	80	20	50
28	(彼は)来るんじゃないかな。	61	66.7	90	30	70
29	(彼は)来たりして。	58	26.3	70	0	30

3.3. EncS 結果

EncS の結果を表 2 に示す。人数が少ないので、全ての回答を載せる。Quizá(s) に高い数値を含む順に並べ、A から J で識別する。

表 2

		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	数値	平均値	最大値	最小値	最頻値
1	Quizá <i>viene</i> .	50	55	50	52	50	40	30	25	25	16	10	39.3	55	16	50
2	Quizá <i>venga</i> .	40	50	40	49	40	40	25	20	20	15	10	33.9	50	15	40
3	Quizás <i>viene</i> .	60	55	55	52	x	40	30	25	25	16	9	39.8	60	16	55
4	Quizás <i>venga</i> .	40	50	45	49	40	40	25	20	20	15	10	34.4	50	15	40
	Quizá(s) <i>viene</i> .											19	39.5	60	16	50
	Quizá(s) <i>venga</i> .											20	34.2	50	15	40
5	Tal vez <i>viene</i> .	30	55	40	55	x	30	20	x	25	25	8	35.0	55	20	30
6	Tal vez <i>venga</i> .	50	50	35	50	40	30	15	20	20	20	10	33.0	50	15	50
7	Acaso <i>viene</i> .	30	x	30	x	x	x	x	x	x	12	3	24.0	30	12	30
8	Acaso <i>venga</i> .	40	x	25	40	x	x	x	5	10	x	5	24.0	40	5	40
9	A lo mejor <i>viene</i> .	50	50	60	50	50	30	15	50	30	35	10	42.0	60	15	50
10	A lo mejor <i>venga</i> .	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	0	x	x	x	x
11	Posiblemente <i>viene</i> .	70	75	70	73	70	60	70	65	x	55	9	67.6	75	55	70
12	Posiblemente <i>venga</i> .	60	70	65	70	60	60	65	60	50	50	10	61.0	70	50	60
13	Probablemente <i>viene</i> .	70	65	70	78	70	70	80	85	x	70	9	73.1	85	65	70
14	Probablemente <i>venga</i> .	60	60	65	76	60	70	75	80	70	65	10	68.1	80	60	60
15	Seguramente <i>viene</i> .	80	95	90	80	90	80	90	95	90	98	10	88.8	98	80	90
16	Seguramente <i>venga</i> .	70	90	85	75	80	80	x	90	90	97	9	84.1	97	70	90
17	<i>Vendrá</i> .	100	100	90	85	100	100	100	99	95	80	10	94.9	100	80	100

ここでも、副詞を 2 つのグループに分けることができる。数値の高い *seguramente*, *probablemente*, *posiblemente* は、平均で 60 パーセントを超え、最低でも 50 パーセントで、しかも回答者間の違いがそれほど大きくない。それに対して *a lo mejor*, *quizás*, *quizá*, *tal vez*, *acaso* のグループは、最高は 60 パーセントだが、平均で 50 パーセントに達するものがなく、しかも回答者によるばらつきが大きい。また、数値の高いグループに属するのは *-mente* で終わる副詞で、低いグループは形態的に多様だ。

直説法と接続法の交替に関しては、2 人を除いて直説法の数値が高いという結果になった。1 人 (回答者 F) は叙法による違いを感じないと回答してくれた。もう 1 人 (回答者 A) は、*tal vez* と *acaso* については直説法より接続法の数値が高い。回答者が後日内省した結果、*quizá(s)*, *posiblemente*, *probablemente*, *seguramente* では直説法の方がリアル感が出るのに対して、*tal vez* と *acaso* の場合、接続法の方がより気持ちが入る・実現が望ましいことのように感じられる、という説明をしてくれた。この説明が記述に対して持ち得る意味は慎重に検討する必要があるが、「疑惑文」において接続法が果たす役割が単純ではないことは想定できる。

直説法未来形の *vendrá* は、推量の用法を想定して入れたものだが、10 人中 5 人が 100 パーセントと回答している。これは明らかに単純な未来の用法を念頭においた回答だ。90 パーセントと答えた回答者

C も、推量ではなく未来として答えたと報告してくれた。アンケート作成者の私にとっては些か意外な結果だったが、アンケート本来の目的からは離れて、未来形が確実な未来を表しうることが示されたのは収穫だったと言える。この形を「推測法」のような叙法として直説法から切り離す考え方に對抗して、直説法未来形であるとする論拠の1つになり得るとともに、未来を「だろう」で訳す学習書の習慣を見直す必要を示唆している。

Quizá と quizás については、7人が同じに扱っている。それに対して、回答者 A と C は quizás の数値が高い。2人は、自分は quizás を多く使うのでそんな感じがするのかもしれないと答えてくれた。つまり、より親しみのある形がより高い蓋然性を感じさせるということで、語彙項目が持つモダリティとは異なる要因が働いている可能性を示唆する。

より身近な形が高い数値を示すということが言えるとすれば、*acaso* の数値の低さと X の多さも、これと関連しているのかもしれない。私自身は自然な発話で *acaso* の「疑い」の用法を聞いた記憶がない。また、書き言葉でもほとんど見たことがない。仮にそうであったとして、なぜ身近さと蓋然性の高さが関係するのかわからないが、考えてみる価値はあるだろう。

また、回答者 E が Quizás viene に X をつける一方 Quizás venga を 40 パーセントとしているが、自分は quizá の方を多く使うと補足している。また、Tal vez viene にも X をつけている。この回答者は Quizá viene, Posiblemente viene, Probablemente viene という直説法の例に対して、インフォーマルな文脈で、という補足をしていて、これらの副詞とは接続法が用いられるのが基本だと認識しているようだ。直説法が規範的に正しくない、あるいは口語的とする寺崎 (1998) の記述を思い出させる。

A lo mejor は、従来直説法とのみ共起すると言われてきた。しかし RAE & ASALE (2009) では叙法の交替があるグループに含められている。川上 (2018) は、実例があることを報告したが、確かに数は少ない。また実際に自分で a lo mejor と接続法を使うと言う話者を確認したこともない。今回は 10 人も接続法は使わないという回答で、予想の範囲内の結果となった。

Seguramente と接続法の組み合わせに X をつけた回答者が 1 人 (回答者 G) いるが、seguramente が直説法とのみ共起すると述べる文法書がある (中岡 1995: 483, 西村 2014: 105) を考えれば、接続法を使わないと言う話者がいてもおかしくない。

一方、posiblemente と probablemente の直説法に X をつけた 1 人 (回答者 I) については、これらの副詞は直説法との共起が優勢 (RAE & ASALE 2009: §25.14i) という傾向に合わない。個人的な特徴と考えておく。

3.4. Quizá(s) の日本語訳

ここまで見てきた2つのアンケートの結果を踏まえ、学習者向けに quizá(s) の日本語訳を考えてみる。数値を付き合わせるだけの乱暴な比較にならざるを得ないが、学習者を説得するためには役立つだろう。

平均値は Quizá(s) と直説法が 39.5 パーセント、接続法が 34.2 パーセント。最頻値は直説法が 50 パーセント、接続法が 40 パーセントだった。それに対して、辞書・文法書の訳を EncJ の平均値の高い方から並べたものが次ページの表 3 になる。

これを見ると、平均値で quizá(s) の値にだいたい対応しているものはない。「ひょっとしたら・・・かもしれない」は低過ぎ、他は高過ぎる。最頻値では「かもしれない」の 50 パーセントが直説法の値と等しくなっている。この中では「かもしれない」が何とか訳せている範囲に入るだろう。

表 3

	例文			EncJ	
	直説法	接続法	両方	平均値	最頻値
たぶん	14	11, 13		73.5	80
おそらく・・・だろう		3, 7, 17a		72.5	80
たぶん・・・だろう	1, 4, 6, 16	8, 10, 15, 18	20	67.6	70
かもしれない	9	2	21, 22, 23	55.0	50
ひょっとしたら・・・かもしれない		5	19a	25.9	20

なお、高垣 (2007) と福嶋 (1995a, 1995b) は「たぶん・・・だろう」を直説法 (4, 6) に、「おそらく・・・だろう」を接続法 (3, 7) にあてているが、今回のアンケートでは「おそらく・・・だろう」の方が数値が高く、著者の訳し分けの意図と合致していない。私自身は、「おそらく」の方が疑いが強いという捉え方で特に違和感を感じないが、アンケートの回答者のほとんどが大学の1年次生で、語感に世代差があるのかもしれない。

EncJ 全体と照らし合わせると、平均値で *quizá(s)* (39.5, 34.2) は「多分来るかもしれない (45.3)」と「もしかしたら来る (33.3)」の間にある。「もしかしたら」は接続法の値にかなり近いので、候補になる。

最頻値では、「多分来るかもしれない (50)」と既に見た「来るかもしれない (50)」が直説法と一致する。しかし、「多分来るかもしれない」を使うのは61人中39人で、使わないという人も少なくない。私自身は、話し言葉で言うことはあるが、「多分」で設定した見込みを「かもしれない」で下方修正するような感覚で、全体として統一感のある表現だとは感じていない。辞書や文法書で使える表現ではないだろう。一方、「きっと来るかもしれない (40)」が接続法と一致するが、61人中27人しか使わない形なので、これも候補としては相応しくない。

結局、無難に使えそうなのは「もしかしたら」と「かもしれない」ぐらいだろうか。やはり「たぶん」は避けるべきだ。

では、「たぶん」を訳語として使えそうな表現は何だろうか。平均値で見ると「多分来る (73.5)」は *Probablemente viene* (73.1) に、「多分来るだろう (67.6)」は *Posiblemente viene* (67.6) に、「多分来るんじゃないかな (59.4)」は *Posiblemente venga* (61.0) に、「多分来るかもしれない (45.4)」は *A lo mejor viene* (42.0) に、「多分来たりして (24.2)」は *Acaso viene / venga* (24.0) に使えるかもしれない。最頻値で考えると、「多分来るだろう (70)」は *Posiblemente viene / Probablemente viene* (70) に、「多分来るんじゃないかな (60)」は *Posiblemente venga* (60) に、「多分来るかもしれない (50)」は *Quizá(s) viene / Tal vez venga / A lo mejor viene* (50) に一致する。「多分来る (80)」と「多分来たりして (10)」は一致するものがない。61人中39人の「多分来るかもしれない」と26人の「多分来たりして」を除くと、だいたい *posiblemente* と *probablemente* に対応するということになる。

4. 「疑いの副詞」と叙法

4.1. 「疑いの副詞」のモダリティ

最後に、EncS の結果から考えられる、スペイン語の「疑いの副詞」研究の方向性について触れたい。このアンケートの持つ限界を踏まえつつ、可能な問題提起を考えてみる。

まず、3.3 で触れた、「疑いの副詞」のグループ化について。アンケート結果から、蓋然性の数値が高めで回答者間のばらつきが少ない *seguramente*, *probablemente*, *posiblemente* と、数値が低めで回答者間のばらつきが大きい *a lo mejor*, *quizá(s)*, *tal vez*, *acaso* の2グループが想定できた。実は、似たような分類

は既にある。和佐 (2005: 98) は「ある命題の真実性についての確信度を表す副詞」を「蓋然性判断を表す副詞」と呼び、「話し手は命題の真実性に対して何の確信も持っていない」時に使われるものを「可能性判断を表す副詞」と呼んでいる。さらに後者を2つに分け、次のような分類を提案している (和佐 2005: 104):

- a. 命題の真実性に対する確信度の高さを表す副詞: *seguramente, probablemente, etc.*
- b. 単一命題に対する可能性判断を表す副詞: *quizá, tal vez, acaso, posiblemente, etc.*
- c. 命題間の範列関係を表す副詞: *a lo mejor, igual, lo mismo, etc.*

「可能性判断」の副詞の下位分類である「単一命題」と「命題間の範列関係」の区別に対しては、三好 (2016a: 53) や後述する寺崎 (2011: 217) による批判がある。現象的には、和佐が「単一命題」に入れているものでは直説法と接続法が交替し、「命題間の範列関係」のものは直説法とのみ共起するとされている。分類基準として叙法との関係が先にあり、命題の数は後付けの説明だという疑いが残る。

寺崎 (2011: 216-217) は、叙法との関係をより明確に認め、コーパス調査のデータに基づき、接続法と共起しない *a lo mejor* を別立てとし、残りを主に直説法と共起するが接続法とも共起するもの、叙法の交替があるものに分けている。その上で、それぞれのグループをモダリティの観点から次のように分類する。

1. 単なる可能性を表す副詞: *a lo mejor*
2. 蓋然性の程度を表す副詞
 - 2.1 高い蓋然性を表すもの: *seguramente, probablemente, posiblemente*
 - 2.2 低い蓋然性を表すもの: *tal vez, quizá / quizás, acaso*

だが、*a lo mejor* を「単なる可能性を表す」とする根拠は、直説法現在形との共起がほとんどということぐらいで、十分とは言えない。蓋然性の高さの区別も、やはり叙法との関係で行われていると考えられる。だが、寺崎のデータでは、接続法との共起は *quizá(s)* 48 パーセント、*acaso* 46 パーセント、*tal vez* 42 パーセント、*probablemente* 35 パーセント、*posiblemente* 33 パーセント、*seguramente* 9 パーセントで、*seguramente* を別立てにしない根拠がどこにあるのかよく分からない。

和佐と寺崎の分類は、それぞれ示唆に富む部分はあるにせよ、叙法との関係を重視しすぎている印象を受ける。今回のアンケートからは寺崎の分類に近いグループ分けが得られたが¹⁰、これは *-mente* で終わる副詞かどうかの違いに起因している可能性がある。つまり、*-mente* の副詞は派生の元になる形容詞の意味が明確で、それを手がかりに蓋然性のイメージが作りやすいのかもしれない¹¹。それに対して、*quizá(s)*, *tal vez*, *acaso*, *a lo mejor* の意味は不透明で、話者同士がバラバラな蓋然性イメージを持っていても表面化しにくいだろう。アンケートでの数値のばらつきの原因はその辺りにあるのかもしれない。

ただし、比較的意味が透明な *-mente* のグループの蓋然性イメージが高く、不透明なグループの蓋然性イメージが低い、しかもそれがおおよそ 50 パーセント前後を境としていることは、偶然ではないかもしれない。仮に、そもそも何かの事象についてその可能性があると言話するのは、少なくとも半々以上の実現見込みがあるからだという語用論的含意があるとすれば、*-mente* グループの数値は分かりやすい。

¹⁰ 和佐の分類と特に異なるのは *posiblemente* の扱いである。

¹¹ ただし、形容詞の意味がそのまま副詞に受け継がれている訳ではない。寺崎 (2011: 214) は *seguro* の「確信している、確実な」と *seguramente* の「たぶん、おそらく」を対比している。また、*posible* 「可能な」は論理的には可能性がゼロでなければ使えるので «*posible pero poco probable*» 「可能だがあまり起こりそうにない」という言い方ができる。しかし今回のアンケートでは *posiblemente* は最低でも 50 パーセントの値を示し、*probablemente* と変わらない回答の話者もいた。

だとすると、もう一方のグループの数値が低いのは、蓋然性とは別のモダリティが働いているからなのかもしれない。アンケートは話者の蓋然性イメージを問うたものだが、どんなモダリティが関係しているかを示すものではない。実際、より親しみのある形の数値が高い話者がいることは分かっている。伝統的な「疑い」について評価しなおすべきなのかも知れないし、あるいは和佐が蓋然性に対置して「可能性」を提示しているのがヒントになるかもしれない。しかし、それとは別の方向を考えることもできるだろう。

4.2. 接続法との関係

「疑いの副詞」が伝統的に「疑惑文」とともに語られ、接続法との関係が問題にされてきたのは理解のできる現象である。しかし、疑惑文が接続法中心に語られることが行き過ぎると、次のような説明になる。

seguramente 「確かに、たぶん」
→ a lo mejor, igual 「たぶん」
→ quizá(s), tal vez 「おそらく」
→ acaso, probablemente, posiblemente 「あるいは」
のような推測の程度の強まりを考えることができる (中岡 1995: 483)。

確かに「推測の強まり」は可能性や蓋然性のスケールとは異なるので、今回のアンケート結果に現れた順序や、和佐や寺崎が提案した分類と一致する必要はないのだが、この「推測度」がどのように測られたのかは不明だ。ただし、最初の2行 (seguramente; a lo mejor, igual) を「直説法とのみ組む」と説明していることから、叙法との関連が強く疑われる。また、つけられた日本語訳が蓋然性のスケールを表しているようにも見え、訳語としても不適切であると考えられるものがある。

また、西村 (2014: 105) は、疑いの副詞には「より疑いの程度が低い、つまり断定はしないものものさうであろうと見込んでいることが示されるものと、反対に、より疑いが強く、断定しないことが示されるもの」があり、「前者には、a lo mejor, igual, seguramente があり、これらは常に直説法の動詞と結び付くと述べている。もちろん、蓋然性と断定は異なる概念なので、理論的には、例えば a lo mejor が常に42パーセント程度の見込みを示し、probablemente と接続法が68パーセントを断定せずに示す、という状況を想定することは可能だが、これはどのようにすれば確認できるのだろうか。また、学習者はこのような情報を上手く活用できるのだろうか。

今回のアンケートは、「同じ副詞の場合、直説法または推測法と共起するときは蓋然性がより高く、接続法と共起するときは蓋然性がより低い (寺崎 2011: 217)」という寺崎の推測を概ね支持する結果を示したが、同時に、接続法との共起率が最初の分類基準にならないことを示唆した。つまり、接続法との共起可能性によって副詞をグループ化し、接続法が持つと考えられるモダリティ (例えば断言の有無) によって「疑惑文」を分類・説明する意味がないことが示唆された。A lo mejor と seguramente が実際には接続法と共起するという事実を考えれば、この基準の無効性がより強く疑われる¹²。むしろ「疑惑文」の分類は「疑いの副詞」の分類を中心にすべきで、叙法の関与は副次的だ (単純でない形だが) と考えた方が良いのではないだろうか。

今回示唆された副詞の2グループそれぞれの中では、接続法との共起が極めて少ない a lo mejor と seguramente が高い蓋然性を示した。Seguramente については、低い共起率と高い蓋然性の間に関連があ

¹² Igual が接続法と共起するかどうかは未確認。

るのかもしれない。しかし、a lo mejor に関しては、平均値でグループ内最高であるものの、回答者によっては quizá(s) よりも低い数値を答えていて (B, D, F, G)、他の副詞と大きく異なって孤立している訳ではない。なお、Kovacci (1999: 755-756) は seguramente, probablemente, tal vez, posiblemente, difícilmente, quizá(s), acaso が「疑いのモダリティ (modalidad dubitativa)」を示すとし、「疑いの連続的なスケール」を形成しているという。疑いの最も強いのが difícilmente で、反対に最も確信度の高いのが seguramente だが、間にある他の副詞同士の関係には言及していない。そして、肯定的な極にある seguramente が直説法とともに用いられ、否定的な極にある difícilmente が接続法や直説法未来形、過去未来形とともに使われると述べる。ここでは疑いの程度と接続法との共起可能性が結び付けられているが、上のリストにない a lo mejor が直説法と用いられる理由は説明しておらず、口語的であることが原因であると読めるような記述をしている (p. 758)。

「疑いの副詞」についての研究の現状を踏まえれば、学習文法が疑惑文を接続法で説明するのは止むを得ないのかもしれない。今後期待されるのは、個々の副詞についての精密な研究が、接続法との関係に従属しない形で進むことだろう。私自身は現在 a lo mejor と接続法の共起について調査中だが、これはむしろ a lo mejor が他の「疑いの副詞」と基本的には変わらないことを示すことを目的としている。

5. おわりに

降水確率が 90 パーセントと聞くと、ざあざあ降りを思い描いてしまう、と言った人がいる。もちろん、この印象は誤りだ。これを言った人自身も、誤りであることは分かっている。今回のアンケートでは、文例から感じられる蓋然性・可能性をパーセントで表してもらったが、数値で表された結果が直接「蓋然性のモダリティ」を反映しているというような単純化は慎まねばならない。しかし、何が測られたのか特定できない (する意図もなかった) という限界は認めた上で、スペイン語の quizá(s) を「たぶん」と訳すのが適切ではないことは示せたと思う。また、このアンケート結果は、直説法・接続法の両方と共起する「疑いの副詞」が -mente で終わるものとそれ以外のものに分類される可能性を示唆した。少なくとも、それは検証に値するだろう。それはまた、これらの副詞の研究を、叙法に従属させない形で進めることの意義を確認することでもある。

参考文献

- Bayerová, Marcela. 1994. «Alternancia indicativo x subjuntivo en oraciones independientes». *Études romanes de Brno* 24, pp. 61-71.
- DeMello, George. 1995. «Alternancia modal indicativo/subjuntivo con expresiones de posibilidad y probabilidad». *Verba* 22, pp. 339-361.
- 土井裕文. 2009. 「Quizá と Quizás」. *Hispánica* 53, pp. 151-155.
- 福嶋教隆. 1995a. 「動詞 -法」. 山田善郎 (監修). 第 18 章, pp. 332-351.
- 福嶋教隆. 1995b. 「文の種類」. 山田善郎 (監修). 第 21 章, pp. 415-423.
- 廣康好美. 2016. 『これならわかるスペイン語文法』. NHK 出版.
- 川上茂信. 2018. 「A lo mejor と接続法 (1)」. 『スペイン語学研究』 33, pp. 51-70.
- 小林一宏 & Gallego Andrada, Elena. 2009. 『スペイン語文法と実践』. 朝日出版社.
- Kovacci, Ofelia. 1999. «El adverbio». Bosque, Ignacio & Demonte, Violeta (dirs.). *Gramática descriptiva de la lengua española*. Vol. 1. Espasa Calpe. Cap. 11, pp. 705-786.
- 宮城昇 & 山田善郎 (監修). 1999. 『現代スペイン語辞典』. 改訂版. 白水社.
- 三好準之助. 2016a. 「副詞句 a lo mejor について」. *Hispanica* 60, pp. 47-67.

- 三好準之助. 2016b. 『日本語と比べるスペイン語文法』. 白水社.
- 中岡省治. 1995. 「推測」. 山田善郎 (監修), pp. 482-486.
- 西川喬. 2010. 『わかるスペイン語文法』. 同学社.
- 西村君代. 2014. 『中級スペイン語 読みとく文法』. 白水社.
- RAE & ASALE (Real Academia Española & Asociación de Academias de la Lengua Española). 2009. *Nueva gramática de la lengua española*. Espasa Libros.
- 高垣敏博 (監修). 2007. 『西和中辞典』第2版. 小学館.
- 高垣敏博. 2018. 『スペイン語接続法超入門』. NHK 出版.
- 高橋正武. 1967. 『新スペイン広文典』. 白水社.
- 寺崎英樹. 1998. 『スペイン語文法の構造』. 大学書林.
- 寺崎英樹. 2011. 「スペイン語の認識モダリティ副詞と法・時制の相関」. 武内道子 & 佐藤裕美 (編). 『発話と文のモダリティ - 対照研究の視点から』. ひつじ書房, pp. 207-224.
- 東京外国語大学スペイン語研究室. 2019. 『スペイン語1年教科書2019』.
- 上田博人. 2011. 『スペイン語文法ハンドブック』. 研究社.
- 和佐敦子. 2005. 『スペイン語と日本語のモダリティ』. くろしお出版.
- Woehr, Richard. 1972. «“Acaso,” “Quizá(s),” “Tal vez”: Free variants?». *Hispania* 55.2, pp. 320-327.
- 山田善郎 (監修). 1995. 『中級スペイン文法』. 白水社.

執筆者連絡先: kawakami.s@tufs.ac.jp

原稿受理: 2019年5月7日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

[テーマ企画: 特集 否定、形容詞と連体修飾複文]
まえがき

Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification: Foreword

風間 伸次郎
Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は本号（『語学研究所論集』第23号）の特集「否定、形容詞と連体修飾複文」における33個のアンケート項目に対する25言語のデータを分析・整理し、類型論的な観点からの考察を加えるものである。

Abstract: This report aims to analyze and consider the data of 25 languages for the 33 questions of the questionnaire on the topic of this volume ‘negation, adjectives and adnominal complex sentences’ and add some remarks from the typological and cross-linguistic view point.

キーワード: 否定、形容詞、比較表現、連体修飾複文、関係節

Keywords: negation, adjective, comparative expression, adnominal construction, relative clause

1. はじめに

『語研論集』では、受動、アスペクト、モダリティ、ヴォイス、所有・存在表現、他動詞、連用修飾複文、情報構造と名詞述語文、情報表示の諸要素、に続き、特集の10年目となる今回は「否定と連体修飾」の問題を取り上げることとした。

日本語によるアンケートを作成し、これについて答えていただくことによって、各言語のデータを収集した（なおアンケートの例文本体は本稿の稿末に付してある）。こうして25言語のデータが集まった。これは東京外国語大学にある27専攻語の内の13言語に12言語の加わったものとなっている。

これらの言語を語族別にみると、まずドイツ語、アイスランド語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ロシア語、ウクライナ語、ポーランド語、チェコ語、ブルガリア語、ラトビア語、リトアニア語、ウルドゥー語は印欧語族の言語である。中にはスラブ語派の言語が5つもあり、語派内部の異同を知るのに有効である。バルト語派、インド語派の言語を含んでいるのも貴重である。ソロン語、ナーナイ語、エウエン語はツングース語族、（チャハル・ハルハの両）モンゴル語はモンゴル語族、タタール語はチュルク語族であるが、これらは類型的な相互の類似からアルタイ諸言語として扱われることもある語群である。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deedja>

フィンランド語はウラル語族、中国語はシナ・チベット語族、マレーシア語はオーストロネシア語族、アラビア語はアフロ・アジア語族、グイ語はコエ・クワディ語族、メエ語はパプア諸語トランスニューギニア系で、朝鮮語は孤立語である。アフリカやニューギニアの言語を含んでおり、類型的にも異なったタイプであって、貴重なデータとなっている。貴重な諸言語のデータを寄せてくださったデータ執筆者の先生方やそのコンサルタントになってくださった方々に深くお礼申し上げたい。ただ、複数の語族のデータからなるものの、オーストラリアやカフカース、新大陸の言語を欠いているため、本稿で以下に展開される類型論的考察が不十分であることは否めない。東南アジアの孤立型の言語が少なく、チベット・ビルマ語派やニジェール・コンゴ語族などの巨大語族の言語が一つも入っていないことも大きな問題点である。

2. 否定

2.1. 否定の先行研究における類型論的な知見

Dryer (2005a: 454-457、なお以下の情報は Website 版に拠った) は否定を示す形態素がどのような形式で現れるかに注目して世界の言語のうちの 1,157 言語を分析している。これによれば否定形態素が①接辞である言語：395、②否定辞(語)である言語：502、助動詞である言語：47、動詞と小辞のいずれであるかが明確でない言語：73、否定語と否定接辞の変種である言語：21、二つの要素による言語：119、であるという。否定形態素の形式に極端な地理的偏りはないが、否定助動詞はフィンランドから西シベリアに渡るユーラシア大陸北部で著しく頻度が高く、否定辞は孤立型の言語が多いという理由から、南アジアで一般的であるとしている。二つの要素による言語は特にアフリカで頻度が高いという。否定助動詞を示す言語のうち 8 つはウラル語族の言語である。

Payne (1985: 207) によれば、否定助動詞は 2 つに分けられ、一つは否定動詞が完全な文的補語をとる上位の動詞の一部もしくはすべての特徴を有している言語で、これは動詞文末もしくは動詞文頭の言語に限られるという(トンガ語やフィジー語など)。もう一つは特に語順に偏りがなく、否定が助動詞のようになっているタイプであるという(ウラル語族やツングース語族など)。たしかに Dryer (2005a) [112A: Negative morphemes] と Dryer (2005c) [81 Order of subject, object, and verb] を掛け合わせてみると、否定助動詞で SOV 語順の言語は 15 言語、同じく SVO の言語は 14 言語で、大きな偏りはみられない。なおもっとも多かったのは [SOV/ 否定接辞] の言語 (194 言語) で、次いで [SVO/ 否定小辞] (176 言語)、[SOV/ 否定小辞] (142 言語) であった。否定自体の位置に注目してみると、VO 言語 (SVO, VSO, VOS) では否定小辞は動詞に先行し、(S)OV 言語では先行することも後行することもあるという。したがって OV 言語でない限り基本的に否定は動詞に先行するものようだ。意味的に補文の否定要素が、主節の方に現れるのも (I don't think he will come. のような文) このことが原因であるのかもしれない。Payne (1985) は歴史的に、動詞に先行する否定要素がその後、動詞を挟む形で動詞に後続する否定要素との不連続形態素をなすようになり、遂には後続要素の方だけが残る構造へと変遷することがあると述べている(フランス語の *ne...pas* で起きたようなケースである)。Payne (1985) はさらに、ウラル語族の内部で、SOV 語順の言語が SVO 語順に変化するにつれて、否定動詞の屈折が失われ、小辞化していくことを例証している。

Payne (1985)、Miestamo (2005a) は、否定が語順の変更、トーンの変更、時制やアスペクトに関わる対立の解消、名詞項の格の交替などを伴うことを指摘している。Payne (1985) によれば、ムードによって変化する否定小辞はハンガリー語に、テンスやアスペクトによって変化する否定辞はセム語派の言語にみられるという。

Miestamo (2005b) は肯定文と否定文の構造的な違いが否定のマーカールの有無のみにあるもの 8 つまり

他の違いがないもの)を対称 (symmetry), 肯定文と否定文にそれ以上の構造的差異が認められるものを非対称 (asymmetry) と呼び、否定構造における対称性に基づいた類型的分類を試みている。その 297 言語での調査結果によれば、対称が 114 言語、非対称が 53 言語、両方の否定が存在するものが 130 言語であったという。地理的分布についてみると、まず対称的否定のみがみられる地域は、大陸ヨーロッパの大部分と、東南アジアの大部分であるという。他方、非対称的否定のみを有する言語が優勢な地域はないという。

Miestamo (2005c) は、さらに非対称的な否定の下位分類として以下の 6 タイプを挙げている (: の後の数字は言語数を示している)。

- [1] A/Fin : 否定される動詞の finiteness が失われて新たな finite の要素が付加される : 40
- [2] A/NonReal : 否定が非現実の範疇として標示される : 20
- [3] A/Cat : 文法範疇の標示が肯定文と否定文で異なる : 82
- [4] [1]と[2]の操作の両方が起きる : 9
- [5] [1]と[3]の操作の両方が起きる : 21
- [6] [2]と[3]の操作の両方が起きる : 11
- [7] 非対称は観察されない : 114

Miestamo (2005b: 458) では、「標準的否定に含まれない否定構文には、存在文・繫辞 (copula) 文・非動詞文の否定、従属節の否定、および命令法などの非平叙節の否定などがある」としているが、「これらの否定表現はここでは考慮しない」としてそれ以上扱っていない。

否定の実現する意味やスコープについて考えると、何らかの焦点にのみ否定のスコープがかかる場合、述語や文自体は否定されない、ということが起こる。例えば本稿のアンケート[19]「私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない」では、「言わなかった」わけではなく「言った」のであって、否定のスコープは文中のある焦点部分にのみ機能する。。Payne (1985) では Klima (1964) による 3 つのテスト (付加疑問 (did he?), 累加 (and neither did I), 回数 (not even once)が文末に付加可能かどうか) によって「標準的な」否定 (つまり命題の否定が起きているもの) であるか否かを判定している。Payne (1985: 199) は、「名詞述語でないものは、文全体に否定が及ばないことが多い」としている。

以上の先行研究の知見を踏まえて今回のデータの分析を行うこととする。

2.2. 名詞述語文と存在文、形容詞述語文、動詞述語文の間における否定の異同

名詞述語文の否定は、単にコピュラの否定形を用いることで済まず言語と、特別な形式 (例えばトルコ語における *değil*) を用いる言語がある。

中国語をはじめ、存在文と所在文の否定に (述語の語彙などに) 大きな違いが現れる言語がある (中国語学でいういわゆる存現文の問題)。これは情報構造と語順の問題と大きく関わっている。存在の否定は「有らない」とならず不変化詞である言語もある (例えばツングース諸語)。

否定は特に孤立型言語での品詞分類の基準となる。これは「形容詞」の位置づけに関して特に問題となる。Stassen (2005a) では叙述形容詞が動詞的な形態を示すか (encode) か、非動詞的な形態を示すか、もしくはその両方であるかについて 386 言語について調査しているが、その結果、①動詞的なのは 151 言語、②非動詞的なのは 132 言語、③両方がみられる (ここには交代型と分裂型が共に含まれる) のは 103 言語であったとしている。その第一の分類基準は動詞型の人称変化で、これがない場合、コピュラを用いるかどうかを第二の分類基準とし、これも使えない場合の第三の基準として否定をあげている。地理的分布についてみると、まず非動詞的タイプは東南アジアと北西コーカサスを除くユーラシア大陸

全般、およびオーストラリアとニューギニアに広がっているという。他方、動詞的タイプの大きく連続した地域はアフリカ、東南アジア、太平洋島嶼部、北米アメリカ大陸にあり、混合的タイプは動詞的タイプと非動詞的タイプがぶつかる地域にみられる傾向があるという。

以上のような点に注意しつつ、今回の調査の対象言語における①名詞述語文と②存在述語文、③形容詞述語文、④動詞述語文の間における否定形式の異同についてみると、次のような結果が得られた。なお動詞述語文には自動詞の否定を調べるアンケート文（(10)「今日はその人は来ない」）と他動詞の否定を調べるアンケート文（(11)「あの人はその本を持って行かなかった」）を用意した。

まず四者のどれにおいても、すなわちどの述語文でも同じ否定形式を用いる言語は、フランス語、イタリア語、スペイン語、フィンランド語、ポーランド語、ウルドゥー語であった。フィンランド語を除き印欧語族の言語であり、ウルドゥー語を除きヨーロッパの言語である。一般に印欧語族の言語、特にヨーロッパの言語は述語の種類の違いに対して無頓着に常に同じ否定形式を用いていることがわかる。その根本的な理由はコピュラ存在である。名詞述語文も形容詞述語文も、さらには存在文にも（動詞である）コピュラが使われるために、結局全て動詞文であることになり、否定形式も同じ形式でかまわないという理屈である。

次に、どれか1つの種類の述語文でのみ否定形式が違う言語についてみる。存在文にのみ異なる否定形式を示す言語は、ドイツ語、アイスランド語、ロシア語、ウクライナ語である。動詞にのみ異なる否定形式を示す言語は、チェコ語、メエ語である。以上の言語は、まずヨーロッパの言語ではゲルマン語派とスラブ語派に偏っていることがわかる。逆に言えばイタリック語派の否定要素が述語の種類に対してもっとも無頓着であるということになる。名詞述語にのみ異なる否定形式を示す言語は、モンゴル語、ソロン語である。ソロン語の名詞述語の否定要素は *antu*「違う」に由来するもので、日本の近畿方言にみられる「～（ん）ちゃう」に似ている。

2つ以上の種類の述語文で違う否定形式を用いる言語についてみると、存在述語文に加えて動詞述語文において異なった否定形式を示す言語がある。これは、ブルガリア語、中国語、アラビア語で、前2者では特に動詞のアスペクトが否定形式の選択に関わっている。名詞に異なる否定形式を持ち、さらにアスペクトに関する別の否定形式を示す言語にマレーシア語があるが、これもやはりアスペクトの違いによるものである。ツングースの3言語はまず存在・所在に異なる否定形式を示し、エウェン語では他の否定で否定動詞の諸アスペクト形式が使われ、ナーナイ語では否定動詞がアスペクトにより接尾辞化もしくは小辞化したものが使われ、ソロン語では「違う」に由来する語が名詞と形容詞の否定に使われている。グイ語では動詞の否定に使われる3形式のうちいずれかが名詞の否定や存在・所在の否定では使えない形になっている。朝鮮語では名詞述語文にも存在文にも動詞とは異なる否定を用いる（ただし否定の指定詞は *an-i*と分析することも可能だろう）。タタール語では存在・所在の他に名詞述語と形容詞述語の否定が動詞のそれとは異なっている。朝鮮語の形容詞は形態的に動詞的であり、タタール語の形容詞は名詞的であって、こうした品詞面での振る舞いの違いが否定形式の現れにも影響を及ぼしていることがわかる。

総じて述語の種類による否定をみると、何より存在の否定において、多くの言語で異なる否定形式の用いられることがわかる。これは情報構造の問題で、他では主題となり否定のスコープに入らないうちに来ない主語を、否定のスコープに入れなければならなくなる、ということがその原因であると考えられる。次に否定の形式に影響を与えるのはアスペクトの違いであることがわかる。

2.3. 存在文の否定・所在文の否定 —特に否定の斜格主語を中心に—

特に存在文では、他の述語文とは異なった否定形式が用いられるという通言語的傾向のあることを上述した。他方、同じ否定形で済ませている言語はどのようにして情報構造上の問題を解決しているのだ

ろうか？ まず語順の制約の厳しい英語やフランス語、スペイン語では、特殊な構文を用いることによって非存在の主体を主題／主語の座から引きずりおろしていることがわかる。語順の制約の緩いイタリア語では非存在の主体を否定の後ろに移動している。ドイツ語ではさらに否定代名詞 (keiner) を用いている。他方、所在の文ではどの言語でも通常の語順の通常の構文に否定が付加された構造が現れている。

一方、格変化のある言語には、ロシア語で「否定生格」と呼ばれる現象、すなわち存在の否定される名詞は属格などの斜格にする、という現象の観察される場合がある。これは一つには主格形が主題になろうとする性格を持つのに対し、存在では非存在の主体を否定のスコープ、つまり題述の方に入れる必要があり、そのために斜格に降格して動詞等に統御された形にしようとするためであろう。否定の主体は非現実の存在であって、不定であることもまたもう一つの重要な原因だろう。むしろこれは Hopper and Thompson (1980) にあるように他動性の観点からも説明がなされている。

今回の調査対象の言語の中では、フィンランド語 (分格)、ロシア語 (属格、以下の言語も)、ウクライナ語、ポーランド語、リトアニア語、ラトビア語に否定の斜格が観察された。ウラル語族と印欧語族のバルト語派・スラブ語派にまたがっているが、地域的には連続している。これらの言語には基層言語としてのウラル諸語からの影響を中心とした言語接触が考えられ、これらの言語は Koptsevskaja-Tamm and Wälchli (2001) をはじめとする一連の研究では「環バルト諸語」(Circum-Baltic languages) として扱われている。他方、同じスラブ語派でもブルガリア語は格変化を失っているので、否定属格は当然ぞんざいしないが、格変化のあるチェコ語でも否定属格がみられない (これはドイツ語の影響によるものだろうか)。

否定斜格を示す上記の言語でも、所在文となると、その主体は主題となり否定のスコープからはずれ、基本的に主格で現れる (フィンランド語、ウクライナ語、ラトビア語)。ロシア語とリトアニア語のデータでは「その本はこの部屋にはない (他の部屋にはある)」という意図を示す場合には、「本」は主格で現れると説明されている。ポーランド語のデータでは属格の文しかあがっていないが、ロシア語やリトアニア語と同じ状況であると考えられる。

2.4. 他動詞文の否定 —特に否定の属格目的語を中心に—

フィンランド語の他動性において有名な現象だが、他動詞の否定文では、その対象が対格でなく、分格になるという現象がある。

このことは印欧諸語のうち、バルト諸語とスラブ諸語の言語に観察されるが (ただし格は属格)、今回の調査例文 (11) では、それぞれの語派の内部で違いがみられた。

目的語が属格になる言語：リトアニア語、ウクライナ語、ポーランド語

目的語が対格のままの言語：ラトビア語、ロシア語、チェコ語

なお 2.3. 節で述べたようにブルガリア語には格変化がない。

ロシア語でも全面的、一般的な強い否定では他動詞の目的語が属格になる (cf. *On nikogda ne pišet pisem* 「彼はいつだって決して手紙を書かない」) という。Koptsevskaja-Tamm and Wälchli (2001: 655) は、この問題についても、環バルト諸語における目的語の主格／属格標示の問題として扱っている。

2.5. 部分否定と全部否定

Haspelmath (2005: 466) は ‘nobody’, ‘nothing’, ‘nowhere’, ‘never’ に直訳できる語を、「否定不定代名詞」と呼んでいる。その上で、これらが①述語否定と共起しなければならない言語、②共起しない言語、③どちらも観察される言語、④否定の存在述語を用いて表現する言語、の4つに分類している。①は例えばロシア語 (*Nikto ne prišel.*)、②の例はドイツ語 (*Niemand kam.*)、③の例はスペイン語 (*Nadie vino. No vi nada.*)、④の例はネレムワ語 (オーストロネシア語族、例は省略) であるという。Haspelmath (2005) の

調査した 206 言語のうち、②は 11 言語、③は 13 言語で、そのうち 17 言語が西ヨーロッパと中央アメリカに集中しているという。④の否定存在述語による言語はポリネシアのオーストロネシア語族の言語に局在しているという。

他方、Haspelmath (2005: 466) は否定不定代名詞は、(i)疑問詞ベースのもの、(ii)一般名詞ベースのもの、(iii)その他、に分類できるとしている。ここで(i)は日本語の「何も」、「誰も」のような要素も含んでいる。すなわちここで Haspelmath (2005: 466) のいう否定不定代名詞とは ‘nobody’ のような「本来の (inherent)」ものだけでなく、‘anybody’ のようなものも含む広い概念であることに注意する必要がある。

本アンケートのうちのマレーシア語(野元 (2010))にあるように、英語の ‘All that glitters is not gold.’ は全部否定と部分否定の両様の解釈を許すという。今回調査した言語の [数量の全部否定] 「(12) 全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。」と [数量の部分否定] 「(13) 全ての学生が参加したわけではない。」の例文において、「全ての学生が参加した」にあたる文をデフォルトのやり方で否定した文が {全部否定／部分否定} のどちらの意味を実現するかについてみると、これは二つのグループ (どちらもデフォルトの否定では表現されなかった言語を含めると、三つ) に分かれることが分かった。

[A]全部否定になる言語のグループ: ウクライナ、ポーランド、チェコ、ラトビア、リトアニア、中国、朝鮮、モンゴル、ウルドゥー、アラビア、タタール、マレーシア、メエ、グイ

[B]部分否定になる言語のグループ: アイスランド、フランス、フィンランド、ロシア

[C]どちらもデフォルトの否定では表現されない言語: ドイツ、イタリア、スペイン、ブルガリア、リトアニア、ナーナイ、エウエン、ソロン

[A]のグループの言語は、何らかの方策によって部分否定の意味を実現しなければならないが、上記の 14 言語のうち、下線を施した 8 言語において、日本語にもみられるような「埋め込み」が観察された (なお[C]の 2 言語でも埋め込みが観察された)。[A]のグループの言語も埋め込みの手法も、(特に西ヨーロッパの) 印欧諸語以外の言語に大きく偏っていることがわかる。

他方、[B]の言語はフィンランド語以外は全部印欧語族の言語で、それも全て地域的にヨーロッパの言語であることがわかる。ではなぜ[B]の言語では部分否定の方がデフォルトの否定形式で表現されるのだろうか? 筆者はこれらの言語のデフォルトの文が有題文でありかつ述語焦点である点にその原因があると考え。SVO 語順の言語における S は基本的に定の名詞であり、さらに主題となる強い傾向があることが指摘されている (野田 (2004), 風間 (2019))。[B]の言語のうち、ロシア語は自由語順の言語であるが、他は SVO を基本語順とする言語であり、ロシア語も主題を文頭におく強い傾向を持っている。したがってこれらの言語では (主語が定である) 有題文と解釈される傾向があるために、否定のスコープは次の下線部 (「全ての学生が参加しなかった」) のようにはならず、対比焦点的な主題として実現し、次の [] に焦点が当たった「[全ての学生]は参加しなかった」の文のように実現するものと考えられる (つまりは部分否定の解釈となる)。

このことは[C]の言語のうちのヨーロッパの言語、すなわちドイツ、イタリア、スペイン、ブルガリア、リトアニアにも当てはまると考える (これらの言語は基本的に SVO 語順の言語である (ドイツ語は定形第 2 だが、主節でもっとも頻度の高い語順はやはり SVO である))。ツングース諸語のうちナーナイ語とエウエン語で、全部否定が [疑問詞+累加] の形式によって表現されたのは媒介言語のロシア語の文がそうだったためだと考えられるので、ツングース諸語は本来的には[B]のタイプの性質を持っていると考えたい。

[B]、[C]の言語では、したがって部分否定の方がデフォルトになるため、全部否定の方に何らかの特別な方策を必要とする。そこでまず用いられるのが ‘nobody’ や ‘nothing’ のような否定不定代名詞であると

考えられる。今回の調査で全部否定に際して否定不定代名詞を用いていたのは、ドイツ語、アイスランド語、ロシア語、ブルガリア語、リトアニア語であった。他方で、ヨーロッパの言語には部分否定の方で否定辞を数量等の前の位置に移動する手法も多く観察されたが、これにはドイツ語、ウクライナ語、ポーランド語、ブルガリア語、ラトビア語、リトアニア語があった。ヨーロッパ以外でもマレーシア語、グイ語に観察された。

2.6. 否定の強調

今回の調査では、否定代名詞の出現を調査するため、さらに「(3) この部屋には一つも椅子がない」および「(4) その部屋には誰もいない」という例文を用いて調査を行った。

まず(3)の「モノ」についての結果を示す。

- A. 否定代名詞を用いる言語：ドイツ (eizigen ‘single’も共起)、イタリア、スペイン
 - B. 不定代名詞を用いる言語：フランス、ラトビア、ウルドゥー
 - C. [「一つ」+強調要素]による言語：フィンランド、チェコ、リトアニア、中国(強調要素は“都” dou1「全て」)、朝鮮、モンゴル、アラビア、タタール、マレーシア、メエ、ナーナイ、エウエン、ソロン
 - D. 「一つ 否定の強調辞」による言語：ロシア、ウクライナ、ポーランド、ブルガリア
- アイスランド語では、「一つ」を否定するのみで、強調要素は現れていない。グイ語では、複数形を用いることで椅子一般の非存在を示していた。

次に(4)の「ヒト」についての結果を示す。

- P. 否定代名詞を用いる言語：ドイツ、イタリア*、スペイン*、アイスランド、ロシア、ウクライナ、ポーランド、ブルガリア、チェコ
- Q. 不定代名詞を用いる言語：フランス、フィンランド、ラトビア、ウルドゥー、アラビア、マレーシア、メエ?
- R. 「疑問詞 も」による言語：朝鮮、モンゴル、ナーナイ、ソロン、エウエン
- S. 「一つ も」による言語：中国、グイ
- T. 「一つ 否定強調辞」による言語：リトアニア

タタール語では疑問詞起源の語 (berkem) が用いられていた。

なお*を付した言語についてだが、スペイン語の *nadie* は、動詞の前に生起した場合は否定代名詞的に、動詞の後に生起した場合は文否定要素を要求して不定代名詞的に振る舞うという。イタリア語の *nessuno* も同様の振る舞いをするようである。

総じて否定代名詞を用いる言語は、やはりヨーロッパの印欧語族の言語に完全に偏っていることが確認できる。不定代名詞を用いることで一貫しているのはフランス語、ラトビア語、ウルドゥー語である。「ヒト」に関して「疑問詞 も」を用いるのは東北アジアの言語に偏っていることもわかる。

2.7. 推量の否定

日本語ではかつて推量の否定には *-(a)mai* が用いられ、現在でも文語のみならず「～しようとすまい」となどの慣用的な表現において、口語でも若干の使用が観察される。一方で、否定の推量は現在の口語ではもっぱら基本的に否定に肯定の推量を組み合わせた *-(a)na-i=daroo* が用いられている。したがって、かつての日本語のように推量の否定に特別な形式を示す言語がある程度存在するのではないかと

考え、今回の例文[17]「明日は雨は降らないだろう」による調査を行った。

しかし今回の調査結果において、推量の否定が特別な形をとる言語は極めて少なかった。まず最も変わっていたのはフィンランド語で、「明日雨が降るだろうか!?’のような反語疑問文による表現が観察された。次に、タタール語では通常の否定形でなく、不定未来の否定形 *-mAs* によって推量の否定を示している。他にはリトアニア語でモダリティ的な意味を持つ「もつ」の接続法現在形に否定の接頭辞がつくこと、中国語で可能性を表わす助動詞の方が否定されること、ウルドゥー語の不確定未来の否定では *nahīn* でなく *na* が用いられること、メエ語の否定と推量の形式の連続が固定した特別な表現である可能性があること、などを除くと、推量の否定はどの言語でも、もっぱら推量の文などを通常の否定の形式によって否定するものであった。

2.8. 禁止

Van der Aurora et al. (2005) は、禁止が [2 人称単数命令法の動詞構造] と [(直説法) 平叙文にみられる否定方法] の組み合わせであるか否か、に注目し、495 言語について調査して、これらが ① *normal imperative + normal negative* (113 言語)、② *normal imperative + special negative* (183 言語)、③ *special imperative + normal negative* (55 言語)、④ *special imperative + special negative* (144 言語) に分類される、という結果を得ている。地理的・系統的分布からみると、①は中南北アメリカ・非バントゥー諸語ニジェール・コンゴ語で多くみられ、ユーラシアではゲルマン語派・スラヴ語派・チュルク語派で典型的であるという。②は広域にわたり、東南アジア・極東、ケルト語派、コイサン諸語で典型的であるという。③はヨーロッパでは、ロマンス語派に典型的で、(東)南アジア・ニューギニアを除く全世界に散発的にみられるという。④も広域にわたり、西ヨーロッパ・東南アジア・極東を除いた各地でみられるという。

これに対し、今回の調査結果は次のようであった：

- ①：ドイツ、フランス、ロシア、ウクライナ、ポーランド、ブルガリア、チェコ、リトアニア、ラトビア、アラビア、タタール、メエ
- ②：フィンランド、中国、モンゴル、マレーシア
- ③：イタリア、スペイン、アイスランド (不定形)
- ④：朝鮮、エウエン、ソロン、ナーナイ、日本
- ②/④：ウルドゥー、グイ

およそ Van der Aurora et al. (2005) の調査結果のとおりであるが、朝鮮語は②でなく④とすべきだろう。ツングース諸語の分析も違っていることが判明した。グイ語では通常の否定小詞も、もっぱら非現実にも用いられる否定小詞も、どちらも用いられるので、②とも④とも決め難い。ウルドゥー語では否定の度合いが強い場合に禁止専用の否定辞 *mat* が用いられる。

アラビア語の命令が特別な形式ではなく、単なる述語の 2 人称形であり、禁止も単にその否定による点が注意を惹く。他の言語においては一般に命令や禁止は通常のパラダイムとは異なった形を示す。

なおイタリア語では敬称の場合、否定される動詞は命令形であるので、その場合は②となる。フィンランド語は②としたが、一般の動詞は語幹が命令形であるのに対し、否定動詞の命令形は *älä* という特殊な形であるため、③としてもよいと考えられる。

2.9. 文の否定・否定のスキープの調節

[14]の調査例文「(私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない」で「文の否定」と呼んだものと、[19]の調査例文「私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない」で「否定のスキープの調節」と呼んだものは、かなり共通した側面を示すことが分かったため、ここでは同じ節で扱うことにする。

まず、ここで[14]「文の否定」と呼んだものは、日本語で述語を否定して作る通常の否定文でなく、文をいったん形式名詞などにより名詞化してこれを名詞述語の否定形式によって否定するものである。

今回のデータでは、次のようなタイプがみられたが、ヨーロッパの言語はもっぱら補文標識により補文化してこれを否定するのに対し、それ以外の地域の言語ではさまざまな要素による否定が観察された。

A. 「(～ことを) 意味しない」のような表現による言語：フランス、ロシア、ウクライナ、ポーランド、ラトビア、アラビア

B. (理由の) 従属節の前に否定を置く言語：ドイツ、アイスランド

C. 補文を名詞述語文の否定で否定する言語：イタリア、スペイン、チェコ、ウルドゥー

D. 連体形に「こと、話」のような名詞を続け、これを名詞述語文の否定で否定する言語：朝鮮、モンゴル、ソロン

E. その他：フィンランド（「高い値段が理由ではない」のような表現による）、リトアニア（「～とは言えない」のような表現による）、タタール（引用を否定する）、マレーシア（形容詞に名詞述語文の否定 *bukan* を用いる）、メエ（動詞節にしたうえでさらに名詞化して文否定を行う）、グイ（「高くないと知っていて買わなかった」のような逆接による2文の表現とする）、ナーナイ・エウエン（単なる形容詞の否定による）

Bはゲルマン語派のみ、AとCとDにはそれぞれスラブ語派、イタリック語派、東北アジアの言語が多くみだされる。したがって系統的・地域的に近い言語が似た表現を採用しているとみることができるだろう。全体として、名詞化して否定する点では同じであるが、その名詞化が前置詞節なのか、補文節なのか、連体修飾された名詞なのか、といった違いが現れることがわかる。

次に、ここで否定のスキープの調節と呼んだものは、[19]「私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない」のような日本語の文で、否定のスキープを限定するために「のだ」を用いていることを指す。先行研究でみたように、「名詞述語でないものは、文全体に否定が及ばないことが多い」という (Payne (1985: 199))。実際に、今回の調査データにおいても、何の調節も行わずに、通常と同じように単に述語を否定するだけで、[19]の文において前半の行為の意図のみを否定することのできる言語が多数存在することがわかった。そのような例を示した言語は、ドイツ*、アイスランド、フランス、フィンランド*、ブルガリア、チェコ、ラトビア、ウルドゥー、アラビア、タタール、ソロン*の各言語である (*の言語は他のバリエーションも示した)。地域にも類型にも偏りがみられないので、やはり先行研究のいうように何らの方策もなしで否定の焦点は限定され得るものなのかもしれない。しかしこの点に関しては今後のさらなる研究を必要とするものと考えられる。

他方、(理由の) 従属節の前に否定を {置く/移動させる} 例を示した言語には、イタリア、スペイン*、ウクライナ、ポーランド、リトアニア、フィンランド、アラビアの各言語があった。このことはこれらの言語で否定の位置が比較的的自由であることを示している。

他に、「文の否定」におけるのと同様に、補文の否定による言語には、スペイン、ポーランド、中国の各言語があった。中国語では“我这么说不是惹你生气”「lit. 私がそう言ったのはあなたを怒らせようということでない」のような表現であった。

マレーシア語、朝鮮語、メエ語、ソロン語でも、それぞれ方策は異なるが、基本的に[14]「文の否定」におけるのと同様の表現がみられた。

グイ語では「私がそう言った」「あなたが怒った」「私はあなたを怒らせたくなかった」という3つの内容の等位接続による表現がみられた。

2.10. 目的節の否定

アイスランド、フランス、イタリア、スペイン、ラトビア、リトアニア、フィンランドのヨーロッパの各言語に接続法（ラトビア語では「願望法」）が観察されたが、肯定と否定による違いはないようである。イタリック語派で接続法が比較的保たれているのに対し、スラブ語派では衰退している状況（ポーランド語には「仮定法」があるという）がこうした分布の結果に反映している。ゲルマン語派のドイツ語でも接続法を用いれば「古風」に感じられると記述されていて、ここでも衰退していることがわかる。

目的節の否定に特別異なった形式を示す言語はあまりないようだが、中国語では免得「～しないように」という特別な語彙的要素により否定の目的節を形成している。

ウルドゥー語とグイ語ではそれぞれ不確定未来の否定、非現実の否定語、が用いられるという。ウルドゥー語の不確定未来の否定 *na* は目的節内の否定と推量の否定に、グイ語の非現実の否定語 *cī* は禁止にも用いられるという点に注意したい。

3. 連体修飾節

連体修飾節については、先行研究も多く、ここで十分整理して示すことはできないが、各項目ごとに（筆者が関連があると考えた）若干の先行研究の知見を示しつつ、今回のデータの分析を行っていくものとする。なお調査例文[26] [時間節]、[27] [場所節]については時間的・能力的な問題から分析を行うことができなかった。記してお詫び申し上げます。

3.1. 内の関係の連体修飾

Comrie and Kuteva (2005) は関係節化の手段に4つのタイプをあげ、世界の112の言語でのその使用を調査している。以下に4つのタイプを疑似日本語によって示し、その言語数も：の後ろに示す。

- ①関係代名詞型：[私は少女を教えている、その誰かがちょうど私たちに挨拶した（所の）。]：12
- ②削減なし型：24
 - ②(1)相関型：[私は少女を教えている、少女がちょうど挨拶したの（を）。]
 - ②(2)主要部内在型：[私は少女がちょうど挨拶したのを教えている。]
 - ②(3)並列型：[少女がちょうど挨拶した、（彼女が／少女が）私に教えられている。]
- ③代名詞残存型：[私は彼女がちょうど挨拶したところの少女を教えている。]：5
- ④ギャップ型：[私はちょうど挨拶した少女を教えている。]：125

Comrie and Kuteva (2005) は上記のタイプの地理的分布に関して、①が印欧語族の言語の中でもヨーロッパの言語に限られることを指摘している。ヨーロッパ以外ではグルジア語と北米のアコマ語しかなく、関係代名詞というものが世界的・類型論的にみるときわめてマイナーなものであることに驚かされる。データをみる限り④ギャップ型が世界的に圧倒的に優勢であり、②削減なし型はもっぱら新大陸に、③代名詞残存型はもっぱらアフリカに分布している。

Comrie and Kuteva (2005) は明言していないが、関係代名詞を使用する言語は、関係節が名詞に後続する言語に偏っている。Comrie and Kuteva (2005) [122 Relativisation strategies] と Dryer (2005b) [90 Order of relative clause and noun] を掛け合わせてみると、関係節後続で関係代名詞を使う言語が10であるのに対し、関係節先行で関係代名詞を使う言語は0である。もっとも多いのは関係節後続でギャップ型の言語(74)、次に多いのは関係節先行でギャップ型の言語(20)である。

以下では上記の先行研究の記述を踏まえて今回の調査の結果について分析する。

従属節の目的語において関係代名詞を使用していたのは下記の言語で、ヨーロッパの言語は全てここ

に属し、さらに印欧語のウルドゥー語が属す他には、マレーシア語、グイ語、エウエン語があった。これらの言語においても、従属節中の主語、場所、所有者においては関係代名詞がそのままでは使いにくくなる。それを整理したのが次の表1である。なお表中の「ゼロ」と「形動詞」は次で問題にするギャップ型の手法である。

表1：内の関係の連体修飾に關係代名詞を用いる言語の被修飾名詞の統語的役割別の表現の分布状況

	目的語	主語	場所	所有者
ドイツ	関代	単文	前置詞＋関代	前置詞＋関代
フランス	関代	関代	前置詞＋関代	関代属格
イタリア	関代	関代	関係副詞	前置詞＋関代 or 関代+have
スペイン	関代	冠詞＋関代 (疑似分裂文)	前置詞＋関代 or 関係副詞	前置詞＋関代
フィンランド ⁶	関代 or 動作主分詞	単文	関代＋ <u>内格</u>	関代属格
アイスランド ⁶	関代 or 過去分詞	単文	there＋関代	関代+be with broken leg
ロシア	関代	単文	関係副詞 or 前置詞＋関代 or 単文	前置詞＋関代 or with broken leg
ウクライナ	関代 (不変化)	関代	関係副詞 or 前置詞＋関代	前置詞＋関代
ポーランド ⁶	関代	単文	関係副詞 or 前置詞＋関代	with broken leg
ブルガリア	関代	関代	前置詞＋関代	前置詞＋関代
チェコ	関代	単文	前置詞＋関代	with broken leg
ラトビア	関代	単文 or 関代	関係副詞	関代与格+be broken leg
リトアニア	関代 or 受動分詞	関代	関代 <u>処格</u>	関代属格
ウルドゥー	関代 or 分詞	関代 or 分詞	関代	関代属格
グイ	関代 or 属格	関代 or 属格	関代 or 属格	関代 or 属格
エウエン	関代	<u>形動詞</u> or 単文	関代	関代 (二重)

このような分布の状況が現れた理由について、以下に若干の考察を加える。

まず【目的語】の場合、現在もSOV語順のウルドゥー語、グイ語、かつてウラル祖語ではSOVだったフィンランド語に分詞等、関係代名詞以外の手段が現れている。これはSOVと連動する前置修飾(AN)の語順がその手段に反映しているものと考えられる。リトアニア語にはウラルの基層が考えられる。アイスランド語については理由がわからない。なおグイ語は従属節中での役割に関わらず一貫して同じ手法を用いていることがわかる。

次に【主語】の場合、そもそも複文でなく、単文で表現する言語の多いことがわかる。例えば、英語で考えると、‘Who [is the person that] brought that book?’の【】内を省略しても自然な単文が得られる。逆に【】内を表現するとまわりくどい不要な疑似分裂文を作ることになる。他方、日本語で「その本を買ってきた【のは】、誰？」という文の【】内を省略すると文として成り立たない。「誰がその本を買ってきた【の】？」のような語順の文でも、むしろ【の】があって疑似分裂文のようになっているほうが文として安定している感じがする。この問題についてはさらに深く分析・考察していく必要があるが、このように従属節中の主語を関係節化する場合に、後置修飾で関係代名詞を使用する言語では単文の方が

自然になるという傾向があるといえるだろう。このことはこれらの言語で、特に SVO 語順の言語の場合に、S が主題兼主語の性格を強く示し、デフォルトの文が有題文であることと深いつながりがあると考えられる。このことに関しては風間 (2019) も参照されたい。なおマレーシア語では先行詞のない疑似分裂文となっている。

次に「場所」の場合、まず関係代名詞自体に格変化がある言語が存在するが、これはフィンランド語とリトアニア語である。フィンランド語は格の多いウラル語族の言語であり、15 の格を持つが、リトアニア語はここでも基層言語であるウラルから受けた影響を示しているものと考えられる。次に注目すべきはアイスランド語で、関係代名詞はもっぱら 'sem' 一つしかなく、しかもこの関係代名詞は「前置詞と直接結合しない」(秦 (1988: 3)) という。このため、「場所」でも「所有者」でも「前置詞+関係代名詞」の形をとることができず、前後の要素でこれを補っているものと思われる。

「前置詞+関係代名詞」を用いるか、関係副詞を用いるか、という選択の状況についてみると、その理由を想定させるような一貫した分布がみられない。理屈から考えると、西ヨーロッパの孤立型の言語において「前置詞+関係代名詞」の分析的表現がより好まれ、東ヨーロッパのより統合的な言語で関係副詞が好まれる、というような状況になってもよいと考えられるが、そのようにはなっていない。イタリック語派、スラブ語派、バルト語派の中でもその選択は分かれていて、語派における一貫性も観察されない。

最後に、「所有者」の場合では、語派によるはっきりとした違いが観察できる。まずスラブ語派では関係代名詞を使わずに、[with broken leg] のような前置詞句によって表現することが多く行われている。格変化を多く残しているバルト語派では関係代名詞の属格が用いられる。他方、格変化を失っているイタリック語派では基本的に「前置詞+関係代名詞」が用いられる(ただしフランス語における関係代名詞の属格についてはさらにその位置づけについて考慮する必要があるだろう)。

次に、ギャップ型の言語における内の関係の連体修飾、およびそこでの「目的語」、「主語」、「場所」、「所有者」間での違いについてみよう。ギャップ型の場合、関係代名詞や関係副詞がないので、それを従属節における「目的語」、「主語」、「場所」、「所有者」のような役割に応じてどのような形にするか、ということは全く問題にならない。全て連体形もしくは形動詞と呼ばれる分詞的な形式で一律に前から修飾すればよい。このことはまずこれらの言語が一貫して主要部後置であり、どのような修飾要素も被修飾要素に常に前置されることが保証されているため、上記のような状況が可能になっていると考えられる。

Keenan and Comrie (1977) が提唱する関係節化の接近階層(主語>直接目的語>間接目的語>所有者)によると、主語での関係節化は他の位置での関係節化より簡単に起こり、直接目的語での関係節化は間接目的語などでの関係節化より簡単に起こる。接近階層をみて考えられる一般化の1つは、代名詞保持の手段は階層の末端で好まれるということである。

したがって今回のギャップ型の言語のデータにおいて唯一問題になるのは、[23]「足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった」において「足」と「イス」の関係がわかりにくいという点であり、いくつかの言語(モンゴル、タタール、ナーナイ、ソロン、グイ)では「足」に所有の表示がなされていることが観察される。

なおモンゴル語では肯定・現在の名詞述語文ではコンピュータを用いないため、「A は B です」は単に「A B」のように示されることになるが、連体修飾が入り込んできて文が長くなると A と B がどこからどこまでわかりにくくなる。このため[22]「この部屋が私たちの仕事をしている部屋です」では bol, =čin のような主題提示要素が現れて主題と題述の切れ目を明確にしていることが観察される。

中国語は、Comrie and Kuteva (2005) ではギャップ型に分類されているが、文的な要素を的 de によ

て名詞化してこれを名詞の前に置き、同格構造によって名詞を修飾する。VO 語順の言語では一般に関係節は後置されるのが普通であるが、中国語は数少ないその例外である。これは橋本 (1989) のいうように、中国語が漢語の下層の上にアルタイ諸言語、特に満洲語の影響を強く受けて成立した言語であるためであろう。[23]では、“的”de による表現だけでなく、“那把椅子断了一条腿, 扔掉了”のように“把”構文を用いて時系列順に述語を連続させた構文(孤立型の言語らしい構文である)も別のバリエントとして提示されていた。

最後に、アラビア語は Comrie and Kuteva (2005) のいう③代名詞残存型であるが、これは[目的語]、[場所]、[所有者] 場合で、[主語] だけは冠詞の一致による同格構造となる。なお本題からは外れるが、チュルク諸語の中にあつてオグズ語群の特にトルコ語においては、従属節中に主語があるかないかによって異なった形動詞が用いられる。アラビア語における上記の違いを鑑みると、このことはアラビア語の影響によって生じた可能性もあるのではないかと考える。

3.2. 外の関係の連体修飾と内の関係の連体修飾、補文節、引用節の四者間の関係の対照

寺村によるいわゆる外の関係の連体修飾は、欧米の印欧語族の言語では一般に補文標識によって示され、内の関係の連体修飾、すなわち関係節とはその表現方法において断絶している。他方、こうした言語では「知っている」、「思う」などの知識・思考の動詞がとる補文節や「言う」などの言語活動の動詞がとる引用節も同じ要素(補文標識に酔る補文)によって示される。一部の言語では「見る」、「聞く」などの知覚動詞がとる補文節も同じ要素によって示される。他方、上記の④ギャップ型を用いる諸言語の中には、この方法が the Fact-S 構造(「外の関係の連体修飾」と同じものを指す)をはじめとする一連の表現における唯一の手段である言語(日本語やそれに類型論的に類似したタイプの言語も多くここに含まれる)が存在し、これが当該言語では一般的な名詞修飾の節構造であるという(Comrie and Kuteva (2005: 495))。

そこで今回の調査データでは、関係節/内の関係の連体修飾節([目的語])と the Fact-S 構造/外の関係の連体修飾節(「音」・「噂」)、補文節(視覚・聴覚・知識)、引用節(間接話法)の4者の異同の関係を調査し、整理して示すことにする。

なお若干の注記のあることを表中に*によって示し、その説明は表の下に示した。

略号は以下のとおりである。

関代：関係代名詞、補：補文標識(how とあるものは英語の‘how’にあたるものを使用)、前：前置詞、同時：同時を示す副詞節など、接：接続詞、属：グイ語における名詞化の機能も併せ持った属格、対：グイ語における名詞化の機能も併せ持った対格、《言って》：歴史的もしくは共時的に「言う」という動詞の副動詞形などから発達した引用節標識、inf: infinitive、NMLZ: nominalizer、N: noun、acc: accusative、gen: genitive

表 2：外の関係の連体修飾節および「補文節」、引用節の標示方法の分布状況

	内 [目的語]	外「音」	外「噂」	補文節			引用
				視覚	聴覚	知識	間接話法
ドイツ	関代	inf/補 how	補	inf/補 how	inf/補 how	補	補
アイスランド	関代	inf	補	inf	Inf	補	Inf
フランス	関代	inf	補*	inf	Inf	補	補
イタリア	関代	inf/補	補	inf/補	inf/補	補	補 or 前 inf
スペイン	関代	前+関代 or 分詞	補	inf/補	inf/補	補	補
ロシア	関代	補 how or N	補**	補 how	補	補	補
ウクライナ	関代	N	補	補 how	補 how	補	補
ポーランド	関代	N	補	補	補	補	補
チェコ	関代	N	補*	補 how	補 how	補	補
ブルガリア	関代	補 how or N	補	補 how	補 how or da 構文	補	補
ラトビア	関代	補 or 分詞	補	補 how or 分詞	補 how or 分詞	補	補
リトアニア	関代	補 how or 分詞	補**	補 how or 分詞	補 how or 分詞	補 or 副分詞	補 or 分詞
ウルドゥー	関代	inf+gen	補/inf+gen	分詞	分詞	補	補
フィンランド	関代	分詞 acc or 同時 or N	補	接 or 補 or 分詞	接 or 補 or 分詞	補 or 分詞	補 or 分詞
アラビア	残留型	ゼロ or N	補	同時	同時	補	補
中国	“的”NMLZ	ゼロ目的語化	ゼロ主語化	ゼロ目的語化	ゼロ目的語化	ゼロ目的語化	ゼロ目的語化
朝鮮	連体	連体	トイ連体	連体+コト	連体+コト	連体+コト	《言って》
モンゴル	形動詞	形動詞	トイ形動詞	形動詞 acc	形動詞 acc	形動詞 acc	《言って》
タタール	形動詞	動名詞	トイ形動詞	形動詞 acc	形動詞 acc	形動詞 acc	補
ソロン	形動詞	形動詞	トイ形動詞	形動詞 acc	形動詞 acc	形動詞 acc	《言って》 or 形動詞 ref
エウエン	関代	2 文	2 文	補 how	補 how	形動詞 acc	形動詞 ref
ナーナイ	形動詞	2 文	2 文	形動詞 acc	形動詞 acc	形動詞 acc	《言って》
マレーシア	ゼロ	ゼロ	補	ゼロ目的語化	ゼロ目的語化	補 or ゼロ目的語化	補 or ゼロ目的語化
メ	形動詞	形動詞	形動詞	同時 or 限定詞 or ゼロ	同時 or 限定詞 or ゼロ	限定詞	ゼロ目的語化
ガイ	関代 or 属		関代	対 or NMLZ	対 or NMLZ	対 or NMLZ	V 対

*関係代名詞等の現れが二重になっている。

**先行詞がない方がふつう。

上に述べたように、ヨーロッパの印欧語族の言語（基本的に VO（語順の）言語）では、内の関係の連体修飾と、表においてその右側に位置する諸表現の間に大きな対立があり、右側の諸表現は主に補文によって示される。補文は一種の名詞化であり、（外の関係など）連体的な場合、それは主名詞と同格の関係に立ち、引用や知覚・知識動詞の補語の場合それらは直接目的語相当である。

これに対し、アルタイ型の言語（日本語、朝鮮語、アルタイ諸言語など、基本的に OV 言語）では、表における一番右の引用節とその左側に位置する諸表現が対立し、左側の諸表現はもっぱら連体形や形動詞を用いて示される。（外の関係など）連体的な場合、それは修飾語として機能し、引用や知覚・知識動詞の補語の場合、それらは連体形や形動詞に格を付加することによって示される。

すなわち、両タイプの相違は表における境界の位置が異なっているだけではない。VO タイプでは長い修飾語が主名詞に先行することが好まれないために、連体修飾複文の形成において修飾構造ではなく、後置した同格構造を用いる。他方 OV 言語では長い修飾語が主名詞に先行することも問題ないので、単文における形容詞の修飾などと同じ修飾構造を用いる。

補文節においては両タイプの間に大きな違いは起こらない。VO 型言語は補文節をそのまま目的語とし、OV 型言語は格を用いて目的語とする。ただし OV 型言語の中で、形容詞が動詞型であるか形容詞型であるかによって、形式名詞を用いてそれに格を接続するか、用いないで直接格を接続するかの違いはある。なお上記で問題にしたように、OV 型言語では VO 言語のそれとは使われる範囲も機能も異なっているので、「補文」および「補文節」という語を通言語的に用いることは正しくないと考え。本稿ではあくまでも便宜的にこの用語を広い意味で使用していることをことわっておく。

他方、引用節では両タイプの違いが問題となる。このことは 3.3. 節で触れる。

OV 型言語でも、その語順の制約がより厳しいゲルマン語派とイタリック語派の両語派の言語では、知覚動詞の構文に不定詞が使われ、知覚内容の中の行為者が直接目的語として取り上げられた表現となる（表中の四角で囲った部分）。この理由については 3.4. 節で考察する。

3.3. 直接話法・間接話法

3.2. 節で分析したように、ヨーロッパの印欧語において、引用節は直接目的語となる。英語における動詞 ‘say’ は他動詞として that 節をとり、その疑問は ‘What did you say?’ となる。これに対し、日本語やアルタイ諸言語の多くにおいて引用節は副詞的に振る舞う節であり、アルタイ諸言語の多くにおいて引用節の標識は歴史のもしくは共時的に「言う」という動詞の副動詞形などから発達した形式を示している（近畿や広島の方言にも「ゆうて（言うた）」のように同様の引用標識がある）。

筆者は、ヨーロッパの印欧語において間接話法で時制やダイクシスの調整が必要なのは、引用節が目的語である補文節であり、主節の動詞に直接支配されているためではないかと考える。これに対し日本語などでは必須項でないため、直接話法と間接話法の境界がはっきりしないのだと考える。

以下の 1)~4)の文は、筆者の内省においては、どれも同じ意味で使用することができる。すなわち例えば 1)と 3)において、「明日」は発話時点における今日のことを示す。

- 1)「昨日オレは、明日もオレが来れば全部片付くだろうって言ったけど、なかなかそうも行かないねえ」
- 2)「昨日オレは、今日もオレが来れば全部片付くだろうって言ったけど、なかなかそうも行かないねえ、」
- 3)「昨日オレは、明日も自分が来れば全部片付くだろうって言ったけど、なかなかそうも行かないねえ、」
- 4)「昨日オレは、今日も自分が来れば全部片付くだろうって言ったけど、なかなかそうも行かないねえ」

ただ、これは「なかなかそうも行かないねえ」という現状への認識が加わっているの、語用論的に解釈が限定されているのかもしれない。5)は発話時点からみても明日も指せるように感じる。しかし 6)では「来る」の時制になっているためか、「今日」を発話時点からみた昨日と解釈することは難しいよう

だ。

- 5) 「昨日オレは明日も来るって言ったよね」
- 6) 「昨日オレは今日も来るって言ったよね」

これに対し、「～(こと)を伝える」のように引用内容を形式名詞によって対格目的語とすると、主文の動詞による支配は強まり、間接話法的な解釈しか許さなくなるようだ。7)の「明日」は発話時点からみての明日のように感じられる。

- 7) 「昨日オレはこの人に、明日も来ることを伝えましたよ」
- 8) 「昨日オレはこの人に、今日も来ることを伝えましたよ」

他方、時制の一致は全く適用できないようだ。このことはヤコブセン (2011: 11) にあるように、話者の視点になっている基準時が過去になっているためだと考えられる。10)でも 12)でも客が来たことは下線部から明らかであるが、12)のように目的語内の節にしても時制は過去形にならない(伝えた時点ですでに客はすでに来てしまっていて、そのことを伝えたという意味になる)。

- 9) 「今日はあいつが来^ると思ったんだ、で、やっぱり来た」
- 10) 「*今日はあいつが来^たと思ったんだ、で、やっぱり来た」
- 11) 「今日客が来^ることは伝えておいたから、接客もスムーズにやってくれたようだ」
- 12) 「#今日客が来^たことは伝えておいたから、接客もスムーズにやってくれたようだ」

今回のデータの分析を通して、上記の仮説を検証を試みようとしたが、調査例文にいろいろと不十分な点があり、準備不足は否めなかった。そこで今回は間接話法とされている方の引用節中で、直接話法の引用節中の「今日」が「昨日」もしくは‘the same day’のような表現になっているか、時制がはっきりと過去完了などになっているか、という点について調べた。はっきりしない言語、疑わしいものは除き、上記の違いが明確に表れている言語のみを選んだ。結果は下記である。

上記の両特徴に関して間接話法的：ドイツ、フランス、スペイン、フィンランド、中国、グイ

「昨日」に関してのみ間接話法的：ウクライナ、アラビア

上記の結果について、OV 言語で間接話法が明確な言語はみいだされなかったということは言えるだろう。グイ語は「今日過去」、「昨日過去」などの細かい時制の区別を持っているため、はっきりとした違いが観察できた。直接話法／間接話法の区別は、ヨーロッパの印欧語においてより厳密であるように思われるが、世界の他地域・他の系統の諸言語の十分な検討が必要である。

3.4. 主要部内在型関係節

主要部内在型関係節(以下、「内在節」とする)は、基本語順が SOV の言語にのみ存在するという説がある(Keenan (1985: 161-163))。さらに SOV の中でもさらに pro-drop の言語に限定されているという説がある(黒田 (1999 [2009: 294, 296]))。

まず今回の調査対象の言語の中で、はっきりと内在節の存在を示していたのは、メエ語とグイ語だけであった。風間 (2017) ではツングース諸語のうちのナーナイ語とモンゴル語で内在節が可能であることを示したが、積極的に使用されるわけではないようだ。同じくツングース諸語のうちのエウエン語でも Malchukov (1995) が内在節の存在を指摘している。風間 (2017) では助詞を全て落とした場合に限って、朝鮮語でも内在節が言えることを指摘した。上記のように、黒田 (1999) は内在節が Pro-drop で SOV 語順の言語に、Keenan (1985: 161-163) はやはり SOV が基本語順の言語にのみ存在するとしている。

今回の調査における上記の5言語は全部SOVが基本語順の言語のようである。他方、グイ語はPro-dropの言語ではなく、黒田(1999)の説の反証となっている。

他に注目すべき言語としては、フィンランド語があり、そこでは目的語が対格になるとともに分詞も対格となって一致を示していた。ラトビア語では知覚動詞でないにもかかわらず対格の対象と不変化分詞による構文が用いられていた。

風間(2017)では、内在節に関して次のような点を指摘した。

- ・内在節を持つ言語では、知覚動詞などでも同じ構文が観察され、構文的な連続性があること
- ・内在節に使われる準動詞形がモノもコトも示せることが内在節成立の要因になっていること

これに対しVO語順の制約の厳しい欧米の印欧語(3.3.節でみたゲルマン語派とイタリック語派の言語)は知覚構文において一般的な補文を取らず、思考動詞等の構文との違いをみせるが、今回の調査から、その理由はこれらの言語が「補文的内容の中にその動作主としての具体的な知覚対象があり、それを目的語にできる可能性があれば、できるかぎりそれを目的語にする」という傾向を持っているためではないかと考えた。すなわち、そもそもSVO語順の言語は他動詞優勢であるが(風間(2019:155-162))、さらにVと具体物としてのOを接近させようとする傾向がある。これは補文構造をデフォルトとみなせば、一種の昇格(raising)とみることもできるだろう。

このことは①知覚構文、②外在型/内在型関係節、③部分への働きかけにおける全体と部分の選択、に共通して、SOV型言語とSVO型言語の違いとなって現れるものと考えられる。

①知覚構文

英：I have seen him run away. 日：私はその人が走って行くのを見た。

②外在型/内在型関係節

英：I ate the apple which was on the table. 日：私はリンゴがテーブルの上にあったのを食べた。

③部分への働きかけにおける全体と部分の選択

英：I hit him on the shoulder. 日：私は彼の肩をたたいた。

これに対し、思考動詞などが補文を取っている場合は具体的な対象を目的語にできないために構文が変わってくる。これは今回調査のアラビア語において全く並行した現象が観察された。

英：*I know him come here in this morning. I know that he came here in this morning.

これは、後ろから修飾する長い語句がどこで終わるのかを示すことが難しく、文的な要素をそのまま目的語等にすることができないSVO型の言語と、文的な長い語句でもhead-finalの特性からその範囲の把握が聞き手にとって容易であり、容易に長い語句を項にすることのできるSOV型の言語の違いであるということができるだろう。見方を変えれば、主要部先行型のSVO型言語では、そのSVOの骨組みをなるべく簡潔な形で文の先頭において示そうとするのに対し、主要部後置のSOV型言語では、従属節の中に主節の動詞にとっての直接の対象が存在しても、SOV・ANの語順を破壊してでもその対象を従属節の右側に外置しようとはしないということになる(ただし内在節/外在節の選択では外在節の方が一般的なようである)。

3.5. 時間節

Cristofaro(2005)では、When節の中の述語が独立した文や複文の内の主節に現れる述語動詞と全く同等の述語動詞である場合にこれを「同等(balanced)」とし、他方、人称の一致やTAMなどの一部もしくは全部を失ってしまう場合にこれを「格下げ(deranked)」として、174言語についての分析・調査を行った。Cristofaro(2005)は地理的分布の傾向などについても記述しているが、筆者には顕著な分布やそ

の明確な理由があるようには思えない。

今回、時間節と場所節に関しては分析を行うことができなかった。次回の課題としたい。

4. 形容詞

形容詞に関しては、比較級と最上級についてデータを分析した。

4.1. 比較級

まずいわゆる形容詞の「比較級」の形式に関して、Stassen (2005b: 491) は次のように述べる：「大半の言語では、そのような明確な標示はない。特別の接辞を持つのは、英語、ドイツ語、オランダ語の ‘-er’、ラテン語の ‘-ior’、ハンガリー語の ‘-bb’、バスク語の ‘-ago’ などほぼヨーロッパのみの現象で、特に小辞比較構造を持つ言語に多い。比較接辞の語源はたいてい不明である。」

Stassen (2005b: 490-491) は比較の基準となる名詞およびその名詞のとり形式（すなわち英語で *than*、日本語で「より」のところに出現する要素）に注目した。① ‘from’ や ‘out of’ といった意味のマーカーをとる場合これを「場所比較 (locational comparative)」② ‘to exceed’ や ‘to surpass’ といった意味を持つ他動詞の直接目的語となる場合これを「優勢比較 (exceed comparative)」③ 「A は大きく、B は大きくない」もしくは「A は大きく、B は小さい」のような表現をとる場合これを結合比較 (conjoined comparative) ④ その他の英語の ‘than’ のような比較の対象専用の要素を用いるものを「小辞比較 (particle comparative)」と呼び、167 言語についてこの観点から分類した。結果は①場所比較：78 言語、②優勢比較：33 言語、③結合比較：34 言語、④小辞比較：22 言語となった。地理的にみると、④小辞比較はヨーロッパに限られている。③結合比較はオーストラリアとニューギニア、アマゾン流域に多い。②優勢比較はほぼ二つの地域、つまりサブサハラのアフリカと中国・東南アジアに限定されている。①場所比較は北アフリカとユーラシアの大部分（中東とインドを含み、ヨーロッパを除く）で優勢で、その他世界各地に広く分布している。

筆者は、この分布について次のように考える。まずサブサハラのアフリカと中国・東南アジアは孤立型言語の集中地帯である。孤立型言語では文法的要素も独立性の強い語であり、動詞連続が頻繁に使われるため、「to exceed」や「to surpass」といった意味を持つ他動詞を使用はするのは自然なことだろう。次に、インドを含むユーラシアにはアルタイ型の SOV 語順の言語が分布し、これらの言語は比較的格の数が多い（風間 (forthcoming)）。格の数が多い理由は場所を示す格が多いためであり、これらの言語が「場所比較」の方策をとることも自然なことだと考えられる。

今回の調査データに関しては、まず（比較を示す）形容詞の形に注目して分類を行ってみた。その結果は次のとおりである。

A. 接辞による言語：ドイツ、フィンランド、アイスランド、ロシア、ウクライナ、ポーランド、ブルガリア、チェコ、ラトビア、リトアニア、アラビア、タタール、ナーナイ、エウエン

B. 分析的形式 (“more”) による言語：フランス、イタリア、スペイン、マレーシア

C. 上記のいずれも用いない言語：中国、朝鮮、モンゴル、ウルドゥー、グイ、ソロン

なおメエ語は上記の③結合比較を用いていた。エウエン語およびナーナイ語の形式は必須のものではなく、本来指大辞や選別形「～の方」、「やや～だ」のような意味を示すものなどであり、媒介言語のロシア語に引かれて付加されたものと思われる。しかし先行研究のいうように必ずしもヨーロッパの言語に限られるわけではなく、アラビア語やタタール語にも観察された。ただし必須であるかなど、さらに検討すべき問題はある。このことは分析的な形式についても言える。

次に Stassen (2005b: 490-491) のいう比較の基準となる名詞の取る形式についてみると、結果は次のよ

うになった。

①：モンゴル、ウルドゥー、アラビア、タタール、マレーシア、エウエン、ソロン

②：中国

③：メエ

④：ドイツ、フランス、イタリア、スペイン、フィンランド、アイスランド

④もしくは①：ロシア、ウクライナ、ポーランド、ブルガリア、チェコ、ラトビア、リトアニア、朝鮮

ほぼ Stassen (2005b) の指摘したような分布になっていることが確認できる。

4.2. 最上級

今回のデータにおける形容詞自体およびそれを取り巻く語による最上級の表現を整理したところ、次のような結果となった。

A. 接辞による言語：ドイツ、フィンランド、アイスランド、ウクライナ、ポーランド、ブルガリア、チェコ、ラトビア（比較級と同じ形+限定）、リトアニア、アラビア（比較級と同じ形）、タタール、エウエン

B. 分析的形式（“more”）による言語：フランス、イタリア、スペイン、ロシア（+比較級と同じ形）、中国、朝鮮、モンゴル、ナーナイ、ソロン

C. 上記のいずれも用いない言語：ウルドゥー、グイ

下線の言語は定冠詞を伴う言語である。なおマレーシア語には接辞と分析的形式の二様の表現があるという。タタール語とエウエン語を除けば、接辞による最上級を持っているのはもっぱらヨーロッパの言語に限られ、さらにフィンランド語を除き印欧語族の言語であることがわかる。印欧語族でもイタリック語派の言語は変化の多くを失い、分析的になったが、ここでもその特徴が反映していることがわかる。

参考文献

欧文

Comrie, Bernard and Tania Kuteva. 2005. 122-123 Relativisation strategies. *WALS*. 494-501.

Cristofaro, Sonia. 2005. 126 ‘When’ clauses. *WALS*. 510-513.

Dryer, Matthew S. 2005a. 112 Negative morphemes. *WALS*. 454-457.

Dryer, Matthew S. 2005b. 90 Order of relative clause and noun. *WALS*. 366-369.

Dryer, Matthew S. 2005c. 81 Order of subject, object, and verb. *WALS*. 330-333.

Dryer, Matthew S. 2005d. 96 Relationship between the order of object and verb and the order of relative clause and noun. *WALS*. 390-393.

Haspelmath, Martin. 2005. 115 Negative indefinite pronouns and predicate negation. *WALS*. 466-469.

Haspelmath, Martin et al. 2005. *World Atlas of Language Structures*. Hong Kong: Oxford Univ. Press.

秦宏一 1988. 「アイスランド語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典』第1巻. 1-6. 東京：三省堂.

Hopper, P. J. and S. A. Thompson 1980. Transitivity in grammar and discourse. *Language*. 56: 251-299.

風間伸次郎 2017. 「アルタイ型言語における主要部内在型関係節について」 北方研究教育センター(編) 『北方人文研究』 10: 3-33.

風間伸次郎 2019. 「語順と情報構造の類型論」 『日本語の格標示と分裂自動詞性』 141-175. 東京：くろしお出版.

風間伸次郎 forthcoming. 「言語類型論からみた日本語の格」 『日本語の格表現』 東京：くろしお出版.

Keenan, Edward 1985. Relative clauses. *Language typology and syntactic description. vol. 2*. Timothy Shopen (ed.). Cambridge: Cambridge UP. 141-170.

- Klima, E. S. 1964. Negation in English. In J. A. Fodor and J. J. Katz (eds.) *The structure of language*. Englewood Cliffs, N. J., Prentice-Hall. 246-323. (筆者未見)
- Koptsevskaja-Tamm and Wälchli (2001) Circum Baltic languages: An areal-typological approach. in Östen Dahl and Maria Koptsevskaja-Tamm (eds.) *The circum-Baltic languages*. Vol. 2. *Grammar and typology*. 615-750. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- 黒田成幸 1999. 「文法理論と哲学的自然主義」ノーム・チョムスキー, 黒田成幸『言語と思考』93-134. 松柏社. [黒田 (2005) 所収]
- 黒田成幸 2005. 『日本語から見た生成文法』東京: 岩波書店
- Malchukov, A. L. 1995. *Even*. (Languages of the world, Materials 12). Newcastle: Lincom Europa.
- Miestamo, Matti. 2005a. Standard negation: the negation of declarative verbal main clause in a typological perspective. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Miestamo, Matti. 2005b. 113 Syntactic and asymmetric negation. *WALS*. 458-461.
- Miestamo, Matti. 2005c. 114 Subtypes of asymmetric standard negation. *WALS*. 462-465.
- Miestamo, Matti. 2007. Negation: an overview of typological research. *Language and linguistics compass* 1/5, 552-570.
- Payne, John R. 1985. Negation. In Timothy Shopen (ed.) *Language typology and syntactic description*. vol 1. I, Clause structure, 197-242. Cambridge: CUP.
- Stassen, Leon. 2005a. 118 Predicative adjectives. *WALS*. 480-483.
- Stassen, Leon. 2005b. 121 Comparative construction. *WALS*. 490-493.
- Van der Aurora, Johan, Nina Dobrushina and Valentin Goussev. 2005. 71 The prohibitive. *WALS*. 290-293.
- ヤコブセン, ウェスリー・M. 2011. 「日本語における時間と現実性の相関関係—「仮定性」の意味的根源を探る—」『国語研プロジェクトレビュー』5. 1-19.

[アンケート例文]

1. これは私の本ではない。[名詞述語文／コピュラ文の否定]
2. この部屋には椅子がない。[存在文の否定]
3. この部屋には一つも椅子がない。[全部否定・モノ]
4. その部屋には誰もいない。[全部否定・ヒト]
5. その本はこの部屋にない。[所在文の否定]
6. この犬は大きくない。[形容詞文の否定]
7. この犬はあまり大きくない。[形容詞文の部分否定]
8. この犬はあの犬より大きい。[比較級]
9. この犬がその犬たちの中で一番大きい。[最上級]
10. 今日はあの人は来ない。[自動詞文の否定]
11. あの人はその本を持って行かなかった。[他動詞文の否定]
12. 全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。[数量の全部否定]
13. 全ての学生が参加したわけではない。[数量の部分否定]
14. (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。[文の否定]
15. 走るな！ [禁止]
16. 大きな声を出すな！ [他動詞文の禁止]
17. 明日は雨は降らないだろう。[推量の否定]
18. あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。[目的節の否定]
19. 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。[否定のスキープの調節]
20. 私が昨日買って来た本はどこ(にある)？ [内の関係の連体修飾節・目的語]
21. その本を持って来た人は誰(か)？ [内の関係の連体修飾節・主語]
22. この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。[内の関係の連体修飾節・場所]
23. 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。[内の関係の連体修飾節・所有者]
24. ドアを叩いている音が聞こえる。[外の関係の連体修飾節]
25. あの人が結婚したという噂は本当(か)？ [外の関係の連体修飾節]
26. 私はその人が来た時にご飯を食べていた。[時間節]
27. 私はその人が待っている所に行った。[場所節]
28. 私はその人が走っていったのを見た。[補文節・視覚]
29. 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[補文節・聴覚]
30. 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。[補文節・知識]
31. (昨日)彼は彼が今日ここに来たと言った。／(昨日)彼は、「私は今日ここに来た」と言った。[補文節・直接発話／間接話法]
32. 私はリンゴが(あの)皿の上にあったのを食べた。[内在節・従主・主目]
33. 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。[内在節・従主・主目]

執筆者連絡先:kazamas@tufs.ac.jp

原稿受理:2019年7月1日

<研究ノート>

ウルドゥー語の否定、形容詞と連体修飾複文 Negation, Adjective and adjoint modification in Urdu

萬宮 健策
Kensaku Mamiya

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨:

本稿では、ウルドゥー語を題材として例文の検討を行い、今回のテーマである否定や、連体修飾の特徴を明確にした。具体的には、否定については、否定辞 *nahīn* を、コピュラを含む動詞の直前に置くことで表現する。全否定と部分否定の差異や、否定辞を置く場所の差異についても検討を加えた。また、連体修飾のうちいわゆる『外の関係』については、関係詞を用いる構文が採られるが、『内の関係』の場合は関係詞を使う表現に加え、日本語のように文が名詞(句)を修飾することも可能である。今村[2008]ほか指摘するとおり、*wālā* を含む文については、今後の更なる検討が不可欠である。

また、今回のテーマに限らず、ウルドゥー語、ヒンディー語という日本国内での名称による区別が、言語学的な観点からどこまで有効なのかは、今後の検討課題である¹。

Abstract:

This article discusses Urdu, including Hindi, which should be considered as a social variant of the former from the viewpoint of linguistics. The negation, adjective and adjoint modification in Urdu are discussed through the sample sentences. Through the analysis of the sample sentences involving noun modification, it could be said that the participle “*wālā*” is worth further investigation.

キーワード: ウルドゥー、否定、形容詞、連体修飾

Keywords: Urdu, Negation, Adjective, Adjoint modification

1. はじめに

ウルドゥー語は、インド・ヨーロッパ語族のうち、現代インド・アーリヤ諸語(New Indo-Aryan Languages)の中央語群に属する言語である²。母語話者人口は、パキスタンおよび北インド地域を中心に約6000万を数える。SOVを基本とする屈折語である。他動詞完了分詞を用いる完了文にのみ能格構造が現れるほか、喜怒哀楽や義務強制を表す場合、与格構文を多用することが特徴の1つに挙げられる。

本稿では、例文の検討を中心として、連体修飾複文がどのように表現されるのかを、あらためて考えてみたい。例文の番号は、アンケートの番号に合致しているが、本稿での順序とは異なっている。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ あくまでも執筆者個人の私見であり、両言語が言語学的に同一である、ということをも主張するものではない。

² ヒンディー語とは、表記する文字が異なるものの、文法構造上は同一言語として見なすことができ、社会変種と位置づけることができる。本稿の例文では、ウルドゥー語とヒンディー語を区別せず、総称として便宜的にウルドゥー語という名称を用いることとする。

2. 先行研究

今回扱う内容に限らず、日本国内でウルドゥー語を対象とする研究は多くない。いわゆる狭義のヒンディー語を対象とすると、今村[2008]をはじめとして、その数は増えるものの、言語の規模から考えると不十分である。何がどこまでわかっているのかを整理し、研究者どうしが可能な限り協力する体制を整える必要がある。

3. 例文の検討

以下、項目ごとに分類した例文をもとに、ウルドゥー語の特徴を考える。前述のとおり、本項での例文に付された番号はアンケートの番号と一致している。

3. -1 コピュラ動詞文の否定

(1) これは私の本ではない。

yē mērī kitāb nahīn hai.
これ NOM. 私 GEN.F. 本 NOM.F.SG. NEG. コピュラ PRES.3.SG.

ウルドゥー語の否定文は、否定辞 *nahīn* を用いて作られる。コピュラ動詞文の場合、コピュラ動詞 *hōnā* の直前に *nahīn* を置くことで否定文になる。下記 3. -2 にまとめられた例文のうち (2) から (5) も同じ *hōnā* という動詞が用いられているが、こちらは存在動詞としての *hōnā* であり、同形だが意味が異なる。否定辞 *nahīn* は、*na* にコピュラ動詞である *hōnā* が付加されたものであると考えるので、例文 (1) から (7) については、文末の *hōnā* 動詞は省略も可能である。

3. -2 全否定と部分否定

全否定の場合、不定代名詞 *kōī* (誰か) (斜格形は *kisī*) もしくは *kuch* (何か) (斜格形は主格形と同形) と否定辞を併用する。*kōī* もしくは *kuch* のあとに別の名詞を伴わなければ、それぞれ、誰もいない ((4) 参照)、何もない ((3') 参照))、という全否定の意味になる³。

(2) この部屋には椅子がない。

is kamrē meṇ kursī nahīn hai.
この OBL.SG. 部屋 OBL.SG. LOC. 椅子 NOM.F.SG. NEG. コピュラ PRES.3.SG.

(3) この部屋には一つも椅子がない。

is kamrē meṇ kōī kursī nahīn hai.
この OBL.SG. 部屋 OBL.SG. LOC. 何か 椅子 NOM.F.SG. NEG. コピュラ PRES.3.SG.

(3') この部屋には何もない

is kamrē meṇ kuch nahīn hai.
この OBL.SG. 部屋 OBL.M.SG. LOC. 何か NEG. コピュラ PRES.SG.

³ 今回の例文にはないが、一度もない、という場合は、*kabhī* (ときどき) という副詞と否定辞を併用する。それ以外では、*bilkul* (全く) や *hargiz* (決して) という副詞と否定辞の併用で、「全く／決して～ない」という全否定文をつくる。この2つは、「全く食べなかった」や「全く大きくない」など、用言の否定にも用いることができる。*hargiz* は否定文にのみ用いられる。

(4) その部屋には誰もいない。

us kamrē meṇ kōī nahīṅ hai.
その OBL.SG. 部屋 OBL.M.SG. LOC. 誰か NOM. NEG. コピュラ PRES.3.SG.

(5) その本はこの部屋にない。

vō kitāb is kamrē meṇ nahīṅ hai.
その NOM. 本 NOM.F.SG. この OBL. 部屋 OBL.M.SG. LOC. NEG. コピュラ PRES.3.SG.

(12) 全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。

a. sab (sārē, pūrē) tālibe ilmōṅ ne hissā nahīṅ liyā.
全て OBL. 学生 OBL.M.PL. ERG. 参加 NOM.M.SG. NEG. 取る PAST.3.M.SG.

b. kisī tālibe ilmōṅ ne hissā nahīṅ liyā.
誰か OBL. 学生 OBL.M.PL. ERG. 参加 NOM.M.SG. NEG. 取る PAST.3.M.SG.

(13) 全ての学生が参加したわけではない。

sab tālibe ilmōṅ ne to hissā nahīṅ liyā.
全て OBL. 学生 OBL.M.PL. ERG. PTCL. 参加 NOM.M.SG. NEG. 取る PERF.3.M.SG.

(12) (13) はそれぞれ全否定、部分否定の例である。(12) で、全てという語彙のうち、() で囲まれた、sārē および pūrē はそれぞれ、(たとえば学内にいた) 学生が全員 (非限定)、(たとえば、学内にいた学生のうちある部屋にいた、もしくは、1 学年の) 学生は全員 (限定) という場合に用いる。sab は sārē と同義と考えて差し支えないが、厳密には学生全員という意味になる。部分否定では、不変化詞 to⁴を用いる。

3. ー3 形容詞と比較

(6) この犬は大きくない。

yē kuttā baṛā nahīṅ hai.
この NOM. 犬 NOM.M.SG. 大きい NOM.M.SG. NEG. コピュラ PRES.3.SG.

(7) この犬はあまり大きくない。

yē kuttā itnā baṛā nahīṅ hai.
この NOM. 犬 NOM.M.SG. このくらい NOM.M.SG. 大きい NOM.M.SG. NEG. コピュラ PRES.3.SG.

(8) この犬はあの犬より大きい。

yē kuttā us kuttē se baṛā hai.
この NOM. 犬 NOM.M.SG. あの OBL. 犬 OBL.M.SG. ABL. 大きい NOM.M.SG. コピュラ PRES.3.SG.

⁴ to は、その直前の語彙を、ほかと対比して強調したり限定の意味を加える。単独で用いられると、接続詞としても用いる語彙である。関係副詞節を受ける主文の文頭にも用いられる。

(9) この犬がその犬たちの中で一番大きい。

yē kuttā un kuttōḥ meḥ sab se baḥā hai.

この NOM. 犬 NOM.M.SG. その OBL.PL. 犬 OBL.M.PL. LOC. 全て OBL. ABL. 大きい NOM.M.SG. コピュラ PRES.3.SG.

比較、最上級は、上記 (8) (9) に示すとおり『比較対象＋奪格後置詞＋形容詞』で表現される。最上級は比較対象が「全て」という語彙になる。いわゆる叙述用法、名詞修飾用法ともに可能である。形容詞自体は比較級や最上級をつくらない⁵。

3. -4 否定命令

(15) 走るな！

a. daḥō mat!

走る IMP. NEG.

b. na daḥō!

NEG. 走る IMP.

(16) 大きな声を出すな！

a. ūḥī āwāz se na bōlō.

大きい OBL.F.SG. 声 OBL.F.SG. ABL. NEG. 話す IMP.

b. ūḥī āwāz mat dēnā!

大きい NOM.F.SG. 声 NOM.F.SG. NEG. 与える IMP.

否定文の命令には、自動詞、他動詞ともに、否定辞 *na* が用いられる。(15) a の *mat* は命令形にのみ用いられる否定辞で、*na* よりも否定の度合いが強くなる。また、倒置することで否定の度合いが一層強調される。話し言葉の場合は、語順に加えて文の抑揚や口調が否定の程度に大きく影響する。(16) の表現は、a. が、たとえば図書館内で親が子どもに対して言うことが想定されるのに対し、b. の表現は、大きな声で話さなくても聞こえている場合に用いられる。

3. -5 一般動詞の否定

(10) 今日はあの人は来ない。

āj vō ādmī nahīn āē gā.

今日 ADV. あの NOM. 人 NOM.M.SG. NEG. 来る FUT.3.M.SG.

(11) あの人はその本を持って行かなかった。

vō ādmī vō kitāb nahīn lē kar gayā.

その NOM. 人 NOM.M.SG. その NOM. 本 NOM.F.SG. NEG. 持つ CONJ. 行く PERF.3.M.SG.

(10) (11) は、一般動詞を含む否定文である。自他の区別なくどちらも動詞の直前に否定辞を置くことで否定文となる。なお、(11) は、ウルドゥー語では自動詞文である。他動詞文では、完了分詞を用いる場合、意味上の主語が能格構造となるが、否定文で否定辞が動詞の直前に置かれる点は自動詞の場合と

⁵ ペルシア語からの借用語彙の中には、比較級や最上級を持つ形容詞があるが、借用語であることと、使用場面が限定的であることから、本稿では検討の対象としない。また、一部のアラビア語から借用された形容詞は叙述用法のみに限定されるものがある。

同じである。口語では、(14) が示すとおり、否定辞を文末に置くことで否定の程度を強調することができる。

(14) (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。

(main ne yē nahīn xarīdā hai, magar) us ki qīmat zyādā
私 OBL. ERG. これ NOM. NEG. 買う PERF.M.SG. しかし それ OBL. GEN.F.SG. 値段 NOM.F.SG. 多い ADJ.
to nahīn.
PTCL. NEG.

(17) 明日は雨は降らないだろう。

a. kal bāriš nahīn hōgī.
明日 ADV. 雨 NOM.F. NEG. 降る FUT.F.SG.
b. hō saktā hai ke kal bāriš na hō.
かもしれない PRES.M.SG. CONJ. 明日 ADV. 雨 NOM.F. NEG. 降る FUT.F.SG.

(17) では、a.が単純未来形の表現である(たとえば、天気予報での表現)のに対し、b.は話者の推量が含まれた表現である。接続詞 ke 以下の部分は、不確定未来形⁶を用いるため、否定辞は na となる。

(18) あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。

halkī āwāz se batānā tāke vō na sun sakē.
小さい OBL.F. 声 OBL.F.SG. ABL. 話す IMP. CONJ. 彼 NOM.SG. NEG. 聞く STEM. 可能 FUT.3.SG.

目的節には、接続詞 tāke を用いる。この接続詞に続く節は不確定未来形となり、前述のとおり、否定辞は na を用いる。

(19) 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。

main ne āp ko nārāz karnē ke liye aisā to nahīn kahā
私 OBL. ERG. あなた OBL. DAT. 怒らせる INF.OBL. ために そう PTCL. NEG. 言う PAST.3.M.SG.

3. -6 連体修飾構造

(20) 私が昨日買ってきた本はどこ(にある)？

a. vō kitāb kahān hai jō kal main ne xarīdī?
その NOM. 本 NOM.F.SG. どこ コピュラ PRES.3.SG. REL.NOM. 昨日 ADV. 私 OBL. ERG. 買う PAST.F.SG.
b. kal mērī xarīdī huī kitāb kahān hai?
昨日 ADV. 私 GEN.F. 買う PERF.F. 本 NOM.F.SG. どこ コピュラ PRES.3.SG.

⁶ 話者が、出来事が起こることを確実でないと判断している場合に用いる未来形。相手の意向を尋ねたり、相手の動作を促す場合にも用いる。たとえば、「我々は来年パキスタンへ行く」という場合の違いは以下のとおり。

aglē sāl ham pākistān jāēn gē. (単純未来形：実際に実現するかどうかはわからないが、発話の時点で、話者はパキスタンへ行くという意味を有している)

aglē sāl ham pākistān jāēn. (不確定未来形：話者自身が来年パキスタンへ行くかどうかを決めていない)

内の関係を表現するには、関係節を用いるが、b.のような表現も可能な場合がある。動作主を強調する場合（この例文の場合は、昨日あなたも彼も本を買ったが、私が買った本はどこだ、という文脈での発話の場合）は、b.の表現が用いられる。動作主が属格となる点が特徴となる。

(21) その本を持って来た人は誰（か）？

- a. vō kaun hai jō vō kitāb lāyā hai?
 それ NOM. 誰 コピュラ PRES.3.SG. REL.NOM. その NOM. 本 NOM.F.SG. 持って来る PERF.3.M.SG.⁷
- b. vō kitāb lānē=wālā kaun hai?
 その NOM. 本 NOM.F.SG. 持って来る INF.OBL.=PTCL. 誰 コピュラ PRES.SG.

この文(21)も内の関係を表現している。関係節を用いる a.の文以外に、分詞 wālā を用いる文 b.も可能である。今村[2008]でも wālā のふるまいが議論されているが、a.と b.との差異をはじめとして、コーパスをもとにした研究が必要な点である。

(22) この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。

- yē vō kamrā hai jahān ham kām kartē haiṅ
 これ NOM. その NOM. 部屋 MON.M.SG. コピュラ PRES.3.SG. REL-ADV. 我々 仕事 NOM.M.SG. する PRES.M.PL.

(23) 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。

- maiṅ ne vō kursī chōṛ dī jis ki ēk tāṅ tūṭī huī thī.
 私 OBL. ERG. その NOM. 椅子 NOM.F.SG. 捨てる PAST.F.SG. REL.OBL. GEN.F. 1 足 NOM.F.SG. 折れる PAST-PERF.F.SG.

(24) ドアを叩いている音が聞こえる。

- darwāzē par dastak dēnē ki āwāz ā rahī hai.
 ドア OBL.M.SG. LOC. 叩く INF.OBL. GEN.F. 音 NOM.F. 来る PRES-PROG.F.SG.

(25) あの人が結婚したという噂は本当（か）？

- a. us ādmī ki śādī hōnē ki afwāh sac hai?
 あの OBL. 人 OBL.M.SG. GEN.F. 結婚する INF.OBL. GEN.F. 噂 NOM.F.SG. 本当 NOM.M.SG. コピュラ PRES.3.SG.
- b. kyā yē afwāh sac hai ke us ādmī ne
 虚辞 この NOM. 噂 NOM.F.SG. 本当 NOM.M.SG. コピュラ PRES.3.SG. CONJ. あの OBL. 人 OBL.M.SG. ERG.
 śādī kī?
 結婚する PAST.F.

外の場合を表す場合、動作+属格後置詞という構造を採る。(24)では『ドアを叩く』+属格+『音』で表される。一方、日本語で「トイウ」で表される文は、(25) b.のように動作主を明示している場合には a.の構文に加え、複文でも表すことができる。

⁷ 「持ってくる」という動詞は他動詞だが、完了分詞を用いる場合でも例外的に能格にならない。同様の例外には、話す、忘れる、理解するという動詞が含まれる。

(26) 私はその人が来た時にご飯を食べていた。

- a. (us waqt) main khānā khā rahā thā jab vō ādmī āyā.
(その時) 私 NOM. 食事 NOM.M.SG. 食べる PAST-PROG.M.SG. REL-ADV. その NOM. 人 NOM.M.SG. 来る PAST.M.SG.
- b. jab vō ādmī āyā, (us waqt) main khānā khā rahā thā.
REL-ADV. その NOM. 人 NOM.M.SG. 来る PAST.M.SG. (その時) 私 NOM. 食事 NOM.M.SG. 食べる PAST-PROG.M.SG.

(26) は、b.に示したように、関係詞から始まる節を先に持って来ることも可能で、情報構造に関係する。さまざまな場面が想定されうるが、原則として先に述べる文が、話者が強調したい部分である。教科書的な説明では、(26) a、(27) のとおり関係節は通常あとに来る。

(27) 私はその人が待っている所に行った。

- main us jagah gayā jahān vō ādmī mērā intizār kar rahā thā.
私 NOM. その場所 ADV. 行く PAST.M.SG. REL-ADV. その NOM. 人 NOM.M.SG. 私 GEN.M.SG. 待つ PAST-PROG.M.SG.

(28) 私はその人が走っていったのを見た。

- main ne us ādmī ko daurā huā dēkhā.
私 OBL. ERG. その OBL. 人 OBL.M.SG. DAT. 走る PAST-PTCL.M.SG. 見る PAST.M.SG.

(29) 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。

- kal rāt main ne unhēn bātēn kartē huē sunā.
昨日夜 ADV. 私 OBL. ERG. 彼ら DAT. 話す PRES-PTCL.M.PL. 聞く PAST.M.SG.

動作主の目の前で動作が進行している場合は、未完了分詞を (29)、動作が完了している場合は、完了分詞を用いる (28) が、文の構造はどちらも共通である。ただし、その動作が自動詞で表される場合は、その動作主の性・数と動詞語尾が一致するのに対し、他動詞の場合は、動作主の性・数と無関係に常に男性複数形が用いられる⁸。

(30) 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。

- main jāntā hūn ke vō ādmī kal yahān āyā thā.
私 NOM. 知る PRES.1.M.SG. CONJ. その NOM. 人 NOM.M.SG. 昨日 ADV. ここ ADV. 来る PAST-PERF.M.SG.

(31) (昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。

- a. kal us ne kahā hai ke vō āj yahān āyā thā.
昨日 ADV. 彼 OBL. ERG. 言う PRES-PERF.M.SG. CONJ. 彼 NOM. 今日 ADV. ここ ADV. 来る PAST-PERF.M.SG.

(昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。

- b. kal us ne kahā hai ke "main āj yahān āyā thā".
昨日 彼 OBL. ERG. 言う PRES-PERF.M.SG. CONJ. 私 NOM. 今日 ここ ADV. 来る PAST-PERF.M.SG.

小説などでは直接話法的な表現が見られ、引用符で会話部分を囲むことで表現される。それ以外では、いわゆる間接話法の構造が採られる。その場合、時制の一致は特に意識しなくてもいいが、一般的に、

⁸ 方言差があることに留意。

主節が単純過去もしくは現在完了形で現れ、従属節はそれより前のことを表すため、過去完了形になる。

(32) 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた。

a. main ne vō sēb khāyā jō us plēt par
私 OBL. ERG. その NOM. リンゴ NOM.M.SG. 食べる PAST.M.SG. REL.NOM. その OBL. 皿 OBL.F.SG. LOC.

thā.

コピュラ PAST.M.SG.

b. main ne vō sēb, jō us plēt par thā,
私 OBL. ERG. その NOM. リンゴ NOM.M.SG. REL.NOM. その OBL. 皿 OBL.F.SG. LOC. コピュラ PAST.M.SG.

khāyā.

食べる PAST.M.SG.

c. main ne (us) plēt par vō sēb khāyā hai.
私 OBL. ERG. その OBL. 皿 OBL.F.SG. LOC. その NOM. リンゴ NOM.M.SG. 食べる PRES-PERF.M.SG.

(33) 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。

a. main ne ghar ke andar ā billī ko pakar liyā.
私 OBL. ERG. 家 OBL.M.SG. GEN.OBL. 中 ADV. 来る PAST.F. ネコ OBL.F.SG. DAT. 捕まえる PAST.M.SG.

b. main ne us billī ko pakar liyā jō ghar ke andar
私 OBL. ERG. その OBL. ネコ OBL.F.SG. DAT. 捕まえる PAST.M.SG. REL.NOM. 家 OBL.M.SG. GEN.OBL. 中 ADV.

ā thī.

来る PAST-PERFF.SG.

c. main ne us billī ko, jō ghar ke andar ā thī,
私 OBL. ERG. その OBL. ネコ OBL.F.SG. DAT. REL.NOM. 家 OBL.M.SG. GEN.OBL. 中 ADV. 来る PAST-PERFF.SG.

pakar liyā.

捕まえる PAST.M.SG.

(32)、(33) はともに、いわゆる主要部内在型関係節文であるが、ウルドゥー語では、その構造をそのまま表現することはできず、(32) ではリンゴ、(33) ではネコという名詞を修飾する連体修飾構造に置き換えて表現される。なお、(32) b.および (33) c.が示すとおり、関係詞節を文中に置くことも可能であるが、一般的な語順ではない。連体修飾構造を用いる文が具体的にどのような構文となるのかについては、属格後置詞を用いる場合、接辞 *wālā* を用いる場合の用法も合わせて考える必要があり、今村 [2011]をもとに、その使い分け、表す意味の差異をより多くの例文を収集して分析する必要がある。

4. まとめに代えて

本稿では、与えられた例文をもとに、否定、形容詞及び連体修飾に焦点を当て、分析を行った。

否定に関しては、原則として動詞の直前に否定辞を置くことで、否定文が形成されることが、例文により明らかである。注意すべきは部分否定で、加賀谷[2005]が不変化詞と呼ぶ *to* を挿入することにより表現され、語順も文意に影響している。また口語の場合、文の抑揚も関与している場合が多い。

形容詞については、形容詞自体は比較級、最上級を形成せず、日本語と同様に奪格後置詞を用いて比較対象との対比を行う。

連体修飾複文については、関係節を用いることが多いが、文による節どうしの関係の差異については、これまでに先行研究で触れられたことがほとんどなく、今後の課題としたい。

ウルドゥー語は、話者の居住地域が広範であるだけでなく、いわゆるヒンディー語とウルドゥー語の差異を考え合わせると、今回提示した例文とは異なる結果が出る可能性もある。したがって、いわゆるヒンディー語とウルドゥー語の研究者どうしの連携が非常に重要であることは、この場を借りて強調しておきたい。

本稿執筆にあたり、東京外国語大学特定外国語主任教員（ウルドゥー語担当）であるアーミル・アリー・ハーン氏（パキスタンのカラチ出身 40 代男性。母語はウルドゥー語）に助言を得た。記して謝意を示したい。

参考文献

- 今村泰也.2008.「ヒンディー語の<V-ne-vālā honā>の三用法—属性叙述から事象叙述へ、客観的叙述から主観的叙述へ—」,『南アジア研究』第 20 号（日本南アジア学会）, pp.7-28.
---. 2011.「日本語から見たヒンディー語の連体修飾構造—いわゆる「外の関係」を中心に—」『日本語と X 語の対照 2』（三恵社） pp.1-10.
加賀谷寛. 2005. ウルドゥー語辞典. 大学書林

執筆者連絡先: k_mamiya@tufs.ac.jp

原稿受理:2019 年 5 月 13 日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

否定、形容詞と連体修飾複文(ドイツ語データ)¹

Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification in German

成田 節

Takashi Narita

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨:本稿の目的は、特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号, 東京外国語大学)における33個のアンケート項目に対するドイツ語のデータを与えることである。

Abstract: This report contributes to the special cross-linguistic study on ‘negation, adjectives and adnominal complex sentences’ (*Journal of the Institute of Language Research* 23, Tokyo University of Foreign Studies). The purpose of this paper is to offer German data for the question of 33 phrases.

キーワード: ドイツ語, 否定, 比較表現, 連体修飾構造, 補文節

Keywords: German, negation, comparative expression, adnominal modification, compound sentence

諸言語における「否定、形容詞と連体修飾複文」についての風間(2019)²の解説, およびそこに提示されている例文をベースに, ドイツ語での状況を記述し, 若干のコメントをつける。

1) これは私の本ではない。[名詞述語文/コピュラ文の否定]

Das ist nicht mein Buch.
this.NOM is not my.NOM book.NOM³

mein Buch (私の本) という定名詞句の否定には nicht (英 not) を用いる。nicht は否定の対象の直前に置くのが原則である。他方, 「これは本だ。」 Das ist ein Buch. の否定は Das ist kein Buch., 「これはビールだ。」 Das ist Bier. の否定は Das ist kein Bier. というように, 不定名詞句の否定には否定冠詞 kein を用いる。

2) この部屋には椅子がない。[存在文の否定]

In dies-em Zimmer gibt es kein-e Stuhl-e.
in this-DAT room.DAT give-PRS.3SG it.NOM no-PL.ACC chair-PL.ACC



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ 匿名の査読者から多くの有益な指摘を受けたこと。ここに記して感謝します。

² 風間伸次郎「特集「否定、形容詞と連体修飾複文」まえがき」(本号17-37頁)。

³ 名詞の性についての情報は, 関係文など特に重要な場合を除いて省略する。

[es gibt+対格] は存在の有無を表す最も一般的な表現である。存在を否定する表現では否定冠詞 **kein** を用いる。2)の「部屋の椅子」のように、複数の存在が想定しやすいときは、非存在の場合でも名詞を複数形にすることが少なくない。もちろん、名詞を単数形にして **keinen Stuhl** とすることも可能だが、こちらは「一つもない」という含みを持ちうる。

3) この部屋には一つも椅子がない。[全部否定・モノ]

In dies-em Zimmer gibt es kein-en einzig-en Stuhl.
in this-DAT room.DAT give-PRS.3SG it.NOM no-ACC single-ACC chair.ACC

「一つもない」は否定冠詞を使い、名詞を単数形にする **keinen Stuhl** でも表せるが、形容詞 **einzig** 「一つだけの」を添えると明示的になる。この他に否定の **nicht** と不定冠詞 **einen** を用いた **nicht einen einzigen Stuhl** (英 not a single chair) という表現も可能である。⁴

4) その部屋には誰もいない。[全部否定・ヒト]

In dies-em Zimmer ist niemand/keiner.
in this-DAT room.DAT Is nobody.NOM/no one.NOM

「誰も～ない」は **niemand** (英 nobody) 又は **keiner** (英 no one) で表す。es gibt は一般的な存在の有無を表す — 上の 2) は言わば「その部屋は椅子のない部屋だ」の意味 —, 4) は特定の時点にそこに人間がいるかどうかを表すので、es gibt ではなく ist (英 is) が自然な表現となる。

5) その本はこの部屋にない。[所在文の否定]

Das Buch ist nicht in dies-em Zimmer.
the.NOM book.NOM is not in this-DAT room.DAT

6) この犬は大きくない。[形容詞文の否定]

Dies-er Hund ist nicht groß.
this-NOM dog.NOM is not big

7) この犬はあまり大きくない。[形容詞文の部分否定]

Dies-er Hund ist nicht so groß.
this-NOM dog.NOM is not so big

1)でも述べたように、**nicht** は原則として否定の対象の直前に置くので、5)は **nicht in diesem Zimmer** となり、

⁴ **einigen** を除いた **nicht einen Stuhl** はインフォーマントの判断では不自然とのことだが、Duden 9, Richtiges und Gutes Deutsch (2011: 514) には以下の文で「私は1冊の本も買わなかった」という意味を表すという記述も見られる。なお、この例の **ein** は不定冠詞ではなく数詞であり、アクセントが置かれる。

Ich habe nicht ein Buch gekauft.
I have.AUX not one.ACC book.ACC buy.PP

6) は *nicht groß* となる。7) の *so* は「そのぐらい」という意味なので、*nicht so groß* で「それほど大きくはない」という意味を表す。*sehr* 「とても」を使って *Dieser Hund ist nicht sehr groß.* とすると「(大きい)が とても大きいわけではない」という意味になる。

8) この犬はあの犬より大きい。[比較級]

Dies-er Hund hier ist größ-er als der Hund dort.
this-NOM dog.NOM here is big-COMP than the.NOM dog.NOM there

9) この犬がその犬たちの中で一番大きい。[最上級]

Dies-er Hund ist der größ-t-e von den Hund-en
this-NOM dog.NOM is the.NOM big-SUPER-NOM of the.PL.DAT dog-PL.DAT

ドイツ語では形容詞の比較級には接尾辞は *-er* を、最上級には接尾辞は *-st* を付ける。単音節の形容詞は変音するものが多い (*groß > größ-*)。8) の比較の対象「～より」は *als* で表す。*groß* の最上級は末尾の *-ß [s]* と接尾辞の *-s [s]* の重複を避けて *größt* (*×größst*) となる。9) では「この犬が... 一番大きい (犬だ)」と考え、*Hund* 「犬」が男性名詞なので、形容詞の前に男性・単数・主格の定冠詞 *der* を置き、それに応じて最上級の接尾辞の後に語尾 *-e* が付いている。このパターンの他に、対象とする名詞の性・数にかかわらず使える *am größten* という形もある：*Dieser Hund/Diese Katze/Dieses Pferd ist am größten.* 「この犬/猫/馬が一番大きい」(*Katze* 「猫」は女性名詞、*Pferd* 「馬」は中性名詞)。ただし *von den Hunden/Katzen/Pferden* 「その犬/猫/馬たちの中で」を付けると不自然になる。

10) 今日はあの人は来ない。[自動詞文の否定]

Heute komm-t er nicht.
today come.PRS-3SG he.NOM not

11) あの人はその本を持って行かなかった。[他動詞文の否定]

Er hat das Buch nicht mitgenommen.
he.NOM has.AUX the.ACC book.ACC not take with one.PP

これまで *nicht* は否定の対象の直前に置くと説明してきたが、正確に言うならば、「定動詞を文末に置く従属文の語順で考えて、否定の対象の直前に置く」ということになる。10) は「来る(*kommt*)」が否定されるので [... *nicht kommt*] と考え、主文では動詞 *kommt* が第 2 位 (*heute* の直後) に置かれるので、その結果として *nicht* が文末になる。11) では「持って行った(*mitgenommen hat*)」が否定されるので [... *nicht mitgenommen hat*] となり、主文では定動詞 *hat* のみが第 2 位に置かれて ... *nicht mitgenommen.* という語順になる。なお *nicht* を *das Buch* の前に置くと「その本を」が否定の焦点となるので、「その本は持って行かなかった (が、他の物を持っていった)」という含意が生じる。

12) 全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。[数量の全部否定]

a) All-e Student-en haben nicht dar-an teilgenommen.
all-PL.NOM student-PL.NOM have.AUX not it-in participate.PP

b) Kein-e Student-en haben dar-an teilgenommen.
no-PL.NOM student- PL.NOM have.AUX it-in participate.PP

〔数量の全部否定〕は原則として 12a) のように *alle... nicht* で表せるが,⁵ インフォーマントによると、否定冠詞 *keine* を用いた 12b) の方が自然な表現だとのことである。12a) は理解するための処理時間が多少長くなるようである (インフォーマントは「2 回読まないと理解できない」と言っていた)。⁶ ただし *alle* と *nicht* の組み合わせでも語順によって容認度が変わるようであり、インフォーマントの判断では 12a') のように *daran* 「それに」を文頭に置き、*alle* にアクセントを置くと不自然ではなくなるとのことである。⁷

a') Dar-an haben all-e Student-en nicht teilgenommen.
it-in have.AUX all-PL.NOM student- PL.NOM not participate.PP

また、*alle* を用いても、12c) のように *die Studenten* 「その学生たちは」と定名詞句として提示した上で、*alle* 「みんな」を同格として添える場合も問題なく容認でき、12d) のように複数形の語尾を付けない *all* を *die Studenten* の直前に置く表現も (特に *die Studenten* に関係文などで限定が加わると) 自然な表現として容認できるとのことだった。

c) Die Student-en haben all-e nicht dar-an teilgenommen.
the-PL.NOM student- PL.NOM have.AUX all-PL.NOM not it-in participate.PP

d) All die Student-en haben nicht dar-an teilgenommen.
all the-PL.NOM student- PL.NOM have.AUX not it-in participate.PP

全量化子と否定の結びつきについては、研究の余地が大いにあるようだ。他方、〔数量の部分否定〕は 13) のように *nicht* を *alle* の前に置くことで問題なく表すことができる。

13) 全ての学生が参加したわけではない。〔数量の部分否定〕

Nicht all-e Student-en haben dar-an teilgenommen.
not all-PL.NOM student- PL.NOM have.AUX it-in participate.PP

14) (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。〔文の否定〕

a) Es ist nicht der Fall, [dass das zu teuer war].
it.NOM is not the.NOM case.NOM that this.NOM too expensive was
それは正しくない [それが高価すぎたこと]。

⁵ Duden 9, Richtiges und Gutes Deutsch (2011: 667)には部分否定の Nicht alle Mitglieder sind verheiratet. 「全ての会員が既婚というわけではない」に対して、Alle Mitglieder sind nicht verheiratet. 「全ての会員が既婚ではない = 既婚の会員はいない」との記述があり、後者の自然さについて特に言及はない。

⁶ 一方、否定冠詞 *keine* を用いた Alle Studenten haben keine Hausaufgaben gemacht. 「全ての学生が宿題をしなかった = 宿題をした学生はいない」は同じインフォーマントの語感では問題なく理解できるとのことである。*alle* と *nicht* の組み合わせは「部分否定」(*nicht alle...*) と「全部否定」(*alle... nicht*) の可能性があるが、*alle* と *keine* の組み合わせは「部分否定」の可能性がないので (×*keine alle...*)、瞬時に「全部否定」と理解されるということかもしれない。

⁷ ちなみに 12a) の *daran* を *nicht* の前に移し (それにより *daran* 「それに」を否定の対象からはずし) た Alle Studenten haben daran nicht teilgenommen. は容認しがたいとのことだった。

- b) ..., nicht weil das zu teuer war.
not because this.NOM too expensive Was
(私はそれを買わなかったが,) 高価すぎたからではない。

「P でない」という「文の否定」を表す形式としては 14a) の *Es ist nicht der Fall, dass...* (英 *It is not the case that...*) がある。尤もこれは日常的な表現とは言いがたく、「私はそれを買わなかった」を表す *Ich habe es nicht gekauft.* に後続する表現としては極めて不自然である。買わなかった理由が「値段が高いということではない」ということならば 14b) の *nicht weil...* (*not because...*) が可能だが、これだと後に *sondern weil...* (*but because...*) が続くことが含意される。

Duden (⁸2009: 909)によると、「P でない」という「文の否定」はそもそもあまり用いられる表現ではないとした上で、可能性としては従属接続詞の直後に (つまり、否定される内容全体の前に) *nicht* を置く以下のような表現を挙げている。

- Wir woll-en, dass nicht unser-e Ware zurückkomm-t,
we.NOM want-PL that not our-NOM goods.NOM come back-3SG
(sondern unser-e Kunde-n wiederkomm-en, ...)
but our-PL.NOM customers-PL.NOM come back-3PL
私たちが望むのは、商品が返ってくるのではなく、(客が戻ってくることで...)

たしかに「(私たちが望むのは) [商品が返ってくること] ではない」というように「商品が返ってくる」という文内容を否定していると見ることもできるが、これも 14b) と同様に、後に「(そうではなく) …だ」という補足がなければ座りが悪い。単独での「文の否定」は日常的な表現になじみにくいのかもしれない。

15) 走るな! [禁止]

- Lauf nicht! (cf. Ich lauf-e nicht.)
run.2SG.IMP not I.NOM run.1SG not

16) ビールを飲むな! [他動詞文の禁止]

- a) Trink kein Bier! (cf. Ich trink-e kein Bier.)
drink.2SG.IMP no.ACC beer.ACC
ビールを飲むな! (私はビールを飲まない。)
- b) Trink das Bier nicht! (cf. Ich trinke das Bier nicht.)
drink.2SG.IMP the.ACC beer.ACC not
そのビールを飲むな! (私はそのビールを飲まない。)

16) で与えられた例文は「大きな声を出すな!」だが、ドイツ語では *Sei nicht so laut!* (*Don't be so loud.*) あるいは *Sprich nicht so laut!* (*Don't speak so loud.*) で、[他動詞文の禁止] にならないので、a) 「ビールを飲むな!」および b) 「そのビールを飲むな!」に変更した。15), 16) とともに否定の命令文で [禁止] を表しているが、否定の表現に関しては平叙文の場合と特に変わるところはない。⁸

⁸ 15) と 16) 及び 18) では親称単数 *du* に対する命令形のみを挙げた。

17) 明日は雨は降らないだろう。[推量の否定]

Morgen wird es nicht regn-en.
tomorrow will.3SG it.NOM not rain-INF

「雨は降らないだろう」では「雨が降る」の否定「雨が降らない」に推量「だろう (wird)」が掛かるので nicht は regnen の前に置かれる。

18) あの人の聞こえないように、小さな声で話してくれ。[目的節の否定]

a) Sprich bitte leise, damit er es nicht hör-en kann.
speak.2SG.IMP please quietly so that he.NOM it.ACC not hear-INF can.PRS.3SG
彼が聞くことができないように、小聲で話せ。

b) Sprich bitte so leise, dass er es nicht hör-en kann.
speak.2SG.IMP please so quietly that he.NOM it.ACC not hear-INF can.PRS.3SG
彼が聞くことができないほどの小聲で話せ。

「～する/しないように…」には目的の従属接続詞 **damit** を用いることも、[so..., dass ~] という組み合わせを用いることもできる。いずれも否定は従属文の中に納まり、nicht の位置なども主文の場合と特に変わる所はない。18a), 18b) 共に従属文末の定動詞は直説法現在形 **kann** だが、接続法第 1 式 **könne**、あるいは接続法第 II 式 **könnte** となる場合もある。目的の従属文内の定動詞に接続法が用いられる例は、コーパスを見ると 20 世紀を通じて徐々に減少したようであり、インフォーマントの語感でも接続法は「古風 (archaisch)」に感じられるとのことである。

19) 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。[否定のスキープの調節]

a) Ich habe das nicht deshalb gesagt,
I have.AUX that.ACC not for the reason say.pp
[weil ich dich ärger-n woll-te].
because I you.ACC make angry-INF want-PST
私は [あなたを怒らせようと思ったから] それだから そう言ったのではない。

a') Ich habe das gesagt,
I have.AUX that.ACC say.pp
nicht [weil ich dich ärger-n woll-te].
not because I you.ACC make angry-INF want-PST
私がそう言ったのは [あなたを怒らせようと思ったから] ではない。

19a) では、weil で始まる理由節を先取りする deshalb に nicht が係り、「それだから [=あなたを怒らせようと思ったから] そう言ったのではない」というように、理由節が否定の作用域であることを明示している。この deshalb がないと「あなたを怒らせようと思ったから、それを言わなかった」と解釈する可能性もわずかながら生じる。19a') のように、主節の後、理由節の直前に nicht を置くと、理由節だけが否定の対象となり「私がそう言ったのは、あなたを怒らせようと思ったからではない。」という意味になるが、文が終わった感じにはならず、「そうではなくて…だからだ。」のような訂正理由が続くことが期待される。

b) Ich habe das nicht gesagt, um dich zu ärger-n
I have.AUX that.ACC not say.PP PREP you.ACC to make angry-INF
それは、あなたを怒らせるために言ったのではない。

b') Ich habe das gesagt, nicht um dich zu ärger-n
I have.AUX that.ACC say.PP not PREP you.ACC to make angry-INF
それを言ったのは、あなたを怒らせるためではない。

19b)は目的を表す [um+zu 不定詞句] が主文に後続し、「[あなたを怒らせるために] 言った」が否定の対象となっている。19 b')のように nicht を主節の後、目的を表す zu 不定詞句の直前に置くことも可能で、この場合は 19a')と同様に目的だけが否定の対象となり、「そう言ったのは、あなたを怒らせるためではない」と解釈されるが、やはり「そうではなくて…のためだ」という訂正が続くことが期待される。

20) 私が昨日買った本はどこ (にある) ?⁹ [内の関係の連体修飾節・目的語]

Wo ist das Buch, [das ich gestern gekauft habe].
where is the.N.NOM book.N.NOM REL.N.ACC I yesterday buy.PP have.AUX
その本はどこにある [それを私が昨日買った] ?

21) その本を持って来た人は誰 (か) ? [内の関係の連体修飾節・主語]

a) Wer ist die Person, [die das Buch mitgebracht hat].
who is the.F.NOM person.F.NOM REL.F.NOM the.ACC book.ACC bring.PP has.AUX
その人物は誰 [その人がその本を持って来た] ?

b) Wer ist es [der das Buch mitgebracht hat].
who is it.NOM REL.M.NOM the.ACC book.ACC bring.PP has.AUX
それは誰 [その人 (男性) がその本を持って来た] ?

c) Wer hat das Buch mitgebracht?
who has.AUX the.ACC book.ACC bring.PP
誰がその本を持って来た?

インフォーマントによると、例文の内容を表すもっとも自然な表現は関係文を用いない c) であるとのことだが、a) も b) もドイツ語としては十分可能な表現であり、小説などにも実例が見られる。ただ、日常の話し言葉としては、a) は人工的な印象を与え、b) はかなり不自然で古風でもあるとのことである。

22) この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。 [内の関係の連体修飾節・場所]

a) Das ist der Raum, [in dem wir arbeit-en].
this.NOM is the.M.NOM room.M.NOM in REL.M.DAT we.NOM work-PL
これがその部屋だ [その中で私たちが働く]。

⁹ 20)から 23)および 32)のグロス中の M は男性 (masculine) , F は女性 (feminine) , N は中性 (neuter) を表す。

b) Hier ist der Raum, [in dem wir arbeit-en].
 here is the.M.NOM room.M.NOM In REL.M.DAT we.NOM work-PL
 ここがその部屋だ [その中で私たちが働く]。

c) In dies-em Raum arbeit-en wir.
 in this-DAT room.DAT work-PL we.NOM
 この部屋で私たちは働く。

22)と同様、例文の内容を表すもっとも自然な表現は関係文を用いないc)だということだが、たとえば来客に家の中を見せて回る状況などを考えるとa)もb)も十分に自然な表現として使えるとのことである。

23) 脚が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。[内の関係の連体修飾節・所有者]

Den Stuhl, bei dem ein Bein abgebrochen war,
 the.M.ACC chair.M.ACC at REL.M.DAT a.NOM leg.NOM break off.PP was.AUX
 habe ich schon weggeschmissen
 have.AUX I already chuck away. PP
 その椅子を [それにおいて1本の脚が折れた] 私は投げ捨てた。

「脚が一本折れた椅子」は「その椅子・それにおいて一つの脚が折れた」と分解し、「それにおいて」は前置詞 bei と関係代名詞 dem (男性・与格) でを表す。

24) ドアを叩いている音が聞こえる。[外の関係の連体修飾節]

a) Ich höre jemand-en an der Tür klopf-en.
 I hear somebody-ACC at the.DAT door.DAT knock-INF
 誰かがドアをノックするのが聞こえる。

b) Ich höre, wie jemand an der Tür klopft.
 I hear as someone-NOM at the.DAT door.DAT knock-PRS.3SG
 誰かがドアをノックする様子が聞こえる。

日本語の「ドアを叩いている音」のように「音」を主名詞とするような連体修飾節はドイツ語では作れない。24a)のように不定詞付き対格構文で「誰かを+ドアをノックする+聞く」とするか、24b)のように wie 「どのように」を従属接続詞として用い「いかに誰かがドアをノックするか+聞く」とするかのとどちらかになる。24a)も24b)も「誰かがドアをノックする」という出来事を同時に知覚していることを表す。

25) あの人が結婚したという噂は本当(か)? [外の関係の連体修飾節]

Ist das Gerücht wahr, dass er geheiratet hat?
 is the.NOM rumour.NOM true that he.NOM marry.PP has.AUX

「...という噂」は das Gerücht, dass ... (the rumour that ...) で表せる。

26) 私はその人が来た時に夕飯を食べていた。[時間節]

Ich habe gerade zu Abend gegessen, als er zu Mir kam.
I have.AUX just to evening eat.PP when he.NOM to me.DAT came

ドイツ語では「～した時」の「時」を名詞としてではなく、従属接続詞 *als* 「～したとき」を用いて表す。なお、*zu Abend essen* で「夕飯を食べる」という意味を表す。

27) 私はその人が待っている所に行った。[場所節]

Ich bin dorthin gekommen, [wo er wart-ete].
I am.AUX there come.PP where.REL he.NOM wait-PST
私はそこへ言った [そこで彼が待っていた]。

「その人が待っている所」に対応するドイツ語では「所」を名詞ではなく、副詞 *dorthin* 「そこへ」で表し、それに *wo* (*where*) を関係詞とする関係文を接続して表現する。

28) 私はその人が走っていったのを見た。[補文節・視覚]

a) Ich habe ihn weglauf-en seh-en.
I have.AUX him.ACC run away-INF see-INF=PP
私はその人が走っていくのを見た。

b) Ich habe gesehen, wie er weggelaufen ist.
I have.AUX see.PP as he.NOM run away.PP is.AUX
私はその人が走って行った様子を見た。

28a)は24a)と同じ不定詞付き対格構文で「その人を＋走り去る＋見た」で「その人が走り去るのを見た」という意味を表す。文末の *sehen* は不定詞と同形だが、ここでは過去分詞として用いられており、*habe* と結んで現在完了形となっている。28b)は24b)と同様、*wie* 「どのように」を従属接続詞として用い、「どのようにその人が走り去ったか＋見た」で「私はその人が走り去る様子を見た」という意味になる。

29) 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[補文節・聴覚]

a) Gestern Nacht habe ich [sie miteinander red-en] hör-en.
yesterday night have.AUX I they.ACC with one another talk-INF hear-INF=PP
昨夜私は [彼らをお互いに＋語る] を聞いた。

b) Gestern Nacht habe ich gehört, [wie sie miteinander rede-ten].
yesterday night have.AUX I hear.PP as they.NOM with one talk-PST.PL
another

昨夜私は聞いた [どのように彼らがお互いに語ったか] を。

「私はかれらがしゃべっているのを聞いた」は24a)と28a)のように不定詞付き対格構文でも、24b)と28b)のように *wie* の従属節を用いても表せる。

30) 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。[補文節・知識]

Ich weiß, dass er gestern hier war.
I know that he.NOM yesterday here was
私は知っている [彼が昨日ここにいた (=来た) ことを]。

31) (昨日の午後) 彼は今朝ここに来たと言った。[補文節・間接話法]

a) Gestern Nachmittag hat er gesagt, [dass er gestern
yesterday afternoon has.AUX he.NOM say.PP that he.NOM yesterday
früh hierher gekommen ist].
early here come.PP is.AUX
昨日の午後彼は言った [彼が昨日の朝ここに来たこと]。

b) Gestern Nachmittag hat er gesagt, er sei
yesterday afternoon has.AUX he.NOM say.PP he.NOM be.AUX
früh am Morgen hierher gekommen.
early in-the morning here come.PP
昨日の午後彼は言った [彼が (その日の) 朝早くここに来たこと]。

間接話法にはさまざまなパターンがあるがここでは2例のみ挙げる。31a)は従属接続詞 **dass (that)** を用い、定動詞は直説法にして発言内容を表すパターン、31b)は定動詞第2位の「主文形式」で定動詞は接続法にして発言内容を表すパターンである。31a)では主節と補文節に直示的な **gestern** が出ているが、インフォーマントによれば重複という文体的な点は別にすれば問題はないとのことであった。31b)でも基本的には31a)と同様に **gestern** を使うことも可能ではあるが、むしろ「(その日の) 朝早く」という **früh am Morgen** などの表現の方が自然に感じられるとのことであった。⁹

(昨日の午後) 彼は、「私は今朝ここに来た」と言った。[補文節・直接発話]

c) Gestern Nachmittag hat er gesagt: „Ich bin heute früh
yesterday afternoon has.AUX he.NOM say.PP I am today early
hierher gekommen.“
here come.PP
昨日の午後彼は言った:「私は今朝ここに来た。」

32) 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた。[内在節・従主・主主]

a) Ich habe den Apfel gegessen, der auf
I have.AUX the.M.ACC apple.M.ACC eat.PP REL.M.NOM on
dem Teller lag.
the.M.DAT dish.M.DAT lie.PST
私はそのりんごを食べた [(それが) その皿の上にあった]

⁹ この段落は査読者の指摘を受けて再調査し、加筆した。

リンゴがさっき皿の上にあったのがいつの間にか無くなっている。

b) Der Apfel, der vorhin auf dem Teller lag.
the.M.NOM apple.M.NOM REL.M.NOM a short time ago on the.DAT dish.DAT lie.PST
ist inzwischen verschwunden.
is.AUX meanwhile disappear. PP
そのりんご [(それが) さっき皿の上にあった] がいつの間にか無くなった。

33) 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。[内在節・従主・主目]

Ich habe die Katze gefangen,
I have the.F.ACC cat.F.ACC catch. PP
die in-s Haus gelaufen ist.
REL.F.NOM in-the.ACC house.ACC PP < walk is
私は [(それが) 家に入って来た] 猫を捕まえた。

32) の「りんごが皿の上にあったのを食べた」はドイツ語では「皿の上にあつたりんごを食べた」のように、また 33) の「ネコが家に入ってきたのを捕まえた」は「家に入ってきたネコを捕まえた」というように、名詞 + 関係文に組み替えて表現する。¹⁰

執筆者連絡先: narita@tufs.ac.jp

原稿受理: 2019 年 5 月 7 日

¹⁰ 査読者から、33) のような表現だと、日本語で意図されている「猫が家に入ってきた瞬間とそれを捕まえた瞬間が一致していること」が必ずしも再現されないので、Ich habe eine Katze gefangen, **als** sie ins Haus gelaufen ist. 「私は (猫が) 家に入ったときに猫を捕まえた」や **Kaum** ist eine Katze ins Haus gelaufen, **als** ich sie gefangen habe. 「猫が家に入るやいなや、私はそれを捕まえた」のような時間文を使った表現の検討も必要との指摘を受けたが、これらについては別の機会に検討したい。

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

アイスランド語における否定、形容詞と連体修飾複文¹

Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification in Icelandic

渡邊 萌

Moe Watanabe

東京外国語大学大学院総合国際学研究所
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿の目的は、特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号, 東京外国語大学)における33個のアンケート項目に対するアイスランド語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Latvian data which answers the thirty three survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 23, which focuses on the cross linguistic study of 'negation, adjectives, and compound sentences of adnominal modification'.

キーワード: アイスランド語、否定、形容詞、連体修飾、複文

Keywords: Icelandic, negation, adjective, adnominal modification, compound sentence

- (1) これは私の本ではない。[名詞述語文/コピュラ文の否定]

Þetta	er	ekki	bók-in	min.
this.N.SG.NOM	COP.IND.PRS.3SG	NEG	book.F.SG.NOM-the.F.SG.NOM	my.F.SG.NOM

- (2) この部屋には椅子がない。[存在文の否定]

Það	er	enginn	stóll	inni	í
EXPL	COP.IND.PRS.3SG	PN.NEG.M.SG.NOM	chair.M.SG.NOM	inside	in

Þessu	herbergi.
this.N.SG.DAT	room.N.SG.DAT



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ アイスランド語はゲルマン系の言語であり、名詞類の形態論的な格は主格 / 対格 / 与格 / 属格、数は単数 / 複数、文法性は男性 / 女性 / 中性の区別がある。動詞は原則として主語の人称・数と一致して活用し、単純時制は現在 / 過去、法は直説法 / 接続法 / 命令法の区別がある。(以上、入江 (2007: 95) を要約) 調査はアイスランド北部出身の男性 (1993 年生まれ、日本語学習歴 11 年で日本語が堪能) にご協力いただいた。全ての例文は、アンケートの日本語文から直接翻訳していただくという形で得た。二つ以上の回答があった場合には a)、b)、c) ... と付した。なお、アイスランド語の表記は全て正書法に基く。

- (3) この部屋には一つも椅子がない。[全部否定・モノ]

Það er ekki einn stóll inni í
EXPL COP.IND.PRS.3SG NEG one.M.SG.NOM chair.M.SG.NOM inside in
þessu herbergi.
this.N.SG.DAT room.N.SG.DAT

- (4) その部屋には誰もいない。[全部否定・ヒト]

Það er enginn inni í þessu
EXPL COP.IND.PRS.3SG PN.NEG.M.SG.NOM inside in this.N.SG.DAT
herbergi.
room.N.SG.DAT

- (5) その本はこの部屋にない。[所在文の否定]

Sú bók er ekki inni í þessu
that.F.SG.NOM book.F.SG.NOM COP.IND.PRS.3SG NEG inside in this.N.SG.DAT
herbergi.
room.N.SG.DAT

- (6) この犬は大きくない。[形容詞文の否定]

Þessi hundur er ekki stór.
this.M.SG.NOM dog.M.SG.NOM COP.IND.PRS.3SG NEG big.M.SG.NOM

- (7) この犬はあまり大きくない。[形容詞文の部分否定]

Þessi hundur er ekki svo stór.
this.M.SG.NOM dog.M.SG.NOM COP.IND.PRS.3SG NEG so big.M.SG.NOM.

- (8) この犬はあの犬より大きい。[比較級]

Þessi hundur er stærri en þessi
this.M.SG.NOM dog.M.SG.NOM COP.IND.PRS.3SG big.COM.M.SG.NOM than this.M.SG.NOM
hundur.
dog.M.SG.NOM

アイスランド語の指示代名詞には英語の **this**、**that** のような区別がなく、その場で見えているものを示す場合は発話者からの遠近に関わらず「þessi」を用いる。

- (9) この犬がその犬たちの中で一番大きい。[最上級]

Þessi	hundur	er	stærstur	af	þessum
this.M.SG.NOM	dog.M.SG.NOM	COP.IND.PRS.3SG	big.SUP.M.SG.NOM	of	this.M.PL.DAT

hundum.
 dog.M.PL.DAT

- (10) 今日はあの人は来ない。[自動詞文の否定]

Hann/Hún	kemur	ekki	í	dag.
he/she.SG.NOM	come.IND.PRS.3SG	NEG	in	day.M.SG.ACC

- (11) あ的那个人はその本を持って行かなかった。[他動詞文の否定]

Sá	maður	fór	ekki	með	þessa
that.M.SG.NOM	man.M.SG.NOM	go.PST.IND.3SG	NEG	with	this.F.SG.ACC

bók.
 book.F.SG.ACC

- (12) 全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。[数量の全部否定]

a)	Engir	nemendur	tóku	þátt.
	PN.NEG.M.PL.NOM	student.M.PL.NOM	take.IND.PST.3PL	part.M.SG.ACC

b)	Það	tóku	engir	nemendur	þátt.
	EXPL	take.IND.PST.3PL	PN.NEG.M.PL.NOM	student.M.PL.NOM	part.M.SG.ACC

- (13) 全ての学生が参加したわけではない。[数量の部分否定]

a)	Ekki	allir	nemendur-nir	tóku	þátt.
	NEG	all.M.PL.NOM	student.M.PL.NOM.-the.M.PL.NOM	take.IND.PST.3PL	part.M.SG.ACC

b)	Það	tóku	ekki	allir	nemendur-nir
	EXPL	take.IND.PST.3PL	NEG	all.M.PL.NOM	student.M.PL.NOM.-the.M.PL.NOM

þátt.
 part.M.SG.ACC

- (14) (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。[文の否定]

(Ég	keypti	það	ekki,	en)
	I.NOM	buy.IND.PST.1SG	it.N.SG.ACC	NEG	but	

það	er	ekki	eins og	það	sé
EXPL	COP.IND.PRS.3SG	NEG	as	it.N.SG.NOM	COP.SBJV.PRS.3SG

dýrt.
expensive.N.SG.NOM

- (15) 走るな！ [禁止]

Ekki hlaupa!
NEG run.INF

- (16) 大きな声を出すな！ [他動詞文の禁止]

a) Ekki tala svona hátt.
NEG talk.INF so high

b) Ekki vera með svona mikinn hávaða.
NEG COP.INF with so much.M.SG.ACC noise.M.SG.ACC

それぞれ a) と b) を直訳すると、a) 「そんなに大きく話すな」、b) 「そんなにたくさんの騒音を伴うな」となり、ここでは他動詞文の禁止の表現は見られなかった。

- (17) 明日は雨は降らないだろう。 [推量の否定]

Á morgun rignir líklega ekki.
tomorrow rain.IND.PRS.3SG likely NEG

- (18) あのの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。 [目的節の否定]

Talaðu lágt þannig að hann/hún heyri ekki.
talk.IMP.SG law so that he/she.SG.NOM hear.SBJV.PRS.3SG NEG

- (19) 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。 [否定のスキープの調節]

Ég sagði það ekki til að reita
I.NOM say.IND.PST.1SG it.N.SG.ACC NEG to INF arouse.INF

þig til reiði.
you.SG.ACC to anger.F.SG.GEN

- (20) 私が昨日買った本はどこ（にある）？ [内の関係の連体修飾節・目的語]

Hvar er bók-in sem ég
where COP.IND.PRS.3SG book.F.SG.NOM.-the.F.SG.NOM REL I.NOM

keypti í gær?
buy.IND.PST.1SG yesterday

- (21) その本を持って来た人は誰（か）？ [内の関係の連体修飾節・主語]

Hver (var það sem) kom með
who COP.IND.PST.3SG it.N.SG.NOM REL come.IND.PST.3SG with

þessa bók?
 this.F.SG.ACC book.F.SG.ACC

括弧内の部分が無くても文が成立するという。

- (22) この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。[内の関係の連体修飾節・場所]

Þetta er herbergi-ð þar sem við
 this.N.SG.NOM COP.IND.PRS.3SG room.N.SG.NOM.-the.N.SG.NOM there REL we.NOM

vinnum.
 work.IND.PRS.1PL

- (23) 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。[内の関係の連体修飾節・所有者]

Ég henti því miður stól-num sem
 I.NOM throw.IND.PST.1SG unfortunately chair.M.SG.DAT-the.M.SG.DAT REL

var með brotna fót-inn.
 COP.IND.PST.3SG with broken.M.SG.ACC foot.M.SG.ACC-the.M.SG.ACC

- (24) ドアを叩いている音が聞こえる。[外の関係の連体修飾節]

Það heyr-ist bankað á hurð-ina.
 EXPL hear.IND.PRS.3SG-MID knock.PTCP on door.F.SG.ACC-the.F.SG.ACC

ここでは外の関係の連体修飾節は用いられていない。

- (25) あ的那个人が結婚したという噂は本当(か)? [外の関係の連体修飾節]

Er það satt sem ég heyrði,
 COP.IND.PRS.3SG it.N.SG.NOM true.N.SG.NOM REL I.NOM hear.IND.PST.1SG

að hann gift-ist?
 COMP he.SG.NOM give in marriage.IND.PST.3SG-MID

直訳すると、「私が聞いた、彼が結婚したというのは本当か?」となる。インフォーマントによると、噂「orðrómur」という語に連体修飾節が伴うような表現は不自然だという。

- (26) 私はその人が来た時にご飯を食べていた。[時間節]

a) Hann/hún kom þegar ég var að borða.
 he/she.SG.NOM come.IND.PST.3SG when I.NOM COP.IND.PST.1SG INF eat.

b) Þegar ég var að borða, kom hann/hún.
 when I.NOM COP.IND.PST.1SG INF eat.INF come.IND.PST.3SG he/she.SG.NOM

c)	Ég	var	að	borða	þegar	hann/hún	kom.
	I.NOM	COP.IND.PST.1SG	INF	eat.INF	when	he/she.SG.NOM	come.IND.PST.3SG

初めにインフォーマントから頂いた例文は a) であったが、匿名の査読者から、a) の日本語訳は「私がご飯を食べていた時にその人が来た。」ともなり、そうである場合は元のアンケート文の日本語とは力点が異なるのではないか、というコメントを頂いた。これについて、b) のように主節と従属節を入れ替えて訳すことも可能かどうかをインフォーマントに確認したところ、問題なく訳せるとの回答を頂いた。さらに、c) のようにも言う事ができ、a) と b) の間に大きな意味的な違いは見いだせないが、a) および b) と c) を比べるといくらか意味的な差異が生じるとのことであった。

- (27) 私はその人が待っている所に行った。[場所節]

Ég	fór	þangað	sem	hann/hún	var
I.NOM	go.IND.PST.1SG	there	REL	he/she.SG.NOM	COP.IND.PST.3SG

að bíða.
INF wait.INF

- (28) 私はその人が走っていったのを見た。[補文節・視覚]

Ég	sá	hann/hana	hlaupa	burt.
I.NOM	see.IND.PST.1SG	he/she.SG.ACC	run.INF	away

- (29) 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[補文節・聴覚]

Ég	heyrði	þá	tala	í gærkvöldi.
I.NOM	hear.IND.PST.1SG	they.ACC	talk.INF	yesterday night

- (30) 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。[補文節・知識]

Ég	veit	að	hann/hún	kom	hingað
I.NOM	know.IND.PRS.1SG	COMP	he/she.SG.NOM	come.IND.PST.3SG	here

í gær.
yesterday

- (31) (昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。[補文節・間接話法]

Hann	sagði-st	hafa	komið	hingað	í dag	(í gær).
he.SG.NOM	say.IND.PST.3SG-MID	have.INF	come.PTCP	here	today	yesterday

(昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。[補文節・直接話法]

Hann	sagði	„ég	kom	hingað	í dag“	(í gær).
he.SG.NOM	say.IND.PST.3SG	I.NOM	come.IND.PST.1SG	here	today	yesterday

- (32) 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた。[内在節・従主・主主]

Ég	borðaði	epli-ð	sem	var
I.NOM	eat.IND.PST.1SG	apple.N.SG.ACC-the.N.SG.ACC	REL	COP.IND.PST.3SG

á diskum.
 on dish.M.SG.DAT-the.M.SG.DAT

- (33) 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。[内在節・従主・主目]

Ég	náði	ketti	sem	kom	inn
I.NOM	catch.IND.PST.1SG	cat.M.SG.DAT	REL	come.IND.PST.3SG	inside

í húsi.
 in house.N.SG.ACC-the.N.SG.ACC

(32)、(33)では共に主要部外在節が用いられている。

略号一覧

1	1st person	1 人称	MID	middle voice	中動態
3	3rd person	3 人称	N	neuter	中性
ACC	accusative	対格	NEG	negation	否定
COM	comparative	比較級	NOM	nominative	主格
COMP	complementizer	補文標識	PL	plural	複数
COP	copula	コピュラ	PN	pronoun	代名詞
DAT	dative	与格	PRS	present	現在
EXPL	expletive	虚辞	PST	past	過去
F	feminine	女性	PTCP	participle	分詞
GEN	genitive	属格	REFL	reflexive	再帰
IMP	imperative mood	命令法	REL	relativizer	関係詞
IND	indicative mood	直説法	SBJV	subjunctive mood	接続法
INF	infinitive	不定詞	SG	singular	単数
M	masculine	男性	SUP	superlative	最上級

参考文献

入江浩司. 2007. 「現代アイスランド語の相互動詞と他動性」 角田三枝・佐々木冠・塩谷享(編)『他動性の通言語的研究』東京: くろしお出版.

執筆者連絡先: moe.w.feux.d.artifice@gmail.com

原稿受理: 2019年5月7日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

フランス語の否定、形容詞と連体修飾文 Negation, adjective and relative clause modifiers in French

秋廣 尚恵
Hisae Akihiro

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は特集「否定、形容詞と連体修飾文」(『語学研究所論集』第23号, 東京外国語大学)に寄与する。本稿の目的は33個のアンケート項目に対するフランス語データを与えることである。

Abstract: This report contributes to the special cross-linguistic study on ‘negation, adjective and relative clause modifiers’ (*Journal of the Institute of Language Research* 23, Tokyo University of Foreign Studies). The purpose of this paper is to offer the French data for the question of 33 phrases.

キーワード: 否定、形容詞構文、連体修飾、フランス語

Keywords: negation, adjective construction, relative clause modifier, French

1. はじめに

特集「否定、形容詞と連体修飾文」のフランス語データとして、筆者が、日本語のアンケートをフランス語訳し、ネイティブチェック¹を受けたものを以下に提供する。尚、アンケート16番に関しては、フランス語では他動詞構文では表現できなかったため、調査の趣旨(他動詞構文の否定形)を考慮して、別な日本語を考え、他動詞構文の否定形を作ることにした。また、調査項目によって特にコメントが必要であると思われるものについては各例の後にコメントを付け加えた。

グロスには、Leipzig Glosing Rules (<https://www.eva.mpg.de/lingua/pdf/Glossing-Rules.pdf>を参照)に従って付したが、若干、用例の記述のために不足していた記号があったため、以下の2つをさらに加えたい。

IMPS : impersonal 非人称

PRN : pronom personnel 人称代名詞

2. データおよび、コメント

1. これは私の本ではない。[名詞述語文/コピュラ文の否定]

Ce	n'	est	pas	mon	livre.
DEM-IDEF	NEG	be-PRS-3SG	NEG	POSS-1SG-M	book

‘It’s not my book’



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ 東京外国語大学院博士後期課程2年生のBARACA, Jean Corentin氏にネイティブチェックをして頂いた。この場をお借りしてお礼申し上げます。

名詞述語文の否定に限らず、一般にフランス語の否定文は、動詞の前に *ne* (後に母音で始まる動詞、あるいは助動詞が来る場合には、*n'*)を置き、動詞の後に *pas* などの否定辞を置く。ただし、口語では、非常にしばしば *ne* が脱落し、*c'est pas mon livre* となる。*Ne* の脱落の通時的研究は数多くなされているが、最近の研究で、比較的一般の読者向けに分かりやすくまとめて書かれたものに、Meisner, C., Robert-Tissot, A. & Stark, E., (2016) がある。

2. この部屋には椅子がない。[存在文の否定]

Il n' y a pas de chaises dans la salle.
 SBJ-IMPS NEG ABL.PRN have-PRS-3SG NEG of chair-PL in ART-DEF-SG-F room
 'There is no chairs in the room.'

Il y a は *avoir* (英語 : *have*) を用いた存在を表す非人称構文である。存在する事物や人が 動詞 *a* の後の直接目的語の位置に現われるのが特徴である。否定文では、接辞 *y* (場所格) を含む動詞句の前に *ne* を、動詞句の後に *pas* をつける。否定文において、動詞の直接目的語につく不定冠詞や部分冠詞は *de* になるという規則がある。つまり、肯定文であれば *il y a des chaises dans la salle* となるところであるが、否定文なので、*il n'y a pas de chaises dans la salle* となっている。

3. この部屋には一つも椅子がない。[全部否定・モノ]

Il n' y a aucune chaise dans la salle
 SBJ-IMPS NEG ABL.PRN have-PRS-3SG PRN-INDEF-F chair in ART-DEF-SG-F room

「一つも～ない」を表現する言い方はいくつか考えられるが、よく使用されるものとしては、*ne...aucun(aucune)*+名詞を使用する。*Aucun, aucune* は不定代名詞として単独で用いられるほか、名詞を伴って不定形容詞としても使用される。ここではモノの名詞 *chair* を修飾する不定形容詞として機能しているが、人の名詞につくことも可能である (*il n'y a aucun étudiant dans la salle* 部屋には一人の学生もいなかった)。しかし、全部否定を表す不定代名詞については、人、モノの区別が生じる。人を表す場合には、4 で示す *personne* を使用し、モノを表す際には、*rien* (nothing) を使用する *il n'y a rien dans la salle* 部屋には何も無い)。

4. その部屋には誰もいない。[全部否定・ヒト]

Il n'y a personne dans la salle.

Il n' y a personne dans la salle.
 SBJ-IMPS NEG ABL.PRN have-PRS-3.SG PRN-INDEF.H. in ART-DEF-SG-F room
 'There is no one in the room'

Personne n' est dans la salle.
 PRN-INDEF.H. NEG be-PRS-3.SG. in ART-DEF-SG-F room
 'No one is in the room'

「誰も～ない」は *ne* の否定辞を動詞の前に置き、さらに *personne* という人を表す不定代名詞を使用する。*Pas* などの否定辞は用いない。存在文、*il y n'y a personne dans la salle* を用いてもいいが、*personne* を主語に置き、所在を表す述語動詞を用いて、*personne n'est dans la salle* としてもいい。

5. その本はこの部屋にない。[所在文の否定]

Ce livre ne se trouve pas dans la salle.
DEM-SG-M. book NEG PRN-REFL-3-SG find NEG in ART-DEF-SG-F room
‘This book is not in the room.’

定の事物や人の所在を表す構文は、「名詞句+ être +場所を表す状況補語」、「名詞句+se trouver+ 場所を表す状況補語」などがあるが、それらを否定文にする場合には、いずれも述語動詞の前に ne、後に pas などの否定辞を置く。

6. この犬は大きくない。[形容詞文の否定]

Ce chien n’ est pas grand.
DEM-SG-M dog NEG be-PRS-3SG NEG big
‘This dog is not big.’

形容詞文を否定文にする場合には、述語動詞（ここでは être）の前に ne、後に pas などの否定辞を置く。

7. この犬はあまり大きくない。[形容詞文の部分否定]

Ce chien n’ est pas très grand.
DEM-SG-M. dog NEG be-PRS-3SG NEG very big
‘This dog is not so big.’

形容詞の部分否定の場合にも、述語動詞の前に ne、後に pas などの否定辞を置く。

8. この犬はあの犬より大きい。[比較級]

Ce chien est plus grand que celui-là.
DEM-SG-M dog be-PRS-3SG more. big that this one
‘This dog is bigger than that one.’

比較級の作り方は、形容詞の前に、優等比較の場合には plus（～より...）劣等比較の場合には、moins（～ほど...ではない）、同等比較の場合には、aussi（～と同じくらい...）を置き、比較の対象となる要素の前に que を置く。「程度」を表すこれら 3 つの副詞は、動詞を修飾することも可能である。また名詞を修飾する場合には、plus de~, moins de~, autant de~ の形式で用いられる。

9. この犬がその犬たちの中で一番大きい。[最上級]

Ce chien est le plus grand parmi tous ces chiens.
DEM-SG-M dog be-PRS-3SG ART-DEF-SG-M. more. big among all DEM-PL dogs
‘This dog is the biggest among all these dogs.’

最上級の作り方は、比較級を作る際に用いた副詞 plus, moins に定冠詞をつける。

10. 今日はあの人は来ない。[自動詞文の否定]

Aujourd'hui, il ne vient pas.
 Today SBJ-PRN-3SG-M NEG come NEG.
 'Today, he does not come.'

自動詞の否定文の場合も他動詞の否定文と同様に、動詞の前に **ne**、後に **pas** などの否定辞を置く。

11. あの人はその本を持って行かなかった。[他動詞文の否定]

Il n' a pas apporté le livre.
 SBJ-PRN-3SG-M NEG have-AUX-PRS-3SG NEG bring ART-DEF-SG-M book
 'He didn't bring the book.'

フランス語の複合過去形は「avoir の現在形+過去分詞」によって構成される。このような複合的な形式で述語が構成される場合には、助動詞が時制、否定のモダリティといった要素を引き受けることになる。従って、11 の例では、**a** の前に **ne**、後に **pas** を置くことによって、否定文が作られている。単純時制形の述語動詞の場合には、述語動詞の前に **ne**、後に **pas** などの否定辞を置く。

12. 全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。[数量の全部否定]

Aucun étudiant n' a participé.
 ADJ-INDEF-M student NEG have-AUX-PRS-3SG participate-PTCP-PST
 'Any student didn't participate.'

13. 全ての学生が参加したわけではない。[数量の部分否定] -

Tous les étudiants n' ont pas participé.
 All-ADJ ART-DEF-PL students NEG have-AUX-PRS-3PL NEG participate-PTCP-PST
 'All the students didn't participate.'

Les étudiants n' ont pas tous participé.
 ART-DEF-PL students NEG have-AUX-PRS-3PL NEG all-ADV participate-PTCP-PST
 'The students didn't all participate.'

数量を部分否定する場合には、**tous** を主語、あるいは動詞の修飾語とする文の否定文を作ればよい。

14. (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。[文の否定]

Je ne l' ai pas acheté.
 SBJ-PRN-1SG NEG ACC-PRN-3SG have-AUX-PRS-1SG NEG buy-PTCP-PST
 'I didn't buy it'

Mais ça ne veut pas dire que le prix était cher.
 But DEM-INDEF NEG want-NEG say COMP ART-DEF-3SG price be-PST-IPFV-3SG expensive
 'But it doesn't mean that the price was expensive.'

「私は買わなかった」という文を見ると分かるように、人称代名詞の形で補語が動詞の前に現れている際 (le, la, les, lui, leur, se) には、代名詞の前に **ne** を置くことに注意したい。「～というわけではない」は「**cela ne veut pas dire que** +目的節」の形式で表すことができる。複合的な述語動詞句 **vouloir dire** 「～を意味する」については、準助動詞が否定のモダリティを引き受ける。また、その目的節は述語動詞句の置かれた否定のスコープに入る。目的節を導く動詞によっては、節の中の述語動詞を接続法に変える必要が現れるものがある。その例としては、**je ne pense pas que...** (私は...とは思わない) **je ne crois pas que...** (私は...とは思わない) などである。また、いくつかの動詞については、直説法か接続法かの選択が可能だ。**je ne comprends pas qu'il soit parti dans ces conditions** (こんな状況で彼が出発したなんて理解できない: 接続法を用いて、「賛同できない気持ち」を表す。) **je ne comprends pas ce que ce mot veut dire** (この言葉の意味が分からない: 直説法を用いて、単に「理解が及ばないこと」を述べる。)

15. 走るな! [禁止]

Ne cours pas!
 NEG run NEG
 'Don't run!'

「禁止」、すなわち、否定の命令文を作る際にも動詞の前に **ne**、後に **pas** などの否定辞を置くことに変わりはない。

16. それを食べるな! [他動詞文の禁止]

Ne le mange pas.
 NEG ACC-PRN-3SG-M. eat NEG
 'Don't eat it'.

他動詞の補語の代名詞が置かれている場合には **ne** を代名詞の前に出す。

17. 明日は雨は降らないだろう。[推量の否定]

Demain il ne pleuvra pas.
 Tomorrow, SBJ-IMPS NEG rain-FUT NEG
 'Tomorrow, it won't rain.'

推量を表すには、様々な言い方があるが、ここでは、述語動詞 **pleuvoir** の単純未来形を使用している。従って **pleuvra** の前後に否定辞を置く。もし、準助動詞の類 (**pourra pleuvoir**, **va pleuvoir** など) を使用するのであれば、準助動詞が否定辞を引き受ける統語的役割を担う。

18. あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。[目的節の否定]

Pourrais-tu parler tout bas pour qu' il
 Can-COND-PRS-2SG.-SBJ-PRN-2SG talk all low for COMP SBJ-PRN-3SG
 ne nous entende pas ?
 NEG ACC-PRN-1PL hear-SBJV-PRS-3SG NEG
 'Could you keep your voice down so that he couldn't hear us?'

ここでは目的節 **pour que** 節が現れている。その内部が接続法現在形であるが、それは目的節に関わる特徴であって、主節の述語動詞が否定形であることとは無関係である。

19. 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。[否定のスキープの調節]

Je ne dis pas ça pour vous
 SBJ-PRN-1SG NEG say-PRS-1SG NEG DEM-PRN-INDEF for ACC-PRN-2SG
 mettre en colère.
 set in anger
 ‘I don’t say it to make you angry.’

動詞の後に置かれた目的節は特にイントネーションやポーズなどによって、主節から切り離されることがなければ、否定のスキープの中に含まれる。もし、目的節を否定のスキープの外に置きたいのであれば、左方に転移する、あるいはポーズやイントネーションなどの韻律的な手段により、分離する必要がある。

20. 私が昨日買った本はどこ（にある）？ [内の関係の連体修飾節・目的語]

Où est le livre que j’ai
 Where be-PRS-3SG ART-DEF-SG-M book COMP SBJ-PRN-1SG have-AUX-PRS-1SG
 acheté hier ?
 buy-PTCP-PST yesterday
 ‘Where is the book that I bought yesterday?’

21. その本を持って来た人は誰（か）？ [内の関係の連体修飾節・主語]

Qui est la personne qui a emporté
 Who be-PRS-3SG ART-DEF-SG-M person SBJ-PRN-REL have-AUX-PRS-3SG bring
 ce livre ?
 DEM-SG-M book
 ‘Who is the person that brought the book here?’

22. この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。 [内の関係の連体修飾節・場所]

C’est la salle dans laquelle nous travaillons.
 DEM-INDEF be-PRS-3SG ART-DEF-SG-F room in PRN-REL-SG-F SBJ-PRN-1PL work-PST-IMPV-3SG
 ‘It is the room in which we worked.’

23. 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。 [内の関係の連体修飾節・所有者]

J’ai déjà jeté la chaise
 SBJ-PRN-1SG have-AUX-PRS-1SG already throw away ART-DEF-SG-M chair
 dont le pied était cassé.
 GEN-PRN-REL ART-DEF-SG-M foot be-PST-IMPV-3SG break-PTCP-PST-SG-M
 ‘I threw away the chair whose foot was broken.’

24. ドアを叩いている音が聞こえる。 [外の関係の連体修飾節]

J’entends quelqu’un frapper à la porte.
 SBJ-PRN-1SG hear-PRS-1SG someone knock to ART-DEF-SG-F door
 ‘I hear someone knocking on the door.’

25. あの人が結婚したという噂は本当 (か) ? [外の関係の連体修飾節]

La rumeur qui dit qu'il s' est
 ART-DEF-SG-F rumor SBJ-PRN-REL say-PRS-3SG. that SBJ-PRN-3SG PRN-RFL-3SG. be-PRS-3SG
 marié est-elle vraie ?
 marry-PTCP-PST-SG-M. be-PRS-3SG-SBJ-PRN-3SG-F true?

26. 私はその人が来た時にご飯を食べていた。[時間節]

Quand il est arrivé, je mangeais.
 When SBJ-PRN-3SG be-PRS-3SG arrive-PTCP-PST SBJ-PRN-1SG eat-PST-IMPV-3SG
 'When he arrived, I was eating.'

27. 私はその人が待っている所に行った。[場所節]

Je suis allé là où il m' attendait.
 SBJ-PRN-1SG be-PRS-1SG go-PTCP-PST-SG-M there where SBJ-PRN-3SG ACC-PRN-1SG. wait-PST-IMPV
 'I went the place where he was waiting for me.'

28. 私はその人が走っていったのを見た。[補文節・視覚]

Je l' ai vu courir.
 SBJ-PRN-1SG ACC-PRN-3SG-M have-AUX-PRS-1SG see-PTCP-PST-SG-M run
 'I saw him run'

29. 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[補文節・聴覚]

Hier soir, je les ai entendus parler.
 Yesterday evening SBJ-PRN-1SG ACC-PRN-3PL have-AUX-PRS-1SG hear-PTCP-PST-SG-M-PL talk
 'Yesterday evening, I heard them talk.'

30. 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。[補文節・知識]

Je sais qu' il est venu ici hier.
 SBJ-PRN-1SG. know-PRS-1SG COMP SBJ-PRN-3SG-M be-PRS-3SG come-PCTP-PST here yesterday
 'I know that he came here yesterday.'

31. (昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。 / (昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。[補文節・直接発話/間接話法]

Hier, il m' a dit
 Yesterday SBJ-PRN-3SG ACC-PRN-1SG have-AUX-PRS-3SG say-PCTP-PST
 qu' il était venu là le jour-même.
 COMP SBJ-PRN-3SG be-PST-IMPV come-PCTP-PST there ART-DEF-SG-M day-same
 'Yesterday, he said to me that he had come there that day.'

Hier, il m' a dit
 Yesterday SBJ-PRN-3SG ACC-PRN-1SG have-AUX-PRS-3SG say-PCTP-PST
 « je suis venu ici aujourd'hui ».
 SBJ-PRN-1SG be-AUX-PRS-1SG come-PCTP-PST-SG-M here today

‘Yesterday, he said to me : I came here today.’

規範的なフランス語の間接話法においては、補文節内で、時制の一致、副詞の一致などが起こると言われている。ただし、文学作品などに観察される自由間接話法といった中間的存在があるのに加え、インフォーマルな日常の自然会話においても、一致が厳密に順守されるわけではない。後者においては、往々にして、間接話法と直接話法の境界は曖昧なものとなる傾向がある。この点については、未だコーパスに基づいた綿密なる記述的研究がなされていないため、今後の研究が多いに期待される分野である。

32. 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた。[内在節・従主・主主]

J'	ai	mangé	la	pomme	qui
SBJ-PRN-1SG	have-AUX-PRS-1SG	eat-PCTP-PST	ART-DEF-SG-F	apple	SBJ-PRN-REL
était	sur	l'	assiette.		
be-PST-IMPFV	on	ART-DEF-SG-F	plate		

33. 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。[内在節・従主・主目]

J'	ai	attrapé	le	chat
SBJ-PRN-1SG	have-AUX-PRS-1SG	catch-PCTP-PST	ART-DEF-SG-M	cat
quand il/ qui		entrait	dans la	maison.
When SBJ-PRN-3SG / which		come-PST-IMPFV-3SG	in	ART-DEF-SG-F house

‘I caught the cat when it/, which was coming into the house’

参考文献

- Meisner, C., Robert-Tissot, A. & Stark, E.(2016). "La présence/absence de *ne*", in *Encyclopédie grammaticale du français*, インターネットの記事 2019年5月6日閲覧。(http://encyclogram.fr/notx/008/008_Notice.php)
- Muller, C. (1991). *La négation en français, Syntaxe, sémantique et éléments de comparaison avec les autres langues romaines*, Genève : Droz.

執筆者連絡先: hisae-akihiro@tufs.ac.jp

原稿受理:2019年5月9日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

イタリア語における否定、形容詞と連体修飾複文

Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification in Italian

久保 博

Hiroshi Kubo

東京外国語大学非常勤講師
Part-time Lecturer, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号, 東京外国語大学)に寄与する。本稿の目的は33個のアンケート項目に対するイタリア語データを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Italian data which answers the thirty three survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 23, which focuses on the cross linguistic study of 'negation, adjectives, and compound sentences of adnominal modification'.

キーワード: イタリア語, 否定, 形容詞, 連体修飾, 複文

Keywords: Italian, negation, adjective, adnominal modification, compound sentence

特集「否定、形容詞と連体修飾複文」のアンケートについて、各文のねらいを考慮しつつ、以下に回答をまとめた。さらに簡単にではあるが解説も試みた。

アンケートへの回答は北イタリア出身のイタリア語話者をお願いした。イタリア語において興味深いと思われる事象を今回の調査から浮き上がらせるために、インタビューを二度行った。一度目は日本語を十分に理解するイタリア語話者にこのアンケートを送りその回答を得たのち、二度目に筆者がさらに他の回答も可能であるかどうかを聞くという手順をとった。

尚、グロスは最低限のみ付してある。

1. これは私の本ではない.[名詞述語文/コピュラ文の否定]

イタリア語において、コピュラ文の否定は1aのように否定辞 non がコピュラ動詞の直前¹に現れる。また、コピュラ分に限らず、一般的には、否定辞と動詞の間に人称代名詞接語形のみが現れることができる²。

a. Questo non è mio libro.
this.SG.M NEG COP.3SG POSS.SG.M book³



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ 人称代名詞接辞形と否定辞がともに現れるときは、否定辞+接辞+動詞という語順になる。

² ロマンズ語における否定辞の分類については、Zanutti(1997)を参照のこと。

³ 本アンケートに掲載されているイタリア語の文では、動詞が直説法である場合、その旨は取り立てて明記されていない。接続法である場合は、その旨がグロスに示されている。

2. この部屋には椅子がない.[存在文の否定]

イタリア語には,存在を表すために様々な表現があるが,ここでは最も標準的な動詞 *esserci* 「ある」を用いた文を 2a に示す.また日本語の文を「中立叙述」と解釈する.

- a. In questa stanza non ci sono sedie.
in.PREP this.SG.F room NEG there_are.3PL chairs

ここで強調しておくべきことは,形態論上,可算名詞である「椅子」は複数形であり,それに伴い動詞も複数形に活用する点である.

3. この部屋には一つも椅子がない.[全部否定・モノ]

モノに関する存在文の全部否定の場合,標準的に単数形で否定形容詞の *nessuno* 「誰(何)も...ない」が用いられる.もしくは,否定副詞 *neanche* 「も...ない」もしくは *nemmeno* 「すら...ない」を不定冠詞および存在しないモノの単数形とともに用いる.*nessuno* や *neanche* が動詞に後置される場合,二重否定が起こる.つまり否定辞 *non* は義務的に表れる.

- a. In questa stanza non c'è nessuna sedia.
in.PREP this.SG.F room NEG there_is.3SG nobody.ADJ.SG.F chair
- b. In questa stanza non c'è neanche una sedia.
in.PREP this.SG.F room NEG there_is.3SG neither.ADV a.SG.F chair

3a,3b ともに全部否定であることは確かであるが,前者の場合細かな含みの違いがある.前者は「椅子の数量がゼロである」と直接明示しているのに対し,後者は「椅子の数量が最も少ない数である 1 に達していない(つまりゼロである)」と間接的に示している.

4. その部屋には誰もいない.[全部否定・ヒト]

ヒトに関する存在文の全部否定の場合も,単数形で否定形容詞 *nessuno* 「誰(何)も...ない」を,「ヒト」を表す語(例えば *uomo* 「人間,男」とともに用いることができる(4a)が,より一般的には *nessuno* を否定代名詞として用いる(4b).後者の場合は「ヒト」のみに用いることが可能で,「モノ」に用いることはできない.

3 の場合同様,*nessuno* や *neanche* が動詞に後置されるので,否定辞 *non* は義務的に表れる.

- a. In quella stanza non c'è nessuno.
in.PREP that.SG.F room NEG COP.3SG nobody.PRN
- b. In quella stanza non c'è nessun uomo.
in.prep that.SG.F room NEG COP.3SG nobody.ADJ.SG.M human

また,以下のように「ヒト」にのみ使える最小化詞 (minimizer)⁴を用いた回答も得た.

- c. In quella stanza non c'è un cane.
in.prep that.sg.f room neg cop.3sg a.M dog
- d. In quella stanza non c'è un' anima viva.
in.prep that.SG.F room neg cop.3SG a.F soul living.ADJ

5. その本はこの部屋にない.[所在文の否定]

所在文は,通常,主語+essere 動詞(コピュラ) +場所という構文を取り,それを否定する場合,コピュラ動詞である essere に否定辞が前置される (5a) .

- a. Quel libro non è in questa stanza.
that.SG.M book NEG COP.3SG in.PREP this.SG.F room.SG.F

6. この犬は大きくない.[形容詞文の否定]

形容詞文の否定では,コピュラ動詞に否定辞 non が前置される (6a) .

- a. Questo cane non è grande.
this.SG.Mdog NEG COP.3SG big.ADJ.SG.M

7. この犬はあまり大きくない.[形容詞文の部分否定]

形容詞分の部分否定では,molto「とても」 や cosi といった程度を表す副詞を伴った文で動詞に否定辞が前置される.ここでは molto を用いた文を示す (7a) .

- a. Questo cane non è molto grande.
this.SG.Mdog NEG COP.3SG very.ADV big.ADJ.SG.M

8. eこの犬はあの犬より大きい.[比較級]

伝統的なイタリア語文法では,比較級に関して優等比較級,劣等比較級,同等比較級の三種の文法事項がある.前者二つは,修飾する二つも物体や概念などの差異を表すのに対し,同等比較級は二つの物体や概念

⁴ 4aの文との対比を鮮明にするために「この部屋には何も無い」という文の場合についても調査を行い次のような回答を得た. 以下のa, bでは, 否定代名詞nienteおよびnullaが, cでは否定形容詞nessunoが用いられている. dでは標準イタリア語ではないが, 「モノ」にのみをしめす最小化詞(minimizer)が用いられる.

- a. In questa stanza non c'è niente.
b. In questa stanza non c'è nulla.
c. In questa stanza non c'è nessuna cosa.
d. In questa stanza non c'è un cazzo.

さらに, nienteが名詞に前置され形容詞として「モノ」の全部否定に使われるケースもあるが, 標準イタリア語においても「特別」な事例であるため, その詳細に関してはGarzonio / Poletto (2008)およびMoscati(2006)を参照されたし.

最小化詞の定義, その通域的なヴァリエーションについて, さらにロマンス語において最小化詞がフランス語の動詞に後置される否定辞pasのように文法化する通時的プロセスについてはGarzonio / Poletto (2008)およびそこに掲載されている参考文献を参照のこと.

また, 否定代名詞や否定形容詞が動詞に前置される場合, 否定辞 non があらわれず二重否定にならないが, それについての解説は省略する.

などの類似点を表す。

優等比較級では,più+形容詞+di+比較される対象,劣等比較級では meno+形容詞+di+比較される対象,という構文をとる。

文 8 は,優等比較級を用いるのが一般的だが (8a) ,劣等比較級を用いても似たような意味の文を作ることができる (8b) .

a.	Questo	cane	è	più	grande
	this.SG.M	dog	COP.3SG	more.ADB.	big.ADJ.SG.M
	di	quell'		altro.	
	than.PRE	that.SG.M		other.PRN.SG.M	
b.	Questo	cane	è	meno	piccolo
	this.SG.M	dog	COP.3SG	less.ADV	small.ADJ.SG.M
	di	quel		cane.	
	than.PRE	that.SG.M		dog	

9. この犬がその犬たちの中で一番大きい.[最上級]

伝統的なイタリア語文法では,比較最上級と絶対最上級の区別があり,前者はある一定の範囲内で「最も...である」という意味を客観的に表すのに対し,後者は主観的に「とても...である」「非常に...である」といった意味をあらわす。

文 9 は,前者の比較最上級にあてはまり,比較級同様,優等最上級 (9a) と劣等最上級 (9b) の区別がある.前者は,定冠詞+più+形容詞+di+比較される範囲,後者では,定冠詞+meno+形容詞+di+比較される範囲,という構文をとる。

a.	Questo	cane	è	il	più	grande
	this.SG.M	dog	COP.3SG	the.SG.M	more.ADB	big.ADJ.SG.M
	di	quei		cani.		
	than.PRE	that.PL.M		DOG.PL		
b.	Questo	cane	è	il	meno	piccolo
	this.SG.M	dog	COP.3SG	the.SG	less.ADV	small.ADJ.SG.M
	di	quei		cani.		
	than.PRE	that.PL.M		DOG.PL		

10. 今日はあの人は来ない.[自動詞文の否定]

10a のように,コピュラ動詞と同様,否定辞 non を動詞に前置する。

a.	Oggi	lui	non	viene.
	today.ADV	he	NEG	come.S.3SG

11. あの人はその本を持って行かなかった.[他動詞文の否定]

自動詞,他動詞にかかわらず文を否定するときには通常 non が動詞に前置される (11a) .

a.	Lui	non ha	portato	via
	he	NEG have.AUX.3SG	bring.PAST.PTCP	away.ADV
	il	libro.		
	the.SG.M	book		

12. 全ての学生が参加しなかった/学生は全員参加しなかった.[数量の全部否定]

イタリア語では「すべての…」を表すのに,tutto/i + 定冠詞 + 名詞句が用いられることから,文 12 の回答として 12a のような文を予測していたが,有標だという事であり,アンケートの答えとしては,12b のような回答を得た.

a.	Tutti	gli	studenti non	hanno	partecipato.
	all.ADJ.PL.M	the.PL.M	students NEG	have.AUX.3PL	participate.PAST.PTCT
b.	Gli studenti	non	hanno	partecipato	tutti.
	the students	NEG	have.AUX.3PL	participate.PAST.PTCT	all.ADJ.PL.M

13. 全ての学生が参加したわけではない.[数量の部分否定]

数量の部分否定では,否定辞 non が数量を表す形容詞に前置される.本回答では,tutti が non によって修飾される (13a) ⁵.

a.	Non	tutti	gli	studenti	non	hanno
	NEG	all.ADJ.PL.M	the.PL.M	students	NEG	have.AUX.3PL
						partecipato.
						participate.PAST.PTCT

14. (私は買わなかった.しかし,決して)値段が高いというわけではない.[文の否定]

14a のように,否定される文が従属節として補語標識により導入され,主節は否定辞とコピュラ動詞のみで構成される.

a.	Non	è	che	era	caro.
	NEG	COP.3SG	COMP	COP.IPFV.3SG	expensive.ADJ

日本語の場合同様,ただ従属節の命題を単純に否定しているのではなく,別の作用を持っている⁶.

さらに,標準イタリア語ではないが,聞き手の「前提」を否定するととらえた場合,14b のように,しばしば mica という動詞に後置される否定の副詞が使われる⁷.

⁵ ほかにも 14 の二つの構文を使って同じような意味を表すこともできるが,ただこの二つの場合,聞き手の前提などを否定しているものであり,ここでの質問の意図である「部分否定」とは多少なりとも違うように思われる.

⁶ より詳しい解説は Garzonio / Poletto (2015)を参照のこと.

⁷ mica の詳細については,Cinque (1976)および Penello-Pescarini(2008)を参照のこと.

- b. Non era mica caro.
 NEG COP.3SG COP.IPFV.3SG NEG expensive.ADJ

15. 走るな！[禁止]

イタリア語では、禁止を表すために数種類の回答を得た。

最も一般的と考えられるものは、否定命令法である。伝統的なイタリア語文法における否定命令法は、二人称単数の場合、否定辞 non + 動詞の不定法(15a)、敬称（三人称単数）の場合、否定辞 non + 命令法三人称単数が用いられる(15b)。形態論上、後者は接続法現在と一致する。

- a. Non correre!
 NEG run.INF
- b. Non corra!
 NEG run.S.IMP.3SG

そのほかにも、以下のような構文をもちいても否定を表すことができる。

非人称の si を用い、一般的にある行動をしないことを表し、言語外の含みとして禁止を表す(15c)。この構文は、頻繁に子供をしつけるために用いられる。

- c. Qui non si corre.
 here.ADV NEG CLT run.S.3SG.

義務や可能性を表すモダリティー動詞を否定辞 non と共に用いる（15d,15e）。

- d. Non devi correre.
 NEG must.MOD.2SG run.INF
- e. Non puoi correre
 NEG can.MOD.2SG run.INF

16. 大きな声を出すな！[他動詞文の禁止]

イタリア語で、大きい声を出すに最も近い表現では、自動詞が用いられたため、「大声でその言葉を言うな」という文を基本に考える。自動詞の時と同じく二人称単数の場合、否定辞 non + 動詞の不定法（16a）、敬称（三人称単数）の場合、否定辞 non + 命令法三人称単数が用いられる。

- a. Non dire la parola ad altra voce.
 NEG say.3SG THE.SG.F word aloud.ADV

15 の自動詞を用いた文と大差はなく、そのほかの同じ表現を用いて禁止を表すことができる。唯一の違いは、「義務」「必要性」をあらわす andare「行く」 + 過去分詞の受け身構文であり、これは自動詞に用いることはできない。これに否定辞 non をつけることで、「禁止」を表すことができる（16b）。

b.	La	parola	non	va	detta	ad alta voce.
	THE.SG.F	WORD	NEG	go.AUX.3SG	say.PAST.PTCT	aloud.ADV

17. 明日は雨は降らないだろう.[推量の否定]

推量は様々な方法で表すことができるが,17a のように forse 「おそらく,たぶん」などのモダリティの副詞を用いるのがもっとも簡易かつ基本的な表現であろう。また,17b のように,credere 「思う,考える」, pensare 「考える」等の認識に関するモダリティ動詞,もしくは 17c のように蓋然性や可能性を表す probabile, possibile などの形容詞を主節に用いて,推量を表すこともできる。以下のように,推量される内容が従属節で示される場合,動詞は接続形をとる。

または,può darsi, può essere などの可能性を表す成句を用い (17d) ,推量を表すことができる。

a.	Forse	domani	non	piove		
	maybe.ADV	tommorrow.ADV	NEG	rain.3SG		
b.	Penso	che	domani	non	piova.	
	think.1SG	COMP	tommorrow.adv	NEG	rain.SBJV.3SG	
c.	È	probabile	che	domani	non	piova.
	be.AUX.3SG	probable.ADJ	COMP	tommorrow.adv	NEG	rain.SBJV.3SG
d.	può	darsi	che	domani	non	piove.
	can.MOD.3SG	give.REFL.INF	COMP	tommorrow.adv	NEG	rain.SBJV.3SG

18. あの人に聞こえないように,小さな声で話してくれ.[目的節の否定]

目的節は,前置詞 per,もしくは perché, affinché, acciocché, ché, onde 等の接続詞によって導入される。前者の場合,動詞は不定詞が,後者の場合,否定文であるかにかかわらず接続法が用いられる。ここでは perché を用いた文を示す (18a)が,興味深いことに,perché を直説法の動詞と用いると,目的ではなく理由を表す (18b) 。

a.	Parla	piano	per favore,	perché
	speak.IMP.2SG	quietly.ADV	please	so_that.CONJN
	quella	persona non	lo	senta
	that.SG.F	person NEG	it.CLT.SG.M	hear.SBJV.3SG
b.	Parla	d alta voce	per favore,	perché
	speak.IMP.2SG	aloud.ADV	please	because.CONJN
	quella	persona lo	sente.	
	that.SG.F	person it.CLT.SG.M	hear.3SG	

19. 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない.[否定のスコープの調節]

否定のスコープの調節に関しては,19a,19b の二種類の回答を得た。前者の目的節は否直前に否定辞が置かれ,統語的に否定のスコープが調節されていることが明示される。後者の場合,否定辞は無標の位置にあるが,目的節全体が強いアクセント (大文字で強調) を伴って発音される。つまり,ここでは統語的には否

定のスコープの調節が明示されない。

- a. Te l' ho detto non
 you.CLT.SG it.CLT.SG have.MOD.1SG say.PAST.PTCT NEG
 per farti arrabbiare.
 for.PRE CAUS.INF-you.REFL.CLT.SG get_angry.INF
- b. Non te l' ho detto
 NEG you.CLT.SG it.CLT.SG have.AUX.1SG say.PAST.PTCT
 PER FARTI ARRABBIARE.
 for.PRE CAUS.INF-you.REFL.CLT.SG get_angry.INF

20. 私が昨日買ってきた本はどこ(にある)? [内の関係の連体修飾節・目的語]

イタリア語では内の関係の連体修飾節・目的語は,che や il quale などのいわゆる関係代名詞によって導入される従属節によってあらわされる.本アンケートではは che を用いた回答を得た (20a) .

- a. Dov' è il libro che ho
 where COP.3SG the.SG.M book COMP have.AUX.1SG
 comprato ieri.
 buy.PAST.PTCP yesterday

21. その本を持って来た人は誰(か)? [内の関係の連体修飾節・主語]

内の関係の連体修飾節・主語も,目的語同様,che や il quale などのいわゆる関係代名詞が導入する関係節によって表される.

- a. Chi è la persona che ha
 who COP.3SG the.SG.F person COMP have.AUX.3SG
 portato quel libro?
 bring.PAST.PTCP that.SG.M book

22. この部屋が私たちの仕事をしている部屋です.[内の関係の連体修飾節・場所]

内の関係の連体修飾節・場所は,関係副詞 dove,前置詞+cui (関係代名詞) , 前置詞+定冠詞+ quale (関係代名詞) が導入する従属節によってあらわすことができる.ここでは dove を用いた回答を得た (22a) .

- a. Questa è la stanza dove lavoriamo.
 this.SG.F COP.3SG the.SG.F room where work.1PL

23. 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった.[内の関係の連体修飾節・所有者]

内の関係の連体修飾節・所有者を表すために,23a,23b の二種類の回答を得た⁸.

- a. Ho già buttato via
have.AUX.IMFV.1SG already.ADV throw.PAST.PTCT away.ADV
la sedia che aveva una gamba rotta.
the.SG.F chair COMP have.IMFV.1SG a.F leg break.PAST.PTCT
- b. Ho già buttato via
have.AUX.IMFV.1SG already.ADV throw.PAST.PTCT away.ADV
la sedia della quale una gamba era rotta.
the.SG.F chair of_the_which a.F leg be.COP.3SG break.PAST.PTCT

前者は,補文標識 *che* で導入される従属節によって所有者が示され,後者では所有を表す前置詞 *di* を伴った関係代名詞 *il quale*⁹によって導入される従属節によって所有者が示される。

24. ドアを叩いている音が聞こえる.[外の関係の連体修飾節]

この文には知覚動詞を使うのが最も一般的だと思われるが,あえて *rumore* 「音」という語を使ってもらった場合,24a のような回答を得た¹⁰.

- a. Sento il rumore di qualcuno che
hear.1SG the.SG.M sound of.PRE someone COMP
sta bussando la porta.
stay.AUX.3SG knock.GER the.SG.F door

25. あの人が結婚したという噂は本当(か)? [外の関係の連体修飾節]

voce 「噂」という語の場合は外の関係の連体修飾節を伴うことができ,主に *che* によって従属節を導入する (25a) .

- a. È vera la voce che quella persona
COP.3ST true.ADJ the.SG.F rumor COMP that.SG.F person
si sia sposata?
CLT.REFL be.SBJV.3SG get_marry.PAST.PTCT

26. 私はその人が来た時にご飯を食べていた.[時間節]

時間節は,quando 「...の時」 (26a) や *mentre* 「...の間」 (26b) などの接続詞,もしくは時間を表す先行詞とともに用いられる前置詞を伴った関係代名詞 *cui* 等 (26c) によって導入される。

⁸ この二つの回答以上に一般的なものは,“Ho già buttato via la sedia con una gamba rotta”のように *con* 「...とともに」によって導入される前置詞句を用いることだが,ここでは出題の意図にそぐわないため脚注に記す。

⁹ 回答では,先行詞 *sedia* の数と性が一致した *la quale* が用いられている。また 23b はあまり一般的な構文ではない。

¹⁰ 直訳すると,「ドアをノックしている誰かの音が聞こえる」となる。

- a. Quando stavo mangiando, lui è entrato.
 when.CONJN stay.IMPF.1SG eat.GER he be.AUX.3SG enter.PAST.PTCT
- b. Mentre stavo mangiando, lui è entrato.
 while.CONJN stay.IMPF.1SG eat.GER he be.AUX.3SG enter.PAST.PTCT
- c. Nel momento in cui stavo mangiando, lui è
 in_the moment in_which stay.IMPF.1SG eat.GER he be.AUX.3SG
 entrato.
 enter.PAST.PTCT

27. 私はその人が待っている所に行った.[場所節]

場所節を示すために,関係副詞 *dove* や *al posto in cui / dove* などの場所を表す語を先行詞としてとる関係副詞を用いることができるが,本アンケートでは 27a を回答として得た.

- a. Sono andato dove mi stava.
 be.AUX.1SG go.PAST.PTCT where me.CLT.1SG stay.AUX.3SG
 aspettando.
 wait.GER

28. 私はその人が走っていったのを見た.[補文節・視覚]

知覚動詞は,視覚 28,聴覚 29 とともに,a, b 二つの構文で表すことができる.28a は,知覚動詞+不定動詞という構文をとり,知覚動詞の直接目的語で表されている語が,不定動詞の意味上の主語となる.この不定詞節の代わりに,28b のように活用した動詞を含む従属節を用いることもできる.

- a. Ho visto quella persona correre.
 have.AUX.1SG see.PAST.PTCT that.SG.F person run.INF
- b. Ho visto quella persona che correva
 have.AUX.1SG see.PAST.PTCT that.SG.F person COMP run.IMPF.3SG

28b の文は一見普通の関係詞節が有るように見えるが,いくつかの関係代名詞とは違う性格を持つことから *pseudorelativa* (疑似関係詞節) などと呼ばれている.(Salvi / Vanelli 1994).

情報提供者によるとこの二つの構文の意味上の違いは以下のとおりである.一方で,28a では走り始めてから止まる,もしくは消え去るまでのすべてを目撃したのに対し,29b ではすでに走っているところを目撃したという違いがあるという.

29. 昨日の夜,私は彼らがしゃべっているのを聞いた. [補文節・聴覚]

- a. Ieri notte li ho sentiti
 yesterday night them.CLT.SG.M have.AUX.1SG hear.PAST.PTC
 parlare.
 talk.INF

- b. Ieri notte li ho sentiti
 yesterday night them.CLT.SG.M have.AUX.1SG hear.PAST.PTC
 che parlavano.
 COMP talk.IMPF.3PL

30. 私はその人が昨日ここに来たことを知っている.[補文節・知識]

知識を表す動詞に関しては,知覚動詞と同様の構文をとることはできない。「知っている」内容は補文標識 *che* によって導入される従属節として示される (30a) .

- a. So che ieri lui è stato qui.
 know.1SG COMP yesterday he be.AUX.3SG be.PAST.PTCT here.ADV

31. (昨日)彼は彼が今日ここに来たと言った./ (昨日)彼は、「私は今日ここに来た」と言った.[補文節・直接発話/間接話法]

間接話法の場合,前置詞 *di* + 不定詞 (31a) ,もしくは補文標識 *che* (31b) によって従属節を導入する.前者は主文と従属節の動詞の主語が一致している場合につかい,それ以外の場合は後者が用いられる.

直説話法の場合には,日本語の「と」やサンスクリット語の *iti* のような引用節を示すマーカーは存在しない (31c) .

- a. Lui ha detto di essere
 he have.AUX.3SG say.PAST.PTCT of.PRE be.AUX.INF.
 venuto oggi.
 come.PAST.PTCT today.ADV
- b. Lui ha detto che è
 he have.AUX.3SG say.PAST.PTCT COMP be.AUX.3SG
 venuto oggi.
 come.PAST.PTCT today.ADV
- c. Lui ha detto: “Sono venuto
 he have.AUX.3SG say.PAST.PTCT be.AUX.1SG come.PAST.PTCT
 qui oggi”.
 here.adv today.ADV

32. 私はリンゴが(あの)皿の上にあったのを食べた.[内在節・従主・主主]

イタリア語では,内在節は存在しない構文であり,32 の場合「リンゴ」は主節の直接目的語として明示される (32a) .

- a. Ho mangiato la mela che stava
 have.AUX.1SG eat.PAST.PTCT the.SG.F apple COMP stay.IPFV.3SG

su	quel	tavolo
on.PRE	that.SG.M	table.

33. 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。[内在節・従主・主目]

32 の場合と同じく,ネコは主節の直接目的語として明示される (33a) .

a.	Ho	afferrato	il	gatto				
	have.AUX.1SG	grab.PAST.PTCT	the.SG.M	cat				
	nel momento in cui		stava	per	entrare	in	casa	
	in_the_moment_in_which		stay.IPFV f	or.PRE	enter.INF	in.PRE	home	

参考文献

- Cinque, G. 1976. Mica. *Annali della Facoltà di Lettere e Filosofia dell'Università di Padova*, 1: 101-112.
- Garzonio, J. / Poletto, C. 2008. Minimizer and quantifiers: a window on the development of negative markers. *Studies in Linguistics CISCL Working Papers*, 2: 59-80.
- Garzonio, J / Poletto, C. 2015. On Preverbal Negation in Sicilian and Syntactic Parasitism. *Isogloss*, Special Issue: 133-149.
- Moscato, V. 2006. *The Scope of Negation*. PhD: Thesis, University of Siena.
- Salvi, G.P. / Vanelli, L. 2004. *La nuova grammatica*. Bologna: Il Mulino.
- Penello, N. / Pescarini, D. 2008. Osservazioni su mica in italiano e alcuni dialetti veneti. *Quaderni di lavoro dell'ASIt*, 8: 43-56.
- Zanuttini, R. 1997. *Negation and Clausal Structure*. New York & Oxford: Oxford University Press.

執筆者連絡先:hiroshi80@tufs.ac.jp

原稿受理:2019年5月7日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

スペイン語における否定、形容詞と連体修飾複文

Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification in Spanish

喜多田 敏嵩、カテリネ・シフエンテス

Toshitaka Kitada, Katherine Cifuentes

東京外国語大学大学院総合国際学研究科
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨:

本稿は、『語学研究所論集』第23号の統一テーマ「否定、形容詞、連体修飾複文」に関するスペイン語のデータ提供である。33の例文について、コロンビア出身のスペイン語母語話者であるシフエンテスと検討を行い、訳出から見られるスペイン語の言語的特徴に関する報告を行った。否定に関する検討では、スペイン語における否定は動詞の直前に否定辞 *no* を置くという単純な規則で成り立っているが、その作用域は、接続法などの日本語にはない形式を用いることで、より明確に表示可能であることを報告した。形容詞文に関する検討では、スペイン語における形容詞文が、形容詞の意味によって、2つの繫辞動詞を使い分ける点や、形容詞が比較に関する語形変化を基本的に持たない点を報告した。連体修飾複文に関する検討では、外の関係の連体修飾の生産性の低さや、主要部内在型関係節の不在から、スペイン語での連体構造の使用が日本語よりも制限的であることを報告した。

Abstract:

Esta monografía ofrece datos del español acerca del tema del presente tomo de *Journal of the Institute of Language Research*. En colaboración con Katherine Cifuentes, hispanohablante nativa de origen colombiano, hemos llevado a cabo un análisis de las 33 oraciones designadas. En cuanto a la negación, hemos señalado que la negación en español se realiza por medio de la simple colocación del adverbio *no* delante del verbo, pero que su alcance se marca de manera más obvia que en la lengua japonesa en virtud de elementos gramaticales como el subjuntivo. Con respecto a las oraciones adjetivales, hemos indicado que el español cuenta con dos verbos copulativos *ser/ estar*, por lo que hay que elegir uno u otro de acuerdo con el significado del adjetivo. También hemos apuntado que los adjetivos no poseen inflexión en el superlativo relativo. Por último, a través del análisis sobre las construcciones adnominales, hemos señalado que su uso es mucho más limitado en español que en japonés debido a la baja productividad de cláusulas aposicionales y a la ausencia de cláusulas relativas de núcleo interno.

キーワード: 否定、形容詞文、連体構造、証拠性

Keywords: negación, oración adjetival, construcción adnominal, evidencialidad

1. はじめに

本稿は、『語学研究所論集』本号のテーマに関するアンケートに対する、スペイン語の回答である。アンケートについては、コロンビア出身のスペイン語母語話者であるシフエンテスが例文をスペイン語に訳し、訳文を2人で検討したうえで喜多田が回答を文章化した。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deedja>

2. 否定・形容詞に関する回答 (例文 1-19)

例文 (1)-(19) は、否定文がどのような構文をとるか探ることがねらいとなっている。スペイン語における否定文は、動詞の直前に否定辞 *no* を置くという単純な規則で生成される¹。否定辞 *no* の位置は元の肯定文のタイプや、助動詞であるか否か、定形であるか否かによらず、常に動詞の直前であり、クリティックが挿入される場合を除き、*no* と動詞は隣接する必要がある (Zagona 2002: 194-195)。したがって、否定に関する例文の検討では、否定辞 *no* の位置に関する記述を簡潔なものにとどめ、否定に加えて記述すべきスペイン語に特有の事項に関する報告も盛り込む。

(1) これは私の本ではない。

Este no es mi libro.

Est-e	no	es	mi	libro.
this.PN-M.SG	NEG	be. IND.PRES.3SG	POSS.1SG	book

スペイン語における名詞述語文の否定は、主語の数・人称に合わせて活用させた繫辞動詞 *ser* の直前に否定辞 *no* を置くことで行う。

(2) この部屋には椅子がない。

(2)-1. No hay sillas en esta sala.

No	hay	silla-s	en	est-a	sala.
NEG	have.IND.PRES.3SG	chair-PL	in	this.DEM-F.SG	room

スペイン語の存在文は、「*hay*+名詞句」という形式をとる。*hay* は動詞 *haber*² の直説法現在 3 人称単数形であり、この形は後続する名詞句の数に関わらず不変であることが特徴である。これは、後続の名詞句が *hay* の主語ではなく直接目的語として機能するためである。そして、存在文を否定する場合は、名詞述語文の否定と同様、動詞の直前に否定辞 *no* を置く。この例文では焦点的情報を「椅子」が担っているが、シフエンテスによれば、(2)-2 のように前置詞句 *en esta sala* 「この部屋には」を文頭に置いても、少なくとも文面では意味の差異は感じられない。

(2)-2. En esta sala no hay sillas.

En	est-a	sala	no	hay	sillas.
in	this.DEM-F.SG	room	NEG	have.IND.PRES.3SG	chair-PL

(3) この部屋には一つも椅子がない。

(3)-1. No hay ni una silla en esta sala.

No	hay	ni	un-a	silla	en	est-a	sala.
NEG	have.IND.PRES.3SG	even	ART.INDF-F.SG	chair	in	this.DEM-F.SG	room

¹ 否定辞 *no* は動詞だけではなく、名詞や形容詞と結びつくこともできる (RAE & ASALE 2009: 40.6i)。

² 動詞 *haber* は、現代スペイン語において所有の意味で用いられることはない。

(3)-2. No hay ninguna silla en esta sala.

No hay ningun-a silla en est-a sala.
 NEG have.IND.PRES.3SG no-F.SG chair in this.DEM-F.SG room

例文 (3) では名詞 (モノ) の全部否定が問題となっているが、スペイン語には2つの形式が存在する。1つは (3)-1 のように、名詞の単数形に不定冠詞を付け、構成された名詞句の直前に、否定の強調副詞 *ni* を置く方法である。もう1つは (3)-2 のように、裸名詞単数形に否定の不定形容詞 *ningún/ ninguna* を付ける方法である。2つの訳文を見れば分かるが、スペイン語では動詞の否定辞 *no* と他の否定語の共起が可能であり、否定の否定を意味することもない。またシフエンテスの内省によれば、上の (3)-1, (3)-2 と、それぞれの語順を入れ替えて生成した (3)-3, (3)-4 の間の含意の差異は、音声的強調の有無がその主たる判断材料となるため、少なくとも文字の上では同じ内容を意味していると言える。

(3)-3. En esta sala no hay ni una silla.

En est-a sala no hay ni un-a silla.
 in this.DEM-F.SG room NEG have.IND.PRES.3SG even ART.INDF-F.SG chair

(3)-4. En esta sala no hay ninguna silla.

En est-a sala no hay ningun-a silla.
 in this.DEM-F.SG room NEG have.IND.PRES.3SG no-F.SG chair

(4) その部屋には誰もいない。

(4)-1. No hay nadie en esa sala.

No hay nadie en es-a sala.
 NEG have.IND.PRES.3SG anybody in that.DEM-F.SG room

例文 (4) は人の否定に関するものであるが、スペイン語では *nadie* という専用の形式が存在する。これは、英語の *anybody/nobody* に相当する、人に関する否定代名詞であり、性・数による語形変化を持っていない。*nadie* が *anybody/nobody* という2つの語に対応するのは、動詞の前に生じた場合は英語の *no-* と同様の働きをするが、動詞の後に生起すると英語の *any-* と同様の働きを見せ、文否定要素 *no* を要求するからである (片岡 2007: 79)。なお (2), (3) と同様、前置詞句を文頭に置いても、文面では意味の差異は感じられないとシフエンテスは指摘している。

(4)-2. En esa sala no hay nadie.

En es-a sala no hay nadie.
 in that.DEM-F.SG room NEG have.IND.PRES.3SG anybody

(5) その本はこの部屋にない。

Ese libro no está en esta sala.

Es-e libro no est-á en est-a sala.
 that.DEM-M.SG book NEG be-IND.PRES.3SG in this.DEM-F.SG room

(5) は所在文の否定に関する例である。これまでと同様、否定は *no* を動詞の直前に置くことで表現するが、スペイン語の所在文には動詞 *estar* を用いる。なお、(5) については、これまでのように前置詞句 *en esta sala* を文頭に置いた場合、トピックが「その本」から「この部屋に」に移動してしまうため、「この部屋には、その本はない」といった意味になってしまう。

(6) この犬は大きくない。

(6)-1. *Este perro no es grande.*

Est-e	perro	no	es	grande.
this.DEM-M.SG	dog	NEG	be.IND.PRES.3SG	big

(6) は形容詞文の否定に関する例文である。スペイン語における形容詞文は、繫辞動詞＋形容詞という語列で構成され、文を否定する際は、他の場合と同様に、動詞の直前に *no* を置く。スペイン語には *ser* と *estar* という2つの繫辞動詞が存在し、補語となる形容詞の意味によって両者を使い分ける。*ser* は、主語に関する固有の性質を表す補語を取る動詞であるのに対し、*estar* は一時的な状態を表す形容詞や所在を表す語句を伴って主語の動的性質を表す動詞である。(6) の「大きい」は主語の「犬」に関する固有の性質であるため、繫辞動詞は *ser* が使用される。例えば、(6)-2 では「冷めている (温まっていない)」というスープの一時的な状態が補語となっているため、*ser* ではなく *estar* が使用される。

(6)-2. *La sopa no está caliente.*

La	sopa	no	est-á	caliente.
ART.DEF.F.SG	soup	NEG	be-IND.PRES.3SG	hot

「そのスープは冷めている。」

(7) この犬はあまり大きくない。

(7)-1. *Este perro no es muy grande*

Est-e	perro	no	es	muy	grande.
this.DEM-M.SG	dog	NEG	be.IND.PRES.3SG	very	big

(7)-2. *Este perro no es tan grande.*

Est-e	perro	no	es	tan	grande.
this.DEM-M.SG	dog	NEG	be.IND.PRES.3SG	so	big

例文 (7) では、形容詞文の部分否定が問題となっている。シフエンテスによれば、上記の2つの訳が適当である。(7)-1 では、形容詞の直前に強調副詞 *muy* が置かれており、「この犬はとても大きい」という言明を否定することで、形容詞の部分否定が実現されている。もう1つの訳で *muy* に代わって使用されている *tan* は、同等比較構文で使用される副詞であり、典型的には (7)-3 のように、接続詞 *como* から始まる節が比較対象を表す。

(7)-3. *Este perro no es tan grande como ese.*

Est-e	perro	no	es	tan	grande	como	es-e.
this.DEM-M.SG	dog	NEG	be.IND.PRES.3SG	so	big	as	that.PN-M.SG

「この犬はその犬ほどは大きくない。」

したがって、(7)-2 は como 節が顕在化されていない同等比較構文の否定であると考えられることができる。シフエンテスによれば、(7)-1, (7)-2 に意味上の差異は感じられないとのことだが、構文上の差異を考慮すれば、(7)-2 では、発話に際して話者が何らかの比較対象を想定している含意が存在すると言える。

(8) この犬はあの犬より大きい。

Este perro es más grande que aquel.

Est-e perro es más grande que aquel.

this.DEM-M.SG dog be.IND.PRES.3SG more big than that.PN

例文 (8) では、(7)-2, (7)-3 で議論の対象となった比較構文が問題となっている。スペイン語における比較構文は、英語の比較構文と類似した形式をとるが、形容詞・副詞に比較級・最上級の語形変化が存在しないことに注意しなければならない。英語では、音節の多い形容詞・副詞、-ly, -ful などの接尾辞を持つ副詞の比較級を表現するために、「more+原級」という形式が存在するが、スペイン語ではこれと似た「más+形容詞・副詞」という形式をとるのが通例である。

(9) この犬がその犬たちの中で一番大きい。

(9)-1. Este perro es el más grande entre todos esos perros.

Est-e perro es el más grande entre

this.DEM-M.SG dog be.IND.PRES.3SG ART.DEF.M.SG more big among

tod-os es-os perro-s.

all-M.PL that.DEM-M.PL dog-PL

例文 (9) では、最上級構文の形式が問われているが、これも英語の「定冠詞+most+形容詞」と同様に、スペイン語においても「定冠詞+más+形容詞」という形式をとる³。スペイン語の最上級構文について特筆すべき事項は、上記の形式を副詞の最上級に用いることができない点である。例えば、「ミゲルは5人の中で最も速く泳ぐことができる」という文を英語で表現する場合、(9)-2 のような訳が可能であるが、スペイン語では同様の構文をとることができず、(9)-3 のように疑似分裂文を用いる必要がある。

(9)-2. Miguel swims the fastest of the five.

(9)-3. Miguel es el que más rápido nada de los cinco.

Miguel es el que más rápido nada

Miguel be.IND.PRES.3SG ART.DEF.M.SG REL more fast swim-IND.PRES.3SG

de los cinco.

of ART.DEF.M.PL five.

‘Miguel is the one who swims the fastest of the five.’

³ スペイン語の形容詞・副詞には接尾辞 -ísimo を伴った「絶対最上級」(superlativos absolutos) と呼ばれる形式が存在するが、実際に最上級を意味するわけではなく、元の意味を強調するだけである。

(10) 今日はあの人⁴は来ない。

(10)-1. Él no viene hoy.

Él no vien-e hoy.
PN.NOM.M.3SG NEG come-IND.PRES.3SG today

(10) は自動詞文の否定に関する例文であるが、スペイン語では、これまでと同様、動詞の直前に *no* を置く。シフエンテスによれば、*hoy* 「今日」を文頭に置いても、意味の差異は感じられない (10-2)。

(10)-2. Hoy no viene él.

Hoy no vien-e él.
today NEG come-IND.PRES.3SG PN.NOM.M.3SG

(11) あ的那个人はその本を持って行かなかった。

Él no se⁵ llevó el libro.

Él no se llevó el libro.
PN.NOM.M.3SG NEG PN.REFL.3 take-IND.PST.3SG ART.DEF.M.SG book

(11) は他動詞文の否定に関する例文であるが、自動詞文と同様、動詞の直前に否定辞 *no* を置く。

(12) 全ての学生が参加しなかった。

(12)-1. No asistió ni un estudiante.

No asist-ió ni un estudiante.
NEG attend-IND.PST.3SG even ART.INDEF.M.SG student

(12)-2. No asistió ningún estudiante.

No asist-ió ningún estudiante.
NEG attend-IND.PST.3SG no.M.SG student

(12)-3. No asistió ninguno de los estudiantes.

No asist-ió ningun-o de los estudiante-s.
NEG attend-IND.PST.3SG none-M.SG of ART.DEF.M.PL student-PL

(12) では量化の全否定が問題となっている。スペイン語における量化の全否定は、(3) と同様の方法で表現される。1つは (12)-1 のように、名詞の単数形に不定冠詞を付けて構成された名詞句 *un estudiante*

⁴ 本稿では、「あの人」「その人」という語の訳出が必要となる例文が存在するが、スペイン語への訳出には、以下の理由から、一貫して *él* (主語人称代名詞 3 人称単数男性形) を用いることにする。(1) スペイン語における指示形容詞のパラダイムには、形式上、近称 *este/ esta*, 中称 *ese/ esa*, 遠称 *aquel/ aquella* の 3 つが存在するが、中称・遠称の間の差異は、一部の地域において中和が見られること (RAE & ASALE 2009: § 17.2n)。(2) シフエンテスによれば、「その人」「あの人」の直訳にあたる *esa persona, aquella persona* は軽蔑・侮蔑的な印象を与える表現であること。(3) 「あの人」の西訳に 3 人称単数の主語人称代名詞 *él/ ella (he/she)* を当てた文献が存在すること (野田 1991)。

⁵ *se* は再帰代名詞で、ここでは動詞 *llevar* 「持っていく」にアスペクト的なニュアンスを付け加えて「持ち去る」のような意味を作っている。

の直前に、否定の強調副詞 *ni* を置く方法である。2つは (12)-2 のように、裸名詞単数形 *estudiante* に否定の不定形容詞 *ningún* を付ける方法である。後者には (12)-3 のように裸名詞複数形をとって、英語の *none of the students* に当たる形式をとる方法も存在する。加えてこれら3つは、名詞句を構成する否定語を動詞よりも左方に置くことで、複数の否定語の共起を避ける形式も可能である。

(12)-4. *Ni un estudiante asistió.*

Ni un estudiante asistió.
 not.even ART.INDF.M.SG student attend-IND.PST.3SG

(12)-5. *Ningún estudiante asistió.*

Ningún estudiante asistió.
 no .M.SG student attend-IND.PST.3SG

(12)-6. *Ninguno de los estudiantes asistió.*

Ningun-o de los estudiante-s asistió.
 none-M.SG of ART.DEF.M.PL student-PL attend-IND.PST.3SG

(13) 全ての学生が参加したわけではない。

(13)-1. *No es que todos los estudiantes hayan asistido.*

No es que tod-os los estudiante-s hay-an
 NEG be.IND.PRES.3SG that.CONJ all-M.PL ART.DEF.M.PL student-PL have-SBJV.PRF.3PL
asist-ido.
 attend-PP

(13)-2. *No significa que todos los estudiantes hayan asistido.*

No signific-a que tod-os los estudiante-s hay-an
 NEG mean-IND.PRES.3SG that.CONJ all-M.PL ART.DEF.M.PL student-PL have-SBJV.PRF.3PL
asist-ido.
 attend-PP

(12) に対して (13) は、量化の部分否定が例文のねらいとなっている。日本語における量化の部分否定は、全数量を表す語を「のではない」「わけではない」と共起させることで表現するのが通例であるが(日本語記述文法研究会 2007: 249-255)、スペイン語でも *No es que...* 「—ということではない」(13-1) や *No significa que...* 「—を意味しない」(13-2) という構文の中に *todos los estudiantes asistieron* 「すべての学生が参加した」という全称量化表現を伴った言明を埋め込む方法が存在する。これにより、日本語と同様に、全称量化を否定の焦点とすることができる。この時、埋め込み節内の動詞は、直説法ではなく接続法をとるが、シフエンテスの回答における「参加した」の時制は、直説法完了過去形 *asistieron* に対応する接続法過去形 *asistieran* ではなく、接続法現在完了形 *hayan asistido* となっている。これは、接続法過去形が未完了相であるのに加えて、その多機能性、ひいては典型的に非現実を表現する形式であるため、「参加した」のような現実には起こった完了的動作の表現にそぐわないためであると考えられる。

(13)-3. No todos los estudiantes asistieron.

No tod-os los estudiante-s asist-ieron.
NEG all-M.PL ART.DEF.M.PL student-PL attend-IND.PST.3PL

(13)-4. No asistieron todos los estudiantes.

No asist-ieron tod-os los estudiante-s.
NEG attend-IND.PST.3PL all-M.PL ART.DEF.M.PL student-PL

(13)-5. Todos los estudiantes no asistieron.

Tod-os los estudiantes no asisti-eron.
all-M.PL ART.DEF.M.PL student-PL NEG attend-IND.PST.3PL

しかしながら、(13)-1, (13)-2 は頻繁に使用される構文ではなく、部分否定は (13)-3, (13)-4, (13)-5 のように、より単純な形式で表現されるのが通例である。(13)-3 では全称量化表現を伴った名詞 *todos los estudiantes* に、(13)-4, (13)-5 では動詞「参加した」に、それぞれ否定辞 *no* を付けるという方法がとられている。なお、(13)-5 に関しては、部分否定の解釈が優勢であるものの、全部否定と解釈する母語話者も存在する (Bosque 1980: 46)。シフエンテスは (13)-5 を部分否定であると解釈している。

(14) (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。

(14)-1. (Yo no lo compré, pero) no es que estuviera caro.

Yo no lo compr-é, pero no es que
PN.NOM.1SG NEG PN.ACC.M.3SG buy-IND.PST.1SG but NEG be.IND.PRES.3SG that.CONJ

estuv-iera car-o.
be-SBJV.PST.IPFV.3SG expensive-M.SG

(14)-2. (Yo no lo compré, pero) tampoco es que estuviera caro.

Yo no lo compr-é, pero tampoco es que
PN.NOM.1SG NEG PN.ACC.M.3SG buy-IND.PST.1SG but neither be.IND.PRES.3SG that.CONJ

estuv-iera car-o.
be-SBJV.PST.IPFV.3SG expensive-M.SG

(14) は文の否定に関する例文であるが、スペイン語では (13)-4, (13)-5 で用いた方法で表現される。主節の否定に用いる語は、(14)-1 のように *no* でもよいし、(14)-2 のように、等位接続詞 *pero* 以前の文が既に *no* を抱えていることを考慮して、*tampoco* でもよい。シフエンテスの内省によれば、後者の方がより容認度が高い表現である。

(15) 走るな!

¡No corras!
¡No corr-as!
NEG run-SBJV.PRES.2SG

(16) 大きな声を出すな！

(16)-1. ¡No alc-es la voz!

¡No alc-es la voz !
 NEG raise-SBJV.PRES.2SG ART.DEF.F.SG voice

(16)-2. ¡No hables en voz alta!

¡No habl-es en voz alt-a!
 NEG speak-SBJV.PRES2SG in voice loud-F.SG

(16)-3. ¡No te lleves el libro!

¡No te llev-es el libro!
 NEG PN.REFL.2SG take-SBJV.PRES.2SG ART.DEF.M.SG book
 「その本を持っていくな！」

(15)(16) では自動詞文・他動詞文の禁止が問われている。スペイン語における禁止、すなわち否定命令の形式に自動詞・他動詞の差異はなく、どちらも「否定辞 *no* + 動詞の接続法現在形」という形で表される。(16) については、(16)-1 のような原文の統語構造に忠実な直訳も可能ではあるが、「大きな声を出す」や「声を荒げる」のように他動詞を用いることは不自然であるため、より自然な言い回しである (16)-2 のような表現も併記している。加えて、(16)-2 には他動詞が生起しておらず、ここで問題となっている他動詞文の禁止に関する記述が十分に行えないため、他動詞文の否定が問題となっていた例文 (11) を元に作成した否定命令の例も (16)-3 として載せている。

(17) あしたは雨は降らないだろう。

(17)-1. Mañana no lloverá.

Mañana no llov-erá.
 tomorrow NEG rain-IND.FUT.3SG

(17)-2. Probablemente no llueve mañana.

Probablemente no lluev-e mañana.
 probably NEG rain-IND.PRES.3SG tomorrow

(17)-3. Es probable que mañana no llueva.

Es probable que mañana no lluev-a.
 be.IND.PRES.3SG probable that.CONJ tomorrow NEG rain-SBJV.PRES.3SG

例文 (17) で問題となっているのは、推量の否定である。シフエンテスとの検討の結果、推量のモダリティを担う語と否定辞 *no* の位置関係にしたがって、上の3つの形式が可能であるという結論に至った。(17)-1 は、動詞「雨が降る」を推量の用法を持つ直説法未来形に活用させ、推量のモダリティを動詞に担わせている。他方、(17)-2 では、動詞の活用形は推量の用法を持たない直説法現在であり、推量のモダリティは文頭の副詞 *probablemente* が担っている。加えて、(17)-3 のように、「明日は雨が降らない」という言明を *Es probable que...* 「—という可能性がある」の従属節に埋め込んで、言明全体に推量のモダリティが行き渡るような形式をとることも可能である。この時、従属節内の動詞は接続法をとる。

(18) あの人の聞こえないように、小さな声で話してくれ。

(18)-1. Habla en voz baja para que él no nos oiga.

Habl-a en voz baj-a para que él no nos
speak-IMP.2SG in voice low-F.SG for that.CONJ NOM.M.3SG NEG PN.ACC.1PL

oig-a.
hear-SBJV.PRES.3SG

例文 (18) では、目的節の否定が問題となっている。スペイン語における目的節には *para que* をはじめとする様々な形式が存在するが、いずれも接続法をとることが特徴であり、目的節の否定は、節内の動詞の直前に *no* を置くだけである。また、主節と目的節の動作主が同一である場合、*para* の後に動詞の不定形を置くことができるが、これを否定したい時も、同様に動詞の直前に *no* を置く。

(18)-2. Habla en voz baja para no molestar a nadie.

Habl-a en voz baj-a para no molestar a nadie.
speak-IMP.2SG in voice low-F.SG to NEG bother.INF to anybody

(19) 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。

(19)-1. No es que te lo dijera porque quisiera ofenderte.

No es que te lo dij-era porque
NEG be.IND.PRES.3SG that.CONJ PN.DAT.2SG PN.ACC.N.3SG say-SBJV.PST.IPFV.1SG because
quis-iera ofender=te.
want-SBJV.PST.IPFV.1SG offend.INF=PN.ACC.2SG

(19)-2. No es que te lo dijera no porque quisiera ofenderte.

No es que te lo dij-era no
NEG be.IND.PRES.3SG that.CONJ PN.DAT.2SG PN.ACC.N.3SG say-SBJV.PST.IPFV.1SG NEG
porque quis-iera ofender=te.
because want-SBJV.PST.IPFV.1SG offend.INF=PN.ACC.2SG

例文 (19) では否定の作用域の調節が問題となっている。日本語では「あなたを怒らせようと思ってそう言った」が否定の作用域となっているが、その焦点となっているのは理由節「あなたを怒らせようと思って」のみであり、「言った」という動作自体は否定されていない。これは「のではない」という形式によるものだが、スペイン語でも同様に、「のではない」に相当する *No es que...* を使用することで同様の形式をとることが可能である。(19)-1 では *te lo dije porque quería ofenderte* 「私はあなたを怒らせようと思って、そのように言った」という言明が従属節として埋め込まれ、日本語と同様に「あなたを怒らせようと思って」が否定の焦点となっている。またシフエンテスによれば、(19)-1 の *porque* 節の直前に、否定辞 *no* を置いた (19)-2 も (19)-1 と同様に解釈可能とのことだが、文が複雑であるためスムーズに解釈することは難しい。しかし、これら2つの文が意味的に等価であるというシフエンテスの指摘をふまえれば、(19)-2 における *porque* 節直前の *no* は虚辞として機能していると言える。

(19)-3. No te lo dije porque quisiera ofenderte.

No te lo dije porque quisiera ofender=te.
 NEG PN.DAT.2SG PN.ACC.N.3SG say-IND.PST.1SG because want-SBJV.PST.IPFV.1SG offend.INF=PN.ACC.2SG

(19)-4. Te lo dije no porque quisiera ofenderte.

Te lo dije no porque quisiera ofender=te.
 PN.DAT.2SG PN.ACC.N.3SG say-IND.PST.1SG NEG because want- SBJV.PST.IPFV.1SG offend.INF=PN.ACC.2SG

しかしながら、(13)と同様、(19)-1, (19)-2 は頻度の高い構文ではなく、クリティックを挟んで否定辞を主節の動詞に隣接させる方法 (19-3) や、否定の焦点となる理由節に隣接させる方法 (19-4) をとるのが一般的である。いずれの場合も、原文同様に *porque* 以下の理由節のみを否定の焦点とすることができる。したがって、否定辞 *no* の位置については、動詞「言う」の直後にしか否定辞を置くことができない日本語よりも選択肢が多いと言える。

加えて、スペイン語では従属節 (理由節) で接続法をとることにより、そこまで否定の作用域が及んでいることを明確に表現することができる。(19)-3, (19)-4 にて使用されている接続法 *quisiera* は、理由節が否定の作用域に含まれていることを示す役割を果たしている。例えば、(19)-5 のように直説法 *quería* を選んでしまうと、理由節が否定の作用域から外れてしまい、「私はあなたを怒らせたかったのですがそのように言わなかった (= 黙っていた)」という解釈になってしまう。

(19)-5. No te lo dije porque quería ofenderte.

No te lo dije porque quería ofender=te.
 NEG PN.DAT.2SG PN.ACC.N.3SG say-IND.PST.1SG because want- IND.PST.IPFV.1SG offend.INF=ACC.2SG

3. 連体修飾複文に関する回答 (例文 20-33)

本章では、連体修飾複文に関する例文 (20)-(33) の検討結果を報告する。

(20) 私が昨日買ってきた本はどこ (にある) ?

¿Dónde está el libro que ayer compré?
 ¿Dónde est-á el libro que ayer compr-é?
 where.INT be-IND.PRES.3SG ART.DEF.M.SG book REL yesterday buy-IND.PST.1SG

例文 (20) では、内の関係の連体修飾節が主節の目的語として機能するケースが問題となっている。高垣 (1994) によれば、日本語の連体構造は、補部 (修飾節) が主要部 (名詞) に必ず前置されるのに対して、スペイン語の連体構造は、限定詞や一部の形容詞を除いて、補部が主要部よりも後方に生起するのが特徴である。

(21) その本を持って来た人は誰 (か) ?

¿Quién fue el que trajo ese libro?
 ¿Quién fu-e el que traj-o es-e libro?
 who.INT be-IND.PST.3SG ART.DEF.M.SG REL bring-IND.PST.3SG that.DEM-M.SG book

例文 (21) では、内の関係の連体修飾節が主節の目的語として機能している。(20) と同様に、スペイン語では連体節が被修飾名詞に後置される。訳文では「人」を意味する普通名詞の代わりに、「定冠詞＋関係詞 que」という形式が使用されている。また、文も疑似分裂文の形をとっている。

(22) この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。

(22)-1. Esta es la sala en la que trabajamos.

Est-a es la sala en la que trabaj-amos.
 this.PN-F.SG be.IND.PRES.3SG ART.DEF.F.SG room in ART.DEF.F.SG REL work-IND.PRES.1PL

(22)-2. Esta es la sala donde trabajamos.

Est-a es la sala donde trabaj-amos.
 this.PN-F.SG be.IND.PRES.3SG ART.DEF.F.SG room where.REL work-IND.PRES.1PL

(22)-3. Es en esta sala donde trabajamos.

Es en est-a sala donde trabaj-amos.
 be.IND.PRES.3SG in this.DEM-F.SG room where.REL work-IND.PRES.1PL

(22) は、場所を表す内の関係の連体修飾節に関する例文である。場所を表す連体修飾節は、スペイン語で 2 通りの方法がある。1 つは (22)-1 のように、関係詞 que の直前に所在を表す前置詞と、被修飾名詞「部屋」の数・性に合った定冠詞を置く方法である。(22) の場合、部屋を表す名詞 sala は女性名詞単数形であり、連体節は「私たちは部屋で働く」という関係になっているので、関係詞 que の直前に前置詞 en と女性単数の定冠詞 la を置いている⁶。また、原文を検討すると、格助詞「が」を従える名詞句「この部屋」は、文の焦点的情報を担っていると考えることができる。(22)-1, (22)-2 は「この部屋が私たちの仕事をしている部屋です」という解釈が可能である一方、「この部屋は私たちの仕事をしている部屋です」という解釈も可能な訳文である。原文の情報構造を明確に表現するために、(22)-3 のように疑似分裂文を用いて表現することもできる。

(23) 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。

(23)-1. Ya boté esa silla de cuyas patas una estaba rota.

Ya bot-é es-a silla de cuy-as pata-s un-a
 already throw.away-IND.PST.1SG that.DEM-F.SG chair of whose.REL-F.PL foot-PL one-F.SG

est-aba rot-a.
 be-IND.PST.IPFV.3SG broken-F.SG

(23)-2. Ya boté esa silla que tenía una pata rota.

Ya bot-é es-a silla que ten-ía
 already throw.away-IND.PST.1SG that.DEM-F.SG chair REL have-IND.PST.IPFV.3SG

⁶ 単音節の前置詞 a, con, de, en, por の 5 つは、直後の定冠詞を省略して関係詞 que を直接後続させることができる (RAE & ASALE 2009: § 44.2e)。したがって (22) も、前置詞 en と関係詞 que の間にある定冠詞女性単数形 la を省略して Esta es la sala en que trabajamos. とすることもできる。

un-a pata rot-a.
 ART.INDF-F.SG foot broken-F.SG

例文 (23) では、所有者を表す内の関係の連体修飾節が問題となっている。(23)-1 は関係形容詞 *cuyo* を用いた訳文であり、*Ya boté esa silla* (その椅子はもう捨てた) という文と *Una de las patas de esa silla estaba rota*. (その椅子の脚のうち、1本は折れていた) という文から構成されている。しかし、この訳出には、「椅子が脚を (複数) 持っている」という所有者—所有物の関係と、「複数の脚のうちの 1 本」という全体—部分の関係が同一文中に混在しているため、被修飾名詞「椅子」が連体節を構成する句の主要部となっていない。そのため、シフエンテスによれば (23)-1 は、非文ではないが理解が困難な表現であり、(23)-2 のように、所有を表す動詞を用いて「椅子が 1 本の壊れた脚を持っていた」と表現し、被修飾名詞「椅子」を連体節における主語とする形式の方が平易でより好まれる。また、(23)-3 のように、関係形容詞 *cuyo* に代わって「関係詞 *que* + 所有形容詞」を用いる方法が、とりわけ口語において見られるが、これは *quesuismo* と呼ばれるくだけた形式であり、使用が推奨されていない (RAE & ASALE 2009: § 22.5n; § 44.9o)⁷。

(23)-3. *Ya boté esa silla que su pata estaba rota.*

Ya bot-é es-a silla que su pata
 already throw.away-IND.PST.1SG that.DEM-F.SG chair REL 3.POSS foot

est-aba rot-a.
 be-IND.PST.IPFV.3SG broken-F.SG

(24) ドアを叩いている音が聞こえる。

Se⁸ oye un sonido de alguien llamando a la puerta.
 Se oy-e un sonido de alguien llam-ando
 SE hear-IND.PRES.3SG ART.INDF.M.SG sound of somebody call-GRND

a la puerta.
 by ART.DEF.F.SG door.

(24) は、外の関係の連体修飾節が問題となった例文であるが、シフエンテスは上記のように訳出した。この訳文では、代名詞 *alguien* 「誰か」に現在分詞 *llamando* 「呼んでいる」を後続させることで、両者の間に「誰かがドアを叩く」という主述関係が構築されている。RAE & ASALE (2009: § 27.7) によれば、名詞句と後続の現在分詞の間には、現在分詞が名詞句を形容詞的に修飾する (*gerundio adjetival*: 形容詞的な現在分詞) 解釈、もしくは上の訳のように、名詞句と現在分詞の間に主述関係を求める (*gerundio predicativo*: 述語的な現在分詞) 解釈が可能であるが、前者の形容詞的解釈は *agua hirviendo* (熱湯) のような少数の固定表現にのみ可能な解釈であるのに加え、後者の述語的解釈も、名詞句が写真や絵画などに関するもの、あるいは聴覚をはじめとする知覚に関するものである場合にのみ可能であり (RAE & ASALE 2009)、いずれも生産性の高い形式ではない。

⁷ シフエンテスは (23)-3 を文法上可能だが、自然な表現ではないと判断している。

⁸ この *se* は再帰代名詞ではなく非人称文や再帰受身文の標識 (*indicador de oraciones impersonales y de pasiva refleja*) であり、*oye* 以下の動詞句を受動態にする機能を担っている (RAE & ASALE 2005 s.v. *se*)。

シフエンテスが (24) の訳出に生産性の低い現在分詞を使用した背景には、名詞句 *un sonido* (ある音) の定性が関与している可能性がある。スペイン語では「事実」「引用」「感覚」などを表す名詞は、外の関係の連体修飾に対応する「定冠詞+名詞+前置詞 *de*+接続詞 *que*+従属節」という構文をとることができる (三好 2016: 114-117) が、ここで名詞に先行する限定詞は定冠詞であるのが通例であり、筆者の確認する限り、不定冠詞が生起する例は非常に少数である。例文 (24) の検討中、シフエンテスは「発話者が例文 (24) を発する場面では音の正体に関する十分な情報・知識が存在しないため、名詞 *sonido* に定冠詞 *el* を付けるのは不自然である」と指摘しており、このコメントから推察すれば、シフエンテスは、「音」の正体の不確かさを理由に名詞 *sonido* に不定冠詞 *un* を付け、形成された不定名詞句 *un sonido* との共起を容認する構文を模索した結果、*un sonido de que* という連体構造を避けて、現在分詞の述語的使用を選択したと考えられる⁹。シフエンテスの内省が示唆する「定冠詞+被修飾名詞+*de que*+従属節」の使用可能性と被修飾名詞の定性の関係については、更なる精査が必要であるが、本稿では、スペイン語における外の関係の連体修飾節には、被修飾名詞の語彙や定性に関する制限があり、日本語ほど生産性・自由度の高い構文ではないことを指摘するとどめる。

(25) あの人が結婚したという噂は本当 (か) ?

¿Es cierto el rumor de que él se casó?

¿Es ciert-o el rumor de que él
be.IND.PRES.3SG true-M.SG ART.DEF.M.SG rumor of that.CONJ PN.NOM.M.3SG

se cas-ó?
PN.REFL.3 marry-IND.PST.3SG

(25) も外の関係の連体修飾に関する例文である。前述の三好 (2016) に従えば、「噂」は「～という」を介して連体節 (内容節) を伴う、引用に関係する名詞であるため、上のように訳出することができる。こちらは (24) と異なって、問題なく「定冠詞+被修飾名詞+*de que*+従属節」という形式を使用できる。

(26) 私はその人が来た時にご飯を食べていた。

Cuando él llegó, yo estaba comiendo.

Cuando él lleg-ó, yo est-aba com-iendo.
when.CONJ PN.NOM.M.3SG arrive-IND.PST.3SG PN.NOM.1SG be-IND.PST.IPFV.3SG eat-GRND

⁹ 不定名詞句 *un sonido* が *un sonido de que...* という連体構造を許容しないことに加え、聴覚に関する名詞自体が連体構造をとりにくいことも、シフエンテが訳出に現在分詞を使用した動機のひとつであると考えられる。Davies (2016-) のスペイン語コーパス *Corpus del Español* を使用して、三好 (2016: 114-117) の挙げる 3 種類の名詞がとる連体構造の生起頻度を調査すると、*el hecho de que* 「～という事実」の生起頻度 267445、*la noticia de que* 「～という報告」の生起頻度 22237 に対して、*el sonido de que* が生起する用例数はわずかに 14 であり、「事実」「引用」「感覚」という 3 種類の名詞の中でも、「感覚 (聴覚)」を表す名詞の連体構造は圧倒的に生産性が低いことが分かる。三好 (2016) 自身も *el rumor de que anda alguien* 「誰かが歩いている音」という連体構造の例を挙げているが、*rumor* は通例「噂」を意味する名詞であり、三好の解釈に反して「誰かが歩いているという噂」の意で表現が解釈・容認されている可能性もある。したがって、名詞 *sonido* が定冠詞 *el* を伴ったとしても、*el sonido de que...* が他の 2 タイプと同様に生産的な連体構造であるとは言えない可能性がある点も報告する。

(26) では時間節の表現が問題となっている。スペイン語の時間節は一般に *cuando* が導く節により表現される。この *cuando* は、高垣 (2007) をはじめとする西和辞典は接続詞と記述しているが、王立言語アカデミーは、先行詞が省略された関係副詞として解釈している (RAE & ASALE 2009: § 22.9)。なお、スペイン語における過去時制は完了過去と未完了過去の2つから成るが、「食べていた」のような、過去のある時点における未完了の動作は未完了過去で表される。

(27) 私はその人が待っているところに行った。

(27)-1. (Yo)¹⁰ fui al lugar donde él me estaba esperando.

Yo	fu-i	al	lugar	donde	él	me
PN.NOM.1SG	go-IND.PST.1SG	to.ART.DEF.M.SG	place	where.REL	PN.NOM.M.3SG	PN.ACC.1SG
	est-aba		esper-ando.			
	be-IND.IPFV.3SG		wait-GRND			

(27) は場所節に関する例文である。スペイン語における場所節には *donde* を使用する。王立言語アカデミーは、(26) の *cuando* と同様、*donde* も関係副詞であるとしているが、*donde* は *cuando* よりも先行詞を明示する頻度が高く (RAE & ASALE 2009: § 22.8c; § 22.9c)、(27)-1 では名詞 *lugar* が先行詞として使用されている。また、*donde* は (27)-2 のように、先行詞を中に含んでしまうことが可能である (高垣 2007 s.v. *donde*)。

(27)-2. No tenemos donde guardarlo.

No	ten-emos	donde	guardar=lo.
NEG	have-IND.PRES.1PL	where.REL	put.away.INF=PN.ACC.N.3SG

「私たちにはそれをしまっておく場所がない。」

(28) 私はその人が走っていったのを見た。

(28)-1. (Yo) lo vi irse¹¹ corriendo.

Yo	lo	v-i	ir=se	corr-iendo.
PN.NOM.1SG	PN.ACC.M.3SG	see-IND.PST.1SG	go.INF=PN.REFL.3	run-GRND

(28)-2. (Yo) vi que él se fue corriendo.

Yo	v-i	que	él	se	fu-e	corr-iendo.
PN.NOM.1SG	see-IND.PST.1SG	that.CONJ	PN.NOM.M.3SG	PN.REFL.3	go-IND.PST.3SG	run-GRND

(28) は視覚の補文節に関する例文である。スペイン語における知覚の補文節は、(28)-1 のように、知覚された事象の動作主を知覚動詞の直接目的語、動作内容を不定詞で表す方法と、(28)-2 のように、接続詞 *que* を用いた埋め込み節を形成し、*que* 節全体を知覚動詞の直接目的語とする方法のいずれかで表

¹⁰ 以降、“(Yo)” という表記があるが、これは「主語人称代名詞 1 人称単数 *yo* を省略しても構わない」という意味である。スペイン語は *pro-drop* 言語であるため、主語の明示が義務的ではない。本稿では、シフエンテスが「問題なく省略できる」と判断した *yo* に関して、この表記を用いている。

¹¹ *se* は再帰代名詞で、ここでは動詞 *ir* 「行く」にアスペクト的なニュアンスを付け加えて「立ち去る」のような意味を作っている。

現可能である。両者の意味は、補文内容に対する知覚者の証拠性 (直接経験性) の差異で説明できるとされる。Hugo Rojas (2011: 148-149) は以下の 2 例を対照させながら、(28)-3 が直接経験のみを、(28)-4 が直接経験あるいは間接経験を含意する形式であると述べている。

(28)-3. Oí ganar a los jóvenes.

O-í ganar a los jóvenes.
 hear-IND.PST.1SG win-INF to ART.DEF.M.PL young-PL
 「私は若者たちが勝つのを実際に耳にした。」

(28)-4. Oí que los jóvenes ganaron.

O-í que los jóvenes gan-aron.
 hear-IND.PST.1SG that.conj ART.DEF.M.PL young-PL win-IND.PST.3PL
 「私は若者たちが勝つのを実際に耳にした。 / 私は若者たちの勝利を噂で聞いた。」

この記述を踏まえれば、(28)-1 は「発話者が自分自身でその人が走り去ったのを目撃した」という直接経験を表現しているのに対し、(28)-2 は直接経験に加えて「その人が走り去ったことを物語る様子・痕跡などを目にした」という間接経験性も含意することができると言える。しかし、シフエンテスの内省によれば、少なくとも (28)-1, (28)-2 の間に、証拠性に起因する意味上の差異は感じられない。また、これら 2 つの訳文に加えて、主にスペインのスペイン語において、男性単数の直接目的格代名詞 *lo* の代わりに間接目的格代名詞 3 人称単数形 *le* を使用する現象 *leísmo* が見られる点も報告する (28-5)。

(28)-5. (Yo) le vi irse corriendo.

Yo le v-i ir=se corr-iendo.
 PN.NOM.1SG PN.DAT.3SG see-IND.PST.1SG go-INF=PN.REFL.3 run-GRND

(29) 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。

(29)-1. Anoche los oí hablando.

Anoche lo-s o-í habl-ando .
 last.night PN.ACC.M.3-PL hear-IND.PST.1SG talk-GRND

(29)-2. Anoche oí que ellos estaban hablando.

Anoche o-í que ellos est-aban habl-ando.
 last.night hear-IND.PST.1SG that.CONJ PN.NOM.M.3PL be-IND.PST.IPFV.3PL talk-GRND

(29)-3. Anoche les oí hablando.

Anoche le-s o-í habl-ando .
 last.night PN.DAT.3-PL hear-IND.PST.1SG talk-GRND

(29) は聴覚の補文節に関する例文であるが、訳出の方法は (28) と同様に 3 通り存在する。(29)-1 が「彼ら」を「聞いた」の直接目的語、「しゃべっている」を補語とする方法、(29)-2 が「彼らがしゃべっていた」を接続詞 *que* を用いて埋め込み節とし、「聞いた」の直接目的語とする方法であり、(29)-3 が、(29)-1 の「彼ら」を間接目的格代名詞 3 人称複数形 *les* で表現する *leísmo* が現れている訳文である。

またシフエンテスによれば、(28) と同様、(29)-1, (29)-3 と (29)-2 の間に、証拠性による差異は感じられない。

(30) 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。

Sé que ayer él vino aquí.

Sé que ayer él vino-o aquí.
know.IND.PRES.1SG that.CONJ yesterday PN.NOM.M.3SG come-IND.PST.3SG here

(30) は知識に関する補文節が問題となっている例文である。ここでは、(28) (29) のように不定詞や現在分詞を用いた補文節を使用することはできず、知識の内容を埋め込み節とする方法が存在するのみである。

(31) (昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。(昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。

(31)-1. Ayer él me dijo que en ese mismo día ya había estado aquí.

Ayer él me dij-o que en es-e mismo día
yesterday PN.NOM.M.3SG PN.DAT.1SG say-IND.PST.3SG that.CONJ in that.DEM-M.SG same day

ya hab-ía est-ado aquí.
already have-IND.PST.IPFV.3SG be-PP here

(31)-2. Ayer él me dijo: “Hoy ya estuve aquí”.

Ayer él me dij-o: “Hoy ya estuv-e aquí”.
yesterday PN.NOM.M.3SG PN.DAT.1SG say-IND.PST.3SG today already be-IND.PST.1SG here

例文 (31) では、話法による補文節の書き分けが問題となっている。(31)-1 は間接話法であり、「彼」の発話内容が *que* 以下の節に埋め込まれている。主節の動詞「言った」が過去の動作であるため、従属節に時制の一致を適用させて、「ここに来た」に相当する動詞句 *había estado aquí* が過去完了形となっている。しかし、これだけでは「彼が言った」のと「彼が既に訪れていた」のが違う日に起こったことであると解釈される可能性があるため、両者が同じ「昨日」の出来事であることを明確にする必要がある。ここでは、従属節内にある *en ese mismo día* (まさにその日に) がその役割を担っている¹²。

一方の (31)-2 は直接話法による表現である。こちらは、主節と従属節の時制を一致させる必要がないので、原文の通り訳出している。

¹² 本来 *ese mismo día* / *en el mismo día* は交替可能で前置詞 *en* の使用は任意である (RAE & ASALE 2009: § 39.3t) が、シフエンテスの内省によれば、*ese mismo día* だけでは「彼の発言」と「発話の場所への彼の発話時以前最後の来訪」の両方が、同じ昨日に起こった出来事であることが保証できておらず、*en* が両事象の同日性を保証している。したがって、(31)-2 における *en* は省略可能な語ではない。

(32) 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた。

(Yo) comí la manzana que había en ese plato.

Yo	com-í	la	manzana	que	hab-ía	en
PN.NOM.1SG	eat-IND.PST.1SG	ART.DEF.F.SG	apple	REL	have-IND.PST.IPFV.3SG	in
	es-e	plato.				
	that.DEM-M.SG	dish				

(33) 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。

(Yo) atrapé el gato que se¹³ entró en casa.

Yo	atrap-é	el	gato	que	se	entr-ó
PN.NOM.1SG	catch-IND.PST.1SG	ART.DEF.M.SG	cat	REL	PN.REFL.3	enter-IND.PST.3SG
	a	la	casa.			
	to	ART.DEF.F.SG	house			

(32) (33) は主要部内在型関係節が問題となっている例文である。(32) は「私は (あの) 皿の上にあったリンゴを食べた」という文における主節の目的語「リンゴ」が従属節の中に入り込み、主語として機能している。同様に、(33) も「私は家に入ってきたネコを捕まえた」という文における主節の目的語で「ネコ」が主語として従属節に入り込んでいる。スペイン語には、このような構文の多様性は存在せず、いずれの場合も「私は (あの) 皿の上にあったリンゴを食べた」「私は家に入ってきたネコを捕まえた」と訳出するほか、手だてが存在しない。

4. おわりに

本稿では「否定、形容詞、連体修飾複文」に関するスペイン語のデータ提供を行った。否定に関する検討の結果、スペイン語における否定は単純であり、文のタイプによらず動詞の直前に否定辞 *no* を置くことで表現できることが明らかになったほか、その作用域は接続法などの日本語には存在しない形式を使用することによって、より明確に表示可能であることを報告した。形容詞文に関する検討では、スペイン語における形容詞文が、形容詞の意味によって、2つの繫辞動詞 *ser/estar* を使い分ける点や、形容詞が比較に関する語形変化を基本的に持たない点を報告した。連体修飾複文に関する検討では、外の関係の連体修飾の生産性の低さや、主要部内在型関係節の不在から、スペイン語の連体構造の使用が日本語よりも制限的であることを報告した。

¹³ *se* は再帰代名詞で、ここでは動詞 *entrar* 「入る」にアスペクト的なニュアンスを付け加えて「いきなり入る」のような意味を作っている。

略号一覧

-	inflexion	FUT	future	PN	pronoun
=	clitic boundary	GRND	gerund	PP	past participle
1	first person	IMP	imperative	POSS	possessive
2	second person	IND	indicative	PRES	present
3	third person	INDF	indefinite	PRF	perfect
ACC	accusative	INF	infinitive	PST	past
ART	article	INT	interrogative	REFL	reflexive
CONJ	conjugation	IPFV	imperfective	REL	relative
DAT	dative	M	masculine	SBJV	subjunctive
DEF	definite	N	neuter	SE	se
DEM	demonstrative	NEG	negative	SG	singular
F	feminine	PL	plural		

参考文献

欧文

Bosque, Ignacio. 1980. *Sobre la negación*. Catedra.

Davies, Mark. 2016-. *Corpus del Español: Two billion words, 21 countries*.

<http://www.corpusdelespanol.org/web-dial/>. (Web / Dialects) (最終閲覧日 2019年6月14日)

Hugo Rojas, Evelyn. 2011. “Las formas de segunda persona singular como estrategias evidenciales”, *Revista de Lingüística Teórica y Aplicada*. Universidad de Concepción. 49 (1), pp. 143-167.

RAE & ASALE (Real Academia Española & Asociación de Academias de la Lengua Española). 2005. *Diccionario panhispánico de dudas*. Santillana.

RAE & ASALE (Real Academia Española & Asociación de Academias de la Lengua Española). 2009. *Nueva gramática de la lengua española*. Espasa Libros.

Zagona, Karen. 2002. *The Syntax of Spanish*, Cambridge University Press.

和文

片岡喜代子. 2007. 「Neg を c- 統御する不定語+モ」『言語研究』, 日本言語学会, 131, pp. 77-113.

高垣敏博. 1994. 「日本語とスペイン語の名詞修飾」『日本語とスペイン語 (1)』国立国語研究所編, くろしお出版, pp. 1-28.

高垣敏博 (編). 2007. 『西和中辞典』(第2版), 小学館.

日本語記述文法研究会 (編). 2007. 『現代日本語文法 3』, くろしお出版.

野田尚史. 1991. 『はじめての人のための日本語文法』, くろしお出版.

三好準之助. 2016. 『日本語と比べるスペイン語文法』, 白水社.

執筆者連絡先: kitada.toshitaka.l0@tufs.ac.jp (喜多田), kmenesesc@unal.edu.co (シフエンテス)

原稿受理: 2019年5月6日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

ロシア語における否定、形容詞と連体修飾複文

Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification in Russian

阿出川 修嘉

Nobuyoshi Adegawa

東京外国語大学非常勤講師

Part-time Lecturer, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿の目的は、特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号, 東京外国語大学) における33個のアンケート項目に対するロシア語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Russian data which answers the thirty three survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 23, which focuses on the cross linguistic study of 'negation, adjectives, and compound sentences of adnominal modification'.

キーワード: ロシア語、否定、形容詞、連体修飾、複文

Keywords: Russian, negation, adjective, adnominal modification, compound sentence

I. はじめに

以下では事前に与えられた33の日本語文に対応するロシア語文を提示している。訳文には、与えられた日本語文の逐語訳により近いものから、同様の発話の文脈でロシア語において実際に用いられるであろう例文(したがって元の日本語文とは統語構造などが異なっている場合がある)までも含めている。

訳文はそれぞれ、ロシア文字で表記したもの、ロシア文字をラテン・アルファベットに翻字したもの、及び文法情報についてのグロスという順で示した。ラテン・アルファベットへの翻字に際しては、米国議会図書館(Library of Congress)で採用されている翻字方式¹を採用している。

訳文中で、丸括弧()内に示した語句は、省略可能であることを示し、角括弧([])内に示した語句は、その直前の語句と置き換えることが可能であることを示す。

それぞれの訳文の後に、文法あるいは語法についての説明が必要と思われる場合にはコメントを付している。

また、日本語文中の「その人」、「あの人」については、それが指示する人物が男性か女性かの判断ができないが、ロシア語に訳出する際にはそのどちらかに応じて用いる代名詞が異なってくるため、以下の訳文では便宜的に он (男性)あるいは она (女性)のどちらかに訳している。同様に、それが指示する人物の性別が判断できない「私」を主語とする場合にも、ロシア語では動詞の過去形について男性形か女性形かの選択をする必要が生じるが、その場合にも便宜的にどちらかの性を選択した上で訳出している。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ 対応表は以下のURIの文書を参照されたい:
<http://www.loc.gov/catdir/cpso/romanization/russian.pdf>

なお、各ロシア語文は、本稿筆者がまず試訳として全てを訳出した後に、母語話者にそれらをチェックしてもらうという手順を踏み作成した。訳文のチェックには、アンナ・トルヒナ (Анна ТРУХИНА)、クリスティーナ・キーロヴァ (Кристина КИРОВА)、アレクサンドル・コストウシルキン (Александр КОСТЫРКИН)、アレクセイ・ズヴェレフ (Алексей ЗВЕРЕВ) の各氏に協力をお願いした。各氏ともそれぞれ多忙を極めていたにも関わらず、今回の作業への協力について快諾いただき、貴重な時間を割いて、訳文の提案及び有益なコメントを下された。ここに記して改めて感謝の意を表したい。

II. 言語データ

1. これは私の本ではない。【名詞述語文／コピュラ文の否定】

Это	не	моя	книга.
Èto	ne	moïa	kniga.
this/that	not	my-SG-F-NOM	book-SG-NOM

否定する語句の直前に否定を表す助詞 (小詞) не を付加する。

2. この部屋には椅子がない。【存在文の否定】

В	(этой)	комнате	нет	стула	[стульев].
V	(ètoï)	komnate	net	stula	[stul'ev].
in	this/that-SG-F-LOC	room-LOC	not be-PRS	chair-SG-GEN	chair-PL-GEN

存在の否定は、述語 нет (この語自体は不変化詞) を用いて表し (現在時制の場合)、その存在が否定される事物を表す名詞類は属格で示される。

3. この部屋には一つも椅子がない。【全部否定・モノ】

В	(этой)	комнате	нет	ни	одного	стула.
V	(ètoï)	komnate	net	ni	odnogo	stula.
in	this/that-SG-F-LOC	room-LOC	not be-PRS	PTCL	one-SG-M-GEN	chair-SG-GEN

「ひとつも～ない」は、数詞 один を名詞に付加し、さらに助詞 ни を数詞に前置し、文を否定文にして表す。その存在が否定される事物を表す名詞が属格形を取るの上の2の例と同様。

4. その部屋には誰もいない。【全部否定・ヒト】

В	(этой)	комнате	никого	нет.
V	(ètoï)	komnate	nikogo	net.
in	this/that-SG-F-LOC	room-LOC	no one-GEN	not be-PRS

述語 нет と共に否定代名詞の никто を属格形で用いて表す。物の存在の否定を表す場合 (「何もない」) には、否定代名詞 ничто をやはり属格形で用いる。

5. その本はこの部屋にない。【所在文の否定】

- | | | | | | | |
|-----|--------------------|----------|------------|----|--------------------|----------|
| (1) | Этой | книги | нет | в | этой | комнате. |
| | Ètoĭ | knigi | net | v | ètoĭ | komnate. |
| | this/that-SG-F-GEN | book-GEN | not be-PRS | in | this/that-SG-F-GEN | room-LOC |
-
- | | | | | | | |
|-----|--------------------|----------|------------|----|--------------------|----------|
| (2) | Эта | книга | не | в | этой | комнате. |
| | Èta | kniga | ne | v | ètoĭ | komnate. |
| | this/that-SG-F-NOM | book-NOM | not be-PRS | in | this/that-SG-F-GEN | room-LOC |

上の2~4の例と同様で存在の否定を表す場合にはその事物は属格となる。また、「その本があるのはこの部屋ではない」ということを伝えるのであれば上例(2)となる。

6. この犬は大きくない。【形容詞文の否定】

- | | | | | |
|-----|--------------------|---------|-----|----------------|
| (1) | Эта | собака | (—) | небольшая. |
| | Èta | sobaka | (—) | nebol'shaĭa. |
| | this/that-SG-F-NOM | dog-NOM | | small-SG-F-NOM |
-
- | | | | | |
|-----|--------------------|---------|-----|--------------|
| (2) | Эта | собака | не | большая. |
| | Èta | sobaka | ne | bol'shaĭa. |
| | this/that-SG-F-NOM | dog-NOM | not | big-SG-F-NOM |

否定をあらわす助詞 **не** を、形容詞 **большой** (「大きい」) の直前に置くことで表すことも可能だが(上例2)、この場合何らかの対比(「大きくはなくて、むしろ小さい」など)が念頭に置かれていることになる。

7. この犬はあまり大きくない。【形容詞文の部分否定】

- | | | | | |
|--------------------|---------|-----|--------|--------------|
| Эта | собака | не | очень | большая. |
| Èta | sobaka | ne | ochen' | bol'shaĭa. |
| this/that-SG-F-NOM | dog-NOM | not | very | big-SG-F-NOM |

副詞 **очень** (「とても~」) を、否定を表す助詞 **не** に後置することで、部分否定が表される。

8. この犬はあの犬より大きい。【比較級】

- | | | | | | |
|-----|---------------|---------|----------|------|---------------|
| (1) | Эта | собака | больше, | чем | та. |
| | Èta | sobaka | bol'she, | chem | ta. |
| | this-SG-F-NOM | dog-NOM | big-COMP | than | that-SG-F-NOM |

(2)	Эта	собака	больше	той.		
	Ėta	sobaka	bol'she	toĭ.		
	this-SG-F-NOM	dog-NOM	big-COMP	that-SG-F-GEN		
(3)	Эта	собака	более	крупная,	чем	та.
	Ėta	sobaka	boleec	krupnaĭa,	chem	ta.
	this-SG-F-NOM	dog-NOM	more	large-SG-F-NOM	than	that-SG-F-NOM

形容詞の比較級によってあらわす（上例 1、2）。また、形容詞の原級に比較級の意味を表す副詞 **более** を付することによっても表すことができる（上例 3²）。

比較の対象を示す場合には、その要素を接続詞 **чем** で導いて後続させる（上例 1、3）。あるいは、形容詞が短語尾形であれば、接続詞 **чем** を用いずに、形容詞の後に比較の対象を示す名詞を属格形で付して同様の意味を表すことも可能である（上例 2）。

9. この犬がその犬たちの中で一番大きい。【最上級】

(1)	Эта	собака	самая	большая	среди [из]	тех	собак.
	Ėta	sobaka	samaĭa	bol'shaĭa.	sredi [iz]	tekh	sobak.
	this-SG-F-NOM	dog-NOM	the	big-SG-F-NOM	among	that-PL-GEN	dog-PL-GEN
			most-SG-F-NOM				
(2)	Эта	собака	наиболее	крупная	среди [из]	тех	собак.
	Ėta	sobaka	naiboleec	krupnaĭa	sredi [iz]	tekh	sobak.
	this-SG-F-NOM	dog-NOM	the most	large-SG-F-NOM	among	that-PL-GEN	dog-PL-GEN
(3)	Эта	собака	больше	всех	тех	(собак).	
	Ėta	sobaka	bol'she	vsekh	tekh	(sobak).	
	this-SG-F-NOM	dog-NOM	big-COMP	all-PL-GEN	that-PL-GEN	dog-PL-GEN	
(4)	Эта	собака	крупнее	их	всех.		
	Ėta	sobaka	bol'she	ikh	vsekh.		
	this-SG-F-NOM	dog-NOM	big-COMP	they-GEN	all-PL-GEN		

最上級は、最上級の意味を表す形容詞 **самый**、あるいは同じく最上級の意味を表す副詞である **наиболее** と性質形容詞を結合（前置）させて表す（上例 1 及び 2³）。

また、定代名詞 **весь**（「あらゆる～、すべての～」）（及びそれを含む名詞句）を属格形で用いて、形容詞比較級に後置すると実質的に最上級の意味を表すことができる（上例 3、4）。

² なお、ここでの例 3 では、例 1 及び 2 の **большая** ではなく、形容詞は **крупная** が用いられている。副詞 **более** と形容詞 **большая** の語結合は不自然で好ましくなく、事実上不可。

³ この例 2 で形容詞に **крупная** が用いられているのは、前の注 2 と同様の理由で、副詞 **наиболее** との結合が不可能なことによる。

10. 今日はあの人は来ない。【自動詞文の否定】

(1)	Сегодня	он	не	придѣт.
	Segodnĭa	on	ne	pridĕt.
	Today	he-NOM	not	come-PFV-PRS/FUT
(2)	Сегодня	его	не	будет.
	Segodnĭa	ego	ne	budet.
	Today	he-GEN	not	be-FUT

否定を表す助詞 не を動詞の直前に付して表す。上例 (2) では、先の 2~5 の文と同様に、存在の否定を表す文を言わば転用したものであるため、やはり属格形が用いられている。

11. あの人はその本を持って行かなかった。【他動詞文の否定】

(1)	Он	не	взял	с	собой	эту	книгу.
	On	ne	vziäl	s	soboĭ	ëtu	knigu.
	he-NOM	not	take-PFV-PST-SG-M	with	himself-INS	this/that-SG-F-ACC	book-ACC
(2)	Он	не	принѣс	этой [той]	книги.		
	On	ne	prines	ëtoĭ [toĭ]	knigi.		
	he-NOM	not	bring-PFV-PST-SG-M	this/that-SG-F-GEN	book-GEN		

否定を表す助詞 не を動詞の直前に付して表す。

なお、上例 (2) のように、対格補語をとる他動詞が否定されると補語が属格形を取る場合がある。

12. 全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。【数量の全部否定】

Никто	из	студентов	не	участвовал.
Nikto	iz	studentov	ne	uchastvoval.
no one-NOM	from	student-PL-GEN	not	take part-IPFV-PST-SG-M

否定代名詞 никто を否定文で用いて全否定を表す。

13. 全ての学生が参加したわけではない。【数量の部分否定】

Не	все	студенты	участвовали.
Ne	vse	studenty	uchastvovali.
Not	all-PL-NOM	student-PL-NOM	take part-IPFV-PST-PL

不定代名詞 весь に否定を表す助詞 не を前置して部分否定を表す。

14. (私は買わなかった。しかし、決して)値段が高いというわけではない。【文の否定】

- (1) (Я не купил. Но) Это не значит, что цена высокая.
 (ĪA ne kupil. No) Èto ne znachit, chto tsena vysokaĭa.
 I-NOM not buy-PFV-PS But this/that-NOM not mean-IPFV- that price-NOM high-SG-F
 T-SG-M PRS -NOM
- (2) (Я этого не купил. Но) Это вообще не дорого.
 (ĪA ètogo ne kupil. No) Èto vovse ne dorogo.
 I-NOM this/that- not buy-PFV-PS But this/that-NOM quite not expensive-SG-N-NO
 GEN T-SG-M M
- (3) (Я не стал покупать, хотя) цена была не такой высокой.
 (ĪA ne stal pokupat', khotĭa) tsena byla ne takoiĭ vysokoĭ.
 I-NOM not begin-PFV- buy-IPFV-INF though price-NOM be- not so-SG-F-I high-SG-F
 PST-SG-M PST-SG- NST -INST
 F

15. 走るな！【禁止】

- (1) Не бегай⁴!
 Ne begai!
 not run-IPFV-IMP-SG
- (2) Нельзя бегать!
 Nel'zia begat'
 it is not allowed-PRED run-IPFV-INF
- (3) Не бегать!
 Ne begat'!
 not run-IPFV-INF

否定を表す助詞 **не** と動詞の命令形によって表す (上例 1)。

また、述語 **нельзя** と動詞の不定形 (不定詞) という語結合によってあらわすことも可能である (上例 2)。

また、同じく助詞 **не** と動詞の不定形 (不定詞) によっても表すことが可能である (上例 3)。これは掲示などではよく用いられる形式である。

⁴ ロシア語動詞には、「移動動詞」というカテゴリーがあるが、この文脈では、定動詞 (定向動詞) と不定動詞 (不定向動詞) という対立のうち、不定動詞を用いるのがよりよい。

16. 大きな声を出すな！【他動詞文の禁止】

- (1) Не говорите громко!
Ne govorite gromko!
not speak-IPFV-IMP-PL loud
- (2) Не шуми!
Ne shumi!
not be noisy-IPFV-IMP-SG
- (3) Нельзя говорить громко!
Nel'zia govorit' gromko!
it is not allowed-PRED speak-IPFV-INF loud
- (4) Не шуметь!
Ne shumet'!
not be noisy-IPFV-INF

動詞の命令形に助詞 **не** を前置して表す（上例 1 及び 2）。

また、述語 **нельзя** と動詞の不定形（不定詞）という語結合、助詞 **не** と動詞の不定形（不定詞）という語結合によってもそれぞれ表すことが可能である（上例 3⁵及び 4）。

なお、ここでのロシア語文の訳例は、元の日本語文とは異なりいずれも自動詞が用いられている（結果として上の 15 の例文と動詞句が異なっている以外の差異が出ていない）が、補語を取る動詞であっても同様の手段で禁止の意味を表すことができる。

17. 明日は雨は降らないだろう。【推量の否定】

- (1) Завтра, похоже, не будет дождя.
Zavtra, pokhozhe, ne budet dozhdiá.
Tomorrow apparently not be-FUT rain-SG-GEN
- (2) Наверное, завтра дождя не будет.
Naverno, zavtra dozhdiá. ne budet.
probably tomorrow rain-SG-GEN not be-FUT

推量の意味それ自体は挿入語を用いて表す。

⁵ ただ、ここでの訳例 3 については、純然たる禁止の意味には取りづらいという主旨の指摘も母語話者から寄せられた。

18. あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。【目的節の否定】

- (1) Говори тихо, чтобы он не услышал (нас).
 Govori tikho, chtoby on ne uslyshal (nas).
 speak-IPFV-IMP-SG quietly in order that he-NOM not hear-PFV-PST-SG-M us-ACC
- (2) Говори тихо, чтобы ему (нас) не было слышно.
 Govori tikho, chtoby emu (nas) ne bylo slyshno.
 speak-IPFV-IMP-SG quietly in order that he-DAT us-ACC not be-PST-SG-N to be heard-PRED

接続詞 **чтобы** で目的を表す従属節を導き、節内の従属文で否定文を用いる。

19. 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。【否定のスキープの調節】

- (1) Я так сказал не для того, чтобы вас обидеть.
 Я tak skazal ne dlia togo, chtoby vas obidet'.
 I-NOM so say-PFV-PST-SG-M not for that-GEN in order that you-ACC offend-PFV-INF
- (2) Я так сказал не потому, что хотел вас рассердить.
 Я tak skazal ne potomu, chto khotel vas rasserdit'.
 I-NOM so say-PFV-PST-SG-M not because want-PST-SG-M you-ACC make angry-PFV-INF

接続詞 **чтобы** に否定を表す助詞 **не** を付することはできないので、前置詞句 **для того** (「～のために」)、あるいは接続詞 **потому** (**что** を伴って原因・理由をあらわす) に助詞 **не** を付して表す。

20. 私が昨日買った本はどこ(にある)? 【内の関係の連体修飾節・目的語】

- Где книга, которую я вчера купил [купила]?
 Gde kniga, kotoruiu ja vchera kupil [kupila]?
 Where book-NOM which-REL-SG-F-ACC I-NOM yesterday buy-PFV-PST-SG-M [buy-PFV-PST-SG-F]

関係代名詞 **который** によって従属節を導く。

21. その本を持って来た人は誰(か)? 【内の関係の連体修飾節・主語】

- (1) Кто принёс эту книгу?
 Кто prinës etu knigu?
 Who-NOM bring- PFV-PST-SG-M this/that-SG-F-ACC book-ACC

- | | | | | | | | |
|-----|---------|----------|------------|----------------|--------------|------------|----------|
| (2) | Кто | тот | человек, | который | принёс | эту | книгу? |
| | Kto | tot | chelovek, | kotoryĭ | prinës | ëtu | knigu? |
| | Who-NOM | that-SG- | person-NOM | which-REL-SG-M | bring- | this/that- | book-ACC |
| | | M-NOM | | -NOM | PFV-PST-SG-M | SG-F-ACC | |

日本語文の構造をより反映しているのは、関係代名詞を使用している上例 (2) だが、実際には上例 (1) の方が用いられる。

22. この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。【内の関係の連体修飾節・場所】

- | | | | | | |
|-----|-----------|----------|-----------|--------|---------------|
| (1) | Это | комната, | где | мы | работаем. |
| | Èto | komnata, | gde | my | rabotaem. |
| | This/that | room-NOM | where-REL | we-NOM | work-IPFV-PRS |
-
- | | | | | | | |
|-----|-----------|----------|----|--------------------|--------|---------------|
| (2) | Это | комната, | в | которой | мы | работаем. |
| | Èto | komnata, | v | kotoroĭ | my | rabotaem. |
| | This/that | room-NOM | in | which-REL-SG-F-LOC | we-NOM | work-IPFV-PRS |
-
- | | | | | | |
|-----|----|--------------------|----------|--------|---------------|
| (3) | В | этой | комнате | мы | работаем. |
| | V | ëtoĭ | komnate | my | rabotaem. |
| | in | this/that-SG-F-LOC | room-LOC | we-NOM | work-IPFV-PRS |

上例 (1) が関係副詞 (где) を用いた表現、同 (2) が関係代名詞を用いた表現である。

また、(3) のような表現で同様の意味を伝えることも可能である。直訳すると「この部屋で私たちは働いています。」となる。

23. 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。【内の関係の連体修飾節・所有者】

- | | | | | | | | | | |
|-----|-------|---------|--------------|----------|------|------------|------------|---------|---------|
| (1) | Я | уже | выбросил | стул, | у | которого | сломалась | одна | ножка. |
| | ĪA | uzhe | vybrosil | stul, | u | kotorogo | sloimalas' | odna | nozhka. |
| | I-NOM | already | discard-PFV- | chair-AC | with | which-REL- | break-PFV- | one-SG- | leg-NOM |
| | | | PST-SG-M | C | | SG-M-GEN | PST-SG-F | F-NOM | |
-
- | | | | | | | | | |
|-----|-------|---------|--------------|-----------|-----------|------|----------------|----------|
| (2) | Я | уже | выбросил | (тот) | стул | со | сломанной | ножкой. |
| | ĪA | uzhe | vybrosil | (tot) | stul | so | sloimannoĭ | nozhkoĭ. |
| | I-NOM | already | discard-PFV- | that-SG-M | chair-ACC | with | broken-ADJ-SG- | leg-INST |
| | | | PST-SG-M | -ACC | | | M-INST | |
-
- | | | | | | | | | |
|-----|---------------|-----------|------|--------------|----------|-------|---------|----------------|
| (3) | Тот | стул | с | поломанной | ножкой | я | уже | выбросил |
| | Tot | stul | s | polomannoĭ | nozhkoĭ | ĭa | uzhe | vybrosil |
| | that-SG-M-ACC | chair-ACC | with | broken-SG-F- | leg-INST | I-NOM | already | discard-PFV-PS |
| | | | | INST | | | | T-SG-M |

上例 (1) では関係代名詞を用いて「足の一本折れた」という表現をしているのに対して、上例 (2)、(3) では前置詞句で表している。

なお、上例 (3) では、「足が一本折れたあの椅子」を表す名詞句が文頭に配されており、文のテーマ部であることが示されている。

24. ドアを叩いている音が聞こえる。【外の関係の連体修飾節】

- | | | | | | |
|-----|--|---------------------------|---|---------------------------------|---------------------------------|
| (1) | Слышу,
Slyshu,
hear-IPFV-PRS-1SG | как
kak
how-CONJN | стучат
stuchat
knock-IPFV-PRS-3PL | в
v
to | дверь.
dver'.
door-SG-ACC |
| (2) | Слышно,
Slyshno,
it can be heard-PRED | как
kak
how-CONJN | стучат
stuchat
knock-IPFV-PRS-3PL | в
v
to | дверь.
dver'.
door-SG-ACC |
| (3) | Слышу
Slyshu
hear-IPFV-PRS-1SG | стук
stuk
knock-ACC | в
v
to | дверь.
dver'.
door-SG-ACC | |
| (4) | Послышался
Poslyshalsiâ
be heard-PFV-PST-SG-M | стук
stuk
knock-NOM | в
v
to | дверь.
dver'.
door-SG-ACC | |

上例 (1) 及び (2) では、「ドアが叩かれている」という従属文を用いた表現で、主文の述語としては、(1) では他動詞 слышать (聞こえる、耳にする) を、(2) では無人称述語の слышно が用いられている。対して、上例 (3) 及び (4) は、стук (「ノックの音」という名詞を用いた表現をする場合の例で、(3) ではやはり他動詞 слышать を、(4) では自動詞 слышаться がそれぞれ用いられている。

25. あの人が結婚したという噂は本当(か)? 【外の関係の連体修飾節】

- | | | | | | | |
|-----|-------------------------------------|------------------|----------------------------------|-------------------------------|-------------------------------------|---|
| (1) | Правдивы
Pravdivy
true-PL-NOM | ли
li
PART | слухи
slukhi
rumors-PL-NOM | (о том),
(o tom),
about | что он
chto on
that he-NOM | женился?
zhenilsiâ?
get
married-PFV-PST
-SG-M |
| (2) | Правдивы
Pravdivy
true-PL-NOM | ли
li
PART | слухи
slukhi
rumors-PL-NOM | (о том),
(o tom),
about | что она
chto ona
that she-NOM | вышла замуж?
vyshla zamuzh?
get
married-PFV-PST-S
G-F |

- (3) Это правда, что он женился?
 Èto pravda, chto on zhenilsia?
 this/that truth-SG-NOM that he-NOM get married-PFV-PST-SG-M
- (4) Это правда, что она вышла замуж?
 Èto pravda, chto ona vyshla zamuzh?
 this/that truth-SG-NOM that she-NOM get married-PFV-PST-SG-F
- (5) Правду говорят, будто она вышла замуж?
 Pravdu govoriat, budto ona vyshla zamuzh?
 truth-SG-ACC say-IPFV-PRS-3PL as if she-NOM get married-PFV-PST-SG-F

上例 (1) 及び (2) は、「噂」という日本語に対応する語(「слухи」)が用いられている文で、前置詞 *о* を用いた前置詞句で「～ということに関する噂」という表現がされている。

上例 (3) ~ (5) は、「噂」という語に直接対応する訳語を用いない場合の表現で、むしろこちらの方がロシア語としては良く、(1) や (2) のような構文は、許容されるものの逐語訳調に響くようである。

なお、「結婚する」という表現について、男性が結婚する場合には *жениться*、女性が結婚する場合には *выйти замуж* というように、それぞれ異なる動詞(句)を用いて表す。

26. 私はその人が来た時にご飯を食べていた。【時間節】

- (1) Я ел [ела], когда она пришла.
 Я ел [ела], когда она пришла.
 I-NOM eat-IPFV-PST-SG-M eat-IPFV-PST-SG-F when she-NOM arrive-PFV-PST-SG-F
- (2) Он пришёл, когда я ел [ела].
 Он пришёл, когда я ел [ела].
 he-NOM arrive-PFV-PST-SG-M when I-NOM eat-IPFV-PST-SG-M eat-IPFV-PST-SG-F

接続詞 *когда* を用いて従属節を導いて表す。

27. 私はその人が待っている所に行った。【場所節】

- (1) Я пошла туда, где он ждал (меня).
 Я пошла туда, где он ждал (меня).
 I-NOM go-PFV-PST-SG-F there where-REL he-NOM wait-IPFV-PST-SG-M ME-ACC
- (2) Я пошла туда, где она ждёт (меня).
 Я пошла туда, где она ждёт (меня).
 I-NOM go-PFV-PST-SG-F there where-REL she-NOM wait-IPFV-PRS-3SG ME-ACC

関係副詞 где を用いる。

上例 (2) のように従属節中で現在時制を用いるのは、発話時点でまだその人が待っているような場合であれば許容できる。

28. 私はその人が走っていったのを見た。【補文節・視覚】

Я	видел,	как	он	убегает [убежал].
ĪA	videl,	kak	on	ubegaet [ubezhal].
I-NOM	see-IPFV-PST-SG-M	how-CONJN	he-NOM	run away-IPFV-PRS-3SG [run away-PFV-PRS-3SG]

知覚動詞が補文節を導く場合には、接続詞 как が用いられる。

29. 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。【補文節・聴覚】

Вчера	вечером	я	слышал,	как	они	разговаривали.
Vchera	vecherom	ĭa	slyshal,	kak	oni	razgovarivali.
Yesterda	evening	I-NOM	hear-IPFV-PST-SG-M	how-CONJN	they-NOM	talk-IPFV-PST-PL
	y					

上の 28 の例と同様に、ここでも知覚動詞が補文節を導く場合には接続詞 как が用いられる。補文節内の動詞について、現在形 (разговаривают) を用いることも可能。

30. 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。【補文節・知識】

(1)	Я	знаю,	что	он	пришёл	сюда	вчера.
	ĪA	znaiu,	chto	on	prishël	siuda	vchera.
	I-NOM	know-IPFV-PRS-1SG	that	he-NOM	arrive-PFV-PST-SG-M		
(2)	Я	знаю,	что	он	приходил	сюда	вчера.
	ĪA	znaiu,	chto	on	prikhodil	siuda	vchera.
	I-NOM	know-IPFV-PRS-1SG	that	he-NOM	arrive-IPFV-PST-SG-M		

接続詞 что を用いて補文節を導く。

なお、従属文で用いられている動詞について、完了体 (пришёл) を用いれば (上例 1)、「その人はまだここにいる」ことを表し、不完了体 (приходил) が用いられれば (上例 2)、「その人はもう既にその場を去ってしまってここにはいない」ということを示す。

31. (昨日)彼は彼が今日ここに来たと言った。/(昨日)彼は、「私は今日ここに来た」と言った。

【補文節・直接発話/間接話法】

(1)	Вчера	Он	сказал:	«Я	пришёл	сюда	сегодня».
	Vchera	On	skazal:	«ĪA	prishël	siuda	segodniã».
	Yesterday	he-NOM	say-PFV-PST-SG-M	I-NOM	arrive-PFV-PST-SG-M	here	today

- (2) Он сказал, что пришёл сюда сегодня.
 On skazal, chto prishël siuda segodniâ.
 he-NOM say- PFV-PST-SG-M that arrive-PFV-PST-SG-M here today
- (3) Он сказал, что он пришёл сюда сегодня.
 On skazal, chto on prishël siuda segodniâ.
 he-NOM say- PFV-PST-SG-M that he-NOM arrive-PFV-PST-SG-M here today
- (4) Он сказал, что тот пришёл сюда сегодня.
 On skazal, chto tot prishël siuda segodniâ.
 he-NOM say- PFV-PST-SG-M that that man-NOM arrive-PFV-PST-SG-M here today

与えられている日本語文の意味が不明瞭ではあるが、彼が来たのが「昨日」であり、そのことを聞き手に伝えたのも同日（「昨日」）であるという解釈に従って訳出した。

上例（1）は、いわゆる直接話法、同（2）は間接話法で表した場合。

上例（2）の主文に、副詞 **вчера**（「昨日」）を添えてしまうと、来たのが今日で、その事実について伝えたのが昨日となってしまう矛盾が生じるため意味を成さない文となる（直接話法であれば副詞 **вчера** を主文に添えることは可能；例 1 を参照）。

上例（3）では、従属節の内容を言った「彼（он）」と、従属節内の「彼（он）」（すなわち今日来たという「彼」とは通常の解釈では、同一人物を指す（その場合には通常従属節内の代名詞は省略される；上例 2 を参照）。しかし、文脈によってはそれぞれ別の人であることをも示しうる。もし、両者が別の人物であることを明示的に示すのであれば、上例（4）のように、従属節内の主語としては「**тот**」を用いる。

32. 私はリンゴが(あの)皿の上にあったのを食べた。【内在節・従主・主主】

- (1) Я съел яблоки, которые лежали на той тарелке.
 ĬA s"el iabloki, kotorye lezhali na toĭ tarelke.
 I-NOM eat-PFV-PST-SG-M apples-ACC which-REL-PL- lie-IPFV-PST-PL on that-SG-F-LOC plate-LOC
- (2) Яблоки на той тарелке я съел.
 ĬAbloki na toĭ tarelke ĭa s"el.
 apples-ACC on that-SG-F-LOC plate-LOC I-NOM eat-PFV-PST-SG-M

関係代名詞を用いて従属節を導いて表す（上例 1）。また、語順によって表すことも可能である（上例 2）。

33. 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。【内在節・従主・主目】

- (1) Я поймал кошку, которая вошла [зашла] в дом.
 [словил]
 ĪA roĭmal [slovil] koshku, kotoraiâ voshla [zashla] v dom.
 I-NO catch-PFV-PST-SG cat-ACC which-REL-SG-F- get in-PFV-PST-SG-F to house-ACC
 M -M NOM
- (2) В дом забралась кошка, а я её поймал.
 V dom zabralas' koshka, a iâ eë roĭmal.
 to house-ACC creep cat-NOM and I-NOM her-ACC catch-PFV-PST-SG-M
 in-PFV-PST-SG-F

関係代名詞を用いて従属節を導いて表す（上例 1）。また、等位接続詞を用いた複文でも表すことができる（上例 2）。

執筆者連絡先: adegawa@tufs.ac.jp

原稿受理: 2019 年 5 月 13 日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

ポーランド語における否定、形容詞と連体修飾複文¹

Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification in Polish

森田 耕司
Koji Morita

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨:本稿の目的は、特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号、東京外国語大学)における33個のアンケート項目に対するポーランド語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Polish data which answers the thirty three survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 23, which focuses on the cross linguistic study of ‘negation, adjectives, and compound sentences of adnominal modification’.

キーワード:ポーランド語, 否定, 形容詞, 連体修飾, 複文

Keywords: Polish, negation, adjective, adnominal modification, compound sentence

特集「否定、形容詞と連体修飾複文」に関するアンケートに沿った形で、ポーランド語のデータを提示する。必要に応じて、解説も加える。

(1) これは私の本ではない。[名詞述語文/コピュラ文の否定]

To	nie	jest	moja	książka.
this	NEG	be.PRES.3.SG	my-F.SG.NOM	book-F.SG.NOM

(2) この部屋には椅子がない。[存在文の否定]

W	tym	pokoju	nie	ma	krzesła.
in	this-M.SG.LOC	room-M.SG.LOC	NEG	have-IMPF.PRES.3.SG	chair-N.SG.GEN

(3) この部屋には一つも椅子がない。[全部否定・モノ]

W	tym	pokoju	nie	ma	żadnego	krzesła.
in	this-M.SG.LOC	room-M.SG.LOC	NEG	have-IMPF.PRES.3.SG	not any-N.SG.GEN	chair-N.SG.GEN



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ ポーランド語のデータ作成に際してご協力いただいた、本学特任講師のカロリナ・プルスコタ先生に心よりお礼を申し上げます。

(4) その部屋には誰もいない。 [全部否定・ヒト]

W	tym	pokoju	nikogo	nie	ma.
in	this-M.SG.LOC	room-M.SG.LOC	nobody-GEN	NEG	have-IMPF.PRES.3.SG

(3)(4)は全部否定に否定代名詞が使われる典型的な文例である。(3)では否定代名詞 *zaden* の生格形である *zadnego*, (4)では否定代名詞 *nikt* の生格形である *nikogo* が使われている。ポーランド語では、否定の助詞 *nie* は否定の意味の文では絶対になくなくてはならない要素であり、否定代名詞 *zaden* や *nikt* はただその意味を強める役割を果たしているにすぎない。

(5) その本はこの部屋にない。 [所在文の否定]

Tej	książki	nie	ma	w	tym	pokoju.
that-F.SG.GEN	book-F.SG.GEN	NEG	have-IMPF.PRES.3.SG	in	this-M.SG.LOC	room-M.SG.LOC

(2)(5)の存在の否定「～がない、～がない」は人称や数に関わらず常に〈*nie ma* + 生格〉という形式を用いる。存在しない対象は生格で表す。この *ma* は動詞 *mieć* 〈持つ〉の現在単数3人称の形だが、この場合はまったく別の意味で、しかも非人称で使われていることに注意する必要がある。

(6) この犬は大きくない。 [形容詞文の否定]

Ten	pies	nie	jest	duży.
this-M.SG.NOM	dog-M.SG.NOM	NEG	be.PRES.3.SG	big-M.SG.NOM

(7) この犬はあまり大きくない。 [形容詞文の部分否定]

Ten	pies	nie	jest	aż	tak	duży.
this-M.SG.NOM	dog-M.SG.NOM	NEG	be.PRES.3.SG	as much as	so	big-M.SG.NOM

(8) この犬はあの犬より大きい。 [比較級]

Ten	pies	jest	większy	niż	tamten	pies.
this-M.SG.NOM	dog-M.SG.NOM	be.PRES.3.SG	bigger-M.SG.NOM	than	that-M.SG.NOM	dog-M.SG.NOM

(9) この犬がその犬たちの中で一番大きい。 [最上級]

Ten	pies	jest	największy	z	tych	psów.
this-M.SG.NOM	dog-M.SG.NOM	be.PRES.3.SG	biggest-M.SG.NOM	from	those-M.PL.GEN	dogs-M.PL.GEN

(8)(9)にはそれぞれ形容詞 *duży* 〈大きい〉の比較級 *większy* と最上級 *największy* が使われており、ポーランド語ではごく一般的な形式である。(9)をポーランド語に直訳すると、上の文章になる。文法的には正文とみなされるが、実際には「そのすべての犬たちの中で」というように表現するのが適切である。つまり、*Ten pies jest największy ze wszystkich tych psów* がポーランド語では自然な文章となる。なおポーランド語では、形容詞の比較級、最上級は一般的である。

(10) 今日はあの人は来ない。 [自動詞文の否定]

Dziś	ta	osoba	nie	przyjdzie.
today	that-F.SG.NOM	person-F.SG.NOM	NEG	come-PF.PRES.3.SG

(11) あの人はその本を持って行かなかった。 [他動詞文の否定]

Ta	osoba	nie	wzięła	tej	książki.
that-F.SG.NOM	person-F.SG.NOM	NEG	take-PF.PAST.3.F.SG	that-F.SG.GEN	book-F.SG.GEN

(12) 全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。 [数量の全部否定]

Wszyscy	studenci	nie	uczestniczyli.
all-MP.PL.NOM	student-MP.PL.NOM	NEG	participate-PF.PAST.3.MP.PL

(13) 全ての学生が参加したわけではない。 [数量の部分否定]

Nie	wszyscy	studenci	uczestniczyli
NEG	all-MP.PL.NOM	student-MP.PL.NOM	participate-PF.PAST.3.MP.PL

(12)(13)の動詞 *uczestniczyć* (参加する) は必ず「前置詞 *w* + 前置格」の構造を要求するので、例文も「(集
 会に) 参加しなかった／参加したわけではない」などの方が自然である。

(14) (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。 [文の否定]

(Nie kupilem. Ale wcale)

To	nie	znaczy,	że	cena	jest	wysoka.
it	NEG	mean-IMP.PRES.3.SG	that	price-F.SG.NOM	be.PRES.3.SG	high-F.SG.NOM

(15) 走るな！ [禁止]

Nie	biegnij!
NEG	run-IMP.PRES.2.SG

(16) 大きな声を出すな！ [他動詞文の禁止]

この例文の内容をポーランド語で表現する際、例えば名詞 *głos* (声) を目的語とした他動詞文が使われるこ
 とはない。自動詞 *mówić* (話す) や *krzyczeć* (叫ぶ) が使われることが大半である。最も近い表現としては、
 以下の2種類が挙げられる。

[A] 動詞 *mówić* (話す)

Nie	mów	tak	głośno!
NEG	say-IMP.PRES.2.SG	so	loud

[B] 動詞 *krzyczeć* (叫ぶ)

Nie	krzycz!
NEG	shout-IMP.PRES.2.SG

(17) 明日は雨は降らないだろう。 [推量の否定]

Jutro	nie	będzie	padał	deszcz.
tomorrow	NEG	be-FUT.3.SG	fall-IMP.P.PAST.3.M.SG	rain-M.SG.NOM

(18) あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。 [目的節の否定]

Mów	cicho,	żeby	ta	osoba	nie	słyszała.
speak-IMP.PRES.2.SG	quietly	so (that)	that-F.SG.NOM	person-F.SG.NOM	NEG	hear-IMPF.PAST.3.F.SG

目的を表す従属節は、接続詞 *aby* / *żeby* を使った仮定法で表現することが多く、その仮定法による目的節を否定することにより表現される。

(19) 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。 [否定のスキープの調節]

To	nie	tak,	że	powiedziałem	to,	żeby	cię	irytować.
It	NEG	so	that	say-PF.PAST.1.M.SG	it	so (that)	you-SG.ACC	irritate-INF

(20) 私が昨日買ってきた本はどこ (にある) ? [内の関係の連体修飾節・目的語]

Gdzie	jest	książka,	którą	kupiłem	wczoraj?
where	be.PRES.3.SG	book-F.SG.NOM	that-F.SG.ACC	buy-PF.PAST.1.M.SG	yesterday?

(21) その本を持って来た人は誰 (か) ? [内の関係の連体修飾節・主語]

この例文は二通りに解釈が可能であり、解釈によって以下の2種類の文章が可能となる。

[A] 誰が本を持って来たかはわかっているが、その持ってきた人物がどういう人であるかを知りたい場合

Kim	jest	osoba,	która	przyniosła	tę	książkę?
who-INST	be.PRES.3.SG	person-F.SG.NOM	that-F.SG.NOM	bring-PF.PAST.3.F.SG	that-F.SG.ACC	book-F.SG.ACC

[B] 誰が本を持って来たのかわからないので、誰が持ってきたのかを知りたい場合

Kto	przyniósł	tę	książkę?
who-NOM	bring-PF.PAST.3.M.SG	that-F.SG.ACC	book-F.SG.ACC

(22) この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。 [内の関係の連体修飾節・場所]

この例文は、ポーランド語では関係副詞と関係代名詞のいずれを使っても表現可能である。それぞれを用いた文章を挙げておく。以下のように、内の関係は関係代名詞や関係副詞によって表現されることが多い。

[A] 関係副詞

To	jest	pokój,	gdzie	pracujemy.
this	be.PRES.3.SG	room-M.SG.NOM	where	work-IMPF.PRES.PL

[B] 関係代名詞

To	jest	pokój,	w	którym	pracujemy.
this	be.PRES.3.SG	room-M.SG.NOM	in	that-M.SG.LOC	work-IMPF.PRES.PL

(23) 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。 [内の関係の連体修飾節・所有者]

To	krzesło	z	jedną	złamaną	nogą	już
that-N.SG.NOM	chair-N.SG.NOM	with	one-F.SG.ACC	broken-F.SG.INST	leg-F.SG.INST	already

wyrzuciłem.

throw away-PF.PAST.1.M.SG

(24) ドアを叩いている音が聞こえる。[外の関係の連体修飾節]

Słyszę	pukanie	do	drzwi.
hear-IMPF.PRES.1.SG	knocking.SG.ACC	at	door-PL.GEN

関係代名詞や関係副詞の代わりに(23)のように分詞を使って表現されることもあれば, 内容によっては(24)のように「叩いている音」を動名詞「叩くこと/ノックすること」で表現する方が自然な場合もある。

(25) あの人が結婚したという噂は本当(か)? [外の関係の連体修飾節]

(Czy)	pogłoski,	że	ta	osoba	wzięła	ślub,
(do)	rumor-NMPPL.NOM	that	that-F.SG.NOM	person-F.SG.NOM	take-PF.PAST.3.F.SG	wedding-M.SG.ACC

są	prawdziwe?
are	true-NMPPL.NOM

(26) 私はその人が来た時にご飯を食べていた。[時間節]

Jadłem	posiłek,	kiedy	ta	osoba	przyszła.
eat-IMPF.PAST.1.M.SG	meal-M.SG.ACC	when	that-f.SG.NOM	person-F.SG.NOM	come-PF.PAST.3.SG

(27) 私はその人が待っている所に行った。[場所節]

Poszedłem	tam,	gdzie	ta	osoba	czekała.
go-PF.PAST.1.M.SG	there	where	that-F.SG.NOM	person-F.SG.NOM	wait-IMPF.PAST.3.SG

(25)-(27)のような文章であれば, 「その人 (ta osoba)」の代わりに「彼 (on)」「彼女 (ona)」「その男性 (ten pan)」「その女性 (ta pani)」あるいは固有名詞を使った方がポーランド語では自然である。これは本稿の例文全般を通していえることであるが, ポーランド語では特定の文脈を除いて「その人 (ta osoba)」という性別を示さない表現を使うと不自然になることが多く, やや謎めいたニュアンスを与えることになる。

ポーランド語では動詞 *czekać* (待つ) は必ず「前置詞 *na* + 対格」の構造を要求するので, 例えば「私はその人が私を待っている所に行った」とした方が自然である。

Poszedłem	tam,	gdzie	ta	osoba	na	mnie	czekała.
go-PF.PAST.1.M.SG	there	where	that-F.SG.NOM	person-F.SG.NOM	for	I-SG.ACC	wait-IMPF.PAST.3.F.SG

(28) 私はその人が走っていったのを見た。[補文節・視覚]

Widziałem,	że	ta	osoba	biegła.
see-IMPF.PAST.1.M.SG	that	that-F.SG.NOM	person-F.SG.NOM	run-IMPF.PAST.3.F.SG

(29) 昨日の夜, 私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[補文節・聴覚]

Wczoraj	wieczorem	słyszałem,	że	oni	rozmawiali.
yesterday	night-M.SG.INST	hear-IMPF.PAST.1.M.SG	that	they-MPPL.NOM	talk-IMPF.PAST.3.MPPL

(28)(29)のような視覚や聴覚の補文節では、ポーランド語の場合、接続詞 *ze* もしくは疑問詞を使った従属節を使った構文を用いるのが一般的である。

(30) 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。 [補文節・知識]

Wiem,	<i>ze</i>	<i>wczoraj</i>	<i>ta</i>	<i>osoba</i>	<i>tu</i>	<i>przyszła.</i>
know-IMPF.PRES.1.SG	that	yesterday	that-F.SG.NOM	person-F.SG.NOM	here	come-PF.PAST.3.F.SG

(31) (昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。 / (昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。 [補文節・直接発話/間接話法]

(Wczoraj)	On	<i>powiedział,</i>	<i>ze</i>	<i>dziś</i>	<i>tutaj</i>	<i>przyszędł.</i>
(yesterday)	he	say-PF.PAST.3.M.SG	that	today	here	come-PF.PAST.3.M.SG

(Wczoraj)	On	<i>powiedział:</i>	<i>„Dziś</i>	<i>tutaj</i>	<i>przyszędłem”.</i>
(yesterday)	he	say-PF.PAST.3.M.SG	today	here	come-PF.PAST.1.M.SG

ただし、間接話法の場合、ここでいう「今日」が事実上「昨日」のことを指すのであれば、次の表現がより自然である。

(Wczoraj)	On	<i>powiedział,</i>	<i>ze</i>	<i>wczoraj</i>	<i>tutaj</i>	<i>przyszędł.</i>
(yesterday)	he	say-PF.PAST.3.M.SG	that	yesterday	here	come-PF.PAST.3.M.SG

(32) 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた。 [内在節・従主・主主]

<i>Zjadłem</i>	<i>jabłko,</i>	<i>które</i>	<i>było</i>	<i>na</i>	<i>(tym)</i>	<i>talerzu.</i>
eat-PF.PAST.1.M.SG	apple-N.SG.ACC	that-N.SG.NOM	be.PAST.3.N.SG	on	(that-M.SG.LOC)	plate-M.SG.LOC

(33) 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。 [内在節・従主・主目]

<i>Złapałem</i>	<i>kota,</i>	<i>kiedy</i>	<i>wszędł</i>	<i>do</i>	<i>domu.</i>
catch-PF.PAST.1.M.SG	cat-M.SG.ACC	when	go-PF.PAST.3.M.SG	into	house-M.SG.GEN

さらに、次の二通りの表現も可能である。

<i>Kiedy</i>	<i>kot</i>	<i>wszędł</i>	<i>do</i>	<i>domu,</i>	<i>złapałem</i>	<i>go.</i>
when	cat-M.SG.NOM	go-PF.PAST.3.M.SG	into	house-M.SG.GEN	catch-PF.PAST.1.M.SG	he-ACC

<i>Jak</i>	<i>kot</i>	<i>wszędł</i>	<i>do</i>	<i>domu,</i>	<i>złapałem</i>	<i>go.</i>
as	cat-M.SG.NOM	go-PF.PAST.3.M.SG	into	house-M.SG.GEN	catch-PF.PAST.1.M.SG	he-ACC

略語

ACC=対格, DAT=与格, F=女性, GEN=生格, IMP=命令形, IMPF=不完了体, INF=不定形, INST=造格, LOC=前置格, M=男性, MP=男性人間形, N=中性, NEG=否定, NMP=非男性人間形, NOM=主格, PAST=過去, PL=複数, PF=完了体, PRES=現在, REF=再帰代名詞, SG=単数, 1=1人称, 2=2人称, 3=3人称

執筆者連絡先: morita@tufs.ac.jp

原稿受理: 2019年5月13日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

ウクライナ語における否定、形容詞と連体修飾複文 Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification in Ukrainian

小川 暁道
Akimichi Ogawa

東京外国語大学非常勤講師
Part-time Lecturer, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿の目的は、特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号, 東京外国語大学) における33個のアンケート項目に対するウクライナ語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Ukrainian data which answers the thirty three survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 23, which focuses on the cross linguistic study of 'negation, adjectives, and compound sentences of adnominal modification'.

キーワード: ウクライナ語、否定、形容詞、連体修飾、複文

Keywords: Ukrainian, negation, adjective, adnominal modification, compound sentence

1. はじめに

特集「否定、形容詞と連体修飾複文」に関する33項目のアンケートに、ウクライナ語の用例を提供する。調査協力者は Олена Маляренко (Olena Maliarenko, 30代女性、母語: ウクライナ語・ロシア語、キエフ大学卒) である。

2. データ

1. これは私の本ではない。[名詞述語文/コピュラ文の否定]

Це не моя книжка.
this not my-NOM book-NOM¹

現在時制の名詞述語文において、be動詞に相当する動詞 бути は通常用いられない。否定の助詞 не は否定される語の直前に置かれる。

2. この部屋には椅子がない。[存在文の否定]

В цій кімнаті немає стільця.
in this-LOC room-LOC no-PRED chair-GEN

存在否定の文においては無人称述語 немає 「～がない」が用いられ、主体となる語は属格となる。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deedja>

¹ 原則としてグロスはこのテーマに関するものを中心に付ける。略号一覧は文末に記す。

3. この部屋には一つも椅子がない。[全部否定・モノ]

В цій кімнаті немає жодного стільця.
in this-LOC room-LOC no-PRED not_any-GEN chair-GEN

否定の強調として、否定代名詞 жодний/жоден「一つも～ない」が使用されるが、この際には否定の助詞は置かれない。2.と同様、存在否定における主体は属格となっている。

4. その部屋には誰もいない。[全部否定・ヒト]

В тій кімнаті нікого немає.
in that-LOC room-LOC no_one-GEN no-PRED

人・動物を表わす否定代名詞 ніхто が用いられ、2.および3.の文と同様に主体は属格となる。

5. その本はこの部屋にない。[所在文の否定]

Ця книжка не знаходиться в цій кімнаті.
this-NOM book-NOM not be-IPFV.3SG in this-LOC room-LOC

所在の否定においては存在否定とは異なり、動詞 знаходиться「所在する、ある」の主語であるため、主体となる語は主格である。

6. この犬は大きくない。[形容詞文の否定]

Ця собака не велика.
this-NOM dog-NOM not big-NOM

1.と同様、現在時制において be 動詞に相当する動詞 бути は通常用いられず、否定される語の直前に否定の助詞 не が置かれる。

7. この犬はあまり大きくない。[形容詞文の部分否定]

Ця собака не дуже велика.
this-NOM dog-NOM not very big-NOM

否定の助詞 не は否定される語の直前に置かれるという原則により、形容詞の部分否定では副詞 дуже「とても」が否定される。

8. この犬はあの犬より大きい。[比較級]

- a) Ця собака більша, ніж та.
this-NOM dog-NOM big-COMP.NOM than -CONJN that-NOM
b) Ця собака більша за ту.
this-NOM dog-NOM big-COMP.NOM than-PRER that-ACC

形容詞 великий「大きい」の比較級は більший で、原級と同様形容詞の語尾を持つ。比較の対象は a) の文のように接続詞 ніж によって表される場合と、b) の文のように前置詞 за+対格 (主な意味は「～に対

して) で表わされる場合とがある。a)は接続詞 *ніж* によって従属節が形成されるため、説の中では比較の対象は名詞や代名詞の主格や対格、副詞、句、主語と述語などで表すことが可能であるが、b)は前置詞であるため、格変化形を持つ名詞や代名詞、形容詞のみしか用いられない。他に前置詞 *від*+属格 (主な意味は「～から」) によっても比較対象を表すことが出来る。

9. この犬がその犬たちの中で一番大きい。[最上級]

- a) *Ця собака найбільша серед цих собак.*
this-NOM dog-NOM big-SUPER.NOM among this-PL.GEN dog-PL.GEN
- b) *Ця собака найбільша з-поміж цих собак.*
this-NOM dog-NOM big-SUPER.NOM from_among this-PL.GEN dog-PL.GEN

形容詞の最上級は比較級の形に接頭辞 *най-*を付けて形成される。比較の範囲は前置詞 *серед*+属格 (主な意味は「～の間で」)、*з-поміж*+属格 (主な意味は「～の中から」) で示される。

10. 今日はあの人は来ない。[自動詞文の否定]

- Сьогодні та людина не прийде.*
today that-NOM person-NOM not come-PFV.FUT.3SG

否定の助詞 *не* は否定される動詞の直前に置かれる。

11. あの人はその本を持って行かなかった。[他動詞文の否定]

- Та людина не взяла з собою тієї книжки.*
that-NOM person-NOM not take-PFV.PAST with oneself-INS that-GEN book-GEN

他動詞文の否定においては直接補語は属格で表される。

12. 全ての学生が参加しなかった/学生は全員参加しなかった。[数量の全部否定]

- Всі студенти не брали участі.*
all-PL.NOM students-NOM not take-IPFV.PAST taking_part-GEN

11.と同様に否定文における他動詞の直接補語は属格で表される。

13. 全ての学生が参加したわけではない。[数量の部分否定]

- Не всі студенти брали участь.*
not all-PL.NOM students-NOM take-IPFV.PAST taking_part-ACC

всі「全ての」が否定されるため、否定の助詞 *не* はこの直前に置かれる。*участь*「参加」そのものが否定されるわけではないので、直接補語は対格となっている。

14. (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。[文の否定]

- Я не купив, але це не означає, що ціна*
I-NOM not buy-PFV.PAST but this-NOM not mean-IPFV.3SG that-CONJN price-NOM

висока.
high-NOM

この文においては文の否定は動詞 означає「意味する」を否定することによって表される。ただし、対比を表す並立複文に置いて、直前の述語を否定する際には助詞 ні が用いられる。

Все на очах мінялося, і тільки твоя любов ні?
all on eyes-LOC change-IPFV.PAST and only your-NOM love-NOM not
「目に映る全てのものは変わった、君の愛だけはそうではないのだろうか。」

15. 走るな！ [禁止]

- a) Не біжи!
not run-IPFV.DEF.IMP
b) Не бігай!
not run-IPFV.INDF.IMP

禁止の命令は不完了相動詞によって表される。またウクライナ語には移動動詞というカテゴリーがあり、定動詞（一定方向への移動「～へ移動中である／向かっている」）と不定動詞（不定方向への移動「行って帰って来る／動き回る／移動することそのもの」）がペアを成している。a)の例は「(ある方向へ向かって) 走って行くな」、b)の例は「走り回るな／(諸条件により、そもそも) 走るな」という意味を表す。

16. 大きな声を出すな！ [他動詞文の禁止]

Не підвищуй голосу!
not raise-IPFV.IMP voice-GEN

15.と同様、禁止の命令は不完了相動詞によって表される。

17. 明日は雨は降らないだろう。 [推量の否定]

Можливо, завтра не буде дощу.
possibly tomorrow not be-FUT.3SG rain-GEN

推量の要素は挿入語によって表される。また、存在否定文と同様、be 動詞 бути の未来形が否定され、名詞 дощ「雨」は属格となる。

18. あの人の聞こえないように、小さな声で話してくれ。 [目的節の否定]

- a) Говори тихіше, щоб та людина не почула.
speak-IPFV.IMP quietly-COMP in_order_that that-NOM person-NOM not hear-PFV.PAST
b) Говори тихіше, щоб тій людині не було чутно.
speak-IPFV.IMP quietly-COMP in_order_that that-DAT person-DAT not be-PAST audible

目的節の中での否定となる。接続詞 щоб に導かれる節の中では、時制に関わらず動詞は過去形となる。a)では「あの人が聞かないように」という人称文で、b)では無人称述語 чутно が使用されており、「あの

人に (とって) 聞こえないように」という主格主語の存在しない無人称文である。

19. 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。[否定のスコープの調節]

Я сказав так, не для того, щоб вас розсердити.
I-NOM say-PAST so not for that-GEN in_order_that you-ACC make_angry-PFV.INF

否定の対象となるのは「怒らせようと思って」の部分なので、語結合 для того, щоб の前に否定の助詞 не が置かれる。

20. 私が昨日買って来た本はどこ (にある) ? [内の関係の連体修飾節・目的語]

- a) Де книжка, що я вчора купив?
where book-NOM what-REL I-NOM yesterday buy-PFV.PAST
- b) Де книжка, яку я вчора купив?
where book-NOM which-REL.F.ACC I-NOM yesterday buy-PFV.PAST
- c) Де книжка, куплена мною вчора?
where book-NOM buy-PAST. PASSPF.NOM I-INS yesterday

a)の関係代名詞 що は不変化、b)の関係代名詞 який は先行詞と性・数が一致し (ここでは女性・単数)、格は従属節内において必要な格を取る。ここでは動詞 купити 「買う」の目的語となる対格である。他にも c)のように分詞を使用した表現も可能である。受動過去分詞は被修飾語と性・数・格が一致し、ここでは女性名詞 книжка 「本」に合わせて女性・単数・主格となる。動作主は具格で表される。

21. その本を持って来た人は誰 (か) ? [内の関係の連体修飾節・主語]

Хто та людина, яка принесла цю книжку?
who-NOM that-NOM person-NOM which-REL.F.NOM bring-PAST this-ACC book-ACC

20.と同様、先行詞と性・数が一致し、ここでは関係代名詞は関係節において主語となっているので、女性単数主格となる。

22. この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。[内の関係の連体修飾節・場所]

- a) Ця кімната – кімната, де ми працюємо.
this-NOM room-NOM COP room-NOM where-REL we-NOM work-IPFV.PRS.1SG
- b) Ця кімната – кімната, в якій ми працюємо.
this-NOM room-NOM COP room-NOM in which-REL.F.LOC we-NOM work-IPFV.PRS.1SG

a)は関係副詞、b)は前置詞と関係代名詞により関係節が構成されている。関係副詞は不変化、b)の関係代名詞の先行詞は女性・単数、関係節の中では関係代名詞 який は所格となる。

23. 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。[内の関係の連体修飾節・所有者]

Я вже викинув на сміття той стілець, у якого
I-NOM already throw-PFV.PAST for rubbish-ACC that-ACC chair-ACC at which-RELM.GEN

зламалася одна ніжка.
break-.PFV. PAST one-NOM leg-NOM

所有表現の一つとして、前置詞 y+属格「～のところに」がある。関係節内で前置詞 y に関係代名詞 який の属格が続く。

24. ドアを叩いている音が聞こえる。[外の関係の連体修飾節]

- a) Стук у двері гучний.
knock-NOM in door-ACC resonant-NOM
- b) Можна почути гучний стук у двері.)
possible-PRED hear-INF resonant-ACC knock-ACC in door-ACC

「ドアを叩いている音」は専ら名詞句によってのみ表される。a)の直訳は「ドアを叩く音が聞こえる」、b)の直訳は「鳴り響くドアを叩く音を聞くことができる」である。

25. あの人が結婚したという噂は本当（か）？ [外の関係の連体修飾節]

Чи правдиві чутки про те, що та людина
INTERR true-PL rumor-PL about that-ACC what-REL that-NOM person-NOM

одружилася²?
marry-F.PAST

前置詞 про「～に関する」に先行詞 те の対格、関係代名詞 що が続く。先行詞に具体的な意味はなく、「те, що～」で「～が～すること」、「～であること」を表す。

26. 私はその人が来た時にご飯を食べていた。[時間節]

Я їв, коли та людина прийшла.
I-NOM eat-PAST when- CONJN that-NOM person-NOM come-PAST

時間の接続詞 коли が使用される。

27. 私はその人が待っている所に行った。[場所節]

Я пішов³ туди, де чекає та людина.
I-NOM go-PFV.PAST there where-REL wait-IPFV.PRS.3SG that-NOM person-NOM

関係副詞 де とによって場所節は表され、先行詞を伴う。

² 男性が結婚する。女性が結婚する場合は вийти заміж

³ 「出かけた」。「行って来た」の意味では移動動詞のうち不定動詞の ходити を使用する。

28. 私はその人が走っていったのを見た。[補文節・視覚]

Я бачив, як бігла та людина.
 I-NOM see-IPFV.PAST how-CONJN run-IPFV.DEF.PAST that-NOM person-NOM

29. 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[補文節・聴覚]

Учора ввечері я чув, як вони розмовляли.
 yesterday in_the_evening I-NOM hear-IPFV.PAST how-CONJN they-NOM talk-IPFV.PAST

視覚や聴覚などの知覚動詞とともに接続詞 як が用いられ、この接続詞 як は「どのようにするか」という疑問詞的意味ではなく、単に「～するのを（見た、聞いた）」という意味である。

30. 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。[補文節・知識]

Я знаю, що та людина вчора прийшла.
 I-NOM know-IPFV.PRS.1SG that-CONJN that-NOM person-NOM yesterday come-PAST

接続詞 що は思考、伝達などの内容を説明する従属節を形成する。

31. (昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。／(昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。[補文節・直接発話／間接話法]

- a) (Учора) Він сказав, що він вчора туди приходив.
 (yesterday) he-NOM say-PFV.PAST that-CONJN he-NOM yesterday there come-IPFV.PAST
- b) (Учора) Він сказав, «Я сьогодні сюди приходив».
 (yesterday) he-NOM say-PFV.PAST I-NOM today here come-IPFV.PAST

a)の間接話法では 30.と同様に接続詞 що を使用する。発話時点から見て彼が「昨日来た」のであれば、使用する副詞は вчора となる。従属節中の動詞の時制は主節中の時制から見た過去・現在・未来となる。

32. 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた。[内在節・従主・主目]

- a) Я з'їв яблуко, яке знаходилося на тарілці.
 I-NOM eat-PFV.PAST apple-ACC which-REL.M.NOM be-IPFV.PAST on plate-LOC
- b) Я з'їв яблуко, що знаходилося на тарілці.
 I-NOM eat-PFV.PAST apple-ACC what-REL be-IPFV.PAST on plate-LOC

関係代名詞を使用した構文となる。関係代名詞 який は先行詞と性・数が一致するが、従属節においては主語となるため、主格である。

33. 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。[内在節・従主・主目]

- a) Я піймав kota, який забіг в дім.
 I-NOM catch-PFV.PAST cat-ACC which-RELN.NOM run_into-PFV.PAST into house-ACC
- b) Я піймав kota, що забіг в дім.
 I-NOM catch-PFV.PAST cat-ACC what-REL run_into-PFV.PAST into house-ACC

先行詞の猫は対格であるが、関係代名詞と一致するのは性・数のみで従属節においては主語となるため、従属節の構造は 32.と同様である。

略号

ACC	accusative	対格	LOC	locative	所格
COMP	comparative	比較級	M	masculine	男性
CONJN	conjunction	接続詞	N	neuter	中性
COP	copula	コピュラ	NOM	nominative	主格
DAT	dative	与格	PASSP	passive participle	受動分詞
DEF	definite	定動詞	PAST	past	過去
F	feminine	女性	PFV	perfective	完了相
FUT	future	未来	PL	plural	複数
GEN	genitive	属格	PRED	predicative	(無人称) 述語
INDF	indefinite	不定動詞	PREP	preposition	前置詞
IMP	imperative	命令形	PRS	present	現在
INF	infinitive	不定詞	REL	relative	関係代名詞
INS	instrumental	具格	SG	singular	単数
INTERR	interrogative	疑問詞	SUPER	superlative	最上級
IPFV	imperfective	不完了相			

執筆者連絡先: akimoga@hotmail.com

原稿受理: 2019年5月9日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

否定、形容詞と連体修飾複文

—チェコ語—

Negation, adjective and nominal-modifying complex sentence

-Czech-

浅岡 健志朗

Kenshiro Asaoka

東京大学大学院人文社会系研究科
University of Tokyo

要旨:本稿は特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号、東京外国語大学)に寄与する。本稿の目的は33個のアンケート項目に対するチェコ語のデータを与えることである。

Abstract: This report contributes to the special cross-linguistic study on ‘negation, adjective and nominal-modifying complex sentence’ (*Journal of the Institute of Language Research* 23, Tokyo University of Foreign Studies). The purpose of this paper is to offer the Czech data for the question of 33 phrases.

キーワード:チェコ語、否定、形容詞、連体修飾複文

Keywords: Czech, negation, adjective, nominal-modifying complex sentence

1. はじめに

「否定、形容詞と連体修飾複文」に関するアンケートに、チェコ語について回答する。調査協力者はボヘミア地方出身の30代前半チェコ語母語話者一名である。データは調査協力者が日本語をチェコ語に翻訳する方法で得られた。調査協力者はブラハ・カレル大学の日本語専攻と日本の社会学修士課程を修了しており、日本語をチェコ語に翻訳するのに十分な日本語の能力を持っている。

2. データ

以下に得られたデータを示す。

(1) Tohle neni moje kniha.
this.SG.NOM NEG.COP.3SG.PRS my.SG.NOM book.SG.NOM
「これは私の本ではない」

(2) V tomhle pokoji neni židle.
in this.SG.LOC room.SG.LOC NEG.be.3SG.PRS chair.SG.NOM
「この部屋には椅子がない」



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deedja>

(3) V tomhle pokoji není ani jedna židle.
in this.SG.LOC room.SG.LOC NEG.be.3SG.PRS even one.SG.NOM chair.SG.NOM
「この部屋には一つも椅子がない」

(4) V tom pokoji nikdo není.
in that.SG.LOC room.SG.LOC no.one.SG.NOM NEG.be.3SG.PRS
「その部屋には誰もいない」

(5) Ta kniha není v tomto pokoji.
that.SG.NOM book.SG.NOM NEG.be.3SG.PRS in this.SG.LOC room.SG.LOC
「その本はこの部屋にない」

(6) Tenhle pes není velký.
this.SG.NOM dog.SG.NOM NEG.COP.3SG.PRS big.SG.NOM
「この犬は大きくない」

(7) Tenhle pes není moc velký.
this.SG.NOM dog.SG.NOM NEG.COP.3SG.PRS very big.SG.NOM
「この犬はあまり大きくない」

(8) Tenhle pes je větší
this.SG.NOM dog.SG.NOM COP.3SG.PRS bigger.SG.NOM

než tamten pes.
than that.SG.NOM dog.SG.NOM
「この犬はあの犬より大きい」

(9) Tenhle pes je z těch psů
that.SG.NOM dog.SG.NOM COP.3SG.PRS from that.PL.GEN dog.PL.GEN

největší.
biggest.SG.NOM
「この犬がその犬たちの中で一番大きい」

(10) Dnes ten člověk nepřijde.
today that.SG.NOM person.SG.NOM NEG.come.3SG.PRS
「今日はあの人は来ない」

- (11) Ten člověk si nevezal tu knihu.¹
 that.SG.NOM person.SG.NOM NEG.take.3SG.PST that.SG.ACC book.SG.ACC
 「あの人はその本を持って行かなかった」
- (12) Všichni studenti se nezúčastnili.
 everyone.PL.NOM student.PL.NOM NEG.attend.3PL.PST
 「全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった」
- (13) Není to tak, že by se všichni studenti zúčastnili.
 it's.not.that COND.3 everyone.3PL.NOM student.PL.NOM attend.PL.PST
 「全ての学生が参加したわけではない」
- (14) (Nekoupil jsem to, ale) ne,
 NEG.buy.SG.PST AUX.1SG that.SG.ACC but no
 že by to bylo tak drahé.
 COMP COND.3 that.SG.NOM COP.SG.PST so expensive.SG.NOM
 「(私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない」
- (15) Neběhej.
 NEG.run.IMP
 「走るな！」
- (16) Nemluv nahlas.
 NEG.speak.IMP aloud
 「大きな声を出すな！」
- (17) Zítra asi nebude pršet.
 tomorrow probably NEG.AUX.3SG.FUT rain.INF
 「明日は雨は降らないだろう」
- (18) Mluv potichu, tak aby to neslyšel.
 speak.IMP quietly so.that.3 that.SG.ACC NEG.hear.SG.PST
 「あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ」
- (19) Neříkal jsem to, proto abych tě rozzlobil.
 NEG.say.PST AUX.1SG that.SG.ACC because in.order.to.1SG 2SG.ACC offend.SG.PST
 「私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない」

¹ 動詞と si が全体としてひとつの(「持っていく」に相当する意味を表す)述語を構成する。(29b)の si、(12)(13)(33)の se に関しても同様である。

- (20) Kde je ta kniha, co jsem včera koupil?
 where be.3SG.PRS that.SG.NOM book.SG.NOM what AUX.1SG yesterday buy.SG.PST
 「私が昨日買った本はどこ（にある）？」
- (21) Kdo přinesl tu knihu?
 who.NOM bring.3SG.PST that.SG.ACC book.SG.ACC
 「その本を持って来た人は誰（か）？」
- (22) Tohle je pokoj, ve kterém děláme práci.
 this.SG.NOM COP.3SG.PRS room.SG.NOM in which.SG.LOC do.1PL.PRS work.SG.ACC
 「この部屋が私たちの仕事をしている部屋です」
- (23) Tu židli, s jednou zlomenou nohou,
 that.SG.ACC chair.SG.ACC with one.SG.INS broken.SG.INS leg.SG.INS
 jsem už vyhodil.
 AUX.1SG already throw.away.SG.PST
 「足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった」
- (24) Slyším ťukání na dveře.
 hear.1SG.PRS knock.SG.ACC on door.PL.ACC
 「ドアを叩いている音が聞こえる」
- (25) Je pravda to, co se říká,
 COP.3SG.PRS truth.SG.NOM that what REFL say.3SG.PRS
 že se oženil?
 COMP REFL marry.3SG.PST
 「あの人が結婚したという噂は本当（か）？」
- (26) Když ten člověk přišel, tak jsem jedl.
 when that.SG.NOM person.SG.NOM come.3SG.PST then AUX.1SG eat.SG.PST
 「私はその人が来た時にご飯を食べていた」
- (27) Šel jsem na místo, kde čekala.
 go.SG.PST AUX.1SG to place.SG.ACC where wait.3SG.PST
 「私はその人が待っている所に行った」
- (28) a. Viděl jsem jak běžel pryč.
 see.SG.PST AUX.1SG how run.SG.PST away
 「私はその人が走っていったのを見た」

- b. Viděl jsem ho běžet pryč.
see.SG.PST AUX.1SG 3SG.ACC run.INF away
「私はその人が走っていったのを見た」
- (29) a. Včera večer jsem slyšel, jak se povídají.
yesterday in.the.evening AUX.1SG hear.SG.PST how REFL talk.3PL.PRS
「昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた」
- b. Včera večer jsem je slyšel si povídat.
yesterday in.the.evening AUX.1SG 3PL.ACC hear.SG.PST talk.INF
「昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた」
- (30) Víím, že ten člověk sem včera přišel.
know.1SG.PRS COMP that.SG.NOM person.SG.NOM here yesterday come.3SG.PST
「私はその人が昨日ここに来たことを知っている」
- (31) Včera řekl, že sem včera přišel.
yesterday say.3SG.PST COMP here yesterday come.3SG.PST
- Včera řekl, "Já jsem sem dnes přišel."
yesterday say.3SG.PST 1SG.NOM AUX.1SG here today come.SG.PST
「(昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。 / (昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った」
- (32) Snědl jsem jablko, které bylo na talíři.
eat.SG.PST AUX.1SG apple.SG.ACC which.SG.NOM be.3SG.PST on dish.SG.LOC
「私はリンゴが(あの)皿の上にあったのを食べた」
- (33) Chytil jsem kočku, která se dostala dovnitř domů.
catch.SG.PST AUX.1SG cat.SG.ACC which.SG.NOM enter.SG.PST inside home
「私はネコが家に入ってきたのを捕まえた」

略号一覧

AUX (助動詞) COMP (補文標識) COND (条件法) COP (コピュラ) GEN (属格) IMP (命令) INF (不定形) LOC (所格) NEG (否定) NOM (主格) PL (複数) PRS (現在) REFL (再帰) SG (単数)

執筆者連絡先: kenshiro.asaoka1990@gmail.com

原稿受理: 2019年5月8日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

ブルガリア語における否定、形容詞と連体修飾複文

Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification in Bulgarian

菅井 健太¹, チャラコヴァ・マリア²

Kenta Sugai, Maria Chalakova

¹北海道大学大学院文学研究院

Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University

²東京外国語大学大学院総合国際学研究所

Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨:本稿の目的は、特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号, 東京外国語大学)における33個のアンケート項目に対するブルガリア語のデータを与えることである

Abstract: This report aims to provide the Bulgarian data which answers the thirty three survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 23, which focuses on the cross linguistic study of ‘negation, adjectives, and compound sentences of adnominal modification’.

キーワード:ブルガリア語, 否定, 形容詞, 連体修飾, 複文

Keywords: Bulgarian, negation, adjective, adnominal modification, compound sentence

本稿は、特集のアンケートに答える形で、スラヴ諸語の1つであるブルガリア語のデータを提供することを目的とする。グロス議論に関わるものだけに限り付す¹。また、必要に応じて簡単な説明も付け加える。ブルガリア語のデータは、チャラコヴァ(ヴェリコ・タルノヴォ出身, 20代)が作成した。

1. これは私の本ではない。[名詞述語文/コピュラ文の否定]

Това не е моята книга.
this NEG be-PRS.3.SG my-DEF.F.SG book-F.SG

2. この部屋には椅子がない。[存在文の否定]

В тази стая няма стол.
in this room there_is_not chair

3. この部屋には一つも椅子がない。[全部否定・モノ]

В тази стая няма нито един стол.
in this room there_is_not not_a_single one chair



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed/ja>

¹ 本稿で用いる文法用語の略記は次の通り: ACC = ACCUSATIVE, AOR = AORIST, CL = CLITIC, COMP = COMPARATIVE, DEF = DEFINITE, F = FEMININE, FUT = FUTURE, IMPF = IMPERFECT, IMP = IMPERATIVE, IMPS = IMPERSONAL VERB, INF = (SHORT) INFINITIVE, M = MASCULINE, N = NEUTER, NEG = NEGATION, OBL = OBLIQUE, PL = PLURAL, PRS = PRESENT, PTCP = (ACTIVE PAST) PARTICIPLE, Q = QUESTION MARKER, REFL = REFLEXIVE, REL = RELATIVE, SG = SINGULAR, SMP = SUBORDINATING MODAL PARTICLE, SUPER = SUPERLATIVE.

4. その部屋には誰もいない。[全部否定・ヒト]

В стаята няма никой.
in room-DEF.F.SG there_is_not nobody

存在文の否定には、*have* を意味する動詞を起源とする非人称動詞 *няма* を用いる（肯定には *има*）。また、全部否定には、対象物がモノであっても、ヒトであっても否定代名詞を用いることができる。

5. その本はこの部屋にない。[所在文の否定]

Книгата я няма в тази стая.
book-DEF.F.SG it-F.SG.ACC.CL there_is_not in this room

(5)の例文にあるように、非人称動詞 *няма*（および肯定形の *има*）が用いられる場合に限り、対象物が定であるとき（当該の例では後置定冠詞を伴っている）、それと同一指示の人称代名詞の接語形対格（ここでは *я*）による二重標示が義務的となる。これは、以下(2')にもあるように、存在文の時も同様である。

- (2') この部屋にはその机はない。

В тази стая я няма масата.
in this room it-F.SG.ACC.CL there_is_not table-DEF.F.SG

また、所在文の否定については、非人称動詞 *няма* と並んで、以下(5')にあるように *be* 動詞（ブルガリア語では *съм* 動詞）を用いることも可能である。（存在文の否定では *be* 動詞は使えない。）

(5') Книгата е в тази стая.
book-DEF.F.SG is in this room

6. この犬は大きくない。[形容詞文の否定]

Това куче не е голямо.
this-N.SG dog-N.SG NEG is big-N.SG

7. この犬はあまり大きくない。[形容詞文の部分否定]

Това куче не е много голямо.
this-N.SG dog-N.SG NEG is very big-N.SG

8. この犬はあの犬より大きい。[比較級]

Това куче е по-голямо от онова куче.
this-N.SG dog-N.SG is big-COMP.N.SG from that-N.SG dog-N.SG

9. この犬がその犬たちの中で一番大きい。[最上級]

Това куче е най-голямото сред тези кучета.
this-N.SG dog-N.SG is big-SUPER.DEF.N.SG among this-PL dog-PL

10. 今日はあの人は来ない。[自動詞文の否定]

Днес онзи човек няма да дойде.
 today that-M.SG person-M.SG FUT.NEG² SMP come-PRS.3.SG

11. あの人はその本を持って行かなかった。[他動詞文の否定]

Онзи човек не взе книгата.
 that-M.SG person-M.SG NEG take-AOR.3.SG book-DEF.F.SG

12. 全ての学生が参加しなかった/学生は全員参加しなかった。[数量の全部否定]

Никой от студентите не взе участие.
 nobody from student-DEF.PL NEG take-AOR.3.SG participation

13. 全ての学生が参加したわけではない。[数量の部分否定]

Не всички студенти взеха участие.
 NEG everybody student-PL take-AOR.3.PL participation

14. (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。[文の否定]

(Аз не си купих. Но в никакъв случай)
 I NEG REFL.DAT buy-AOR.1.SG but by_no_means
 не може да се каже, че цената е висока.
 NEG can SMP REFL say-PRS.3.SG that price-DEF.F.SG is high-F.SG

15. 走るな! [禁止]

- a. Не тичай!
 NEG run-IMP.2.SG
- b. Недей да тичаш!
 don't-2.SG SMP run-PRS.2.SG
- c. Недей тича!
 don't-2.SG run-INF

禁止には、三通りの表し方がある。(15a)は動詞の命令形を用いるもの、(15b)は否定命令を表す助動詞である *недей*³と *да* 構文 (*да* + 動詞の現在形によって表される) の組み合わせによって表すもの、(15c)は *недей* と不定形の残存形⁴との組み合わせによって表すものである。Ницолова (2008: 404)によれば、こ

² *have* を意味する動詞を起源とする非人称動詞 *няма* は、*да* 構文 (*да* + 動詞の現在形) との組み合わせで、未来の否定形を形成する。一方、肯定形は *want* を意味する動詞起源の助詞 *ще* が用いられる。

³ 現代語ではほとんど用いられないことのない動詞 *дея* 「する」の否定命令形に由来する。また、2人称単数形の *недей* 以外に、*недейте* という2人称複数形の形も持つ。

⁴ 現代ブルガリア語では、動詞の不定形は失われ (現代語では *да* 構文に取って代わられた)、不定形語尾 **-ти* を除いた短縮不定形 (*съкратен инфинитив*) と呼ばれる形がわずかに用いられるのみである (Ницолова 2008: 444)。現代語で短縮不定形を用いるのは、事実上、否定命令を表す助動詞 *недей* との組み合わせで用いられる場合に限られる。

れらに意味上の違いはないが、文体面では(15a)がもっともニュートラルなのに対して、(15b)は口語的、(15c)はやや古い言い回しとされる。

16. 大きな声を出すな！ [他動詞文の禁止]

- a. Не викай!
NEG shout-IMP.2.SG
- b. Недей да викаш!
don't-2.SG SMP shout-PRS.2.SG
- c. Недей вика!
don't-2.SG shout-INF

ブルガリア語では、(16)は他動詞文とならないため、以下の例文(16')を作例した。ただし、自動詞文の禁止と形式の上で違いはない。

(16') ごみを捨てるな！

- a. Не хвърляй боклука!
NEG throw_away-IMP.2.SG rubbish-DEF.M.SG
- b. Недей да хвърляш боклука!
don't-2.SG SMP throw_away-PRS.2.SG rubbish-DEF.M.SG
- c. Недей хвърля боклука!
don't-2.SG throw_away-INF rubbish-DEF.M.SG

17. 明日は雨は降らないだろう。 [推量の否定]

Утре вероятно няма да вали дъжд.
tomorrow probably FUT.NEG SMP rain-PRS.3.SG rain

18. あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。 [目的節の否定]

Ако обичаш, говори тихо, така че да не те чуе онзи човек.
if_you_please speak-IMP.2.SG quietly so that SMP NEG you-ACC hear-PRS.3.SG that person

19. 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。 [否定のスコープの調節]

Аз не казах така, за да те ядосам.
I NEG say-AOR.1.SG so for SMP you-ACC make_angry-PRS.1.SG

20. 私が昨日買った本はどこ (にある) ? [内の関係の連体修飾節・目的語]

Къде е книгата, която купих вчера?
where is book-DEF.F.SG REL.F.SG buy-AOR.1.SG yesterday

21. その本を持って来た人は誰 (か) ? [内の関係の連体修飾節・主語]

Кой е човекът, който донесе тази книга?
who is person-DEF.M.SG REL.M.SG bring-AOR.3.SG this book

22. この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。[内の関係の連体修飾節・場所]

Това е стаята, в която ние работим.
 this is room-DEF.F.SG in REL.F.SG we work-PRS.1.PL

23. 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。[内の関係の連体修飾節・所有者]

Вече изхвърлих онзи стол, на който единият крак е счупен.
 already throw_away-AOR.1.SG that chair of REL.M.SG one-DEF.M.SG.OBL foot-M.SG is broken

24. ドアを叩いている音が聞こえる。[外の関係の連体修飾節]

Чува се как някой хлопа по врата.
 hear-PRS.3.SG REFL how somebody knock-PRS.3.SG on door

25. あの人が結婚したという噂は本当(か)? [外の関係の連体修飾節]

Истина ли е слухът, че онзи човек се е оженил?
 truth Q is rumour-DEF.M.SG that that-M.SG person-M.SG REFL be-PRS.3.SG marry-PTCP.M.SG

26. 私はその人が来た時にご飯を食べていた。[時間節]

Аз ядах, когато онзи човек дойде.
 I eat-IMPF.1.SG when that-M.SG person-M.SG come-AOR.3.SG

27. 私はその人が待っている所に行った。[場所節]

Аз отидох на мястото, където онзи човек чакаше.
 I go-AOR.1.SG to place-DEF.N.SG where that-M.SG person-M.SG wait_for-IMPF.3.SG

28. 私はその人が走っていったのを見た。[補文節・視覚]

Аз видях, как онзи човек избяга.
 I see-AOR.1.SG how that-M.SG person-M.SG run_away-AOR.3.SG

視覚の補文節について、(28)の例文では一通りの訳しかできないが、補文節の動詞を別のものに変え
 ると、以下(28')に示すように二通りの構造が可能である。

- (28') 私はその人が建物を出ていったのを見た。

a. Аз видях, как онзи човек напусна сградата.
 I see-AOR.1.SG how that-M.SG person-M.SG leave-AOR.3.SG building-DEF.F.SG

b. Аз видях онзи човек да напуска сградата.
 I see-AOR.1.SG that person SMP leave-PRS.3.SG building-DEF.F.SG

(28'a)は接続詞 *как* を用いたものであり、(28'b)は *да* 構文を用いたものである。

29. 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[補文節・聴覚]

a. Вчера през нощта аз чух, как те си говореха.
 yesterday at night-DEF.F.SG I hear-AOR.1.SG how they REFL.DAT talk-IMPF.3.PL

b. Вчера през нощта аз ги чух да си говорят.
 yesterday at night-DEF.F.SG I they-ACC.CL hear-AOR.1.SG SMP REFL.DAT talk-PRS.3.PL

聴覚の補文節もまた、二通りの構造が可能である。一方で、以下(30)にあるように、知識の補文節は接続詞（ここでは *че*）を用いたものに限られ、*да* 構文を用いた構造は許容されない。

30. 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。[補文節・知識]

Аз знам, че вчера онзи човек е идвал тук.
 I know-PRS.1.SG that yesterday that-M.SG person-M.SG be-PRS.3.SG come-PTCP.M.SG here

31. a. (昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。[補文節・間接話法]

(Вчера) той каза, че днес е дошъл тук.
 yesterday he say-AOR.3.SG that today be-PRS.3.SG come-PTCP.M.SG here

b. (昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。[補文節・直接話法]

(Вчера) той каза: „Аз днес дойдох тук.“
 yesterday he say-AOR.3.SG I today come-AOR.1.SG here

32. 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた。[内在節・従主・主主]

Аз изядох ябълката, която беше върху чинията.
 I eat_up-AOR.1.SG apple-DEF.F.SG REL.F.SG was on dish-DEF.F.SG

33. 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。[内在節・従主・主目]

Аз хванах котката, която влезе в къщата.
 I catch-AOR.1.SG cat-DEF.F.SG REL.F.SG enter-AOR.3.SG in house-DEF.F.SG

ブルガリア語には主要部内在型関係節はない。したがって、(32)および(33)の例文は外在型関係節で表される。

参考文献

Ницолова, Руселина. 2008. *Българска граматика, морфология*, София: УИ „Св. Климент Охридски“

執筆者連絡先: ksugai@let.hokudai.ac.jp (菅井), aikanyou@hotmail.com (チャラコヴァ)

原稿受理: 2019年5月8日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

ラトヴィア語における否定、形容詞と連体修飾複文
Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification in Latvian

堀口 大樹
Daiki Horiguchi

岩手大学
Iwate University

要旨:本稿の目的は、特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号、東京外国語大学)における33個のアンケート項目に対するラトヴィア語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Latvian data which answers the thirty three survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 23, which focuses on the cross linguistic study of ‘negation, adjectives, and compound sentences of adnominal modification’.

キーワード:ラトヴィア語, 否定, 形容詞, 連体修飾, 複文

Keywords: Latvian, negation, adjective, adnominal modification, compound sentence

1. はじめに

以下、調査項目を大きく否定と連体修飾に分け、アンケート項目の例文のラトヴィア語訳を示し、適宜コメントを加える。なお、ラトヴィア語訳は本論文の筆者が行い、ラトヴィア人のコンサルタント(リーガ出身・在住、女性、30代)にチェックをしていただいた。なおグロスについては便宜上、男性・女性といった文法性の表示は省略し、名詞と形容詞の単数・複数の表示は英語による翻訳で示した。

2. 否定

1. これは私の本ではない。[名詞述語文/コピュラ文の否定]

Šī nav mana grāmata.

this.NOM be.PRS.3.NEG my.NOM book.NOM

be動詞に相当する動詞 būt の3人称現在形 ir の否定形 nav を用いる。なおラトヴィア語での動詞の3人称では、単数と複数の区別がなく同形となる。

2. この部屋には椅子がない。[存在文の否定]

Šajā istabā nav krēsla.

this.LOC room.LOC be.PRS.3.NEG chair.GEN

存在文の否定では、主語が属格で表示される。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed/ja>

3. この部屋には一つも椅子がない。[全部否定・モノ]

Šajā istabā nav neviena krēsla.
this.LOC room.LOC be.PRS.3.NEG any.GEN chair.GEN

存在文の否定では主語が属格で表示される。否定代名詞の *neviens* 「一つの／誰 (…もない)」を用いて、全否定を表す。

4. その部屋には誰もいない。[全部否定・ヒト]

Tajā istabā nav neviena.
that.LOC room.LOC be.PRS.3.NEG no.one.GEN

存在文の否定で、否定代名詞の *neviens* 「誰／一つの (も…でない)」の属格を用いて、全否定を表す。

5. その本はこの部屋にない。[所在文の否定]

Tā grāmata nav šajā istabā.
that.NOM book.NOM be.PRS.3.NEG this.LOC room.LOC

所在文の否定は、動詞 (be 動詞 *būt* の 3 人称現在形 *ir*) を否定形 *nav* にするのみである。

6. この犬は大きくない。[形容詞文の否定]

Šis suns nav liels.
this.NOM dog.NOM be.PRS.3.NEG big.NOM

形容詞文の否定は、動詞 (be 動詞 *būt* の 3 人称現在形 *ir*) を否定形 *nav* にするのみである。

7. この犬はあまり大きくない。[形容詞文の部分否定]

Šis suns nav tik liels.
this.NOM dog.NOM be.PRS.3.NEG so big.NOM

be 動詞を否定形にし、副詞 *tik* 「あまりに」を用いて部分否定を表す。

8. この犬はあの犬より大きい。[比較級]

Šis suns ir lielāks nekā tas.
this.NOM dog.NOM be.PRS.3 big.COMP than that.NOM
Šis suns ir lielāks par to.
this.NOM dog.NOM be.PRS.3 big.COMP than that.ACC

形容詞 *liels* の比較級 *lielāks* を用いる。比較対象には接続詞 *nekā* または前置詞 *par* を用いる。接続詞 *nekā* と前置詞 *par* に意味上の使い分けは見られない。

9. この犬がその犬たちの中で一番大きい。[最上級]

Šis suns ir vislielākais no tiem suņiem.
this.NOM dog.NOM be.PRS.3 big.SUPER from those.DAT dogs.DAT
Šis suns ir lielākais no tiem suņiem.
this.NOM dog.NOM be.PRS.3 big.COMP.DEF from those.DAT dogs.DAT

形容詞 *liels* 「大きい」の最上級 *vislielākais* を用いる。また比較級 *lielāks* を限定形にした *lielākais* も最上級の意味を持つ。両者に意味上の使い分けは見られない。また *lielākais* の前に代名詞 *pats* 「自身、自体」をつけて、最上級の意味を強調することもある。比較の範囲は前置詞 *no* 「…から」や前置詞 *starp* 「…の間

で], または名詞の属格+vidū (名詞 vidus 「間」の単數位格) を用いる。

10. 今日はあの人は来ない。[自動詞文の否定]

Šodien tas cilvēks neatnāk.
today that.NOM man.NOM come.PRS.3.NEG
動詞の否定形は否定辞 ne-を動詞に付加して作る。

11. あの人はその本を持って行かなかった。[他動詞文の否定]

Tas cilvēks nepaņēma to grāmatu.
that.NOM man.NOM take.out.PST.3 that.ACC book.ACC

動詞の否定形は否定辞 ne-を動詞に付加して作る。ラトヴィア語と同系統のリトアニア語では他動詞文の対格補語が否定になると、属格補語になるが、現代ラトヴィア語では否定文でも対格補語が一般的である。

12. 全ての学生が参加しなかった/学生は全員参加しなかった。[数量の全部否定]

Visi studenti nepiedalījās.
all.NOM students.NOM participate.PST.3.NEG
代名詞 visi 「すべての」を用い、動詞を否定形にする。

13. 全ての学生が参加したわけではない。[数量の部分否定]

Ne visi studenti piedalījās.
not all.NOM students.NOM participate.PST.3
否定詞の ne を代名詞 visi 「すべての」の前に置き、動詞は否定形にしない。

14. (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。[文の否定]

Tas nenozīmē, ka cena ir dārga.
it.NOM mean.PRS.3.NEG CONJN price.NOM be.PRS.3 expensive.NOM

前の状況を受けた代名詞 tas 「それ」と動詞 nozīmēt 「意味する」の否定形を用い、接続詞 ka で従属文を続ける。

15. 走るな! [禁止]

Neskrien!
run.IMP.2.SG.NEG
Neskriet!
run.INF.NEG

動詞 skriet 「走る」の命令法 2 人称単数形 skrien に否定辞 ne. を加え、禁止を表す。または、動詞不定形だけで命令や (否定辞を伴って) 禁止の意味を表すことができる。命令法に比べて断固とした響きを持つ。

16. 大きな声を出すな! [他動詞文の禁止]

Nerunā skaļi.
speak.IMP.2.SG.NEG loudly

Nerunā skaļā balsī.
speak.IMP.2.SG.NEG loud.LOC voice.LOC

動詞 runāt「話す」の命令法 2 人称単数形の否定で禁止を表す。副詞 skaļi「(声が) 大きく」または位格の名詞句 skaļā balsī「大きな声で」を用いるのが一般的で、他動詞文にはならない。

17. 明日は雨は降らないだろう。[推量の否定]

Es domāju, ka rīt nelīs.
I.NOM think.PRS.1.SG CONJN tomorrow rain.FUT.3.NEG

Es domāju, ka rīt nebūs lietus.
I.NOM think.PRS.1.SG CONJN tomorrow be.FUT.3.NEG rain.GEN

動詞 domāt「思う、考える」と従属接続詞 ka を用いる。動詞 līt「(雨が) 降る」の未来形の否定、または be 動詞の未来形の否定を用いる。後者は存在文の否定なので、名詞 lietus「雨」は否定属格 lietus (単数主格と同形) となる。

18. あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。[目的節の否定]

Runā klusi, lai tas cilvēks nedzirdētu.
speak.IMP.2.SG quietly CONJN that.NOM man.NOM hear.SBJV.NEG

目的節を導く願望の接続詞 lai を用いる。目的節では接続法(ラトヴィア語学では願望法 vēlējuma izteiksme と呼ばれる)を用い、動詞は否定形となる。

19. 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。[否定のスキープの調節]

Es neteicu tā, lai jūs aizvainotu.
I.NOM say.PST.1.SG.NEG so CONJN you.ACC offend.SBJV

主節の動詞を否定形にし、「あなたを怒らせるために」という目的節を導く願望の接続詞 lai を用いる。目的節では接続法を用いる。主節の主語と目的節の主語が一致する場合、目的節では主語を示さない。

3. 連体修飾

20. 私が昨日買った本はどこ(にある)? [内の関係の連体修飾節・目的語]

Kur ir grāmata, ko es nopirku vakar?
where be.PRS.3 book.NOM REL.ACC I.NOM buy.PST.1.SG yesterday

「本」を先行詞とした関係代名詞を用いる。

21. その本を持って来た人は誰(か)? [内の関係の連体修飾節・主語]

Kas atnesa to grāmatu?
who.NOM bring.PST.3 that.ACC book.ACC
Kas bija cilvēks, kas atnesa to grāmatu?
who.NOM be.PST.3 man.NOM REL.NOM bring.PST.3 that.ACC book.ACC

疑問詞 kas「誰」を用いるのが一般的である。または先行詞 cilvēks「人」と関係代名詞を用いる。

22. この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。[内の関係の連体修飾節・場所]

Šī ir istaba, kur mēs strādājam.
this.NOM be.PRS.3 room.NOM where we.NOM work.PRS.1.PL

先行詞 *istaba* 「部屋」と場所を示す関係副詞 *kur* 「そこで」を用いる。

23. 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。[内の関係の連体修飾節・所有者]

Es jau izmetu to krēslu,
I.NOM already throw.away.PST.1.SG that.ACC chair.ACC
kuram bija viena salauzta kājiņa.
REL.DAT be.PST.3 one.NOM break.PST.PASSP foot.NOM

関係代名詞 *kurš* を用いる。関係節では *kājiņa* 「足」が主語で、「足」の所有者である椅子を先行詞とする。関係代名詞は与格で示される。

24. ドアを叩いている音が聞こえる。[外の関係の連体修飾節]

Es dzirdu, kā klauvē pie durvīm.
I.NOM hear.PRS.1.SG CONJN knock.PRS.3 at doors.DAT
Es dzirdu klauvējam pie durvīm.
I.NOM hear.PRS.1.SG knock.INDP at doors.DAT

聴覚動詞の補文節を導く接続詞 *kā* を用い、無主語で人一般を示し、動詞は 3 人称現在形を用いる。28 や 29 のように視覚・知覚対象となる動作を *-am/-ām* (再帰動詞では *-amies/-āmies*) で終わる不変化分詞 (indeclinable participle : INDP) で示すこともできる。不変化分詞については 28 で詳細を説明する。

25. あの人が結婚したという噂は本当 (か) ? [外の関係の連体修飾節]

Vai baumas, ka tas cilvēks apprecējās, ir patiesas?
Q gossip.NOM CONJN that.NOM man.NOM get.married.PST.3 be.PRS.3 true.NOM

名詞 *baumas* 「噂」の修飾節を導く接続詞 *ka* を用いる。

26. 私はその人が来た時にご飯を食べていた。[時間節]

Es ēdu, kad atnāca tas cilvēks.
I.NOM eat.PST.1.SG CONJN come.PST.3.SG that.NOM man.NOM

時間節を導く接続詞 *kad* を用いる。

27. 私はその人が待っている所に行った。[場所節]

Es aizgāju uz vietu, kur gaidīja tas cilvēks.
I.NOM go.PST.1.SG to place.ACC where wait.PST.3.SG that.NOM man.NOM

場所節を導く関係副詞 *kur* を用いる。

28. 私はその人が走っていったのを見た。[補文節・視覚]

Es redzēju, kā skrēja tas cilvēks.
I.NOM see.PST.1.SG how run.PST.3 that.NOM man.NOM
Es redzēju to cilvēku skrienam/skrienot.
I.NOM see.PST.1.SG that.ACC man.ACC run.INDP

視覚動詞の補文節を導く接続詞 *kā* を用いるか、視覚対象を対格補語として、その行為を示す不変化分詞「…しているのを」を用いる。動詞 *skriet* 「走る」の不変化分詞は *skrienam* または *skrienot* である。不変化分詞には 2 種類の語尾がある。 *-am/-ām* (再帰動詞では *-amies/-āmies*) で終わる不変化分詞は、動詞の

一人称複数現在形と同形で、視覚動詞・聴覚動詞などの知覚動詞の目的語が主体となって行う動作をもっぱら示す。それに対して-ot（再帰動詞では-oties）で終わる不変化分詞は、-am/-ām（再帰動詞では-amies/-āemies）で終わる不変化分詞と同じく、知覚動詞の目的語が主体となって行う動作のほか、補文節で主体が行う付帯状況を示すため、使用範囲はより広い。例えば、Es lasu grāmatu, klausoties radio. 「ラジオを聴きながら、私は本を読む」では、動詞 klausīties 「聴く（再帰動詞）」の-ot(ies)で終わる不変化分詞 klausoties が用いられている。28.や29.のように知覚動詞の目的語が主体となって行う動作を示す場合、2つの不変化分詞には意味上の使い分けはない。ただし24.のように「ドアを叩く」主体が明示されない場合は、-ot（再帰動詞では-oties）ではなく-am/-ām（再帰動詞では-amies/-āemies）で終わる不変化分詞を用いる。

29. 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[補文節・聴覚]

Vakar vakarā es dzirdēju, kā viņi sarunājās.
 yesterday night.LOC I.NOM hear.PST.1.SG how they.NOM talk.PST.3
 Vakar vakarā es dzirdēju viņus sarunājamies/sarunājoties.
 yesterday night.LOC I.NOM hear.PST.1.SG they.ACC talk.INDP

28と同様に、聴覚動詞の補文節を導く接続詞 kā を用いるか、聴覚対象を対格補語としてその行為を不変化分詞で示す。動詞 sarunāties 「しゃべる」の不変化分詞 sarunājamies または sarunājoties を用いる。

30. 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。[補文節・知識]

Es zinu, ka tas cilvēks vakar atnāca šurp.
 I.NOM know.PRS.1.SG CONJN that.NOM man.NOM yesterday come.PST.3 here
 補文節を導く接続詞 ka を用いる。

31. (昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。 / (昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。[補文節・直接発話 / 間接話法]

Viņš teica: “Es šodien biju šeit”.
 he.NOM say.PST.3 I.NOM today be.PST.1.SG here
 Viņš teica, ka vakar bija šeit.
 he.NOM say.PST.3 CONJN yesterday be.PST.3 here
 間接話法では補文節を導く接続詞 ka を用いる。

32. 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた。[内在節・従主・主主]

Es apēdu ābolu, kas atradās uz šķīvja.
 I.NOM eat.PST.1.SG apple.ACC REL.NOM be.located.PST.3 on dish.GEN
 リンゴを先行詞とした関係代名詞を用いる。

33. 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。[内在節・従主・主目]

Es pieķēru kaķi ieejam/ieejot mājā.
 I.NOM catch.PST.1.SG cat.ACC enter.INDP house.LOC
 Es pieķēru kaķi, kas iegāja mājā.
 I.NOM catch.PST.1.SG cat.ACC REL.NOM enter.PST.3 house.LOC

「捕まえる」は視覚・聴覚動詞ではないが、視覚・聴覚動詞と同様に、対象が行う動作を示す不変化分

詞 *ieejam* または *ieejot* 「入るのを, 入ったのを」を用いることができる。または, *ネコ* を先行詞とした関係代名詞を用いる。

略語リスト

1	1 人称	LOC	位格
2	2 人称	NEG	否定
3	3 人称	NOM	主格
ACC	対格	PASSP	受動分詞
COM	比較級	PL	複数
CONJN	接続詞	PRS	現在
DAT	与格	PST	過去
DEF	定性	Q	疑問マーカー
FUT	未来	REL	関係代名詞
GEN	属格	SBJV	接続法 (願望法)
IMP	命令法	SG	単数
INDP	不変化分詞	SUPER	最上級
INF	不定形		

執筆者連絡先: dhorig@iwate-u.ac.jp

原稿受理: 2019 年 5 月 2 日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

リトアニア語の否定、形容詞と連体修飾節

Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification in Lithuanian

櫻井 映子

Eiko Sakurai

東京外国語大学非常勤講師

Part-time Lecturer, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿の目的は、特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号、東京外国語大学)における33個のアンケート項目に対するリトアニア語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Lithuanian data which answers the thirty three survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 23, which focuses on the cross linguistic study of 'negation, adjectives, and compound sentences of adnominal modification'.

キーワード: リトアニア語, 否定, 形容詞, 連体修飾, 複文

Keywords: Lithuanian, negation, adjective, adnominal modification, compound sentence

リトアニア語は、バルト海東岸に位置するリトアニア共和国の公用語で、話者の数は約300万人である。姉妹語のラトヴィア語とともにインド・ヨーロッパ語族のバルト語派に属している。古い屈折組織や自由アクセントをよく保持しており、インド・ヨーロッパ語族の諸現代語中でも最も古風な言語の一つに数えられている。名詞類は7つの格(主格, 属格, 与格, 対格, 具格, 位格, 呼格)と2つの性(男性, 女性)を区別し、動詞は3つの人称(1・2・3人称)と2つの数(単数, 複数)を区別する。語順はかなり自由であるが、優勢な語順はSVOで、典型的な他動詞構文では、主語は主格、直接目的語は対格を取る。間接目的語は与格を取り、直接目的語より前に置かれる傾向がある。

また、リトアニア語は、分詞の種類と形態が非常に豊富な言語である。分詞は、形態によって以下のように大別される。

(a) 分詞(形容詞的分詞): 性・数・格により変化する。能動態と受動態がある。現在/ (一般) 過去/ 習慣過去/ 未来能動分詞, 現在/ 過去/ 未来受動分詞, 必要分詞がこれに属する。

(b) 半分詞: 性・数により変化する(主格形のみ)。能動態のみで受動態をもたない。

(c) 副分詞(副詞的分詞): 不変化である。能動態のみで受動態をもたない。現在/ 過去/ 習慣過去/ 未来副分詞がこれに属する。

形容詞的な分詞は、基本的に、定語的、半述語的(状況語的・補語的)、および、述語的機能をもつ。半分詞と副分詞は、半述語的機能のみをもつ。

関係節は、関係代名詞を用いて形成される(関係代名詞型)。関係代名詞は性・数・格により変化する、被修飾名詞が関係節の中で担う文法的役割(主語、目的語等)を示す。関係代名詞は被修飾名詞の直後(関係節の最初)に置かれる。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

否定は、否定標識である否定詞 *ne* によって表される。主な否定詞には、*ne* “ない、いいえ”、*nebe* “もはや～ない”、*nė* および *nei* “～も (ない)” の4つがある。*ne* “ない、(質問に答えて) いいえ” と *nebe* “もはや～ない” は否定の接頭辞としての機能も兼ねており、形容詞、副詞、名詞に付して否定の意味を表すのみならず、動詞に付して否定文を形成するのに用いられる (*ne-*, *nebe-*; 動詞と一続きに綴られる)。*nė* および *nei* は、ふつう否定標識である *ne* (あるいは *nebe*) をともなって、否定の強意を表す。なお、英語などとは異なり、リトアニア語では、*niekas* 「誰も・何も (～ない)」、*niekad* 「かつて・一度も (～ない)」、*niekaip* 「決して (～ない)」、*niekur* 「どこにも (～ない)」といった否定の代名詞や副詞も、一般的に *ne* (*ne-*) をともない、単独では用いられない。

なお、バルト・スラヴ諸語に共通する「否定の属格 (生格)」、すなわち、否定の他動詞文の直接目的語、および、否定の存在文 (すなわち不在を表す文) の主語は属格をとる現象が、リトアニア語においても見られる。

それでは、以下にリトアニア語の言語データを示す。文脈や発話状況により多様な表現が可能であるが、ここでは最も基本的な表現のみを挙げる。リトアニア語への翻訳にあたり、3名のリトアニア人にインフォーマントとして協力を依頼した¹。

【名詞述語文／コピュラ文の否定】

リトアニア語の動詞 *būti* 「ある、いる、～である」は、英語の *be* 動詞に相当し、存在動詞としてもコピュラ動詞としても機能する。

まず、日本語の「これは～である」という意味の文に相当するリトアニア語の表現 *Čia [yra] ~ (būti* の3人称現在形 *yra* は省略可能)、直訳すると「ここに～がある」という意味である。これは本来的には存在文であり、コピュラ文ではない。*būti* の否定形 *nebūti* の人称変化形 (3人称現在形 *nėra*) を用いると *Čia nėra ~* 「ここには～がない」という不在の意味になる。よって、「これは～ではない」という意味を表す否定文を作るには、*būti* の後に否定詞 *ne* を添える。

(1) これは私の本ではない (直訳：ここにあるのは私の本ではない)。

<i>Čia</i>	<i>[yra]</i>	<i>ne</i>	<i>mano</i>	<i>knyga</i> . ²
ここに	ある.PRS.3	NEG	私の	本.F.SG.NOM

一方、「それは～ではない」という表現は、定代名詞 *tai* 「それ」(中性形) を主語とするコピュラ文の否定である。*būti* の否定 *nebūti* の3人称現在形 *nėra* は、否定詞 *ne* に置換可能である。

(1)' それは私の本ではない。

a. <i>Tai</i>	<i>nėra</i>	<i>mano</i>	<i>knyga</i> .
それは	～でない.PRS.3	私の	本.F.SG.NOM

¹ 調査に協力してくださった Ramutė Bingelienė 氏 (1966年 Klaipėda 生まれ、ヴィリニウス大学リトアニア語教師)、Jurgita Ignocienė 氏 (1983年 Rokiškis 生まれ、同大学日本語教師) ならびに Mindaugas Ignocias 氏 (1985年 Vilnius 生まれ、同大学日本語教師) に心よりお礼申し上げます。なお、インフォーマントによれば、本アンケートで扱う内容に関する限り、方言差や世代差はとくに感じられないとのことである。

² 本稿で用いる略号は以下の通り：ACC accusative (対格); ADV adverb(ial) (副詞(的)); DAT dative (与格); F feminine (女性); FUT future (未来); GEN genitive (属格); IMP imperative (命令法); INF infinitive (不定詞); INS instrumental (具格); LOC locative (位格); M masculine (男性); N neuter (中性); NEG negative (否定); NOM nominative (主格); P participle (分詞); PASS passive (受動態); PL plural (複数); PRS present (現在); SG singular (単数)。なお、括弧 [] は省略可能、括弧 { } は置換可能であることを示す。

- b. Tai ne mano knyga.
 それは NEG 私の 本.F.SG.NOM

【存在文の否定】

存在動詞として機能する būti 「ある, いる」の否定 nebūti 「ない, いない」を述語とする存在文の否定(不在を表す文)の場合, 主語は主格ではなく属格(いわゆる「否定の属格」)となる。基本的に, 可算名詞は複数属格, 不可算名詞は単数属格で表されるが, 「一つもない」というニュアンスをもつ場合は, 可算名詞でも単数となる。

- (2) この部屋には椅子がない。

Šiame kambaryje nėra {kėdės / kėdžių}.
 この 部屋に.M.SG.LOC ない.PRS.3 椅子が.F.SG/PL.GEN

【全部否定・モノ】

全部否定は, nè/nei vienas 「一人も・一つも(～ない)」, もしくは, 副詞 visai 「まったく」と, 否定詞 ne をともなう否定表現によって表される。なお, nè/nei vienas の vienas は数詞の「1」であり, 形容詞や代名詞などと同様に, 関係する名詞の性・数・格に一致する。

- (3) この部屋には一つも椅子がない。

- a. Šiame kambaryje nėra {nė / nei} vienos kėdės.
 この 部屋に.M.SG.LOC ない.PRS.3 一人も・一つも.F.SG.GEN 椅子が.F.SG.GEN
- b. Šiame kambaryje visai nėra kėdžių.
 この 部屋に.M.SG.LOC まったく ない.PRS.3 椅子が.F.PL.GEN

【全部否定・ヒト】

否定代名詞 niekas は「誰も・何も(～ない)」はヒトにもモノにも用いられる。

- (4) その部屋には誰もいない。

- a. Tame kambaryje nėra nė vieno žmogaus.
 その 部屋に.M.SG.LOC ない.PRS.3 一人も・一つも.M.SG.GEN 人が.M.SG.GEN
- b. Tame kambaryje nieko nėra.
 その 部屋に.M.SG.LOC 誰も・何も.GEN いない.PRS.3

【所在文の否定】

所在文の否定については, 単純に「～は～にない」という意味を表す場合には, 存在動詞 būti の否定 nebūti 「ない, いない」を述語とし, 主語は属格(否定の属格)になる。

- (5) その本はこの部屋にない。

- a. Tos knygos nėra šiame kambaryje.
 その 本は.F.SG.GEN ない.PRS.3 この 部屋に.M.SG.LOC

一方, 「～は～にはない」, すなわち, この部屋にはないが, 他の場所にあることを意味する場合は, 存在動詞として機能する būti は肯定形のまま, 否定詞 ne は分離して「この部屋に」のような所在の場所の表現の前に置かれる。存在自体を否定するわけではないので, 主語は主格のまま「否定の属格」とはならない。

- b. Ta knyga yra ne šiame kambaryje.
 その本は.FSG.NOM ある.PRS.3 NEG この部屋に.M.SG.LOC
 その本はこの部屋にはない（他の場所にある）。

【形容詞文の否定】

形容詞文の否定の場合、コピュラ動詞として機能する *būti* 「～である」の否定形 *nebūti* 「～でない」を用いる文(6a)、および、形容詞に否定詞 *ne-*を付加して形成される否定の意味の形容詞を用いた文(6b)のいずれも可能である。インフォーマントによれば、両者の違いはあまり感じられないが、厳密に言えば、(6a)は文全体の否定、(6b)は特性の否定である。すなわち、(6a)は「予想は外れていた。実際に見てみると、この犬は大きくない」などといったコンテキストが可能であるが、(6b)はそうではない。一方、(6b)の *ne-didelis* 「大きくない」のような、*ne-*を付加して形成される否定の形容詞は、意味的には「大きい」に対して「小さい」のように、もとの形容詞の反意語に相当する。従って、他の形容詞との組み合わせによる、「この犬は賢くおだやかで大きくない。家で飼うのに適している」といったコンテキストが想定できる。

(6) この犬は大きくない。

- a. Šis šuo nėra didelis.
 この犬は.M.SG.NOM ～でない.PRS.3 大きい.M.SG.NOM
- b. Šis šuo [yra] ne-didelis.
 この犬は.M.SG.NOM ～である.PRS.3 NEG-大きい.M.SG.NOM

【形容詞文の部分否定】

形容詞文の部分否定は、英語などと同様に、副詞 *labai* 「とても」を形容詞に添え、*būti* 「～である」の否定形 *nebūti* 「～でない」を用いた文(7a)、および、副詞 *labai* 「とても」に否定詞 *ne* を付加して形成される部分否定を表す副詞 *nelabai* 「あまり～ない」を用いた文(7b)、いずれも可能である。

(7) この犬はあまり大きくない。

- Šis šuo nėra labai didelis.
 この犬は.M.SG.NOM ～でない.PRS.3 とても 大きい.M.SG.NOM
- Šis šuo [yra] ne-labai didelis.
 この犬は.M.SG.NOM ～である.PRS.3 NEG-とても (=あまり～ない) 大きい.M.SG.NOM

【比較級】

リトアニア語には、形容詞と副詞に比較級の形式がある。比較基準（対象）「～よりも」は、*negu*+主格、もしくは、*už*+対格によって表される。

(8) この犬はあの犬より大きい。

- a. Šis šuo [yra] didesnis negu tas šuo.
 この犬は.M.SG.NOM ～である.PRS.3 より大きい.M.SG.NOM ～よりも あの犬.M.SG.NOM
- b. Šis šuo [yra] didesnis už tą šunį.
 この犬は.M.SG.NOM ～である.PRS.3 より大きい.M.SG.NOM ～よりも あの犬.M.SG.ACC

【最上級】

リトアニア語には、形容詞と副詞に最上級の形式がある。形容詞の最上級には、しばしば、強意の代名詞 *pats/pati* 「自身、まさに」（男性／女性）が添えられる。

(9) この犬がその犬たちの中で一番大きい.

- a. Šis šuo [yra] (pats) didžiausias tarp tų šunų.
 この 犬は.M.SG.NOM ~である.PRS.3 まさに 最も大きい.M.SG.NOM ~の間で その 犬.M.PL.GEN
- b. Šis šuo [yra] (pats) didžiausias iš tų šunų.
 この 犬は.M.SG.NOM ~である.PRS.3 まさに 最も大きい.M.SG.NOM ~の中から その 犬.M.PL.GEN

【自動詞文の否定】

自動詞文のうち, 存在文の否定である不在文の場合以外は, 「否定の属格」は見られない.

(10) 今日はあの人には来ない.

Šiandien tas žmogus ne-ateis.
 今日 あの人.M.SG.NOM NEG-来る.FUT.3

【他動詞文の否定】

他動詞文の否定の場合は, 直接目的語が対格ではなく属格となる「否定の属格」が義務的に見られる.

(11) あの人はその本を持って行かなかった.

Tas žmogus ne-pasiėmė tos knygos.
 あの人.M.SG.NOM NEG-持って行った.PAST.3 その 本を.F.SG.GEN

【数量の全部否定】

数量の全部否定の場合, 定代名詞 *visas* 「全ての」と否定詞 *ne* による「全ての～が～なかった」という表現が可能である(12a). ただし, インフォーマントによれば, 否定代名詞 *niekas* 「誰も・何も(～ない)」や *nė vienas* 「一人も・一つも(～ない)」を用いた全部否定の表現の方がより自然である(12b, c).

(12) 全ての学生が参加しなかった/学生は全員参加しなかった.

- a. Visi studentai ne-dalyvavo.
 すべての 学生たち.M.PL.NOM NEG-参加した.PAST.3
- b. Niekas iš studentų ne-dalyvavo.
 誰も・何も.NOM ~の中から 学生たち.M.PL.GEN NEG-参加した.PAST.3
- c. Nė vienas studentas ne-dalyvavo.
 一人も・一つも.M.SG.NOM 学生.M.SG.NOM NEG-参加した.PAST.3

【数量の部分否定】

(13) 全ての学生が参加したわけではない.

Ne visi studentai dalyvavo.
 NEG すべての 学生たち.M.PL.NOM 参加した.PAST.3

【文の否定】

(14) (私は買わなかった. しかし, 決して) 値段が高いというわけではない.

(Aš nepirkau. Bet jokiū būdu) ne dėl to, kad kaina [yra] didelė.
 私は買わなかった しかし 決して NEG ~ために ~こと 値段.F.SG.NOM ~である.PRS.3 大きい.F.SG.NOM

【禁止】

禁止は, 命令形に否定接頭辞の *ne-* を添えて表すのが一般的である.

(15) 走るな！

Ne-bėk!
NEG-走れ.IMP.2SG

(16) 大きな声を出すな！

Ne-kalbėk garsiai!
NEG-話せ.IMP.2SG 大声で・大きな声を出して

【推量の否定】

推量「～だろう」は、モダリティ的な意味をもつ接続法現在形の *turėti* 「もつ」（「おそらく～だろう」）と動詞の不定形の組み合わせによって表される。否定の場合は、*turėti* に否定の接頭辞 *ne-* を付ける。

(17) 明日は雨は降らないだろう。

- a. *Rytoj ne-turėtų* *lyti.*
明日 NEG-おそらく～だろう.SBJV.PRS.3 雨降る.INF
- b. *Rytoj ne-turėtų* *būti lietaus.*
明日 NEG-おそらく～だろう.SBJV.PRS.3 ある.INF 雨.M.SG.GEN

【目的節の否定】

リトアニア語の目的節は接続詞 *kad* によって導かれる。目的節内では、肯定・否定の別にかかわらず、接続法が用いられる。

(18) あの人の聞こえないように、小さな声で話してくれ。

Kalbėk tyliai, kad tas žmogus ne-išgirstų.
話せ.IMP.2SG 小さな声で ～こと（ように） あの 人.M.SG.NOM NEG-聞きつける.SBJV.PRS.3

【否定のスキープの調節】

例文(19)の日本語の文「私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない」をリトアニア語に訳すと、「私がそう言ったのは、あなたを怒らせたかったためではない」という表現になる。例文(19)のような場合、日本語とは異なり、リトアニア語では動詞「言った」を否定形にして「言わなかった（言ったんじゃない）」と訳すことはできない。理由を表す従属節 *dėl to, kad* 「～ために、～ので」の前に否定詞 *ne* を添える。

(19) 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。

Aš taip sakiau ne dėl to,
私は.1SG.NOM そのように言った.PAST.1SG NEG そのために

kad norėjau jus įžeisti.
～こと ～したかった.PAST.1SG あなたを.2PL.ACC 怒らせる.INF

【内の関係の連体修飾節・目的語】

日本語の内の関係の連体修飾節に対応するのは、リトアニア語では、多くの場合、関係代名詞として機能する疑問詞 *kuris* 「どの」を用いた関係代名詞節である。分詞がこれに代わることもある。関係代名詞節の先行詞である被修飾語名詞には、定代名詞の *tas* 「その」が任意で添えられる(20a)。また、リトアニア語は、受動が書き言葉のみならず話し言葉においてもきわめて頻繁に用いられる言語であり、受動分詞による「私によって昨日買われた本はどこにある？」のような（日本語に直訳すれば不自然となる）表現も全く自然である。なお、リトアニア語の受動文の動作者は属格（1・2人称の場合は所有代名詞）

によって表される (20b). インフォーマントによれば, 両者の違いは, (20a)は, 「(私が) その本を買った」という行為がすでに遂行された (そしてすでにその本を持っている) ことに重点が置かれた表現であるのに対し, (20b)は, 受動分詞による定語的表現であり, その本は (たとえば, もらったのではなく) 「(私が) 買った」ものである点に重点が置かれた表現であると言える.

(20) 私が昨日買ってきた本はどこ (にある) ?

- a. Kur yra (ta) knyga, kurią nusipirkau vakar?
 どこにある.PRS.3 その本.F.SG.NOM どの.F.SG.ACC 買った.PAST.1SG 昨日
- b. Kur yra mano vakar nusipirkta knyga?
 どこにある.PRS.3 私の(によって) 昨日 買った(買われた).PASS.PAST.PTCP.F.SG.NOM 本.F.SG.NOM

【内の関係の連体修飾節・主語】

内の関係の連体修飾節の先行詞がヒトを意味する主語の場合, 名詞 žmogus 「人」を先行詞とする場合 (21a)と, これを省いて定代名詞 tas 「その」のみが先行詞となる場合(21b)がある.

(21) その本を持って来た人は誰 (か) ?

- a. Kas yra tas žmogus, kuris atnešė tą knygą?
 誰.NOM ~である.PRS.3 その人.M.SG.NOM どの.M.SG.NOM 持って来た.PAST.3 その本を.F.SG.ACC
- b. Kas yra tas, kuris atnešė tą knygą?
 誰.NOM ~である.PRS.3 その.M.SG.NOM どの.M.SG.NOM 持って来た.PAST.3 その本を.F.SG.ACC

【内の関係の連体修飾節・場所】

(22) この部屋が私たちの仕事をしている部屋です.

- Čia yra kambarys, kuriame mes dirbame.
 ここにある.PRS.3 部屋.M.SG.NOM どの.M.SG.LOC 私たちが.1PL.NOM 仕事する.PRS.1PL

【内の関係の連体修飾節・所有者】

(23) 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった.

- Jau išmečiau tą kėdę, kurios viena koja nulūžo.
 もう捨てた.PAST.1SG その椅子を.F.SG.ACC どの.F.SG.GEN 1つの足.F.SG.NOM 折れた.PAST.3

【外の関係の連体修飾節】

リトアニア語の主な補文節には, 英語の that 節に相当する接続詞 kad に導かれる節, 関係代名詞・関係副詞に導かれる節などがある. 補文節は, 一般的に, 動詞, 動詞派生名詞, 形容詞中性形, あるいは副詞に従属し, 主語または目的語として機能する. 概して, 発話, 心理, 知覚, 感情, 評価などの具体的陳述を表すことを特徴とする. なお, リトアニア語では, 補文節は, しばしば, 分詞あるいは副分詞に置換可能である. なお, リトアニア語の知覚動詞 (matyti 「見る, 見える」, girdėti 「聞く, 聞こえる」)などは, (24b) Girdžiu garsus 「(私は) 音を (対格) 聞く」のように対格を取るため, 伝統的に他動詞に分類されるが, (24d) Girdėti garsai 「音が (主格) 聞こえる」のように, 知覚動詞が不定形の場合, 知覚される対象が主格主語となり自動詞のような格枠組みを取りうる点で, 特殊な他動詞として位置づけられている. 後者の場合は, 意味上の主語 (経験者) を与格で表すことができる.

(24) ドアを叩いている音が聞こえる.

- a. Girdžiu, kaip [kažkas] daužo duris.
 (私は) 聞く.PRS.1SG どのように 誰か.NOM 叩く.PRS.3 ドアを.F.PL.ACC
 ((私は) [誰かが] ドアを叩いているのを聞く.)
- b. Girdžiu daužomų durų garsus.
 (私は) 聞く.PRS.1SG 叩かれる.PASS.PRS.PTCP.F.PL.GEN ドアの.F.PL.GEN 音を.M.PL.ACC
 (直訳：(私は) 叩かれるドアの音を聞く.)
- c. Girdžiu daužant duris.
 (私は) 聞く.PRS.1SG 叩くのを.ADV.PRS.PTCP ドアを.F.PL.ACC
 (直訳：(私は) ドアを叩いているのを聞く.)
- d. Girdėti daužomų durų garsai.
 聞こえる.INF 叩かれる.PASS.PRS.PTCP.F.PL.GEN ドアの.F.PL.GEN 音が.M.PL.NOM
 (直訳：叩かれるドアの音が聞こえる.)

【外の関係の連体修飾節】

接続詞 *kad* に導かれる節は、名詞に従属することもある。

(25) あの人結婚したという噂は本当(か)？

Ar tiesa, kad tas žmogus susituokė?
 ~か 本当.F.SG.NOM ~こと あの人.M.SG.NOM 結婚した.PAST.3

【時間節】

時間節は、最も典型的には、接続詞 *kai* 「～とき」に導かれる。リトアニア語では、接続詞に導かれる時間節は、分詞や副分詞に置換可能である。述語動詞(主動詞)と同じ主語をもつ場合は分詞が用いられ、同じ主語をもたない場合は副分詞が用いられる。副分詞の意味上の主語は与格で表され、伝統的に、絶対分詞構文(あるいは絶対与格構文)と呼ばれる。伝統的には分詞・副分詞の「半述語的機能」のうちの「状況語的機能」に分類されている(「半述語的機能」には、他に、(28)で扱う「補語的機能」が区別されている)。

(26) 私はその人が来た時に夕食を食べていた。

- a. Kai tas žmogus atėjo, aš valgiau vakarienę.
 ~時 その人.M.SG.NOM 来た.PAST.3 私は.1SG.NOM 食べていた.PAST.1SG 夕食を.F.SG.ACC
- b. Tam žmogui atėjus, aš valgiau vakarienę.
 その人.M.SG.DAT 来た時.ADV.PRS.PTCP 私は.1SG.NOM 食べていた.PAST.1SG 夕食を.F.SG.ACC

【場所節】

場所節では、関係副詞として機能する疑問副詞 *kur* 「どこに」が用いられる。

(27) 私はその人が待っている所に行った。

- a. Aš nuėjau ten, kur tas žmogus laukia.
 私は.1SG.NOM 行った.PAST.1SG そこに どこに その人.M.SG.NOM 待っている.PRS.3
- b. Aš nuėjau į tą vietą, kur tas žmogus laukia.
 私は.1SG.NOM 行った.PAST.1SG その場所へ どこに その人.M.SG.NOM 待っている.PRS.

視覚や聴覚などの知覚を意味する知覚動詞の場合、関係副詞として機能する疑問副詞 *kaip* 「どのように」が用いられる(28a)。この種の補文節は、しばしば分詞(28b)あるいは副分詞(28c)に置換可能である。

このような分詞および副分詞の機能は, 伝統的には「半述語的機能」のうちの「補語的機能」に分類されている(「半述語的機能」には, 他に, (26)で説明した「状況語的機能」が区別されている). インフオーマントによれば, 分詞による(28b)は見た対象により重点を置き, 具体的な場面(たとえば, その人が通りを(あるいは競技会で)走っているところを見た)を表すのに適しているのに対し, 副分詞の(28c)は見た動作により重点を置き, 一般的な場面(たとえば, いつもその人が走っているのを見た)を表すのに適している.

【補文節・視覚】

(28)私はその人が走っていったのを見た.

- a. Aš mačiau, kaip tas žmogus bėga.
 私は.1SG.NOM 見た.PAST.1SG どのように その 人が.M.SG.NOM 走っている.PRS.3
- b. Aš mačiau tą žmogų bėgantį.
 私は.1SG.NOM 見た.PAST.1SG その 人を.M.SG.ACC 走っている.PRS.PTCP.M.SG.ACC
- c. Aš mačiau tą žmogų bėgant.
 私は.1SG.NOM 見た.PAST.1SG その 人を.M.SG.ACC 走っている.ADV.PRS.PTCP

【補文節・聴覚】

(29)昨日の夜, 私は彼らがしゃべっているのを聞いた.

- a. Vakar naktį aš girdėjau, kaip jie kalba.
 昨日 夜 私は.1SG.NOM 聞いた.PAST.1SG どのように 彼らが.3M.PL.NOM 話している.PRS.3
- b. Vakar naktį aš girdėjau juos kalbančius.
 昨日 夜 私は.1SG.NOM 聞いた.PAST.1SG 彼らを.3M.PL.ACC 話している.PRS.PTCP.M.SG.ACC
- c. Vakar naktį aš girdėjau juos kalbant.
 昨日 夜 私は.1SG.NOM 聞いた.PAST.1SG 彼らを.3M.PL.ACC 話している.ADV.PRS.PTCP

【補文節・知識】

知識を意味する補文節(30a)は, 副分詞節(30b)に置換可能であるが, 分詞節には置換されない.

(30)私はその人が昨日ここに来たことを知っている.

- a. Aš žinau, kad tas žmogus atėjo vakar.
 私は.1SG.NOM 知っている.PRS.1SG ~こと その 人が.M.SG.NOM 来た.PAST.3 昨日
- b. Aš žinau tą žmogų atėjus čia vakar.
 私は.1SG.NOM 知っている.PRS.1SG その 人が.M.SG.ACC 来た.ADV.PRS.PTCP ここに 昨日

【補文節・直接発話／間接話法】

リトアニア語には, 直接話法と間接話法の区別がある((31a)(31c)を対照). 間接話法を表す補文節(31a)は, 分詞(主格形)に置換できる(31b). ただし, 発話者である主節の主語と同じ主語をもつ場合にのみ分詞に置換可能である他, 動詞 sakyti「言う」が再帰辞をともなった再帰動詞 sakytisである方が自然である.

(31) 間接話法：(昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った.

a. (Vakar) Jis sakė, kad čia atėjo vakar.
 昨日 彼は.3M.SG.NOM 言った.PAST.3 ~こと ここに 来た.PAST.3 昨日

b. (Vakar) Jis sakė-si čia atėjęs vakar.
 昨日 彼は.3M.SG.NOM 言った.PAST.3-REFL ここに 来た.PAST.PTCP.M.SG.NOM 昨日

直接話法：(昨日) 彼は, 「私は今日ここに来た」と言った.

c. (Vakar) Jis sakė: „Aš čia atėjau šiandien“.
 昨日 彼は.3M.SG.NOM 言った.PAST.3 私は.1SG.NOM ここに 来た.PAST.1SG 今日

リトアニア語は日本語のような内在節を持たない.

【内在節・従主・主主】

(32) 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた (直訳：私は皿の上にあったリンゴを食べた).

a. Aš suvalgiau obuolį, kuris buvo lėkštėje.
 私は.1SG.NOM 食べた.PAST.1SG リンゴを.M.SG.ACC どの.M.SG.NOM あった.PAST.3 皿に

b. Aš suvalgiau obuolį, buvusį lėkštėje.
 私は.1SG.NOM 食べた.PAST.1SG リンゴを.M.SG.ACC あった.PAST.PTCP.M.SG.ACC 皿に

【内在節・従主・主目】

(33) 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた.

a. Aš pagavau katę, kuri įėjo į namą.
 私は.1SG.NOM 捕まえた.PAST.1SG ネコを.F.SG.ACC どの.F.SG.NOM 入ってきた.PAST.3 家に

b. Aš pagavau katę, įėjusią į namą.
 私は.1SG.NOM 捕まえた.PAST.1SG ネコを.F.SG.ACC 入ってきた.PAST.PTCP.F.SG.ACC 家に

執筆者連絡先: esakurai@gw2.u-netsurf.ne.jp, esakurai@tufs.ac.jp

原稿受理: 2019年5月8日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

フィンランド語の否定、形容詞と連体修飾複文 Negation, Adjectives and Adnominal Complex Sentences in Finnish

坂田 晴奈
Haruna Sakata

東京外国語大学非常勤講師
Part-time Lecturer, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号, 東京外国語大学)に寄与する。本稿の目的は33個のアンケート項目に対するフィンランド語データを与えることである。

Abstract: This report contributes to the special cross-linguistic study on ‘negation, adjectives and adnominal complex sentences’ (*Journal of the Institute of Language Research* 23, Tokyo University of Foreign Studies). The purpose of this paper is to offer the Finnish data for the question of 33 phrases.

キーワード: フィンランド語, 否定動詞, 形容詞, 連体修飾節

Keywords : Finnish, negative verb, adjective, adnominal clause

1. コンサルタント情報

本調査においては、以下のフィンランド語¹コンサルタント2名にご協力いただいた。

氏名 : A 氏

性別 : 女性

生年月 : 1964年12月 (2019年5月現在54歳)

出身地 : フィンランド・トゥルク市 (Turku)

母語 : フィンランド語トゥルク方言

備考 : フィンランドに在住, 英語を理解する

氏名 : B 氏

性別 : 女性

生年月 : 1991年6月 (2019年5月現在27歳)

出身地 : フィンランド・トゥルク市 (Turku)

母語 : フィンランド語トゥルク方言

備考 : A氏の娘, 日本人配偶者と共にフィンランドに在住, 英語と日本語を理解する



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ フィンランド語はウラル語族, フィン・ウゴル語派, バルト・フィン諸語に属する膠着語である。名詞の格変化が15種あり, 動詞は人称(単数, 複数の1~3人称の他に受動形という不定人称形がある), 時制(現在, 過去, 現在完了, 過去完了), 法(直説法, 条件法, 可能法, 命令法)によって語形変化する。また, 否定動詞という人称活用をとまなう否定形を持つのが特徴である。基本語順はSVO, 修飾部先行型で, 概ね後置詞型である。表記は全て正書法に基づく。

2 名とも首都ヘルシンキから南西に 160km ほどのトゥルク市出身で、母語もトゥルク方言であるが、本調査において方言の影響は特にないと思われる。媒介言語は英語と日本語である。例文を提示していただく際は、英語文と日本語文を示しながらその文が表す状況を説明して調査した。

例文のグロスに関しては基本的にライプツィヒグロスおよび Hakulinen 他(2004)の術語に従う。グロス中の英訳はインターネット上の辞書“EUdict” (<http://eudict.com/>)のフィンランド語・英語辞書を参照した。

2. 否定、形容詞と連体修飾複文に関する調査結果

以下、否定と形容詞、および連体修飾複文に分けて調査結果を示す。

2.1. 否定と形容詞

(1) これは私の本ではない。[名詞述語文／コピュラ文の否定]

Tämä ei ole (minu-n) kirja-ni.
 this:NOM NEG.3SG be:PRS 1SG-GEN book:NOM-POSS.1SG

否定文においては否定動詞が用いられる。この否定動詞には人称による語形変化がある。(1)のように 3 人称単数を主語とする場合、否定動詞は ei である。本動詞であるコピュラ (動詞 olla 「ある、いる」) は人称語尾を失った形式で現れる。

(1)のような所有表現には名詞の属格形が用いられるが、人称代名詞が所有者となる場合は所有接辞も用いられる。(1)においては、1 人称単数の所有者を表す所有接辞-ni が名詞に後続する。人称代名詞の属格形 minun は任意であるが、強調などの意図がない限りは省略される。

(2) この部屋には椅子がない。[存在文の否定]

Tässä huonee-ssa ei ole tuoli-a.
 this:INE room-INE NEG.3SG be:PRS chair-PART

「[場所] に [物体・人物] がある (いる)」という文は存在文と呼ばれ、文頭に場所格を伴う名詞があり、存在する物体や人物は主格名詞によって表される。ただし否定文の場合、名詞は分格形という形になる。分格はフィンランド語の格変化の一種で、直接目的語や物質名詞 (液体など個別に分けられない名詞) につくなど様々な用法を持つ。否定文における直接目的語は必ず分格形になるが、動詞の種類によっては肯定文の直接目的語も分格形になりうる。

(3) この部屋には一つも椅子がない。[全部否定・モノ]

a. Tässä huonee-ssa ei ole ainut-ta-kaan tuoli-a.
 this:INE room-INE NEG.3SG be:PRS only-PART-PC chair-PART

b. Tässä huonee-ssa ei ole yhtä-än tuoli-a.
 this:INE room-INE NEG.3SG be:PRS one:PART-PC chair-PART

「一つも～ない」を表すのは ainuttakaan, yhtään といった語である。これらは基本的に否定文で用いられる。意味の違いはほとんどない。

(4) その部屋には誰もいない。[全部否定・ヒト]

a. Siinä huonee-ssa ei ole ketä-än.
 it:INE room-INE NEG.3SG be:PRS who:PART-PC

b. Kuka-an ei ole siinä huonee-ssa.
 who:NOM-PC NEG.3SG be:PRS it:INE room-INE

(4a)は存在文で, ketään「誰も」は分格形である(主格形は kukaan)。(4b)は存在文ではなく, 単に kukaan を主語にした文とみなされ, 否定文でも kukaan は分格形にならない。全部否定の場合, モノもヒトも文構造は同じである。

(5) その本はこの部屋にない。[所在文の否定]

a. Se kirja ei ole tässä huonee-ssa.
 it:NOM book:NOM NEG.3SG be:PRS this:INE room-INE

b. Tässä huonee-ssa ei ole sitä kirja-a.
 this:INE room-INE NEG.3SG be:PRS it:PART book-PART

コンサルタントによると, (5a)と(5b)の違いは「本」と「部屋」のどちらを強調するかという点である。(5a)が(5)の日本語に近いと思われる。(5b)は存在文である。

(6) この犬は大きくない。[形容詞文の否定]

Tämä koira ei ole iso.
 this:NOM dog:NOM NEG.3SG be:PRS big:NOM

日本語とは違い, 形容詞そのものを否定形にすることはできない。コンピュータの役割を果たす動詞 olla 「ある, いる」を用いる。

(7) この犬はあまり大きくない。[形容詞文の部分否定]

Tämä koira ei ole kovin iso.
 this:NOM dog:NOM NEG.3SG be:PRS very big:NOM

部分否定の場合は「とても」のような意味を表す程度副詞を形容詞に前置する。英語などと同様の方法である。

(8) この犬はあの犬より大きい。[比較級]

a. Tämä koira on iso-mpi kuin tuo koira.
 this:NOM dog:NOM be:PRS.3SG big-CMP:NOM as that:NOM dog:NOM

b. Tämä koira on tuo-ta koira-a iso-mpi.
 this:NOM dog:NOM be:PRS.3SG that-PART dog-PART big-CMP:NOM

比較級・最上級による形容詞活用がある。比較級を表すには *-mpi* という形態を用いる。比較対象となる名詞は、(8a)のように接続詞 *kuin* を用いる場合は基本的に主格形である。(8b)のように *kuin* を用いない場合は、比較対象となる名詞が分格形になり、形容詞に先行する。(8a)は書き言葉でも話し言葉でも用いられるが、(8b)は書き言葉でのみ用いられる。

(9) この犬がその犬たちの中で一番大きい。[最上級]

a. Tämä koira on nii-stä koir-i-sta iso-in.
 this:NOM dog:NOM be:PRS.3SG it:PL-ELA dog-PL-ELA big-SUP:NOM

b. Tämä koira on iso-in noi-sta koir-i-sta.
 this:NOM dog:NOM be:PRS.3SG big-SUP:NOM that:PL-ELA dog-PL-ELA

最上級を表すには *-in* という形態を用いる。比較対象となる複数名詞は出格をとる。出格は場所格の一つで「～の中から」という意味を表す。(9a)と(9b)は複数名詞と形容詞の語順が入れ替わっているが、これはどの要素を強調したいかによる。日本語により近いニュアンスを表すのは(9a)である。

(10) 今日はあの人はい来ない。[自動詞文の否定]

Hän ei tule tänään.
 3SG:NOM NEG.3SG come:PRS today

(11) あの人はその本を持って行かなかった。[他動詞文の否定]

Hän ei otta-nut sitä kirja-a (itse-lle-en).
 3SG:NOM NEG.3SG take-PAST.PTCP it:PART book-PART oneself-ALL-POSS.3SG

自動詞文でも他動詞文でも、否定動詞を用いることに変わりはない。他動詞の目的語は分格形になる。(11)のような過去形の否定は否定動詞＋過去分詞で表す。

(12) 全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。[数量の全部否定]

Kuka-an opiskelijo-i-sta ei osallistu-nut.
 who:NOM-PC student-PL-ELA NEG.3SG participate-PAST.PTCP

kukaan は(4)にも見られた不定代名詞で、否定文や疑問文で用いられる。(12)を直訳すると「学生たちの中からは誰も参加しなかった」となる。

(13) 全ての学生が参加したわけではない。[数量の部分否定]

Kaikki opiskelija-t eivät osallistu-neet.
 all:NOM student-PL:NOM NEG.3PL participate-PAST.PTCP.PL

部分否定は *kaikki opiskelijat* 「全ての学生たち」を主語とした否定文で表される。

(14) (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。[文の否定]

Kallis hinta ei ole syy sille.
expensive:NOM price:NOM NEG.3SG be:PRS reason:NOM it:ALL

文全体を否定することはできない。(14)の日本語の意図を示すには, *kallis hinta* 「高い値段」という名詞句を主語とした「高い値段がその理由ではない」という文を作るしかない。

(15) 走るな! [禁止]

Älä juokse!
NEG.IMP.2SG run

禁止は否定命令文で表す。命令文における否定動詞は *älä* (2人称単数) もしくは *älkää* (2人称複数) である。

(16) 大きな声を出すな! [他動詞文の禁止]

Älä puhu kova-lla ääne-llä!
NEG.IMP.2SG speak loud-ADE voice-ADE

(16)の日本語は他動詞文の禁止の例として示されているが, フィンランド語では「大きな声」という目的語は *kovalla äänellä* 「大きな声で」という接格名詞句にするのが普通である。他動詞文の禁止の例としては, 以下の(16-cf)を示す。

(16-cf) あいつに本をあげるな!

Älä anna kirja-a häne-lle!
NEG.IMP.2SG give book-PART 3SG-ALL

禁止を表す否定命令文においても, 他動詞の目的語は分格形である。

(17) 明日は雨は降らないだろう。[推量の否定]

a. Mahta-a-ko-han huomenna sata-a?
can:PRS-3SG-Q-PC tomorrow rain-AINF

b. Sata-a-ko-han huomenna?
rain:PRS-3SG-Q-PC tomorrow

推量の否定を表す例としては, 平叙文でなく疑問文が得られた。(17a), (17b)はいずれも「明日は雨が降るのだろうか (いや, 降らない)」という反語的な表現である。動詞に付属する *-han* は話者の心理を表す小辞で, 様々な場面において用いられる。

(18) あの人に聞こえないように, 小さな声で話してくれ。[目的節の否定]

Puhu hiljaa, jottei hän kuul-isi.
speak:IMP.2SG quietly in.order.that:NEG.3SG 3SG:NOM hear-COND.PRS.3SG

目的節の否定は、接続詞 *jotta* と否定動詞 *ei* が融合した *jottei* によって表される。接続詞と否定動詞の融合は、フィンランド語によく見られる現象である。目的節の動詞は条件法である。

(19) 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。[否定のスキープの調節]

- a. En sano-nut niin, jotta vihastutta-isi-n sinu-t.
 NEG.1SG say-PAST.PTCP so in.order.that make.angry-COND.PRS-1SG 2SG-ACC
- b. En sano-nut niin suututta-a-kse-ni/ vihastutta-a-kse-ni
 NEG.1SG say-PAST.PTCP so make.angry-AINF-TRA-POSS.1SG make.angry-AINF-TRA-POSS.1SG
- sinu-t.
 2SG-ACC
- c. Sano-ma-lla niin tarkoitukse-ni ei ol-lut suututta-a/
 say-MAINF-ADE so purpose-POSS.1SG NEG.3SG be-PAST.PTCP make.angry-AINF
- vihastutta-a sinu-a.
 make.angry-AINF 2SG-PART

目的節としては、(18)と同様に接続詞 *jotta* を用いる(19a)のような構造と、(19b)のように A 不定詞変格形を用いる構造がある。A 不定詞変格形は主に目的を表す不定詞で、主語を示す所有接辞を必ず伴う。(18)の場合に A 不定詞変格形が用いられなかったのは、(18)の目的節が否定されていたからである。(19c)は「そのように言った私の目的は、あなたを怒らせるためではなかった」という構造で、*tarkoitukse-ni* 「私の目的」が主語となっている。*vihastuttaa*の方が *suututtaa* より強い怒りを表す。

目的語である「あなた」が(19a)と(19b)は *sinut* (対格形) に、(19c)では *sinua* (分格形) になっている。(19a)、(19b)の目的節は否定されていないので、節中の目的語「あなた」は対格形となる。これに対し、(19c)の「あなた」は主節となる否定文に含まれており、「否定文における目的語は分格形となる」というルールにしたがって分格形となる。

2.2. 連体修飾複文

(20) 私が昨日買った本はどこ (にある) ? [内の関係の連体修飾節・目的語]

- a. Missä on kirja, jonka ost-i-n eilen?
 where be:PRS.3SG book:NOM REL:ACC buy-PAST-1SG yesterday
- b. Missä on (minu-n) eilen osta-ma-ni kirja?
 where be:PRS.3SG 1SG-GEN yesterday buy-AGT.PTCP-POSS.1SG book:NOM

(20a)は英語と同様の構造で、関係詞 *joka* を冠する関係節を用いた例である。(20b)は動作主分詞を用いた例である。動作主分詞は *-ma-* という形態をとり、名詞の属格形や所有接辞によって動作主を表す。副詞や、目的語となる名詞句は動作主分詞に先行する。ただし動作主分詞を用いた文は、話し言葉ではあまり用いられない。

(21) その本を持って来た人は誰 (か) ? [内の関係の連体修飾節・主語]

Kuka to-i se-n kirja-n?
 who bring-PAST.3SG it-ACC book-ACC

「その本を持って来た人」は関係節や動作主分詞構文で表すことができるが、(21)のような疑問文においては関係節を用いないのが普通である。つまり、疑問詞 *kuka* を主語とした文で表される。

(22) この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。[内の関係の連体修飾節・場所]

a. Tämä on huone, jossa ole-mme tö-i-ssä.
 this:NOM be:PRS.3SG room:NOM REL.INE be:PRS-1PL work-PL-INE

b. Tämä on huone, jossa työskentele-mme.
 this:NOM be:PRS.3SG room:NOM REL.INE work:PRS-1PL

「仕事をしている」は(22a)の *olla töissä* というイディオムもしくは(22b)の *työskennellä* という動詞を用いる表現がある。*työskennellä* の方がやや堅い表現である。文の構造はいずれも関係節を用いたものである。「AはBだ」という文では、動作主分詞をあまり使わないようである。

(23) 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。[内の関係の連体修飾節・所有者]

a. Ole-n jo heittä-nyt tuo-n tuoli-n pois, jonka jalka
 be:PRS-1SG already throw-PAST.PTCP that-ACC chair-ACC away REL:GEN leg:NOM

murtu-i.
 get.broken-PAST.3SG

b. Ole-n jo heittä-nyt pois se-n tuoli-n, jonka jalka
 be:PRS-1SG already throw-PAST.PTCP away it-ACC chair-ACC REL:GEN leg:NOM

murtu-i.
 get.broken-PAST.3SG

(23a)と(23b)の違いは、副詞 *pois* の位置のみである。この語順の違いに大きなニュアンスの違いはない。いずれも関係節を用いている。連体修飾節に名詞の所有者という情報が加わる場合、構造が複雑になるためか動作主分詞は使われない。

(24) ドアを叩いている音が聞こえる。[外の関係の連体修飾節]

a. Kuule-n, kun ove-en kopute-ta-an.
 hear:PRS-1SG as door-ILL knock-PASS-3SG

b. Kuule-n ove-en kopute-tta-va-n.
 hear-1SG door-ILL knock-PASS-PRS.PTCP-ACC

- c. Kuule-n ove-n koputukse-n ääne-n.
hear-1SG door-GEN knock-GEN sound-ACC

「ドアを叩いている音」のような、日本語における外の関係の連体修飾節は、(24a)や(24b)のように「ドアが叩かれている(時の音)」と表現するか、(24c)のように「ドアのノックの音」という名詞句で表現するかはわからない。多くの欧米言語と同様、外の関係の連体修飾節は存在しない。

(25) あの人結婚したという噂は本当(か)? [外の関係の連体修飾節]

- On-ko (se) huhu totta, että hän men-i naimisiin?
be:PRS.3SG-Q it:NOM rumor:NOM true that 3SG:NOM go-PAST.3SG married

「あの人結婚したという噂」は、「あの人結婚した」を従属節にして表すが、(24)と同様に連体修飾節は形成できない。

(26) 私はその人が来た時にご飯を食べていた。[時間節]

- a. Sö-i-n ruoka-a, kun hän tul-i.
eat-PAST-1SG food-PART as 3SG:NOM come-PAST.3SG
- b. Ol-i-n syö-mä-ssä ruoka-a, kun hän tul-i.
be-PAST-1SG eat-MAINF-INE food-PART as 3SG:NOM come-PAST.3SG
- c. Sö-i-n ruoka-a häne-n tull-e-ssa-an.
eat-PAST-1SG food-PART 3SG-GEN come-EINF-INE-POSS.3SG

時間節の表現には(26a)や(26b)のように接続詞 *kun* を用いるか、(26c)のように時相構文という構文を用いる。時相構文は E 不定詞内格形という不定詞を用いる。E 不定詞内格形は非定形動詞でありながら、所有接辞によって動作主を表すことができる。時相構文は話し言葉ではあまり用いられない。

(26a)と(26b)の違いは、主節に直説法の定形動詞を使うか、コピュラ動詞 *olla*+MA 不定詞内格形を使うかという点にある。(26b)で用いられているコピュラ動詞 *olla*+MA 不定詞内格形は、動作の継続あるいは「～しようとする(した)」という将前相のような意味を表す構造である。この構造は話し言葉でもよく用いられるが、(26a)や(26c)のように直説法の定形動詞で動作の継続を表すことも可能である。

(27) 私はその人が待っている所に行った。[場所節]

- Men-i-n paikka-an, jossa hän odott-i.
go-PAST-1SG place-ILL REL.INE 3SG:NOM wait-PAST.3SG

場所節は関係詞 *joka* の内格形 *jossa* を用いる。フィンランド語は関係詞も格変化する。

(28) 私はその人が走っていったのを見た。[補文節・視覚]

- a. Nä-i-n, kun hän juoks-i pois.
see-PAST-1SG as 3SG:NOM run-PAST.3SG away

b. Nä-i-n, että hän juoks-i pois.
 see-PAST-1SG that 3SG:NOM run-PAST.3SG away

c. Nä-i-n häne-n juokse-va-n pois.
 see-PAST-1SG 3SG-GEN run-PRS.PTCP-GEN away

補文節を表すには、接続詞を冠する従属節か、分詞構文を用いる。(28a)と(28b)の違いは接続詞の意味の違いにある。(28a)は「～する時」を表す *kun* による従属節で、(28b)は「～する(こと)」を表す *että* による従属節である。

(28c)は、現在分詞の属格形を用いた分詞構文である。主節動詞と分詞の動作主が異なる場合、分詞の動作主は名詞(あるいは代名詞)の属格形で示す。主節は過去形でも、過去の時点で同時進行していたとみなせる動作は現在分詞で表される。分詞構文は、話し言葉では使用頻度があまり高くない。

(29) 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[補文節・聴覚]

a. Eilen illa-lla kuul-i-n, kun he juttel-i-ivat.
 yesterday evening-ADE hear-PAST-1SG as 3PL:NOM chat-PAST-3PL

b. Eilen illa-lla kuul-i-n, että he juttel-i-ivat.
 yesterday evening-ADE hear-PAST-1SG that 3PL:NOM chat-PAST-3PL

c. Eilen illa-lla kuul-i-n heidä-n juttele-va-n.
 yesterday evening-ADE hear-PAST-1SG 3PL-GEN chat-PRS.PTCP-GEN

聴覚に関する補文節も、接続詞を冠する従属節か、分詞構文を用いて表す。(28)と同様に、(29a)と(29b)の違いは接続詞の意味の違いにある。(29a)は「～する時」を表す *kun* による従属節で、(29b)は「～する(こと)」を表す *että* による従属節である。(29c)は現在分詞による分詞構文で、これも(28c)と構造は同じである。話し言葉ではこれもやはり使用頻度が低い。

(30) 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。[補文節・知識]

a. Tiedä-n, että hän tul-i tänne eilen.
 know:PRS-1SG that 3SG:NOM come-PAST.3SG here yesterday

b. Tiedä-n häne-n tul-lee-n tänne eilen.
 know:PRS-1SG 3SG-GEN come-PAST.PTCP-GEN here yesterday

知識に関する補文節には、接続詞 *että* を冠する従属節か、分詞構文のどちらかが用いられる。接続詞 *kun* は時を表すというニュアンスを持つためか、使用されない。(30b)は過去分詞による分詞構文である。主節が表す時点では完了しているとみなせる動作は過去分詞で表される。

(31) (昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。 / (昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。
 [補文節・直接発話 / 間接話法]

- a. Eilen hän sano-i, että hän ol-i tul-lut
 yesterday 3SG:NOM say-PAST.3SG that 3SG:NOM be-PAST.3SG come-PAST.PTCP
 {sinne/ tänne} (juuri) {sama-na/ samaise-na/ sinä} päivä-nä.
 there here just same-ESS self.same-ESS it-ESS day-ESS
- b. Eilen hän sano-i tul-lee-nsa {sinne/ tänne} (juuri)
 yesterday 3SG:NOM say-PAST.3SG come-PAST.PTCP-GEN.POSS.3SG there here just
 {sama-na/ samaise-na/ sinä} päivä-nä.
 same-ESS self.same-ESS it-ESS day-ESS

間接話法の場合は接続詞 *että* を冠する従属節で表すか、分詞構文で表すかのどちらかである。「昨日」を従属節で表すには、*sama / samainen* 「同じ」の様格形あるいは指示詞 *se* 「それ」の様格形のいずれかを用いる。様格は本来「～の状態で、～として」という意味を表すが、時を表す名詞に後続する場合は「～に」という意味を表す。

直接話法については、以下のように表すのが普通である。

- c. Eilen hän sano-i, ”Tul-i-n tänne tänään”.
 yesterday 3SG:NOM say-PAST.3SG come-PAST-1SG here today

(32) 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた。[内在節・従主・主目]

- a. Sö-i-n omena-n, joka ol-i tuo-lla lautase-lla.
 eat-PAST-1SG apple-ACC REL:NOM be-PAST.3SG that-ADE plate-ADE
- b. Sö-i-n tuo-lla lautase-lla ole-va-n omena-n.
 eat-PAST-1SG that-ADE plate-ADE be-PRS.PTCP-ACC apple-ACC
- c. Sö-i-n tuo-lla lautase-lla ol-lee-n omena-n.
 eat-PAST-1SG that-ADE plate-ADE be-PAST.PTCP-ACC apple-ACC

(32a)は関係節を用いた表現である。話し言葉ではこの構造が最もよく用いられる。(32b)と(32c)は分詞構文である。(32b)と(32c)では分詞構文の時制が異なっているが、コンサルタントに確認したところ、状況に明確な違いは認められなかった。

(33) 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。[内在節・従主・主目]

- a. Ot-i-n kiinni kissa-n, joka tul-i koti-i-ni.
 take-PAST-1SG caught cat-ACC REL:NOM come-PAST.3SG home-ILL-POSS.1SG
- b. Ot-i-n koti-i-ni tul-lee-n kissa-n kiinni.
 take-PAST-1SG home-ILL-POSS.1SG come-PAST.PTCP-ACC cat-ACC caught
- c. Ot-i-n kiinni koti-i-ni tul-lee-n kissa-n.
 take-PAST-1SG caught home-ILL-POSS.1SG come-PAST.PTCP-ACC cat-ACC

(33a)は関係節を用いた表現である。話し言葉ではこの構造が最もよく用いられる。(33b)と(33c)は分詞構文である。いずれの分詞構文でも過去分詞が使われている。分詞の動作主は主節の目的語となるので、「猫」を表す *kissan* は対格形である。(33b)は「捕まえた」という動作を強調しており、(33c)は「家に入ってきたネコ」という目的語を強調しているが、大きな意味の違いはない。一般にフィンランド語では、強調される項が文末に位置する傾向が見られる。「捕まえる」という動作を表す *otin kiinni* の *kiinni* は副詞で、定形動詞と組み合わせた句動詞のような構造において用いられることが多い。

略号一覧

	英語	フィンランド語	日本語
-			形態素境界
./:			形態素境界あるいは意味境界 (分節不可の場合)
1	1 st person	1. persoona	1 人称
2	2 nd person	2. persoona	2 人称
3	3 rd person	3. persoona	3 人称
ACC	accusative	akkusatiivi	対格
ADE	adessive	adessiivi	接格
AGT.PTCP	agent participle	agenttipartisiippi	動作主分詞
AINF	A-infinitive	A-infinitiivi	A 不定詞
ALL	allative	allatiivi	向格
CMP	comparative	komparatiivi	比較級
COND	conditional	konditionaali	条件法
EINF	E-infinitive	E-infinitiivi	E 不定詞
ELA	elative	elatiivi	出格
ESS	essive	essiivi	様格
GEN	genitive	genetiivi	属格
ILL	illative	illatiivi	入格
IMP	imperative	imperatiivi	命令法
INE	inessive	inessiivi	内格
MAINF	MA-infinitive	MA-infinitiivi	MA 不定詞
NEG	negative	negatiivi	否定
NOM	nominative	nominatiivi	主格
PART	partitive	partitiivi	分格
PASS	passive	passiivi	受動
PAST	past	imperfekti ²	過去
PC	particle	partikkeli	小辞
PL	plural	monikko	複数
POSS	possessive	possessiivi	所有接辞
PRS	present	preesens	現在
PTCP	participle	partisiippi	分詞
Q	question particle	kysymyspartikkeli	疑問小辞
REL	relative	relatiivi	関係詞
SG	singular	yksikkö	単数
SUP	superlative	superlatiivi	最上級
TRA	translative	translatiivi	変格

² フィンランド語学では、いわゆる過去形は *imperfekti* (未完了形) と呼ばれ、現在完了・過去完了を表す *perfekti* (完了形) と対立する位置づけになっている。

参考文献

- Hakulinen, Auli, Maria Vilkuna, Riitta Korhonen, Vesa Koivisto, Tarja Riitta Heinonen, Irja Alho. 2004. *Iso suomen kielioppi*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Lepäsmaa, Anna-Liisa and Leena Silfverberg. 2004. *Suomen kielen alkeisoppikirja*. Helsinki: Finn Lectura.

参考ウェブサイト

EUdict <http://eudict.com/>

執筆者連絡先: poutainen@hotmail.com

原稿受理: 2019年5月7日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

エジプト・アラビア語における否定、形容詞と連体修飾複文 Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification in Egyptian Arabic

長渡 陽一
Youichi Nagato

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿の目的は、特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号、東京外国語大学)における33個のアンケート項目に対するエジプト・アラビア語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Egyptian Arabic data which answers the thirty three survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 23, which focuses on the cross linguistic study of 'negation, adjectives, and compound sentences of adnominal modification'.

キーワード: エジプト・アラビア語、否定、形容詞、連体修飾、複文

Keywords: Egyptian Arabic, negation, adjective, adnominal modification, compound sentence

1. はじめに

否定、形容詞と連体修飾複文について、エジプトのカイロ市を中心とした口語アラビア語、エジプト・アラビア語のデータを提供する。文例の表記は、母音の音声を加味した音韻表記¹である。文例作成にあたっては、カイロ市出身の20代女性、ゼイナブ・アル・アズィーズィ氏の協力を得た。

エジプト・アラビア語の文法の要点は、次のとおりである。

- ・基本語順はSVOないしVSO。これ以上の文法関係は前置詞で示す。修飾語は名詞に後置する。
- ・動詞の時制・アスペクトには過去、現在、進行・習慣、未来、完了があり、人称、性、数で活用する。
- ・名詞は、男女2つの文法性があり、可算名詞には複数形がある。
- ・名詞は定と不定がある。普通名詞は定るとき定冠詞 *l-* を付ける。定冠詞がなければ不定である。
- ・形容詞は、形態、統語的に名詞に近い。また定の名詞を修飾するとき形容詞にも定冠詞をつける。

2. 否定

エジプト・アラビア語の否定には、接周辞 *ma- ... -f* と前置語 *mif* があり、否定される語によって次のように使い分けられる。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ 短母音は/a a i u/がある。/a/と/a:/は区別せず *a* で示した。/i/は *i* と *e*、/u/は *u* と *o* の実現形に近いほうで示した。挿入母音の/i/と/u/は上付きの「e」「o」で示した。長母音は /a: a: i: u: e: o:/ がある。/a:/と/a:/は区別せず *a:* で示した。音節再構成により短縮した長母音は短母音で示した。咽頭化音子音の/*t*/、/*d*/、/*s*/はそれぞれ *t*、*d*、*s* で示した。語末の *h* はふつう発音されない。*g* (ج) [g]は、他の諸方言の/*ɟ*/に対応する。

エジプト・アラビア語の否定辞使い分け

否定形式	否定される語
接周辞 <i>ma- ... -f</i>	<ul style="list-style-type: none"> ・動詞（過去形、現在形、進行形） ・存在詞
前置語 <i>mif</i>	<ul style="list-style-type: none"> ・動詞（完了形、未来形、進行形） ・名詞、形容詞、前置詞句、副詞など

動詞完了形は能動分詞が起源であり、形容詞と同じ統語上のふるまいをする。動詞進行形は、接周辞 *ma- ... -f* で否定することが多いが、前置語 *mif* でも否定でき、意味の差はない。未来形は、前置語 *mif* で否定される。

2.1. 名詞述語文／コピュラ文の否定

名詞述語文は、現在時制ではコピュラを使わない。名詞のほか、述語が形容詞、前置詞句など、動詞以外の述語でも同じなので、まとめて非動詞述語文と呼ぶことができる。(1) は、*da keta:b-i* 「これは私の本だ」の述語名詞を前置語 *mif* で否定したものである。*mif* は否定コピュラではない。

- (1) これは私の本ではない。

da mif keta:b-i . (ده مش كتابي)
これ NEG 本 -私の

2.2. 存在文の否定

存在文は、(2) の *fi*: 「ある」など、前置詞を起源とした存在詞に存在物の名詞を後続させて構成される。存在詞は、動詞と同じく接周辞 *ma- ... -f* で否定され、擬似動詞と呼ばれる。

- (2) この部屋には椅子がない。

ma-fi: -f korsi fi l- ?o:da hena . (مفيش كرسي في الأوضة هنا)
NEG- 有る-NEG 椅子 に DEF-部屋 ここ

2.3. 全部否定

特定の名詞について「1つの～も」は、名詞に *wala* 「～さえ」や *wa:hid* 「1」などをつける。(3) ではさらに *hatta* 「まで」をつけているが、これらのいずれかがなくても全部否定となる。

- (3) この部屋には一つも椅子がない。[モノの全部否定]

ma-fi: -f wala hatta korsi wa:hid fi l- ?o:da hena . (مفيش ولا حتي كرسي واحد في الأوضة هنا)
NEG- 有る-NEG さえ まで 椅子 1つ に DEF-部屋 ここ

ヒトの「1人の～も」の場合もこれと同じく、*wala* などを使って *ma-fi: -f wala ta:leb* 「1人の学生もいない」などとする。

これに対して、「何も(ない)」には、普通名詞の *ha:ga* 「物」を不定代名詞のように使って *ma-fi: -f ha:ga* 「何もない」とし、「誰も(いない)」は、(4) のように不定代名詞 *hadd* 「誰か」を使う。

- (4) その部屋には誰もいない。[ヒトの全部否定]

ma-fi: -f hadd fi l- ?o:da-di . (مفيش حد في الأوضة دي)
NEG- 有る-NEG 誰も に DEF-部屋 -その.F

2.4. 所在文の否定

所在文は一般的には、在るものを主語とし、場所を示す前置詞句を述語とするコピュラ文（非動詞述語文）である。(5) のように、*mawgu:d* 「所在している」を使うこともできる。これはとくに人が主語の

ときにはよく使われる、文語の *wadzada* 「見出す」の受動分詞が起源の形容詞である。

- (5) その本はこの部屋にない。

ek-keta:b mif mawgu:d fi l- ʔo:ða hena. (الكتاب مش موجود في الأوضة هنا)
 DEF-本 NEG 在る に DEF-部屋 ここ

2.5. 形容詞文の否定

形容詞文は、形容詞が述語になっている非動詞述語文で、これを否定するには、述語形容詞を前置語 *mif* で否定する。

- (6) この犬は大きくない。

ek-kalb^e-da mif kibi:r. (الكلب ده مش كبير)
 DEF-犬 -この NEG 大きい

形容詞文の部分否定は、(7) にあるように、*ʕawi* 「とても」で修飾された述語形容詞 *kibi:r ʕawi* 「とても大きい」を前置語 *mif* で否定することでなされる。文脈から分かっているならば、*kibi:r* 「大きい」を言わずに *mif ʕawi* 「とてもではない」とすることもできる。

- (7) この犬はあまり大きくない。[部分否定]

ek-kalb^e-da mif kibi:r ʔawi. (الكلب ده مش كبير قوي)
 DEF-犬 -この NEG 大きい とても

2.6. 形容詞の比較級と最上級

比較級と最上級は形態的には同じで、形容詞の3子音語根を *ʔaCCaC* 型に嵌めて得られる。比較か最上かは、文脈、あるいは統語的に判別される。たとえば(8)のように *min* 「～より」が後続していると比較であり、(9)のように名詞が後続していると最上である。

- (8) この犬はあの犬より大きい。[比較級]

ek-kalb^e-da ʔakbar min ^ek-kalb^e-da. (الكلب ده أكبر من الكلب ده)
 DEF-犬 -この 大きい COMP より DEF-犬 -あの

- (9) この犬がその犬たちの中で一番大きい。[最上級]

ek-kalb^e-da ʔakbar kalb wiʃt ^ek- kela:b-di . (الكلب ده أكبر كلب وسط الكلاب دي)
 DEF-犬 -この 大きい COMP 犬 の中で DEF-犬.PL -その

2.7. 自動詞文と他動詞文

自動詞文と他動詞文とで、否定方法は異ならない。次の(10)は未来形 (*ha-...*) なので前置語 *mif* で否定され、(11)は過去形なので接周辞 *ma-...-f* で否定されている。

- (10) 今日のはあの人は来ない。[自動詞文の否定]

ennaharda f- faʕʕ^e-da mif ha-ji:gi. (النهاردة الشخص ده مش هيجي)
 今日 DEF-人 -あの NEG FUT-来る.3

- (11) あの人はその本を持って行かなかった。

ef- faʕʕ^e-da ma-ʕadd^e -f ^ek- keta:b maʕa:-h . (الشخص ده مأخذش الكتاب معاه)
 DEF-人 -あの NEG- 持って行った-NEG DEF-本 と共に -彼

2.8. 数量の否定

数量の全部否定は、名詞 *koll* 「全て」を主語とし、その述語を否定する。(12) の(a)は「全ての学生が」、(b)は「学生は、その全てが」という構造をしている。

(12) 全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。[全部否定]

(a) *koll^e t- tolla:b ma-farku: -f* . (كل الطلاب ماشاركوش)
全て DEF-学生.PL NEG- 参加した.PL-NEG

(b) *et-tolla:b koll^e-hom ma-farku: -f* . (الطلاب كلهم ماشاركوش)
DEF-学生.PL 全て -彼ら NEG- 参加した.PL-NEG

部分否定は、*koll* 「全て」を否定する。(13) の(a)では *koll^e t-tolla:b* 「全ての学生」を *mif* で否定している。(b)は、元文の「～わけではない」を訳した、「全ての学生が参加したという、そういう意味ではない」という文である。

(13) 全ての学生が参加したわけではない。[部分否定]

(a) *mif koll^e t- tolla:b 'staraku* . (مش كل الطلاب اشتركو)
NEG 全て DEF-学生PL 参加した.3PL

(b) *mif mašna keda ?inn^e koll^e t- tolla:b 'staraku* . (مش معني كده إن كل الطلاب أشتركو)
NEG 意味 そう という 全て DEF-学生PL 参加した.3PL

2.9. 文の否定

文を否定するには、その文を *?inn* 「～という」でまとめる必要がある。(14) では、*ka:li* 「高い」という一語文を *?inn* でまとめている。*?inn* は直後に名詞、通常は主語が必要で、それが接尾代名詞（男性単数）*-o* 「それ」である。

(14) (私は買わなかったが) 値段が高いというわけではない。[文の否定]

da mif mašna:-h ?abadan ?inn-o ka:li . (ده مش معناه أبداً إنه غالي)
それ NEG 意味 -その 決して という-それ 高い

2.10. 禁止(否定命令)

禁止(否定命令)は、エジプト・アラビア語では、現在形2人称の否定と同じ形態である。つまり(15) (a)は「君は走らない」、(16) (a)は「君は大きな声を出さない」とも解釈できる。(b)の *?iwša* 「気をつける」は強い否定命令を表し、インフォーマントによると「さもないと…」が続くニュアンスがある。

(15) 走るな!

(a) *ma-tigri:-f* . (ما تجريش)
NEG- 走る.2 -NEG

(b) *?iwša tigri* . (إوعى تجري)
気をつける.IMP 走る.2

(16) 大きな声を出すな！

(a) *ma-tʃalli:-f ʃo:t-ak.* (ما تعلّيش صوتك)
 NEG- 高める.2 -NEG 声 -君の

(b) *ʔiwʃa tʃalli ʃo:t-ak.* (إوعى تعلّي صوتك)
 気をつける.IMP 高める.2 声 -君の

2.11. 推量の否定

推量の否定は、動詞の未来形 (*ha-*) を否定することで表す。未来形は、未来のほか、発話者による推量も表す。

(17) 明日は雨は降らないだろう。

jaʔara d- dinja bokra miʃ ha-tmaʔtar. (يا تري الدنيا بكرة مش هتمطر)
 ~なあ DEF-世界 明日 NEG FUT- 雨が降る

2.12. 目的の否定

目的の否定は、目的を示す節を否定文にすることで得られる。(18) は、「あの人が聞かないために」としている。動作の目的を表すには接続詞 *ʃafa:n* 「～ために」を使う。これは日本語の「～ために」と同じように、名詞を従えることも、節を従えることもできる。

(18) あの人の聞こえないように、小さな声で話してくれ。[目的節の否定]

momken titkallēm bi ʃo:t wa:ʔi ʃafa:n ʕf- ʃaʃʃe-da ma-jsmaʕ-f .
 可能性がある 話す.2 で 声 低い ために DEF-人 -あの NEG- 聞く.3 -NEG
 (ممکن تتكلم بصوت واطي عشان الشخص ده ما يسمعش)

2.13. 否定のスコープ

否定のスコープを、(19) の元文の「言ったのではない」のように「言ったこと」を否定することはできず、(a)のように「言わなかった」とするか、(b)のように「～ためではない」とする必要がある。

(a)は、「怒らせるためにそう言わなかった」という解釈も可能だが、ふつうの状況では元文の日本語の意味に解釈される。(b)は *bass* 「けれども」を挟み、2文で構成されている。*bass* をなくして、1文にすると、ちょうど日本語の「怒らせるためでなくそう言った」となり、元文のニュアンスは伝わりにくい。

(19) 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。[否定のスコープの調節]

(a) *ʔana ma-ʔoltē -f keda ʃafa:n ʔazaʃʃel-ak.* (أنا ما قلتك كده عشان أز علك)
 私は NEG- 言った.1 -NEG そう ために 怒らせる.1 -君を

(b) *ʔana ʔoltē keda bassē miʃ ʃafa:n ʔazaʃʃel-ak.* (أنا قلتك كده بس مش عشان أز علك)
 私は 言った.1 そう けれども NEG ために 怒らせる.1 -君を

3. 連体修飾節

アラビア語では、名詞を修飾する語句は、名詞に後置する。このとき、修飾語句が名詞でなく、形容詞や節であれば、それを先行名詞の定不定に合わせる必要がある。不定は無標示なので、単に後置するのみであるが、定であれば、形容詞なら定冠詞 *l-* を冠し、節なら節定冠詞 *lli* を節の頭に冠する。

以下、文例中の修飾節を [] で囲んだ。

3.1. 内の関係

修飾節の中で、先行名詞が主語でないとき、先行名詞が修飾節の中で代名詞として再掲され、節内での役割が示される。(20) では *stare:t* 「買った」の目的語 *-o* 「それを」、(22) では *fi:-h* 「そこで」の *-h* 「それ」によって場所が示され、(23) では *rigl-o* 「その足」の *-o* 「その」として現れている。(21) は、*elli* 以下の節が名詞化されて主語となり、「誰だ、その本を持ってきた者は」という構造になっている。

(20) [私が昨日買った]本はどこ? [目的語]

fe:n **k- keta:b* [*elli stare:t-o mba:reh*]. (فين الكتاب اللي اشتريته امبارح)
 どこ DEF-本 DEF 買った.1 -それを 昨日

(21) [その本を持って来た]人は誰? [主語]

mi:n [*elli ga:b *k- keta:b-da*]. (مين اللي جاب الكتاب ده)
 誰 DEF 持ってきた.3 DEF-本 -その

(22) この部屋が[私たちの仕事をしている]部屋です。[場所]

el-ʔo:da-di hejja l- ʔo:da [*lli ʔehna bi- niʔavak fi:-ha*].
 DEF-部屋 -この.F COP.F DEF-部屋 DEF 私たち PROG-働く.1PL で -それ
 (الأوضة دي هي الأوضة اللي إحنا بنشتغل فيها)

(23) [足が一本折れた]あの椅子はもう捨ててしまった。[所有者]

*ʔala:ʂ rame:t *k- korsi* [*lli ka:net rigl-o maksu:ra*].
 もう 捨てた.1 DEF-椅子 DEF COP.PAST.3F 足 -そのの 壊れている.F
 (خلاص رميت الكرسي اللي كانت رجله مكسورة)

3.2. 外の関係

外の関係のとき、すなわち修飾節の中において先行名詞に役割がないときは、節内に、内の関係のときのような、先行名詞の役割を表す代名詞は現れない。たとえば(24) (a)では、先行名詞 *ʂo:t* 「音」が、修飾節 *hadd^e jixabbit ʂala l-ba:b* 「誰かがドアを叩く」の中に役割を持たないため、再掲されていない。

また(24) (b)のように、動名詞 *taxbi:t* 「ノックすること」を使って、「誰かのノックの音」という名詞句でも同じ内容を表すことができる。動名詞は、主語がその直後に置かれ、それ以降に前置詞句などが置かれる。

(24) [(だれかが)ドアを叩いている]音が聞こえる。

(a) *sa:meʂ ʂo:t^e* [*hadd^e jixabbit ʂala l-ba:b*]. (سامع صوت حد يخبط على الباب)
 聞こえる 音 誰かが ノックする.3 の上 DEF-ドア

(b) *sa:meʂ ʂo:t taxbi:t hadd^e ʂala l-ba:b*. (سامع صوت تخبيط حد على الباب)
 聞こえる 音 ノックの 誰かの の上 DEF-ドア

「～という噂」は、(25) (a)のように、先行名詞 *ʔifa:ʂa* 「噂」に「～という」以下の節が修飾する形で表される。節の中の *be-tʔu:l* 「言っている」の主語は先行名詞 *ʔifa:ʂa* 「噂」であり、「(噂が) 言っている」となっている。また(25) (b)のように、*ʔinn* 以下の補文節を直接、*ʔifa:ʂa* 「噂」につけることもできる。

(25) [あの人が結婚したという噂は本当？]

(a) *el-ʔifa:ʕa [ʔlli be- tʔu:l ʔinne f-faxʕe-da tgawwez] ʕahi:ha?*
DEF-うわさ DEF PROG-言う.3F ~と DEF-人 -あの 結婚した.3 本当.F
(الإشاعة اللي بتقول إن الشخص ده اتجوز صحيحة؟)

(b) *el-ʔifa:ʕa [ʔinn e f-faxʕe-da tgawwez] ʕahi:ha?*
DEF-うわさ ~という DEF-人 -あの 結婚した.3 本当.F
(الإشاعة إن الشخص ده اتجوز صحيحة؟)

3.3. 時間節、場所節

時間節は、「時」などを先行名詞とした連体修飾節にはせず、(26) のように接続詞 *lamma* 「～のとき」を用いる。

(26) 私は、[その人が来た]時にご飯を食べていた。[時間節]

ʔana kunt e b- a:kol lamma [f-faxʕe-da geh]. (أنا كنت باكل لما الشخص ده جه)
私は COP.PAST.1 CONT-食べる.1 のとき DEF-人 -この 来た.3

場所節は、(27) のように名詞 *maka:n* 「場所」を先行名詞とした修飾節で表す。このとき修飾節の中で、*maka:n* の役割が代名詞-*h* 「それ」によって示される。

(27) 私は、[その人が待っている]所に行った。[場所節]

roht e-l-maka:n [ʔlli f-faxʕe-da mistanni fi:-h]. (رحت المكان اللي الشخص ده مستني فيه)
行った.1 DEF-場所 DEF DEF-人 -その 待っている で -それ

3.4. 補文節

補文節の1つで、*w-*「そして」と代名詞主語で始まる文を続けて、「～しながら」など同時性を表す形式がある。(28) (29) それぞれの(a)は、この同時性の *w-*を使った補文節の例である。*w-*節内の時制は、(28) (a)のように主節に合わせることもあるが、(29) (a)のように、主節の時点からみた時制にするのがふつうである。同時性の *w-*による補文節は直前の名詞にかかるとは限らず、たとえば *w-ana* 「そして私が」とすれば「私が～していたときに見た」のような節も作れる。

また、(28) (29) の(b)は、主節の目的語をそのまま主語として動詞を続ける構文である。(a)と(b)はだいたい同じ意味として使われる。

(28) 私は、[その人が走っていった]のを見た。[視覚]

(a) *ʔana fuft e f-faxʕe-da [w-howwa ka:n be- jigri].* (أنا شفت الشخص ده وهو كان بيجري)
私は 見た.1 DEF-人 -その そして-彼が COP.PAST.3 CONT-走る.3

(b) *ʔana fuft e f-faxʕe-da [ka:n be- jigri].* (أنا شفت الشخص ده كان بيجري)
私は 見た.1 DEF-人 -その COP.PAST.3 CONT-走る.3

(29) 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[聴覚]

(a) *ʔana smeʕt e-hom e-mba:reh bille:l [w-homma be- jtkallemu].*
私は 聞いた -1 -彼ら 昨日 夜に そして-彼らが CONT-話す.3PL
(أنا سمعتهم امبارح بالليل و هما بيتكلمو)

(b) *ʔana smeʕt e-hom [be- jtkallemu] mba:reh bille:l.* (أنا سمعتهم امبارح بالليل)
私は 聞いた.1 -彼ら CONT-話す.3PL 昨日 夜に

(30) では、*ʕa:ref* 「知っている」の目的語が *f-faxʕ* 「その人」ではないので(28) (29) の(b)のような形式はできず、*ʔinn* 「～と」を使った「その人が来た」という補文節にする。

(30) 私は、[その人が昨日ここに来たことを]知っている。 [知識]

ʔana ʕa:ref [*ʔinn f-faxʕe-da geh hena mba:reh*]. (أنا عارف إن الشخص ده جه هنا امبارح)
 私は 知っている ～と DEF-人 -その 来た.3 ここ 昨日

3.5. 直接話法・間接話法

アラビア語では、(31) (b)のような直接話法と、(31) (a)のような、*ʔinn* 「～と」を使った間接話法がある。時制の一致現象はない。

(31) 昨日、彼は[彼が今日ここに来たと言った]。

(a) *emba:reh howwa ʔa:l* [*ʔinn-o geh hena fi l- jo:m-e-da*].
 昨日 彼が 言った.3 ～と -彼 来た.3 ここ に DEF-日 -この
 (إمبارح هو قال إنه جيه هنا في اليوم ده)

昨日、彼は、「私は今日ここに来た」と言った。

(b) *emba:reh howwa ʔa:l* “*ʔana ge:t e hna nnaharda*”. (إمبارح هو قال “أنا جيت هنا النهارده”)
 昨日 彼が 言った.3 私は 来た.1 ここ 今日

3.6. 内在節

アラビア語では内在節はつくれず、主節の目的語を先行名詞とした修飾節で表す。(32) は「皿の上にあったリンゴ」、(33) は「家に入ってきたネコ」となっている。

(32) 私は、リンゴが[(あの)皿の上にあった]のを食べた。

ʔakalt e- tuffa:ha [*lli ka:net fi t- ʔabaʔ*]. (أكلت التفاحة اللي كانت في الطبق)
 食べた.1 DEF-リンゴ DEF COP.PAST.3F に DEF-皿

(33) 私は、ネコが[家に入ってきた]のを捕まえた。

misikt e- ʔoʕta [*lli dayalet e- be:t*]. (مسكت القطه اللي دخلت البيت)
 捕まえた.1 DEF-ねこ DEF 入った.3F DEF-家

参考文献

Badawi, El-Said and Martin Hinds. 1986. *A Dictionary of Egyptian Arabic*, Librarie du Liban: Beirut.

本研究は、JSPS 科研費 JP16K02877 の助成を受けています。

執筆者連絡先: nagatoyouichi@gmail.com

原稿受理: 2019年5月8日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

マレーシア語の否定と連体修飾複文 Negation and nominal modifier clauses in Malay

野元 裕樹¹, ムハマド・ファリス・シノン・ビン・マスニン²
Hiroki Nomoto, Mohd Farez Syinon bin Masnin

¹東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, School of Language and Culture Studies
²ゼンマーケット株式会社
ZenMarket Inc.

要旨:本稿ではマレーシア語の否定と連体修飾複文を概観する。データは、本号の特集「否定、形容詞と連体修飾複文」のためのアンケートに基づく。

Abstract: This article overviews negation and nominal modifier clauses in Malay. The data is based on the questionnaire prepared for the special topic of this volume “Negation, adjectives and nominal modifier clauses.”

キーワード:否定, 連体修飾複文, 関係節, 補文, マレーシア語

Keywords: negation, nominal modifier clauses, relative clauses, complementation, Malay

1. はじめに

本稿では、特集のアンケート項目に基づき、マレーシア語の否定と連体修飾複文について概観する。それぞれ第2節、第3節で扱う。アンケート項目のうち、これらの節で議論されないものは、第4節に収録する。特集アンケートでの例文番号は【 】に入れて示す。

本稿で示すデータは、マレーシア国内の地域方言の差を超えて使われる、マレーシア語の標準方言のものである。標準方言においては、書き言葉と話し言葉があり、2つの変種間の差は大きく、ダイグロシヤ状況を生んでいる。本稿のデータは基本的に話し言葉のものである。例文はムハマド・ファリス・シノンが特集アンケートの日本語文に基づいて作文した。

2. 否定

マレーシア語の否定辞には、*tidak* (口語形: *tak*), *bukan*, *belum*, *jangan* の4つがある。これらの使い分けには、焦点の有無、述語の統語範疇、相、モダリティが関与する。まず、2.1節で焦点を伴わない、中立的な否定を扱う。焦点を伴う場合は、否定辞の用法が異なるため、2.2節で別に論じる。最後に、2.3節で、言語類型論的に興味深い、表層の統語構造と否定辞の作用域の対応関係について触れる。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

2.1. 中立的否定

中立的否定とは、否定される要素が焦点でない、つまり代替要素 (alternative) との対比を伴わないような否定をいう。名詞述語文の否定では、(1)のように、*bukan* が用いられる。

- (1) Ini *bukan* buku saya.¹ 【1】
this not book 1SG
「これは私の本ではない。」

形容詞述語文(2)および動詞述語文(3)の否定では、*tidak/tak* が用いられる。

- (2) Anjing ini *tak* besar. 【6】
dog this not big
「この犬は大きくない。」

- (3) a. Orang itu *tak* datang hari ini. 【10】
person that not come today
「今日はあの人は来ない。」

- b. Orang itu *tak* bawa buku itu pulang. 【11】
person that not bring book that return
「あの人はその本を持って行かなかった。」

形容詞述語文で、主語が表す個体が形容詞の表す特性を文脈上決定される標準より低い程度でしか持たない場合、(4)のように、*tidak/tak berapa* 「あまり～ない」や *tidak/tak begitu* 「それほど～ない」のような表現が用いられる。(4)から *tak* を除いた文(5)は非文であるので、(4)の文は *berapa besar* を述語とするような形容詞述語文の *tak* による否定ではない。*tak berapa* は、ひとかたまりの否定要素として機能している。つまり、(4)は(6a)ではなく(6b)のような構造を持つ。

- (4) Anjing ini *tak berapa* besar. 【7】
dog this not how.much big
「この犬はあまり大きくない。」

- (5) *Anjing ini *berapa* besar.
dog this how.much big

- (6) a. Anjing ini [_{Neg} *tak*] [_{AP} *berapa besar*].
b. Anjing ini [_{Neg} *tak berapa*] [_{AP} *besar*].

存在文(7)および所在文(8)では動詞 *ada* 「ある、いる」を用いるため、否定には *tak* が用いられる。*tak ada* が一語になった *takde, tiada* 「ない」という語形も存在する²。

¹ ライプツィヒグロス規則にない記号：PART: particle.

² 古典マレー語では、*tiada* が現代語の *tidak/tak* に相当する通常の否定辞として用いられていた。現代語

- (7) Di bilik ini {*tak ada / takde/ tiada*} kerusi. [2]
at room this not be not.be not.be chair
「この部屋には椅子が {ありません/ない}。」

- (8) Buku itu {*tak ada / takde / tiada*} di bilik ini. [5]
book that not be not.be not.be at room this
「その本はこの部屋に {ありません/ない}。」

助動詞を含む文の否定では否定辞が助動詞の前に置かれるが, 完了の助動詞 *sudah* と *telah* は例外である。 *sudah/telah* の意味の否定, つまり未然の意味を表すのには, 特別な否定辞 *belum* 「(まだ) ~ない」が存在する。(9)の否定は, 通常否定辞 *tidak/tak* を用いた(10a)ではなく, 補充形の *belum* を用いた(10b)のようになる。相は, 類型論的に補充形の否定辞がよく観察される意味範疇である (cf. Zeshan 2013)。

- (9) Hari ini orang itu *sudah/telah* datang sini.
today person that PFV come here
「今日あの人はこちらに来た。」

- (10) a. *Hari ini orang itu *tidak/tak sudah/telah* datang sini.
today person that NEG PFV come here
b. Hari ini orang itu *belum* datang sini.
today person that NEG.PFV come here
「今日はあの人はまだ来ていない。」

希求を表す節では, (11)のように否定辞 *jangan* が用いられる。しかし, (12)のように *tak* を用いることもある。(12)の文では *jangan* は不自然である。どのような場合に *jangan* が容認されるかは, 今後の検討課題である。

- (11) ... Rasulullah SAW menentukan waktu kepada kami tentang menggunting kumis, mengerat kuku, mencabut bulu ketiak dan mencukur ari-ari
supaya *jangan* di-biarkan lebih dari empat puluh hari.³
so.that not PASS-let more than forty day

では, 一語の「ない」である *takde/tiada* は通常否定辞ではなく, 控え目な否定を表す。(i)に, 現代語での *takde* の使用例を示す。存在・所在文ではないので, *takde* を *tak* に置き換えても非文にはならない。

- (i) ... muka dia *takde*-lah cute sangat tapi lagi best dari teddybear.
face 3SG not.be-PART cute very but more good than teddy.bear
「…彼女の顔はすごいかわいいってわけじゃないけど, テディベアよりはいいね。」
(http://mohamadnor.blogspot.com/2006_12_01_archive.html, MALINDO Conc (Nomoto et al. 2018)を用いて 2019年5月1日にライブツイヒコーパスコレクション(Goldhahn et al. 2012)のZSM MXD2012サブコーパスから採集)

³ <http://hadirasullullah.blogspot.com/2010/05/himpunan-hadis-hadis-rasullullah-4.html> (MALINDO Conc (Nomoto et al. 2018)を用いて 2019年5月3日にライブツイヒコーパスコレクション(Goldhahn et al. 2012)のZSM MXD2012サブコーパスから採集)

「…預言者様（神の祝福あれ）は、口髭を整えること、爪を切ること、腋毛を抜くこと、陰毛を剃ることについて、40日以上放置しないようにと、時間をお決めになった。」

- (12) Cakap perlahan-lahan -lah, supaya orang tu tak/*jangan dengar. 【18】
 speak quietly -PART so.that person that not not hear
 「あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。」

命令文では逆に、(13)に示したように、通常の否定辞 *tak* を用いることができない。

- (13) a. *Jangan/*Tak lari!* 【15】
 not not run
 「走るな！」
- b. *Jangan/*Tak cakap kuat-kuat.* 【16】
 not not speak loudly
 「大きな声を出すな！」

2.2. 焦点を伴う否定

否定される要素が焦点である、つまり代替要素との対比を伴う場合、述語の統語範疇にかかわらず、否定辞には常に *bukan* が用いられる。名詞述語文では、中立的否定でも *bukan* が用いられるため、中立的否定と焦点を伴う否定の区別が曖昧になる⁴。例文(14)–(15)は、野元（2016）からの例である。

- (14) Ini *bukan* [NP kekasih saya]. Ini adik saya.
 this not lover 1SG this younger.sibling 1SG
 「これは私の恋人ではありません。弟（妹）です。」

- (15) Dia *bukan* [AP bodoh]. Sebaliknya, dia sangat pandai dalam subjek lain.
 3SG not stupid conversely 3SG very clever in subject other
 「彼（女）は馬鹿というわけではありません。というか、他の科目では非常によくできるんです。」

- (16) Kini, aku *bukan* [VP mengurut], tapi meraba.⁵
 now 1SG not massage but touch
 「今や、僕はマッサージするのではなく、さすっていた。」

相や法の助動詞を含む場合にも、焦点を伴う否定では、*bukan* が用いられる。(17)では、母親が動かないのが眠っているためでなく、他の理由のためであることが *bukan* の使用から伝わる。(18)の文の前の

⁴ Kroeger (2014)は、本稿のいう「中立的否定」と「焦点を伴う否定」を内部[述語]否定 (internal [predicate] negation) と外部[文]否定 (external [sentential] negation) (Lyons 1977: 769; Horn 1989: Ch. 7) の語彙的区別として分析している。内部否定は命題の述語を否定して否定命題を作る。一方、外部否定は命題全体を否定する主節現象 (main clause [root] phenomenon) である。

⁵ <http://ceritaseksfantasi.blogspot.com/2011/06/guru-tuisyen.html> (MALINDO Conc (Nomoto et al. 2018)を用いて2019年5月2日にライブツイヒコーパスコレクション(Goldhahn et al. 2012)のZSM WEB2012サブコーパスから採集)

文脈では, スンニ派とシーア派の対立がもう何世紀も続く論争を経て存続することが述べられている。(18)の文で *bukan* の使用の背後にあるのは, シーア派である聞き手がスンニ派に転向することなどなく, シーア派であり続けるだろうという話し手の考えである。

(17) Setelah menggerakkan ibu-nya berkali-kali, Kay merasakan ibu-nya itu *bukan sedang* tidur.⁶
after move mother-3 many.times Kay feel mother-3 that not PROG sleep
「何度も母親を揺すった後, ケイは母親が眠っているのではないと感じ取った。」

(18) Andai aku pulak menang berdialog sekali pun hang *bukan akan* jadi sunni pun.⁷
if 1SG on.the.other.hand win dispute at.all 2SG not will be Sunni at.all
「仮に俺が議論に勝ったとしても, お前はスンニ派になったりなどしない。」

完了の助動詞 *sudah/telah* の中立的な否定では, 他の助動詞と違い, 否定辞 *tidak* が用いられないことを前節で述べた。しかし, 焦点を伴う否定の場合には, 他の助動詞との違いはなく, *bukan* が用いられる。(19)では, 助動詞 *sudah* の口語形 *dah* が *bukan* の後に生起している。この文は, 前の文脈にある *sudah pergi* 「もう行った」という表現が「死ぬ」の婉曲表現ではなく, 字義通りの意味であることを述べている。

(19) Bukan macam tu nak, Farid *bukan dah* mati tapi Farid terpaksa pergi sambung belajar.⁸
not like that child Farid not PFV die but Farid have.to go continue study
「そうじゃないのよ, ファリッドはあの世に行ったんじゃないくて, 進学で行かなくちゃならなかったの。」

焦点を伴う否定の *bukan* は, 副詞形成の接尾辞 *-nya*⁹を付けて, *bukannya* とすることもできる。この文では, *bukan* が *harganya mahal* 「値段が高い」という文の前に来ている。意味的には, *bukan* は否定の命題「値段が高くない」を作るのではなく, 肯定の命題「値段が高い」を否定している。

(20) [私は買わなかった。しかし, …]

Bukan-nya harga-nya mahal.

【14】

not-NYA price-3 expensive

「値段が高いというわけではない。」

肯定の命題を否定する *bukan* は, その命題を表す文の前でなく, (21)のように, その中に入り込むこ

⁶ <http://an-nurkasih.blogspot.com/> (MALINDO Conc (Nomoto et al. 2018)を用いて 2019年5月2日にライブツイヒコーパスコレクション(Goldhahn et al. 2012)の ZSM WEB2012 サブコーパスから採集)

⁷ <http://nikabduh.wordpress.com/2008/06/18/anasir-syiah-dalam-pas-2/> (MALINDO Conc (Nomoto et al. 2018)を用いて 2019年5月2日にライブツイヒコーパスコレクション(Goldhahn et al. 2012)の ZSM MXD2012 サブコーパスから採集)

⁸ <http://muzri.wordpress.com/2009/11/page/36/> (MALINDO Conc (Nomoto et al. 2018)を用いて 2019年5月2日にライブツイヒコーパスコレクション(Goldhahn et al. 2012)の ZSM MXD2012 サブコーパスから採集). *berlajar* は綴り間違い。正しくは, *belajar*.

⁹ 査読者から副詞形成の接尾辞 *-nya* の意味は何かという質問があった。ここでの *-nya* は, 特に意味を追加することはなく, 単にそれが付加した語が副詞であることを表す。

とも可能である。

- (21) Saya *bukan-nya* cakap macam tu sebab saya rasa nak buat awak marah. 【19】
1SG not-NYA say like that because 1SG feel want make 2SG angry
「私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。」

肯定の命題でなく、否定の命題が否定される場合、否定文の否定、つまり二重否定になる。二重否定の文では、(22)に示したように、述語の統語範疇に関わらず、必ず *bukan* が用いられる。斜体の *bukan* を *tak* にすることはできない。(22a)では、焦点を伴う否定の *bukan* には接尾辞-*nya* がないと、二度同じ語形が続くため、不自然に響く。二重否定の文「p でなくはない」は、「そうでなく、p」とか「そうでなく、p でも p でなくもない」のような意味を常に伴うようである。そのため、二重否定の文は焦点を伴う否定の一種であると考えられる。

- (22) a. Ali *bukan²(-nya)* bukan [_{NP} kawan saya] sebab kami sekolah sama dulu.
Ali not not friend our because 1PL.EXCL school same before
「昔同じ学校だったから、アリは私の友達でなくはない。」
b. Sup ini *bukan tak* [_{AP} sedap].
soup this not not delicious
「このスープはおいしくなくはない。」
c. Saya bukan tak [_{VP} suka buah durian].
1SG not not like fruit durian
「私はドリアンが好きでなくはない。」

命題内容には関係しないメタ言語的否定、つまり言語表現そのものを否定する場合にも、常に *bukan* が用いられる。(23)の文で、否定の対象となっているのは、命題内容自体ではなく、それを伝えるために用いられている言語表現（具体的には *mudah* という語）である。*muda* 「若い」も *mudah* 「易しい」も形容詞なので、焦点を伴う否定の *bukan* の他に中立的否定の *tak* も可能なはずだが、実際には *bukan* のみが容認される。

- (23) [*muda* を *mudah* と間違えて発音した外国人のマレーシア語学習者に対して]
a. Awak *bukan* “mudah” tapi “muda.”
2SG not MUDAH but MUDA
「君は mudah (易しい) じゃなくて, muda (若い) です。」
b. #Awak *tak* mudah, tapi muda.
2SG not easy but young
（「君は易しいんじゃないで、若いです。」）

Horn (1989)のいうメタ言語的否定は、より限定的な概念である。すなわち、一般化された会話の含意 (generalized conversational implicature) 一会話の含意のうち、特定の文脈が設定されなくても生じるもの一の否定である。(24)に示したように、やはり *bukan* のみが容認可能である。この文で否定されているのは、*satu* 「1」が生み出す「1より多くない」という会話の含意であり、命題内容そのものではない。

- (24) a. *Aku bukan beli satu tau, aku beli 6 buah sekaligus!*
1SG not buy one know 1SG buy six CLF at.once
「私1つ買ったんじゃないのよ, 6つまとめて買ったの。」
- b. #*Aku tak beli satu tau, aku beli 6 buah sekaligus!*
1SG not buy one know 1SG buy six CLF at.once

(Kroeger 2014: 142)

2.3. 否定辞の作用域と表層の統語構造

否定辞は作用域を取る要素であり, 数量表現など他の作用域を取る要素と作用域の広さにおいて競合する. 英語のことわざ(25)は同一の表層構造で, (26)に示した, 作用域の異なる2通りの解釈が可能である.

- (25) *All that glitters is not gold.*

「すべての光るものが金ではない。」

- (26) a. *all > not*: すべての光るもの *x* について, 「*x* は金でない」が真である (全否定)

「光るものには金であるものはない。」

- b. *not > all*: 「すべての光るもの *x* が金である」は真でない (部分否定)

「光るものには金であるものもあれば, 金でないものもある。」

部分否定のみを表すには, (27)のように, 否定辞が数量詞を必ず統御する位置に生起するような構造の文が用いられる.

- (27) *Not all that glitters is gold.*

「すべての光るものが金であるわけではない。」

マレーシア語では, 英語と違い, 否定辞と数量詞の作用域の関係は表層の構造と常に同じになる. そのため, 英語のように同一の語順で解釈が曖昧になることはない. 例えば, 英語のことわざ(25)のマレーシア語訳は, 解釈により異なる.

- (28) a. *semua* 「すべて」 > *bukan* 「ない」

Semua yang bergemerlapan bukan emas.

all REL glitter not gold

「光るものには金であるものはない。」

- b. *bukan* 「ない」 > *semua* 「すべて」

Bukan semua yang bergemerlapan emas.

not all REL glitter gold

「光るものには金であるものもあれば, 金でないものもある。」

作用域の解釈が表層の語順に従うため, 数量詞 *kesemua* 「すべての」が否定辞 *tak* を統御する構造の(29)の文には, 全否定の意味しかない. 部分否定には, 統御関係が逆の構造を持つ(30)の文が用いられる. (30a)では, 否定辞 *tak* が数量詞 *semua* を直接修飾している. (30b)は, 否定辞 *bukan* が文を埋め込む形の構造

になっている (cf. (20)).

(29) *Kesemua pelajar tak ambil bahagian.*¹⁰ 【12】

all student not take part
「すべての学生が参加しなかった。」

(30) a. [*Tak semua*] *pelajar ambil bahagian.* 【13】

not all student take part
「すべてではない学生が参加した。」

b. *Bukan [kesemua pelajar ambil bahagian].*

not all student take part
「すべての学生が参加したわけではない。」

推量の否定では、否定辞が推量の副詞より広い作用域を取るため、(31)のように、否定辞 *tak* が推量の副詞 *mungkin* を統御する構造を取る。日本語の「まい」のような特別な形式はない。否定の推量では、(32)のように、語順が逆になる。

(31) *tak* 「ない」 > *mungkin* 「だろう」

Esok tak mungkin hujan.
tomorrow not maybe rain
「明日は雨は降るだろうことはない (= 降り得ない).」

(32) *mungkin* 「だろう」 > *tak* 「ない」

Esok mungkin tak hujan. 【17】
tomorrow maybe not rain
「明日は雨は降らないだろう。」

3. 連体修飾複文

3.1. 関係節

マレーシア語の関係節には、関係詞 *yang* により導入されるものと *yang* なしに完全な節が修飾される語の直後に続くものがある。関係詞 *yang* を伴う関係節は、主名詞が関係節内の述語の項である場合と再述代名詞が生起する場合である。(33)では動詞の内項が、(34)では動詞の外項が関係化されている。いずれも、関係詞 *yang* が義務的である。(34)は、前置された疑問詞 *siapa* 「誰」の後に明示的な主名詞が生起しない自由関係節が続く、疑似分裂文である。以下の例では、関係節など議論の対象となっている節を [] で囲んで示すことにする。

¹⁰ (i)のように、数量詞を遊離させることも可能である。

(i) *Pelajar kesemua-nya tak ambil bahagian.*
student all-3 not take part
「学生は全員参加しなかった。」

- (33) Buku [**(yang)* saya beli semalam]ada di mana? [20]
book REL 1SG buy yesterday be at where
「私が昨日買ってきた本はどこにある？」

- (34) Siapa [**(yang)* bawa buku tu]? [21]
who REL bring book that
「その本を持って来たのは誰？」

(35)の文では *sebatang kaki* 「一本の脚」の所有者が関係化され、再述代名詞-*nya* として生起している。口語では再述代名詞-*nya* が生起しないことも多い。

- (35) Kerusi [**(yang)* dah patah se-batang kaki(-nya)]tu dah di-buang. [23]
chair REL PFV break one-CLF leg-3 that PFV PASS-dispose
「脚が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。」

その他の場合、すなわち、主名詞が関係節内の述語の項でなく、再述代名詞も生起しない場合には、関係詞 *yang* は生起できない。(36)の文は、場所の付加詞が関係化されていると言える例である。このような例では、*di mana* 「どこ」が節頭に生起し、関係代名詞として機能することもある。

- (36) a. Bilik ini bilik [**(yang)* kami buat kerja]. [22]
room this room REL 1PL.EXCL do work
「この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。」
b. Saya pergi ke tempat [**(yang)*orang itu menunggu]. [27]
1SG go to place REL person that wait
「私はその人が待っている所に行った。」

(37)の文は、時の付加詞が関係化されていると言える例である。このような表現は可能ではあるものの、同じ内容であれば、(38)のように「～する時」という意味の接続詞を用いて表現する方が普通である。

- (37) Saya tengah makan pada ketika [**(yang)*orang itu datang]. [26]
1SG PROG eat at time REL person that come
「私はその人が来た時にご飯を食べていた。」

- (38) Saya tengah makan semasa/ketika orang itu datang.
1SG PROG eat when when person that come
「私はその人が来た時、ご飯を食べていた。」

(39)は、関係節内に主名詞に対応する表現があるとは想定しにくい、いわゆる「外の関係」の連体修飾節である。やはり、関係詞 *yang* は生起できない。同じ内容は、(40)のように、*ketukan pintu* 「ドアの叩き」という名詞句による修飾でも表現できる。

(39) Kedengaran bunyi [(**yang*) pintu di-ketuk]. 【24】
 hear sound REL door PASS-knock
 「ドアを叩いている音が聞こえる。」

(40) Kedengaran bunyi [_{NP} ketukan pintu].
 hear sound knock door
 「ドアのノック音が聞こえる。」

(41)–(42)に示したように、マレーシア語には主要部内在型関係節は存在しない。

(41) a. **Saya makan* [yang epal ada atas pinggan itu]. 【32】
 1SG eat REL apple be on plate that
 b. **Saya makan* [yang ada epal atas pinggan itu].
 1SG eat REL be apple on plate that
 意図される解釈：「私はリンゴがああ皿の上にあったのを食べた。」

(42) **Saya tangkap* [yang kucing masuk ke rumah]. 【33】
 1SG catch REL cat enter to house
 意図される解釈：「私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。」

3.2. 内容節

内容節は、補文標識 *yang* または *bahawa* により導入される。*yang* は話し言葉で、*bahawa* は書き言葉で用いられることが多い。これらなしに、内容節が続くことも可能である。(43)のように内容節が名詞を修飾する場合も、(44)および(46)のように内容節が思考動詞や発言動詞の項になる場合も同じである。(44)の日本語訳のように形式名詞「こと」に相当する名詞を内容節が修飾するような文は容認されない(45)。(46)を直接話法で書き換えると(47)のようになる。

(43) Betul ke khabar angin [yang/bahawa/Ø orang tu dah kahwin]? 【25】
 true Q rumor that/that/Ø person that PFV marry
 「あの人が結婚したという噂は本当か？」

(44) Saya tahu [yang/bahawa/Ø orang itu datang ke sini semalam]. 【30】
 1SG know that/that/Ø person that come to here yesterday
 「私はその人が昨日ここに来たことを知っている。」

(45) **Saya tahu hal/perkara* [yang/bahawa/Ø orang itu datang ke sini semalam].
 1SG know thing/thing that/that/Ø person that come to here yesterday

- (46) [5月1日に話し手のマレーシアからの友人は話し手に「今日、日本に着いた」と言った。そのことについて、話し手は5月2日に別の友人に伝えている.]

(Semalam) Dia cakap [yang/bahawa/Ø dia sampai di sini semalam]. 【31】

yesterday 3SG say that/that/Ø 3SG reach at here yesterday

「(昨日) 彼は彼が昨日ここに着いたと言った。」

- (47) (Semalam) Dia cakap, “Saya sampai di sini hari ini.” 【31】

yesterday 3SG say 1SG reach at here yesterday

「(昨日) 彼は『私は今日ここに着いた』と言った。」

4. その他

4.1. 不定表現+とりたて助詞 pun「も」

とりたて助詞 (focus-sensitive particle) の pun 「も」は、焦点が尺度 (scale) の下限に位置することを表す (野元, アズヌール・アイシャ 2017). (48)では「一つの椅子」, (49)では「誰か」という不定表現に pun を付加することで、「この部屋に椅子がない」, 「その部屋に人がいない」ことが反駁しがたい事実であることを表している。

- (48) a. Di bilik ini tiada se-buah kerusi pun. 【3】

at room this not.be one-CLF chair PUN

b. Di bilik ini se-buah kerusi pun tiada.

at room this one-CLF chair PUN not.be

「この部屋には一つも椅子がない。」

- (49) a. Di bilik itu tiada sesiapa pun. 【4】

at room that not.be anyone PUN

b. Di bilik itu sesiapa pun tiada.

at room that anyone PUN not.be

「その部屋には誰もいない。」

4.2. 形容詞の比較級・最上級

形容詞の比較級は, (50)のように, lebih 「より～」+形容詞で表す。比較の対象は「～から」という意味の前置詞 daripada (または dari) により導入される。

- (50) Anjing ini lebih besar daripada anjing itu. 【8】

dog this more big than dog that

「この犬はあの犬より大きい。」

最上級は, paling 「一番～」+形容詞(51a)または形容詞に接頭辞 ter-を付加した形(51b)で表す。

- (51) a. Anjing ini paling besar antara anjing-anjing itu. 【9】

dog this most big among dog.PL that

- b. Anjing ini yang *ter-besar* antara anjing-anjing itu.
 dog this REL TER-big among dog.PL that
 「この犬がその犬たちの中で一番大きい。」

4.3. 知覚動詞の補文

知覚動詞の補文は、3.2 節で見た内容節である補文よりも構造的に小さい。(52)–(53)の補文の先頭には、*yang/bahawa* (英: *that*), *supaya/agar* (英: *so that*), *untuk* (英: *for, to*) のいずれの補文標識も生起できない。一方、補文中には相を表す助動詞が生起できるので、当該の構成素は単純な動詞句よりも大きい。

- (52) Saya tengok/nampak [orang itu (telah) berlari]. 【28】
 1SG look/see person that PFV run
 「私はその人が走っていったのを見た。」

- (53) Malam semalam, saya dengar [mereka sedang bercakap-cakap]. 【29】
 night yesterday 1SG hear 3PL PROG talk
 「昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。」

参考文献

- Goldhahn, Dirk, Thomas Eckart and Uwe Quasthoff. 2012. Building large monolingual dictionaries at the Leipzig Corpora Collection: From 100 to 200 languages. In *Proceedings of the Eighth International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC'12)*.
- Horn, Laurence R. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: University of Chicago Press.
- Kroeger, Paul. 2014. External negation in Malay/Indonesian. *Language* 90: 137–184.
- Lyons, John. 1977. *Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 野元裕樹. 2016. 『Bahasa Melayu TUFUS 文法』東京外国語大学.
http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ase/mal/tatabahasa_web/index.html
- 野元裕樹, アズヌール・アイシャ・アブドゥッラー. 2017. 「マレーシア語の取り立て表現と不定表現」『語学研究所論集』22: 121–131. 東京外国語大学.
- Nomoto, Hiroki, Shiro Akasegawa and Asako Shiohara. 2018. Building an open online concordancer for Malay/Indonesian. The 22nd International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL)での発表論文.
- Zeshan, Ulrike. 2013. Irregular negatives in sign languages. In Matthew S. Dryer & Martin Haspelmath (eds.) *The World Atlas of Language Structures Online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. (<http://wals.info/chapter/139>, アクセス日: 2019年5月5日.)

執筆者連絡先: nomoto@tufs.ac.jp (野元), farez_syinon@yahoo.com (ムハammad・ファリス・シノン)
 原稿受理: 2019年5月8日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

メエ語の否定、形容詞と連体修飾複文 Negation, Adjective, and Adnominal Constructions in Mee (Ekari)

青山 和輝¹、黒島 規史²
Kazuki Aoyama, Norifumi Kuroshima

¹ 東京大学大学院 / 東京外国語大学 AA 研共同研究員

Graduate School of the University of Tokyo / Joint Researcher of ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies

² 東京外国語大学非常勤講師 / 東京外国語大学 AA 研共同研究員

Part-time Lecturer, Tokyo University of Foreign Studies / Joint Researcher of ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿では、本号の特集にしたがってメエ語の否定、形容詞と連体修飾複文について概観する。メエ語のデータを提示したうえで、各例文に対して解説を加える。

Abstract: This article overviews negation, adjective, and adnominal constructions in Mee (Ekari) based on the questionnaire on the special topic of this volume. We present examples of the Mee language and give an explanation for each example sentence.

キーワード: メエ語、否定、形容詞、連体修飾複文

Keywords : Mee (Ekari), negation, adjective, adnominal construction

1. はじめに

本稿では特集「否定、形容詞と連体修飾複文」のアンケートに沿ってメエ語（バプア諸語トランスニューギニア系）の例文を提示し、各例文に対して適宜補足説明を加える。

本稿のデータは、アンケートの例文を筆者らがメエ語に翻訳したうえで、コンサルタントの方の確認と修正を経たものである。ただし、(7) から (9) に関しては筆者らでは対応するメエ語の表現がわからなかったため、コンサルタントの方に一からメエ語に翻訳していただいた。

コンサルタントはメエ語 Paniai 方言が母語である Dance Nawipa 氏である。したがって、以下で扱うメエ語は Paniai 方言であるが、単にメエ語と称することにする。

メエ語の基本語順は SOV で、修飾語と被修飾語の語順は NA/AN のどちらもありうる。主語や目的語を示す明確な格標識はなく、主語や目的語と一致を示す接辞が動詞に接続する主要部標示型の言語だと言える。人称接辞を含めた種々の接辞は以下のような順で動詞語幹に接続される。アスペクト、テンス接辞の種類によっては、主語一致接辞は現れない場合もある。

Negative-Dual subject-Benefactive-Object-Verb stem-Aspect/Tense-Subject



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deedja>

2. メエ語データ

(1) これは私の本ではない。[名詞述語文／コピュラ文の否定]

<i>Kii</i>	<i>ke</i>	<i>aniya</i>	<i>buukuu</i>	<i>ki</i>	<i>beu.</i>
DEM.SG.M	DET.SG.M	1SG.GEN	book	DET.SG.M	NEG

メエ語の指定文、指正文にコピュラ相当の要素は現れない。名詞述語の否定は、述語に後続する否定小詞 *beu* によって表される。

メエ語では限定詞 *ki* のような、先行研究で名詞句標識と呼ばれている一連の語とその組合せによって情報構造が複雑に管理されている。例 (1) の限定詞 *ki*¹ はちょうど日本語の「で『は』ない」のように対比関係を示していると考えられる。

(2) この部屋には椅子がない。[存在文の否定]

<i>Kou</i>	<i>owaa</i>	<i>kugu</i>	<i>duba</i>	<i>kouya</i>	<i>ko</i>	<i>kursi</i>	<i>ko</i>	<i>beu</i>	<i>top-a.</i>
DEM.SG.F	house	room	in	there	DET.SG.F	chair	DET.SG.F	NEG	EXIST-3SG.F.S

メエ語は存在述語 *top-*「ある／いる」を有し、存在文と所在文はこの存在述語を随意的に伴う。存在述語 *top-* は動詞 *tou*「とどまる」の中過去形 *-p-* に由来するが²、否定のふるまいが通常の動詞とは異なるため、本稿では *top-* を動詞とは異なる範疇の存在述語「ある／いる」と見なす。

通常の動詞は後述の通り、否定接頭辞 *te-* あるいは否定小詞 *beu* の後置により否定されるが、*top-* による存在文はそのどちらでもなく、例 (2) の通り *beu* を *top-* に前置する。これは例 (17c) の *beu yuwa* と並行的に捉えられるようにも思われるが、*beu top-* を一塊の非存在述語「ない／いない」と見なすべきか、それとも *top-* が随意的であることを重視して全く別の処理方法を採用するかは今後の課題となる。

(3) この部屋には一つも椅子がない。[全部否定・モノ]

<i>Kou</i>	<i>owaa</i>	<i>kugu</i>	<i>duba</i>	<i>ko</i>	<i>kursi</i>	<i>ena</i>	<i>ma</i>	<i>beu</i>	<i>top-a.</i>
DEM.SG.F	house	room	in	DET.SG.F	chair	one	also	NEG	EXIST-3SG.F.S

(4) その部屋には誰もいない。[全部否定・ヒト]

a.	<i>Kou</i>	<i>owaa</i>	<i>kugu</i>	<i>duba</i>	<i>ko</i>	<i>mee</i>	<i>beu</i>	<i>top-ai.</i>
	DEM.SG.F	house	room	in	DET.SG.F	person	NEG	EXIST-3PL.S
b.	<i>Kou</i>	<i>owaa</i>	<i>kugu</i>	<i>duba</i>	<i>ko</i>	<i>mee</i>	<i>ma</i>	<i>beu.</i>
	DEM.SG.F	house	room	in	DET.SG.F	person	also	NEG

モノの全部否定はちょうど日本語の「一つもない」に対応する形式が用いられる（メエ語では数詞は基本的に後置修飾かつ遊離を許す）。ヒトの全部否定は例 (4) の通り名詞 *mee*「人」が限定詞なしで用いられ、疑問詞 *meimee*「誰」は用いない。例 (4ab) はいずれもコンサルタントから得た例文ママであり、両者に意味に違いはないが、ここからも存在述語 *top-* が随意的であることが分かる³。

¹ 限定詞は指示詞が文法化したものと考えられる。例 (1) に見られる *ke* はおそらく *ki* と同一の機能を持つと接辞で、指示詞 *kii* と組み合わせた場合の異形態と分析される。

² Marquardt et al. (2018) は *-p-* を完了接辞とみて、状態動詞 *tou* と組合せると継続の意味を表すとする。

³ 随意的というのはていどいい逃げの表現であって、どのような場合に省略可能で、どのような場合に不可能なの

(5) その本はこの部屋にない。[所在文の否定]

Kou buukuu kou ko, kou owaa kugu duba beu top-a.
 DEM.SG.F book DEM.SG.F DET.SG.F DEM.SG.F house room in NEG EXIST-3SG.F.S

所在文は存在文とおよそ同じ構造をしている。存在述語 *top-* を用いても良いし、否定の仕方も同一である。語順と名詞句標識の使い方のみによって区別されると考えられる。

(6) この犬は大きくない。[形容詞文の否定]

Kii dodii kii ke ibo (ki) beu.
 DEM.SG.M dog DEM.SG.M DET.SG.M big DET.SG.M NEG

形容詞述語文は名詞文と同様、否定小詞 *beu* で否定される。ただし文構造には不明な点も多く、例 (6) にも分析の余地がある。*beu* は否定的意味の形容詞をつくるのにも用いられるため (privative; たとえば *dimi-yago* 「賢い」に対して *dimi-beu* 「愚かな」)、*ki* の入らない場合は否定述語 *ibo-beu* “non-big” を含む肯定文と捉えることができるかもしれない、一方 *ki* の入る場合は例 (13, 14) と同様、肯定文を *ki* で名詞化したうえで否定する文否定表現とみなすことができるかもしれない。

(7) この犬はあまり大きくない。[形容詞文の部分否定]

Kii dodii kii ke ibo-opoo beu.
 DEM.SG.M dog DEM.SG.M DET.SG.M big-much NEG

例 (7) で *ibo* 「大きい」に後続する接辞 *-opoo* は元来「太い」を表す形容詞 *epo* であるが、ここでは形容詞の強意要素として用いられ、否定詞と共に用いて形容詞の部分否定「あまり……ない」を表す。

(8) この犬はあの犬より大きい。[比較級]

a. この犬とあの犬を比べると、あの犬が大きい。

Kii-kaa dodii kii ke, kou-kaa dodii ma
 DEM.SG.M-GEN dog DEM.SG.M DET.SG.M DEM.SG.F-GEN dog with
ena dani ti-touyogo ko kou-ka dodii kou ko ibo.
 one similar do-CVB.COND DET.SG.F DEM.SG.F-GEN dog DEM.SG.F DET.SG.F big

b. あの犬は小さいがこの犬は大きい

Kii-kaa dodii kii ke ibo beu kodeya,
 DEM.SG.M-GEN dog DEM.SG.M DET.SG.M big NEG but
kou-kaa dodii kou ko ibo.
 DEM.SG.F-GEN dog DEM.SG.F DET.SG.F big

(9) この犬がその犬たちの中で一番大きい。[最上級]

Kii dodii kii ke kou dodii-idoo duba umina ibo.
 DEM.SG.M dog DEM.SG.M DET.SG.M DEM.PL.F dog-PL in most big

かは現状全く分からない。

形容詞比較級は（分析的にも）存在せず、言語的に比較を行うには例 (8ab) のような迂言的な言い回しを用いるしかない。一方、形容詞最上級は例 (9) のように *umina* を前置することで作られる。*umina* は「多い」を意味する形容詞であるが、この用法では本来の語彙的意味は失われており、たとえば *miyoo* 「小さい」から *umina miyoo* 「最も小さい」を作ることもしできる。

(10) 今日彼は来ない。[自動詞文の否定]

- a. 今日彼は来ない（そういうことになっている）

Itaagapi okai ki te-me-ete.
today 3SG DET.SG.M NEG-come-PROG

- b. 今日彼はまだ来ていない。

Itaagapi okai ki mei beu te-ete.
today 3SG DET.SG.M come.INF NEG do-PROG

(11) あ的那个人はその本を持って行かなかった。[他動詞文の否定]

- a. *Okai ki, kou buukuu kou doki-yake uwii beu ti-p-i.*
3SG DET.SG.M DEM.SG.F book DEM.SG.F take-CVB.SEQ go.INF NEG do-MP-3SG.M.S

- b. *Okai ki, kou buukuu kou te-doke-uwii-p-i.*
3SG DET.SG.M DEM.SG.F book DEM.SG.F NEG-take-go-MP-3SG.M.S

動詞文を否定する方法は2種類ある。否定接頭辞 *te-* を動詞語幹と目的語一致接頭辞の前に付加する方法、および否定小詞 *beu* を動詞不定形に後置し軽動詞 *tai* を続ける方法である。動詞の自他により否定方法が変わることはない。この2種類の否定方式は、例 (10) のように現在進行形 *-ete* では明確な意味的差異が出るが、例 (11) のように中過去形 *-p-* では差異が明確でない。一見すると *beu* のほうは文否定のように見えるが、文否定は例 (13) に見られるように別の方法でなされる。

例 (11) で「持って行く」は *dokii* 「持つ」*uwii* 「行く」をつなげた複合的表現であるから、他動詞の否定方法を見る例としては適切ではないかもしれないが、動詞複合の否定について示唆的である。すなわち *dokiyake uwii* と副動詞で「ゆるく」結合する場合には *tedokiyake uwii* とは言わず *dokiyake uwii beu* と言い、一方 *dokeuwii* と「かたく」結合する場合には *tedokeuwii* と接頭辞による否定が用いられる。

(12) 全ての学生が（祭りに）参加しなかった／学生は全員（祭りに）参加しなかった。[数量の全部否定]

- a. *Mahasiswa utoma yuwo te-degi-ta.*
student all festival NEG-participate-IP

- b. *Mahasiswa utoma yuwo degii beu ti-ta.*
student all festival participate NEG do-IP

(13) 全ての学生が（祭りに）参加したわけではない。[数量の部分否定]

Mahasiswa utoma yuwo degi-ta ko beu.
student all festival participate-IP DET.SG.F NEG

(14) (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。[文の否定]

(Ani ki edai beu kodeya) adekaa ko ibo te-ete ko beu.
1SG DET.SG.M buy.INF NEG but price DET.SG.F big do-PROG DET.SG.F NEG

例 (12ab) は意味的に同義である; 2 種類の否定方法では、否定の範囲がどちらも数量詞 *utoma* 「全て」の範囲の内側にある解釈しかない。数量の部分否定は例 (13) のように文否定により、すなわち肯定文「全ての学生が参加した」に限定詞 *ko* をつけて名詞化し、それを否定小詞 *beu* で否定することにより達成される。

例 (14) も同様に文を名詞化して否定する手法を示しているが、ここでは形容詞文 *adekaa ko ibo* 「値段が高い」に動詞 *teete* を補って動詞節としてから否定する点が注目に値する。動詞を補わない例 (6) と比較せよ。

(15) 走るな！ [禁止]

- a. *Tibigi te-tai!* 走らない。
 running NEG-do.INF
- b. *Tibigi ko peu!* 走れない。
 running DET.SG.F bad
- c. *Tibigi ko daa!* 走るのは駄目だ (禁じられている)。
 running DET.SG.F forbidden

(16) 大きな声を出すな！ [他動詞文の禁止]

- a. *Manaa ibo te-podomi-yaawi!*
 voice big NEG-go_out-CAUS.IMP
- b. *Ibo mana-ida te-wegai!*
 big voice-LCLZ NEG-speak.INF

メエ語では不定形を命令に用いることが多い。予防的禁止 (preventive) も制止的禁止 (prohibitive) も変わらず例 (15a) のように *te-* で標示され、禁止特有の否定形式はない。

メエ語では *tibigi* 「走る (こと)」のような動作・状態を表す名詞的要素が多くあり、これらは軽動詞 *tai* を伴うことで屈折するが、この場合 *te-* は基本的に軽動詞に直接つく形になる (コンサルタントによると *?Te tibigi tai!* は非文ではないが奇妙であるという)。また例 (15bc) のような言い方も実質的に禁止表現である。特に *daa* 「禁じられた」はメエ語の否定表現を考えるうえで押さえておくべき語といえる。

動詞の自他は禁止方法に関与しない。例 (16a) は日本語の直訳風だがメエ語としても容認される。もっとも例 (16b) のように自動詞文「大きな声で話すな！」でも同じ意味を伝えられる (*-ida LCLZ* は例 (27) を参照)。

(17) 明日は雨は降らないだろう。 [推量の否定]

- a. *Aweetaa edi te-wei-t-a yuwa.*
 tomorrow rain NEG-fall.INF-FF-3SG.F.S possible
- b. *Aweetaa edi wei beu tai-t-a yuwa.*
 tomorrow rain fall NEG do.INF-FF-3SG.F.S possible
- c. *Aweetaa edi wei-t-a beu yuwa.*
 tomorrow rain fall.INF-FF-3SG.F.S NEG possible

明日起こるであろう出来事を叙述するには遠未来形 *-tag-/t-* が用いられる。推量のモダリティを示す

手段としては、文末詞 *yuwa* 「だろう」が最もよく用いられる。例 (17a) は *te*-、例 (17b) は *beu* による否定文の文末にそれぞれ *yuwa* をつけただけで、*yuwa* を除去しても文として成立する。一方例 (17c) では *yuwa* を削除した...*weita beu*. では文として成立せず、*beu yuwa* を否定推量「～ではないだろう」を表す特別な形式と認めるべきかもしれない (例 (2) の解説も参照のこと)。

(18) 彼に聞こえないように、小さな声で話してくれ。[目的節の否定]

a. 彼に聞こえるように、声を大きくして話してくれ。

a-1. *Kii mee kidi yuwii nee, mana iboo~iboo ti-yake wegai!*
 DEM.SG.M person DEM.SG.M hear.INF OPT voice big~RDP do-CVB.SEQ speak.INF

a-2. *Kii mee kidi yuwe-eta, mana iboo~iboo ti-yake wegai!*
 DEM.SG.M person DEM.SG.M hear-PURP voice big~RDP do-CVB.SEQ speak.INF

b. 彼に聞こえないように、声を小さくして話してくれ。

b-1. **Kii mee kidi te-yuwii nee, mana miyoo~miyoo ti-yake wegai!*
 DEM.SG.M person DEM.SG.M NEG-hear.INF OPT voice small~RDP do-CVB.SEQ speak.INF

b-2. *Kii mee kidi te-yuwe-eta, mana miyoo~miyoo ti-yake wegai!*
 DEM.SG.M person DEM.SG.M NEG-hear-PURP voice small~RDP do-CVB.SEQ speak.INF

メエ語で目的節を作るには、例 (18a-1) のように動詞不定形に小詞 *nee* をつけるか、または例 (18a-2) のように動詞語幹に目的接辞 *-eta* をつけるかの 2 種類があるが、否定と共起するのは後者のみである。ただし目的接辞 *-eta* はデータが乏しく、副動詞接辞と見なすべきかどうか分からない。

しかし小詞 *nee* は否定接頭辞 *te-* と全く共起しないわけではなく (下例 cf.a を参照)、今後様々な節について検証する必要がある。

cf. 彼は私を殺したくない。

a. *Okai ki ani te-nagii nee dimii.*
 3SG DET.SG.M 1SG NEG-1SG.O.kill OPT DESID

b. *Okai ki ani nagii nee dimii ko beu.*
 3SG DET.SG.M 1SG 1SG.O.kill OPT DESID DET.SG.F NEG

(19) 私はあの人を怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。[否定のスキープの調節]

Ani ki okai utugu be e-gaa-yake wegai ko beu
 1SG DET.SG.M 3SG head unwilling 3.O-think-CVB.SEQ speak.INF DET.SG.F NEG

自動詞的表現 *utugu be gai* 「怒る」に対して目的語接辞をつけた他動詞的表現 *utugu be egai* 「怒らせる」が用いられている。例 (19) は文否定になっている。上掲「彼は私を殺したくない」の例も参照するに、やや複雑な文では動詞不定形+*beu* は避けられ、*te-* もしくは文否定の方略が用いられるらしい。

(20) 私が昨日買った本はどこ (にある) ? [内の関係の連体修飾節・目的語]

[*Ani geto eda-p-a*] *buukuu kou ko kaiya (top-aa)?*
 1SG yesterday buy-MP-1SG.S book DEM.SG.F DET.SG.F where EXIST-3SG.F.S

メエ語では、人称と時制によって屈折した定形節が主節にも連体修飾節にもなることができる。(20)

であれば中過去 *-p-* が付いた *eda-p-a* 「買った」は、そのまま主節にも現れることができる。主節述語と連体節述語の形態が同様なのは以下 (26) まで同様である。(25) までの例に見るように、メエ語は連体修飾が可能な範囲が広い。

主節の *top-aa* 「ある」の有無は随意的である。主語一致接辞の *-a* は短母音であるが、疑問文のためにここでは長母音になっていると考えられる。メエ語においてはいくつかの条件のもとで短母音が長母音になることがあるが、その条件は未解明である。

(21) その本を持って来た人は誰 (か) ? [内の関係の連体修飾節・主語]

[*Kou buukuu kou ko na-doke me-ta*] *mee ki meimee?*
 DEM.SG.F book DEM.SG.F DET.SG.F 1SG.BEN₂-carry come-IP person DET.SG.M who

(21) においても不定過去 *-ta* が付いた *me-ta* 「来た」は主節にも現れうるが、連体修飾の機能を担っている。

(22) この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。[内の関係の連体修飾節・場所]

Kou owaa kugu kou ko [inii kei te-ig-e] owaa kugu.
 DEM.SG.F house room DEM.SG.F DET.SG.F 1PL work do-HAB-1PL.S house room

(23) 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。[内の関係の連体修飾節・所有者]

[*Bado ena tuwa-ta*] *kursi kou emige-teig-a.*
 foot one break-IP chair DEM.SG.F throw_away-CMPL-1SG.S

(24) ドアを叩いている音が聞こえる。[外の関係の連体修飾節]

[*Damo tuguu te-ete*] *manaa yuwi-daa.*
 door knock do-PROG sound hear-SPN

(25) あの人が結婚したという噂は本当 (か) ? [外の関係の連体修飾節]

[*Okai waka buki-ta*] *manaa maakodo mee beu?*
 3SG spouse marry-IP sound true Q NEG

(24), (25) は外の関係の連体修飾であるが、「トイウ」のようなマーカがなくとも、(20) から (23) までの内の関係の連体修飾のように、主節述語がそのまま連体修飾節述語となっている。

肯否疑問文の場合、文末の *mee beu* は *beu* がなくても成立するが、*beu* を付けた (25) に付加疑問のような意味は生じない。(21) に見るように、疑問詞疑問文の場合 *mee (beu)* は現れない。

(26) 私はその人が来た時にご飯を食べていた。[時間節]

Ani ki [okai me-p-i gaa] ko dugi no-otigo.
 1SG DET.SG.M 3SG come-MP-3SG.M.S time DET.SG.F potato eat-PPROG

時間節は *gaa* を用いる。ちなみに「～する前に」と言う場合には、「動詞の不定形 + *beu* (NEG) + *gaa*」で表す。

(27) 私はその人が待っている所に行った。[場所節]

Ani ki [okai na-dou+to-p-i-ida] uwi-ta.
 1SG DET.SG.M 3SG 1SG.O-see+stay-MP-3SG.M.S-LCLZ go-IP

場所節を形成するには、場所化の *-ida* を用いる。*-ida* は他に手段や時を表す用法もある。手段の用法に関しては (16b) を参照されたい。

(28) 私はその人が走っていったのを見た。[補文節・視覚]

- a. *Ani [okai tibigi uwe-etigo] e-doo-ta.*
 1SG 3SG running go-CVB.SIM 3.O-see-IP
- b. *Ani [okai tibigi uwe-ete ko] doo-ta.*
 1SG 3SG running go-PROG DET.SG.F see-IP
- c. *Ani [okai tibigi te-ete] e-dou.*
 1SG 3SG running do-PROG 3.O-see-INF

「見る」のような視覚に関わる動詞を述語とする補文節を形成するには、いくつかの方法がある。一つは (28a) のように副詞節を用いる方法である。*-etigo* は副詞節として「～しながら」という意味も表すが、ここでは補文節となっている。二つ目と三つ目は主節ともなれる定形節を用いる方法である。(28b), (28c) では進行アスペクトの *-ete* が現れているが、これはそのまま主節としても現れることができる。(28b) では述語の限定詞 *ko* を後接させることで名詞化していると考えられる。一方、(28c) は限定詞なしで補文節となっている。この例の他にも、メエ語では主節と副詞節、あるいは副詞節と補文節に連続性が見られる。

(28) では、(28a) と (28c) は主節述語に *e-* 人称接辞が付き、目的語の *okai* (3SG) に一致しているが、(28b) では人称接頭辞はない。よって、(28b) は限定詞で統合された節を目的語に取っているのに対し、(28a) と (28c) は *uwe-etigo* (go-CVB.SIM), *te-ete* (do-PROG) が *okai* (3SG) を修飾し、主節述語は *okai* (3SG) を目的語として取っているために人称接辞が付いているとも分析することができる。メエ語では連体修飾節は被修飾語に先行するが、形容詞などは被修飾語に先行することも後行することもあるため、このような分析も支持されるだろう。ただ、人称接辞の出現条件に関してはまだ調査の余地がある。

(29) 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[補文節・聴覚]

- a. *Geto wanee ko ani [okei wega-atigo] e-yuwi-ta.*
 yesterday night DET.SG.F 1SG 3PL speak-CVB.SIM 3.O-hear-IP
- b. *Geto wanee ko ani [okei wega-ate ko] yuwi-ta.*
 yesterday night DET.SG.F 1SG 3PL speak-PROG DET.SG.F hear-IP
- c. *Getounu ko ani [okei mana wega-ate] e-yuwai.*
 last_night DET.SG.F 1SG 3PL word speak-PROG 3.O-hear-INF

(29) も (28) と同様に三つの方法がある。主節の人称接辞の現れ方も同様である。

(30) 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。[補文節・知識]

Ani ki [okai ki geto me-p-i ko] epi.
 1SG DET.SG.M 3SG DET.SG.M yesterday come-MP-3SG.M.S DET.SG.F know

主節が「知る」など知識に関わる場合、(28b), (29b) のように限定詞 *ko* で統合された節が補文節となる。*epi* (know) は他の動詞のように人称や時制で屈折しない。

(31) (昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。 / (昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。[補文節・直接発話/間接話法]

- a. *Geto ko okai ki [itaagapi yakai me-eg-i] wega-p-i.*
 yesterday DET.SG.F 3SG DET.SG.M today to_here come-RP-3SG.M.S speak-MP-3SG.M.S
- b. *Geto ko okai ki “ani ki itaagapi yakai me-eg-a”*
 yesterday DET.SG.F 3SG DET.SG.M 1SG DET.SG.M today to_here come-RP-1SG.S
wega-p-i.
 speak-MP-3SG.M.S

メエ語では、(31) に見るように、間接引用、直接引用に関わらず補文節マーカ―はなく、主節がそのまま補文節となる。

(32) 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた。[内在節・従主・主目]⁴

- Ani [apel kii pidini wadoo to-og-i na ki] no-p-a.*
 1SG apple DEM.SG.M dish up stay-RP-3SG.M.S EGO DET.SG.M eat-MP-1SG.S

メエ語には主要部内在型関係節を形成する方法が二つ存在する。一つは (32) のように *na ki* で統合された節が主要部内在型関係節となる場合である。*na ki* の *ki* は限定詞であり、*na* は話者のみが知っている対象に付く。例えば、*noogei na ki* (my.friend EGO DET.SG.M) 「(話者のみが知っている) わたしの友達」のようである。もう一つは *na ki* の代わりに指示詞 *kidi* を用いる方法である。(33) では *na ki* と *kidi* のどちらも自然と判断されたが、(32) では *na ki* を *kidi* に置き換えるとやや不自然ということであった。

(33) 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。[内在節・従主・主目]

- a. *Ani [kucing owaa duba yokouyoo ki-ta kidi] yaki-ta.*
 1SG cat house inside entering become-IP DEM.SG.M catch-IP
- b. *Ani [kucing owaa duba yokouyoo ki-ta na ki] e-yaki-ta.*
 1SG cat house inside entering become-IP EGO DET.SG.M 3.O-catch-IP

(32) で述べたように (33a) は指示詞 *kidi* によって、(33b) は *na ki* によって統合された節が主要部内在型関係節となっている。

(32), (33) の主節の人称接辞の有無に関しては、今後さらに調査が必要である。

⁴ 本特集のアンケートでは [内在節・従主・主目] であったが (32) は [内在節・従主・主目] であるため修正した。これまでの調査では、メエ語は [内在節・従主・主目] のパターンも可能なようである。

略号一覧

1	first person	LCLZ	localizer
2	second person	M	masculine
3	third person	MP	middle past tense
BEN ₂	benefactive II	NEG	negation
CAUS	causative	O	object
CMPL	completive	OPT	optative
COND	conditional	Q	interrogative
CVB	converb	PL	plural
DEM	demonstrative	PROG	progressive
DESID	desiderative	PPROG	past progressive
DET	determiner	PURP	purposive
EGO	egophoric	RDP	reduplication
EXIST	existential	RP	recent past tense
F	feminine	S	subject
FF	far future tense	SG	singular
GEN	genitive	SIM	simultaneous
HAB	habitual	SEQ	sequential
INF	infinitive	SPN	spontaneous
IP	indefinite past tense		

参考文献

Marquardt, Christine; Marie-Luise Schwarzer; and Sören Eggert Tebay. 2018. The Perfect in Mee: New evidence for a result state approach. *Proceedings of TripleA5*. <https://ling.auf.net/lingbuzz/004414>, accessed 2019-03-14.

執筆者連絡先: k.aoyama.macho@gmail.com (青山), norifumi.964ma@gmail.com (黒島)

原稿受理: 2019年5月8日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

中国語における否定、形容詞と連体修飾複文
Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification in Chinese

加藤 晴子
Haruko Kato

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿の目的は、特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号、東京外国語大学)における33個のアンケート項目に対する中国語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Chinese data which answers the thirty three survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 23, which focuses on the cross linguistic study of 'negation, adjectives, and compound sentences of adnominal modification'.

キーワード: 中国語, 否定, 形容詞, 連体修飾, 複文

Keywords: Chinese, negation, adjective, adnominal modification, compound sentence

中国語における「否定、形容詞と連体修飾複文」について、アンケート¹に従い、見ていく²。

1. これは私の本ではない。[名詞述語文/コピュラ文の否定]

这 不 是 我 的 书。
これ NEG COP 私 ATTR 本

2. この部屋には椅子がない。[存在文の否定]

这 个 房 间 没 有 椅 子。
この CLF 部屋 NEG ある 椅子

3. この部屋には一つも椅子がない。[全部否定・モノ]

这 个 房 间 一 把 椅 子 都 没 有。
この CLF 部屋 1 CLF 椅子 も NEG ある



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ アンケートへの回答は、飯島啓子氏(本学特定外国語教員・北京市出身)と、胡良娜氏(大学院博士後期課程・山東省日照市出身)にお願いした。ここに感謝の意を表す。ただし、本稿の内容に誤りがあれば、それは筆者の責任に帰するものである。

² 回答で得られた中国語の文がもとの例文と表現上異なる場合、中国語文に対する直訳をグロスの下、または本文中に付した。

4. その部屋には誰もいない。[全部否定・ヒト]

a. 那 个 房 间 一 个 人 也 没 有。

その CLF 部屋 1 CLF 人 も NEG ある

b. 那 个 房 间 谁 也 不 在。

その CLF 部屋 誰 も NEG いる

a は、3 と同じ形式だが、不特定の人が集まる部屋がからっぽであることを表し、b は、その部屋を通常の居場所としている特定の人（家族・ルームメイトなど）がたまたま（出かけているなどで）いないことを表す。存在を表す“有”と所在を表す“在”の違いが現れたものと考えられる。

5. その本はこの部屋にない。[所在文の否定]

那 本 书 不 在 这 个 房 间 里。

その CLF 本 NEG ある この CLF 部屋 LOC

6. この犬は大きくない。[形容詞文の否定]

这 只 狗 不 大。

この CLF 犬 NEG 大きい

7. この犬はあまり大きくない。[形容詞文の部分否定]

a. 这 只 狗 不 太 大。

この CLF 犬 NEG とても 大きい

这 只 狗 不 怎 么 大。

この CLF 犬 NEG それほど 大きい

这 只 狗 没 那 么 大。

この CLF 犬 NEG それほど 大きい

b. 这 只 狗 不 是 很 大。

この CLF 犬 NEG COP とても 大きい

a は「期待・予測したほどには大きくない」というニュアンスを持つが、b は事実の指摘としての「大きいというわけではない」に相当する。

8. この犬はあの犬より大きい。[比較級]

这 只 狗 比 那 只 狗 大。

この CLF 犬 PREPより あの CLF 犬 大きい

9. この犬がその犬たちの中で一番大きい。[最上級]

a. 在 那 群 狗 里 这 只 狗 最 大。

PREPで その CLF 犬 LOC この CLF 犬 最も 大きい

その犬たちの中ではこの犬が一番大きい。

b. 这 只 狗 在 那 群 狗 里 最 大。

この CLF 犬 PREPで その CLF 犬 LOC 最も 大きい

この犬はその犬たちの中で一番大きい。

与えられた日本語が「この犬が～」なので、犬の集合の中から1匹を選び出す表現としては、aが適切であると考えられる。bは、「この犬について言えばどうかという～」という表現になる。

10. 今日はあの人は来ない。[自動詞文の否定]

今天 他 不 来。

今日 彼 NEG 来る

11. あの人はその本を持って行かなかった。[他動詞文の否定]

a. 他 没 把 那 本 书 拿走。

彼 NEG PREPを その CLF 本 持つ+行く

b. 他 没 拿走 那 本 书。

彼 NEG 持つ+行く その CLF 本

aは“把”を使った形式で、bに比べ、その本に対してどのような処置を加えたかに力点を置いた表現になる。

12. 全ての学生が参加しなかった/学生は全員参加しなかった。[数量の全部否定]

所有 的 学生 都 没 参加。 / 学生 都 没 参加。

すべて ATTR 学生 すべて NEG 参加する 学生 すべて NEG 参加する

13. 全ての学生が参加したわけではない。[数量の部分否定]

不 是 所有 的 学生 都 参加 了³。

NEG COP すべて ATTR 学生 すべて 参加する PRF

14. 私は買わなかった。しかし、決して値段が高いというわけではない。[文の否定]

a. 我 没 买。 但 并 不 是 因为 价钱 太 高。

私 NEG 買う しかし 決して NEG COP だから 値段 あまりにも 高い

私は買わなかった。しかし、決して値段が高すぎたからではない。

b. 我 没 买。 但 并 不 是 买不起。

私 NEG 買う しかし 決して NEG COP 買う+NEG+できる

私は買わなかった。しかし、決して（負担能力がなくて）買えないというわけではない。

与えられた日本語は、前後のつながりが曖昧に感じられる。そのため、aとbのそれぞれの訳で表される表現になるよう語句を補った。

15. 走るな！ [禁止]

a. 别 跑！

するな 走る

³ 中国語文法では、“了”について、動詞に直に後接し[動作の完了]を表すものと、文末について[事態の変化]を表すものとを、それぞれ“了1”“了2”として区別するが、本稿では、一律に[パーフェクト PRF]を表すものとして扱う。

- b. 别 在 这儿 跑!
 するな PREPで ここ 走る
- c. 别 在 这儿 跑来 跑去!
 するな PREPで ここ 走る+来る 走る+行く
- d. 别 乱 跑!
 するな みだりに 走る

a は、一義的には「逃げるな!」と理解される可能性が高い。それを避けるために、b, c の“在这儿⁴”やcの“~来~去”, dの“乱”などのような他の要素を加える。cは「走り回るな」, dは「目の届かないところまで行くな」のニュアンスをそれぞれ持つという。

16. 大きな声を出すな! [他動詞文の禁止]

- a. 别 大声 说话!
 するな 大声で 話す
 大声で話すな!
- b. 别 嚷!
 するな わめく
 わめくな!

いずれも他動詞文ではないので、次の例を追加する。

私にかまうな!
 别 管 我!
 するな かまう 私

17. 明日は雨は降らないだろう。[推量の否定]

明天 不 会 下 雨 吧⁵。
 明日 NEG AUX⁶ 降る 雨 INFER

18. あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。[目的節の否定]

你 小声 说, 免得 让 他 听见。
 あなた 小聲で 言う しないように PASS 彼 聞く+知覚する

19. 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。[否定のスキープの調節]

我 这么 说 不 是 惹 你 生气。
 私 このよう 言う NEG COP CAUS あなた 怒る
 私がそう言ったのはあなたを怒らせようとしたのではない。

⁴ この“在这儿”は実質的には意味を持たないと考えられる。

⁵ 文末の“吧”を取り去ると、より確信を持った表現になる。

⁶ “会”はここでは[可能性]を表す助動詞である。

20. 私が昨日買ってきた本はどこ（にある）？ [内の関係の連体修飾節・目的語]

我 昨天 买来 的 书 在 哪儿？
私 昨日 買う+来る ATTR 本 ある どこ

21. その本を持って来た人は誰（か）？ [内の関係の連体修飾節・主語]

a. 拿来 那 本 书 的 人 是 谁？
持つ+来る その CLF 本 ATTR 人 COP 誰
b. 谁 拿来 的 那 本 书？
誰 持つ+来る ATTR その CLF 本

a は与えられた日本語に沿って「その本を持ってきた」が“的”を介して「人」を修飾しているが、翻訳調に感じられるという。b は“谁拿来的”が“那本书”を修飾する形式になっているが、「誰がその本を持ってきたのか？」に相当する。

22. この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。 [内の関係の連体修飾節・場所]

a. 这 个 房 间 是 我 们 办 公 的 房 间。
この CLF 部屋 COP 私たち 働く ATTR 部屋
b. 这 是 我 们 办 公 的 房 间。
これ COP 私たち 働く ATTR 部屋

a は与えられた日本語に沿った表現だが，“房间”の繰り返しが冗長な感じをもたらす。また、どちらかというところ「この部屋は～」に近い。b は「これは私たちが仕事をしている部屋です。」に相当する。

23. 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。 [内の関係の連体修飾節・所有者]

a. 那 把 断 了 一 条 腿 的 椅 子 我 已 经 扔 掉 了。
あの CLF 折れる PRF 1 CLF 足 ATTR 椅子 私 もう 捨てる+なくなる PRF
b. 那 把 椅 子 断 了 一 条 腿 ， 扔 掉 了。
あの CLF 椅子 折れる PRF 1 CLF 足 捨てる+なくなる PRF

a は与えられた日本語に沿った表現，b は「あの椅子は足が一本折れたので捨てた。」に相当する。

24. ドアを叩いている音が聞こえる。 [外の関係の連体修飾節]

a. 我 听 见 敲 门 的 声 音。
私 聞く+知覚する 叩く ドア ATTR 音
b. 我 听 见 有 人 在 敲 门。
私 聞く+知覚する いる 人 PROG 叩く ドア

a は与えられた日本語に沿った表現，b は「誰かがドアを叩いているのが聞こえる。」に相当し，29 と同じ形式である。

25. あの人が結婚したという噂は本当（か）？ [外の関係の連体修飾節]

听说 他 结婚 了, 是 真 的 吗?

HS 彼 結婚する PRF COP 本当 ATTR⁷ Q

「あの人は結婚したそうだが、本当か？」に相当する。「噂」に相当する語は通常使わない。

26. 私はその人が来た時にご飯を食べていた。 [時間節]

他 来 的 时候 我 正 吃 饭 呢。

彼 来る ATTR 時 私 PROG 食べる ご飯 DUR

27. 私はその人が待っている所に行った。 [場所節]

a. 我 去 了 他 等 我 的 地方。

私 行く PRF 彼 待つ 私 ATTR 場所

b. 我 去 找 他 了, 他 在 那 儿 等 我。

私 行く 尋ねる 彼 PRF 彼 PREPで そこ 待つ 私

a は与えられた日本語に沿った表現, b は「私はその人を訪ねて行き, その人はそこで私を待っていた。」に相当する表現だが, a, b ともに, どのような状況を述べているのかがわかりにくい。

28. 私はその人が走っていったのを見た。 [補文節・視覚]

我 看见 他 跑过去 了。

私 見る+知覚する 彼 走る+過ぎる+行く PRF

29. 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。 [補文節・聴覚]

昨天 晚上, 我 听见 他们 在 聊天。

昨日 夜 私 聞く+知覚する 彼ら PROG しゃべる

30. 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。 [補文節・知識]

我 知道 他 昨天 来 过 这儿。

私 知る 彼 昨日 来る PAST ここ

31. (昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。 / (昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。 [補文節・直接発話/間接話法]

昨天 他 说 他 昨天 来 过 这儿。 / 昨天 他 说 “我 今天 来 这儿 了。”

昨日 彼 言う 彼 昨日 来る PAST ここ 昨日 彼 言う 私 今日 来る ここ PRF

32. 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた。 [内在節・従主・主主]

a. 我 把 那 个 盘 子 里 的 苹果 吃 掉 了。

私 PREPを あの CLF 皿 LOC ATTR リンゴ 食べる+なくなる PRF

⁷ “的” はここでは、「～の(こと)」という名詞性成分を構成する助詞として使われている。

b. 我 吃 了 那 个 盘 子 里 的 苹 果。
私 食 べ る PRF あの CLF 皿 LOC ATTR リンゴ

a, b ともに「私はあの皿の中のリンゴを食べた。」に相当し、「リンゴが皿の中にあったの」を目的語とする表現はない。a と b の違いは 11 と同じく、a は“把”を使った形式で、b に比べ、そのリンゴに対してどのような処置を加えたかに力点を置いた表現になる。

33. 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。[内在節・従主・主目]

a. 我 把 跑 进 我 家 里 来 的 猫 抓 住 了。
私 PREP を 走る+入る 私 家 LOC +来る ATTR ネコ 捕まえる+留める PRF
私は家に入ってきたネコを捕まえた。

b. 有 一 只 猫 跑 进 我 家 里 来, 我 把 它 抓 住 了。
いる 1 CLF ネコ 走る+入る 私 家 LOC +来る 私 PREP を それ 捕まえる+留める PRF
1 匹のネコが家に入ってきて、私はそれを捕まえた。

32 と同様「ネコが家に入ってきたの」を目的語とする表現はない。“跑进来”は「(走って) 入って来る」の意でひとまとまりだが、“我家里”などの場所を表す目的語は、“跑进”と“来”間に割り込ませなければならないというルールがある。

21, 23, 24, 27, 33 では、与えられた日本語に沿って連体修飾節を含む文 (a) と、含まない文 (b) の 2 種類をそれぞれ示した。中国語は SVO 型かつ修飾節前置型の言語であるため、長い複雑な修飾節は避けるとされる⁸が、ただしどの程度までの長さ・複雑さが許容されるのかは曖昧である。内の関係にしても外の関係にしても、日本語とは異なる制約のあることが指摘されているが、構文的要因、意味論的要因、語用論的要因、表現機能上の要因など様々な要因が絡み、未解明な部分もある。

略号一覧

ATTR:attributive 修飾語標識, AUX:auxiliary 助動詞, CAUS:causative 使役, CLF:classifier 類別詞, COP:copula コピュラ, DUR:durative 継続, HS:hearsay 伝聞, INFER:inferential 推量, LOC:locative 方位詞, NEG:negation 否定, PASS:passive 受身, PAST:past 過去, PREP:preposition 前置詞, PRF:perfect パーフェクト, PROG:progressive 進行, Q:question marker 疑問マーカー

参考文献

木村英樹.2017.『中国語ははじめの一步〔新版〕』ちくま学芸文庫
来思平・相原茂著、喜多山幸子編訳.1993.『日本人の中国語—誤用例 54 例』東方書店
楊凱榮. 2018. 「日中連体修飾節の対照研究」『中国語学・日中対照論考』白帝社:249–278.

執筆者連絡先: hkato@tufs.ac.jp

原稿受理: 2019 年 5 月 7 日

⁸ 例えば来・相原 1993 では、これを理由とした修正例をいくつか取り上げている。また、木村 2017 も、SVO でありながら修飾節が前に置かれるタイプの言語は修飾節を重層的に膨らませることに不向きであると指摘している。

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

朝鮮語の否定、形容詞と連体修飾複文 Negation, Adjective and Adnominal Constructions in Korean

黒島 規史
Norifumi Kuroshima

東京外国語大学非常勤講師／東京外国語大学 AA 研共同研究員
Part-time Lecturer, Tokyo University of Foreign Studies / Joint Researcher of ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿では、本号の特集にしたがって朝鮮語の否定、形容詞と連体修飾複文について概観する。朝鮮語のデータを提示したうえで、各例文に対して解説を加える。

Abstract: This article overviews negation, adjective, and adnominal constructions in Korean based on the questionnaire on the special topic of this volume. We present Korean examples and give an explanation for each example sentence.

キーワード: 朝鮮語、否定、形容詞、連体修飾複文

Keywords : Korean, negation, adjective, adnominal construction

1. はじめに

本稿では特集「否定、形容詞と連体修飾複文」のアンケートに沿って現代朝鮮語（以下、単に朝鮮語と称する）の例文を提示し、各例文に対して適宜補足説明を加える。

例文は筆者がアンケート例文を朝鮮語にし、その朝鮮語をコンサルタントの方に確認していただいた。コンサルタントはソウル出身の30代男性であり、日本語も流暢である。

2. アンケート項目に対する朝鮮語データ

例文の朝鮮語はハングル表記と、Yale 式ラテン文字転写¹⁾にグロスを付して提示する。

1 から 7、10 から 19 の否定に関する例文を挙げる前に、朝鮮語における述語の否定の特徴を簡単に述べておく。朝鮮語の用言は動詞、形容詞、存在詞、指定詞（コンピュータ）に分けることができる。動詞と形容詞の否定は述語の前に否定の副詞 *an* を置くか、動詞語幹に *-ci anh-* を付ける二つの方法がある。前者は話しことばで、後者は書きことばでよく用いられる。不可能形もこの否定形とパラレルな関係にあり、二つの統語的手段を持つ。ただ、*al-*「知っている」の否定は *molu-*「知らない」となり、語彙的な手段による。存在詞は *iss-*「ある、いる」と *eps-*「ない、いない」の二つのみで、肯否のペアを成している。存在に関して朝鮮語では有情物と無情物の区別はない。指定詞も *i-*「～である」と *ani-*「～でない」の二つのみで、やはり語彙的に肯否のペアを成している。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹⁾ ハングルのラテン文字転写には浅尾仁彦氏が作成した「ハングル → イェール式ローマ字変換」(<http://asaokitan.net/tools/hangul2yale/>)を利用した。ただし、両唇音 (p, pp, ph, m) に付く *wu* は *u* で表記せず、そのまま *wu* で転写している。

(1) これは私の本ではない。[名詞述語文／コンピュータ文の否定]

이것은 내 책이 아니다.

ikes=un nay chayk=i ani-ta.

これ=TOP 1SG.GEN 本=NOM NCOP-DECL

(2) この部屋には椅子がない。[存在文の否定]

이 방에는 의자가 없다.

i pang=ey=nun uyca=ka eps-ta.

この 部屋=DAT=TOP 椅子=NOM ない-DECL

(3) この部屋には一つも椅子がない。[全部否定・モノ]

이 방에는 의자가 하나도 없다.

i pang=ey=nun uyca=ka hana=to eps-ta.

この 部屋=DAT=TOP 椅子=NOM 一つ=も ない-DECL

(4) その部屋には誰もいない。[全部否定・ヒト]

그 방에는 {아무도 / 그 누구도 / 어느 누구도} 없다.

ku pang=ey=nun {amwu=to / ku nwukwu=to / enu nwukwu=to} eps-ta.

その 部屋=DAT=TOP 誰=も その 誰=も どの 誰=も いない-DECL

「誰も」という場合には、不定代名詞の amwu を用いることが多いが、疑問詞 nwukwu を用いることもできる。その場合、例文に示したように ku 「その」や enu 「どの」を付けることでより安定した表現になる。このようなバリエーションは「なにも」「どこにも」にも同様に見られる。「誰も」に関しては、前回の特集でも扱った。黒島・崔 (2017: 146-147) の例文 (18), (19) を参照されたい。

(5) その本はこの部屋にない。[所在文の否定]

그 책은 이 방에는 없다.

ku chayk=un i pang=ey=nun eps-ta.

その 本=TOP この 部屋=DAT=TOP ない-DECL

(6) この犬は大きくない。[形容詞文の否定]

이 개는 크지 않다.

i kay=nun khu-ci anh-ta.

この 犬=TOP 大きい-NMLZ NEG-DECL

(7) この犬はあまり大きくない。[形容詞文の部分否定]

이 개는 {별로 / 그렇게 / 그다지} 크지 않다.

i kay=nun {pyello / kuleh-key / kutaci} khu-ci anh-ta.

この 犬=TOP 別に そうだ-ADV.MNN それほど 大きい-NMLZ NEG-DECL

pyello, kuleh-key, kutaci は形容詞の部分否定だけに用いられるわけではなく、pyello であれば「物があまりない」のようにも用いられる。pyello と kutaci は否定極性を持つが、kuleh-key は持っていない。

(8) この犬はあの犬より大きい。[比較級]

이 개는 저 개보다 크다.

i kay=nun ce kay=pota khu-ta.

この 犬=TOP あの 犬=CMPR 大きい-DECL

比較を表す場合、日本語と同様に比較対象に比較格の =pota を付ける。

(9) この犬がその犬たちの中で一番大きい。[最上級]

이 개가 그 개들 중에 {가장 / 제일} 크다.

i kay=ka ku kay=tul cwung=ey {kacang / ceyil} khu-ta.

この 犬=NOM その 犬=PL 中=DAT 最も 一番 大きい-DECL

最上級を表すには、(9) に挙げたような副詞を用いる。

(10) 今日はあの人は来ない。[自動詞文の否定]

오늘은 그 사람은 안 온다.

onul=un ku salam=un an o-nta.

今日=NOM その 人=TOP NEG 来る-DECL.NPST

(11) あの人はその本を持って行かなかった。[他動詞文の否定]

저 사람은 그 책을 가져가지 않았다.

ce salam=un ku chayk=ul kacyeke-ci anh-ass-ta.

あの 人=TOP その 本=ACC 持って行く-NMLZ NEG-PST-DECL

(10) では述語に an を前置させる否定、(11) では -ci anh- を後置させる否定の表現を用いているが、これは動詞の自他とは無関係で、入れ替えても自然さに影響はない。(12) と (17) も同様に、どちらの否定表現を用いてもかまわない。ただ、(12) のように述語が漢字語 + ha-「する」(参加する)のときは、an を前置する否定において an を ha-「する」の前に挿入する必要がある。

(12) 全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。[数量の全部否定]

a. 모든 학생이 참가하지 않았다.

motun haksayng=i chamkaha-ci anh-ass-ta.

全ての 学生=NOM 参加する-NMLZ NEG-PST-DECL

b. 학생은 모두 참가하지 않았다.

haksayng=un motwu chamkaha-ci anh-ass-ta.

学生=TOP 全て 参加する-NMLZ NEG-PST-DECL

(12) では日本語と同様に二つの言い方が可能である。

(13) 全ての学生が参加したわけではない。[数量の部分否定]

모든 학생이 참가한 것은 아니다.

motun haksayng=i chamkaha-n kes=un ani-ta.

全ての 学生=NOM 参加する-ADN.PST こと=TOP NCOP-DECL

(14) (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。[文の否定]

값이 비싼 것은 아니다.

kaps=i pissa-n kes=un ani-ta.

値段=NOM 高い-ADN.NPST こと=TOP NCOP-DECL

(13), (14) はともに独立性のない不完全名詞 kes 「もの、こと」により名詞化して表す。

(15) 走るな！[禁止]

뛰지 마!

ttwi-ci ma!

走る-NMLZ やめる:IMPR

(16) 大きな声を出すな！[他動詞文の禁止]

큰 소리 내지 마!

khu-n soli nay-ci ma!

大きい-ADN.NPST 声 出す-NMLZ やめる:IMPR

(15), (16) に挙げたように、禁止には -ci mal- を用いる。動詞を名詞化させるのは、否定の場合と同様である。

(17) 明日は雨は降らないだろう。[推量の否定]

내일은 비는 안 올 것이다.

nayil=un pi=nun an o-l kes=i-ta.

明日=TOP 雨=TOP NEG 来る-SPEC=COP-DECL

(18) あの人の聞こえないように、小さな声で話してくれ。[目的節の否定]

저 사람한테 {들리지 않게(끔) / 들리지 않도록} 작은 소리로 말해 줘.

ce salam=hanthey {tulli-ci anh-key(kkum) / tullu-ci anh-tolok} cak-un

あの 人=DAT 聞こえる-NMLZ NEG-ADV.MNN 聞こえる-NMLZ NEG-ADV.MNN 小さい-ADN.NPST

soli=lo malhay cw-e.

声=INST 言う:ADV BEN-IMPR

「～(し)ないように」は二つの副動詞語尾 -key と -tolok を用いることができる。二つの副動詞語尾はいくつかの意味があるが -keykkum は目的の意味しかない。両者は目的の他にも程度の意味を共通して持つが、-key は様態を、-tolok は時間的な到達を表す用法を独自に持つ点で異なる。

(19) 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。[否定のスコープの調節]

나는 너를 화나게 하려고 그런 건 아냐.

na=nun ne=lul hwana-key ha-lyeko kule-n ke=n any-a.

1SG=TOP 2SG=ACC 怒る-ADV.MNN する-ADV.VOL そう言う-ADN.PST こと=TOP NCOP-DECL

(19) でも (13), (14) のように不完全名詞 kes (話しことばでは ke) を用いる。

(20) 私が昨日買ってきた本はどこ(にある)? [内の関係の連体修飾節・目的語]

내가 어제 사 온 책은 어디 있어?

nay=ka ecey sa o-n chayk=un eti iss-e?

1SG=NOM 昨日 買う:ADV VEN-ADN.PST 本=TOP どこ ある-INTRR

(21) その本を持って来た人は誰(か)? [内の関係の連体修飾節・主語]

그 책을 가져온 사람이 누구야?

ku chayk=ul kacyeo-n salam=i nwukwu=ya?

その 本=ACC 持って来る-ADN.PST 人=NOM 誰=COP:INTRR

(22) この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。[内の関係の連体修飾節・場所]

이 방이 우리가 일하고 있는 방입니다.

i pang=i wuli=ka ilha-ko iss-nun pang=i-pnita.

この 部屋=NOM 1PL=NOM 働く-ADV PROG-ADN.NPST 部屋=COP-DECL.POL

(23) 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。[内の関係の連体修飾節・所有者]

다리가 하나 부러진 그 의자는 이미 버렸다.

tali=ka hana pwuleci-n ku uyca=nun imi pely-ess-ta.

足=NOM 一つ 折れる-ADN.PST その 椅子=TOP すでに 捨てる-PST-DECL

(24) ドアを叩いている音が聞こえる。[外の関係の連体修飾節]

문을 두드리는 소리가 들린다.

mwun=ul twutuli-nun soli=ka tulli-nta.

ドア=ACC 叩く-ADN.NPST 声=NOM 聞こえる-DECL.NPST

(24) は外の関係だが、(20) から (23) の内の関係の例と同様に連体形を用いる。

(25) あの人が結婚したという噂は本当(か)? [外の関係の連体修飾節]

그 사람이 결혼했다는 소문은 진짜야?

ku salam=i kyelhonhay-ss-ta-nun somwun=un cincca=ya?

その 人=NOM 結婚する-PST-DECL.QUOTE-ADN.NPST 噂=TOP 本当=COP:INTRR

「噂」「命令」など、言語行為に関わる名詞句を修飾する場合、日本語のトイウのような表現を用いる。例 (25) では終止形の述語に直接非過去連体形が接続しているが、これは -ta-ko ha-nun (-DECL.QUOTE-COMP 言う-ADN.NPST) のように COMP (補文節マーカー) と「言う」のような言語行

為を表す動詞が省略されたものと解釈される。

(26) 私はその人が来た時にご飯を食べていた。[時間節]

나는 그 사람이 왔을 때 밥을 먹고 있었다.

na=nun ku salam=i w-ass-ul ttay pap=ul mek-ko iss-ess-ta.
1SG=TOP その人=NOM 来る-PST-ADN.IRR とき ご飯=ACC 食べる-ADV PROG-PST-DECL

時を表す名詞 ttay を修飾する場合、連体形は非現実の -(u)l になることがほとんどである。

(27) 私はその人が待っている所に行った。[場所節]

나는 그 사람이 {기다리고 있는 곳으로 / 기다리고 있는 데로} 갔다.

na=nun ku salam=i {kitali-ko iss-nun kos=ulo / kitali-ko iss-nun tey=lo}
1SG=TOP その人=NOM 待つ-ADV PROG-ADN.NPST ところ=ALL 待つ-ADV PROG-ADN.NPST ところ=ALL
ka-ss-ta.
行く-PST-DECL

場所を表すには (27) のように不完全名詞 kos あるいは tey が用いられる。後者はやや話しことば的である。

(28) 私はその人が走っていったのを見た。[補文節・視覚]

나는 그 사람이 달려 가는 것을 봤다.

na=nun ku salam=i tally-e ka-nun kes=ul pw-ass-ta.
1SG=TOP その人=NOM 走る-ADV AND-ADN.NPST こと=ACC 見る-PST-DECL

補文節は不完全名詞 kes 「こと、もの」を用いて名詞化することで形成される。次の (29), (30) も同様である。

(29) 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[補文節・聴覚]

어젯밤에 나는 그들이 이야기하고 있는 것을 들었다.

eceyspam=ey na=nun kutul=i iyakiha-ko iss-nun kes=ul tul-ess-ta.
昨晚=DAT 1SG=TOP 3PL=NOM 話す-ADV PROG-ADN.NPST こと=ACC 聞く-PST-DECL

(30) 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。[補文節・知識]

나는 그 사람이 어제 여기에 {온 것을 / 온 걸로} 알고 있다.

na=nun ku salam=i ecey yeki=ey {o-n kes=ul / o-n ke=llo}
1SG=TOP その人=NOM 昨日 ここ=DAT 来る-ADN.PST こと=ACC 来る-ADN.PST こと=INST
al-ko iss-ta.
知る-ADV PROG-DECL

「来たことを」には二通りの朝鮮語を挙げたが、日本語に近いのは前者の言い方である。後者は「来たものと思っている」ほどの意味である。

(31) (昨日)彼は彼が今日ここに来たと言った。/(昨日)彼は、「私は今日ここに来た」と言った。

[補文節・直接発話/間接話法]

a. 그는 그가 오늘 여기에 왔다고 했다.

ku=nun ku=ka onul yeki=ey w-ass-ta-ko hay-ss-ta.
 3SG.M=TOP 3SG.M=NOM 今日 ここ=DAT 来る-PST-DECL.QUOT-COMP 言う-PST-DECL

b. 그는 “나는 오늘 여기에 왔어”라고 했다.

ku=nun “na=nun onul yeki=ey w-ass-e”=la-ko hay-ss-ta.
 3SG.M=TOP 1SG=NOM 今日 ここ=DAT 来る-PST-DECL=COP.QUOT-COMP 言う-PST-DECL

(31a) に関して、発話動詞の目的語項となる補文節の場合、述語の終止形に補文節マーカーである *-ko* が結合する。ただ、話しことばではしばしば *-ko* は現れないことがあり、この点は日本語の関西方言にも似ている。直接引用は (31b) のように *=la-ko* を用いる。あるいは *-ko* の代わりに副動詞語尾 *-mye* 「～ながら」を付け *-la-mye* としたうえで、主節に *ha-* 「言う」以外の言語行為を表す動詞を用いることもできる。

(32) 私はリンゴが(あの)皿の上にあったのを食べた。[内在節・従主・主目]²

a. ??나는 사과가 접시 위에 있는 것을 먹었다.

??na=nun sakwa=ka cepsi wi=ey iss-nun kes=ul mek-ess-ta.
 1SG=TOP リンゴ=NOM 皿 上=DAT ある-ADN.NPST もの=ACC 食べる-PST-DECL

b. 나는 접시 위에 있는 사과를 먹었다.

na=nun cepsi wi=ey iss-nun sakwa=lul mek-ess-ta.
 1SG=TOP 皿 上=DATある-ADN.NPST リンゴ=ACC 食べる-PST-DECL

(33) 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。[内在節・従主・主目]

a. ??나는 고양이가 집에 들어온 것을 잡았다.

??na=nun koyangi=ka cip=ey tuleo-n kes=ul cap-ass-ta.
 1SG=TOP ネコ=NOM 家=DAT入ってくる-ADN.PST もの=ACC 捕まえる-PST-DECL

b. 나는 집에 들어온 고양이를 잡았다.

na=nun cip=ey tuleo-n koyangi=lul cap-ass-ta.
 1SG=TOP 家=DAT 入ってくる-ADN.PST ネコ=ACC 捕まえる-PST-DECL

主要部内在型関係節の許容度は人にもよると考えられるが、今回の調査では、(32a), (33a) のように不自然という回答だった。この場合、(32b), (33b) のように主要部外在型関係節で表す必要がある。³

² アンケートでは [内在節・従主・主目] となっていたが、例 (32) は [内在節・従主・主目] であるため、修正した。統語的には例 (33) と同じパターンである。[内在節・従主・主目] の例を (34) に挙げる。

³ 風間 (2017: 21) では同様の例文について調査し、助詞を取り除いた口語でなら自然になるということ指摘している。

3. 主要部内在型関係節に関する追加の朝鮮語データ

主要部内在型関係節について、関係節が主語になる例を補い、(32a), (33a) とは異なり、主要部内在型関係節が自然だと判断される例もあることを示す。

(34) 泥棒が家に入ってきたのが逃げた。[内在節・従主・主主]

??도둑이 집에 들어온 것이 도망쳤다.

??totwuk=i cip=ey tuleo-n kes=i tomang#chy-ess-ta.

泥棒=NOM 家=DAT 入ってくる-ADN.PST もの=NOM 逃亡#する-PST-DECL

(34) は [内在節・従主・主主] のパターンが適格な文となるか検証するためのものである。この例は不自然と判断された。

(35) その人がパソコンが故障したのを直した。[内在節・従主・主目]

그 사람이 컴퓨터가 고장난 것을 고쳤다.

ku salam=i khemphyuthe=ka kocang#na-n kes=ul kochoy-ess-ta.

その人=NOM パソコン=NOM 故障#でる-ADN.PST もの=ACC 直す-PST-DECL

(35) は Jhang (1994: 2) で挙げられた例を、主語のみ換えて作った文である。Jhang (1994: 2) でも適格な文とされているが、やはりこの例は自然であると判断された。(32), (33) との容認度の差はなにに起因するのか、さらに調査が必要である。

4. おわりに

本稿では特集「否定、形容詞と連体修飾複文」のアンケート項目に沿って朝鮮語の例を提示し、必要などころには簡単な解説を加えた。さらに、主要部内在型関係節について二つ例を追加した。主要部内在型関係節に関しては、先行研究において自然な文として提示されている例も、実際はほとんど用いられず、不自然と判断されることも多い。どのような主要部内在型関係節なら自然だと判断されるのか、さらに詳細な研究が必要であろう。

略号一覧

ACC	accusative	対格	NMLZ	nominalizer	名詞化
ADN	adnominal form	連体形	NOM	nominative	主格
ADV	adverbial form	副動詞形	NPST	non past	非過去
ALL	allative	沿格	PL	plural	複数
AND	andative	遠心	PROG	progressive	進行
BEN	benefactive	受益	PST	past	過去
CMPR	comparative	比較格	QUOT	quotative	引用
COMP	complementizer	補文標識	SG	singular	単数
COP	copula	指定詞	SPEC	speculative	推量
DAT	dative-locative	与位格	TOP	topic	主題
DECL	declarative	叙述	VEN	venitive	求心
GEN	genitive	属格	VOL	volitive	意志
IMPR	imperative	命令	1		1人称
INST	instrumental	具格	2		2人称
INTRR	interrogative	疑問	3		3人称
IRR	irrealis	非現実	-		接辞境界
M	masculine	男性	=		接語境界
MNN	manner	様態	#		語境界
NCOP	negative copula	否定のコピュラ	:		形態素境界非表示
NEG	negative	否定			

参考文献

- Jhang, Sea-Eun. 1994. *Headed Nominalizations in Korean: Relative Clauses, Clefts, and Comparatives*. Doctoral dissertation, Simon Fraser University.
- 風間伸次郎. 2017. 「アルタイ型言語における主要部内在型関係節について」『北方人文研究』10: 3-33. 北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.
- 黒島規史・崔正熙. 2017. 「現代朝鮮語の情報表示の諸要素」『語学研究所論集』22: 138-152. 東京外国語大学語学研究所.

執筆者連絡先: norifumi.964ma@gmail.com

原稿受理: 2019年5月8日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

タタール語における否定、形容詞と連体修飾複文
Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification in Tatar

菱山 湧人
Yuto Hishiyama

東京外国語大学大学院総合国際学研究科
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿の目的は、特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号, 東京外国語大学)における33個のアンケート項目に対するタタール語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Tatar data which answers the thirty three survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 23, which focuses on the cross linguistic study of ‘negation, adjectives, and compound sentences of adnominal modification’.

キーワード: タタール語、否定、形容詞、連体修飾、複文

Keywords: Tatar, negation, adjective, adnominal modification, compound sentence

タタール語はチュルク諸語の北西(キプチャク)語群に属する言語である。チュルク諸語は膠着型言語であり、基本語順はSOV、修飾語―被修飾語の順序をとるのが基本である。タタール語はキリル文字に基づいた正書法を持つが、本稿の例文はラテン文字に転写して示す。コンサルタントは1992年ロシア連邦タタールスタン共和国カザン生まれの女性である。日本語を解するため、調査は日本語の例文を直接タタール語に訳してもらった形で行った。

(1) 「これは私の本ではない。」[名詞述語文/コピュラ文の否定]

Bu kitap mineke tügel.
this book mine COP.NEG

(2) 「この部屋には椅子がない。」[存在文の否定]

Bu bülmä-dä urındıq yuq.
this room-LOC chair there.isn't

(3) 「この部屋には一つも椅子がない。」[全部否定・モノ]

Bu bülmä-dä ber urındıq ta yuq.
this room-LOC one chair EMPH there.isn't



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed/ja>

- (4) 「その部屋には誰もいない。」[全部否定・ヒト]

Bu bülmä-dä berkem yuq.
this room-LOC no.one there.isn't

全部否定は、「1」にあたる *ber* と、日本語の「も」にあたる *DA* によって表される。(4) のように、*DA* が現れないこともある。*berkem* は *ber* 「1」と *kem* 「誰」から成っている。

- (5) 「その本はこの部屋にない。」[所在文の否定]

Šul kitap bu bülmä-dä yuq.
that book this room-LOC there.isn't

- (6) 「この犬は大きくない。」[形容詞文の否定]

Bu et zur tügel.
this dog big COP.NEG

形容詞文の否定も、名詞述語文／コピュラ文と同様に否定辞 *tügel* によって表される。

- (7) 「この犬はあまり大きくない。」[形容詞文の部分否定]

Bu et šulay uq zur tügel.
this dog so EMPH big COP.NEG

- (8) 「この犬はあの犬より大きい。」[比較級]

Bu et tege et-tän zur-raq.
this dog that dog-ABL big-COMP

- (9) 「この犬がその犬たちの中で一番大きい。」[最上級]

Bu et šul et-lär-nej ara-sin-da iñ zur.
this dog that dog-PL-GEN interval-3SG.POSS-LOC most big

- (10) 「今日はあの人は来ない。」[自動詞文の否定]

Bügen tege keše kil-miy.
today that person come-NEG.PRS

- (11) 「あの人はその本を持って行かなかった。」[他動詞文の否定]

Tege keše bu kitap-ni al-ıp kit-mä-de.
that person this book-ACC take-CVB leave-NEG-PST

- (12) 「全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。」[数量の全部否定]

Böten uquči-lar qatnaš-ma-dı.
all student-PL participate-NEG-PST

- (13) 「全ての学生が参加したわけではない。」[数量の部分否定]

Böten uquči-lar qatnaş-qan dip äyt-ä al-miy-m
 all student-PL participate-PTCP.PST QUOT say-CVB take-NEG.PRS-1SG

直訳すると、「全ての学生が参加したと、(私は) 言うことはできない」となっている。

- (14) 「(私は)買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。」[文の否定]

(Min sat-ıp al-ma-yan bul-sa-m da,)
 1SG sell-CVB take-NEG-PTCP.PST be-COND-1SG although
 bäyä-se qıybat dip äyt-er-lek tügel.
 price-3SG.POSS expensive QUOT say-PTCP.FUT-IEK COP.NEG

直訳すると、「値段が高いと言うほどではない」となっている。

- (15) 「走るな！」[禁止]

Yöger-mä!
 run-NEG.IMP.2SG

- (16) 「大きな声を出すな！」[他動詞文の禁止]

Tawışlan-ma-ÿz!
 be.noisy-NEG-IMP.2PL

タタール語で「大きな声を出すな」にあたる表現（例えば、先生が子供たちに対して静かにするよう注意をするような場合に用いられる）は、自動詞 *tawışlan-*「騒ぐ」の否定命令形によって表される。そのため、これは「他動詞文の禁止」の用例ではない。「他動詞文の禁止」の用例としては、以下のようなものがある。

- (16b) 「タバコを吸うな！」

Tämäke tart-ma!
 tobacco smoke-NEG.IMP.2SG

- (17) 「明日は雨は降らないだろう。」[推量の否定]

Irtägä yañyır yaw-mas=tır.
 tomorrow rain rain-NEG.INDEF.FUT=MOD

不定未来形の否定形 *-mAs* のみによっても推量の否定は表されうるが、上の例では推量のモダリティを表す接語=*DEr* も現れている。

- (18) 「あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。」[目的節の否定]

Tege keşe išet-mäs öčen şipirt qına söyläş.
 that person hear-NEG.INDEF.FUT so.that quiet only talk.IMP.2SG

- (19) 「私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。」 [否定のスコープの調節]

Min šul süz-ne sine açuwlän-dir-ir öčen äyt-mä-de-m.
1SG that word-ACC 2SG.ACC get.angry-CAUS-INDEF.FUT so.that say-NEG-PST-1SG

- (20) 「私が昨日買ってきた本はどこ（にある）？」 [内の関係の連体修飾節・目的語]

Min kičä sat-ıp al-yan kitap qayda mikän?
1SG yesterday sell-CVB take-PTCP.PST book where Q.MOD

タタール語で内の関係の連体修飾節・目的語はいくつかの構造で表されうるが、上の例では主格主語と形動詞、主語を表す所属人称接辞が付いてない主要部名詞からなる構造で表されている。タタール語ではこれが最も一般的な構造である。

- (21) 「その本を持って来た人は誰（か）？」 [内の関係の連体修飾節・主語]

Bu kitap-ni al-ıp kil-gän keše kem?
this book-ACC take-CVB come-PTCP.PST person who

- (22) 「この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。」 [内の関係の連体修飾節・場所]

Bu bülmä bez eš-ebez-ne ešliy toryan bülmä ul.
this room 1PL work-1PL.POSS-ACC work.PTCP.PRS room EMPH

内の関係の連体修飾節・目的語と同様の構造で表される。*ešliy toryan* は work-CVB stand-PTCP.PST のような分析的な構造となっているが、現代タタール語文法で *-Aly toryan* は現在の形動詞とするのが一般的である。

- (23) 「足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。」 [内の関係の連体修飾節・所有者]

Ber ayay-i sün-yan tege urıñdiq-ni min tašla-dı-m inde.
one leg-3SG.POSS be.broken-PTCP.PST that chair-ACC 1SG throw.away-PST-1SG already

内の関係の連体修飾節・所有者は、所有物-3SG.POSS を主語とする構造によって表される。

- (24) 「ドアを叩いている音が聞こえる。」 [外の関係の連体修飾節]

Išek-ne qay-uw tawış-i išet-el-ä.
door-ACC knock-VN sound-3SG.POSS hear-PASS-PRS

外の関係の連体修飾節を表す構造の一つに、動名詞節+名詞-3SG.POSS がある。上の例では、誰がドアを叩いているか（動名詞節の主語）は標示されておらず、「ドアを叩く音」という一般的な音の性質が表されている。

- (25) 「あの人が結婚したという噂は本当（か）？」 [外の関係の連体修飾節]

Tege keše öylän-gän digän yäybät döres mikän?
that person marry-PRF QUOT rumor right Q.MOD

外の関係の連体修飾節は上のように、内容節+「という」にあたる *digän* +名詞という構造でも表される。*di-gän* は形式的には say-PTCP.PST である。

(26) 「私はその人が来た時にご飯を食べていた。」[時間節]

Tege keşe kil-gän-dä, min aša-p utır-a ide-m.
 that person come-PTCP.PST-LOC 1SG eat-CVB sit-PRS COP.PST

時間節「～したときに」は、過去の形動詞＋位格によって表される。タタール語では過去の形動詞に人称が付くのはまれであり、節の主語も多くの場合主格で現れる。

(27) 「私はその人が待っている所に行った。」[場所節]

Min tege keşe köt-ep tor-yan urın-ya bar-dı-m.
 1SG that person wait-CVB stand-PTCP.PST place-DAT go-PST-1SG

内の関係の連体修飾節・場所と同様。

(28) 「私はその人が走っていったのを見た。」[補文節・視覚]

Min tege keşe-neŋ čap-qan-ı-n kür-de-m.
 1SG that person-GEN run-PTCP.PST-3SG.POSS-ACC see-PST-1SG

タタール語で補文節はいくつかの構造で表されるが、上の例のように属格主語と、非定形動詞＋節の主語を示す所属人称接辞からなる構造が一般的である。視覚・聴覚・知識の別は主節述語によって表される。

(29) 「昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。」[補文節・聴覚]

Kičä kič belän min alar-niŋ söyläş-üw-läre-n išet-te-m.
 yesterday at.night 1SG 3PL-GEN talk-VN-3PL.POSS-ACC hear-PST-1SG

(30) 「私はその人が昨日ここに来たことを知っている。」[補文節・知識]

Tege keşe kičä monda kil-gän-e-n min bel-ä-m.
 that person yesterday here come-PTCP.PST-3SG.POSS-ACC 1SG know-PRS-1SG

上の例のように、主格主語と所属人称接辞の付いた主要部からなる補文節も見られる。

(31) 「(昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。 / (昨日) 彼は、『私は今日ここに来た』と言った。」[補文節・直接発話／間接話法]

Ul bügen üz-e-neŋ monda kil-gän-e-n äyt-te.
 3SG today REFL-3SG.POSS-GEN here come-PTCP.PST-3SG.POSS-ACC say-PST

“Min bügen monda kil-gän ide-m” dip äyt-te ul.
 1SG today here come-PRF COP.PST-1SG QUOT say-PST 3SG

前者は上位節と同主語の補文節である。補文節中の主語は属格の再帰代名詞、述部は過去の形動詞によって表されており、いずれも主語の人称を示す所属人称接辞をとっている。

後者は直接話法の表現で、日本語の「と」に相当する *dip* が用いられている。*di-p* (もしくは *diy-ep*) は形式的には *say-CVB* である。

(32) 「私はリンゴが（あの）皿の上にあったのを食べた。」[内在節・従主・主主]

Min tege tālinkā-dā yat-qan alma-nī aša-dī-m.
 1SG that dish-LOC lie-PTCP.PST apple-ACC eat-PST-1SG

日本語の内在節はタタール語では連体修飾節で表される。上の例は直訳すると「私は皿の上にあったリンゴを食べた」となっている。

(33) 「私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。」[内在節・従主・主目]

Pesiy öy-gā ker-gān-e-n kūr-de-m.
 cat house-DAT enter-PTCP.PST-3SG.POSS-ACC see-PST-1SG

上の例は直訳すると「私は猫が家に入ったのを見た」となっており、補文節が用いられている。「見た」という動詞に変えた理由をコンサルタントは、『猫』を捕まえることはできるが、『猫が入ってきたこと』を捕まえることはできないため」だとした。(33) の日本語の意味は、「家に入ってきた猫を捕まえた」という連体修飾節を用いた構造によって表される。

(33b) 「私は家に入ってきた猫を捕まえた。」

Min öy-gā ker-gān pesiy-ne tot-īp al-dī-m.
 1SG house-DAT enter-PTCP.PST cat-ACC catch-CVB take-PST-1SG

略号一覧

1, 2, 3		1, 2, 3 人称	PASS	passive	受身
ABL	ablative	奪格	PL	plural	複数
ACC	accusative	対格	PRF	perfect	完了
CAUS	causative	使役	PRS	present	現在
COMP	comparative	比較	PST	past	過去
COP	copula	コピュラ	POSS	possessive	所有
CVB	converb	副動詞	PTCP	participle	形動詞
DAT	dative	与格	Q	question	疑問
EMPH	emphasis	強調	QUOT	quotative	引用
FUT	future	未来	REFL	reflexive	再帰
GEN	genitive	属格	SG	singular	単数
IMP	imperative	命令	VN	verbal noun	動名詞
INDEF	indefinite	不定	-		接辞境界
MOD	modality	モダリティ	=		接語境界
NEG	negative	否定			

執筆者連絡先: boltwatts@gmail.com

原稿受理: 2019年5月6日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

モンゴル語(ハルハ方言・チャハル方言)における否定、形容詞と連体修飾複文
Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification
in Mongolian (Khalkha dialect, Chakhar dialect)

ホリロ

Hao Rile

東京外国語大学大学院総合国際学研究科
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨:本稿の目的は、特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号、東京外国語大学)における33個のアンケート項目に対するモンゴル語(ハルハ方言・チャハル方言)のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Mongolian (Khalkha dialect, Chakhar dialect) data which answers the thirty three survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 23, which focuses on the cross linguistic study of ‘negation, adjectives, and compound sentences of adnominal modification’.

キーワード:モンゴル語(ハルハ方言・チャハル方言)、否定、形容詞、連体修飾、複文

Keywords: Mongolian (Khalkha dialect, Chakhar dialect), negation, adjective, adnominal modification, compound sentence

1. はじめに

モンゴル語ハルハ方言は、モンゴル国の広域に分布する方言である。モンゴル語チャハル方言は、中国内モンゴル自治区で話されている方言の一つであり、中国領域のモンゴル語の標準語とされている。本稿ではハルハ方言とチャハル方言を扱う。

ハルハ方言の話者は1989年モンゴル国ウウルハンガイ県ハラホリン郡生まれの女性である。チャハル方言の話者は、1983年中国内モンゴル自治区錫林郭勒盟^{シリンゴル} 鑲黄旗^{フベートシヤル}生まれの女性である。二人の話者はいずれも日本語力を有するため、日本語の例を提示し、33の文を訳していただく形をとった。

以下の文では、ハルハ方言を[Kha.]、チャハル方言を[Cha.]の略号によって示す。ハルハ方言の表記はキリル文字正書法による表記をローマ字に転写して示す¹。チャハル方言は音声表記に近い音素表記によって示す²。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ 本稿でのモンゴル語ハルハ方言の例文表記は、下記の転写ルールに従う: a=a, ɒ=b, v=v[β], ɣ=g, ɮ=d, e=je/jö, ë=jo, ж=ʒ[dʒ-ʃ], з=z[dz-ts], и=i, й=j, к=k, л=l[l̥], м=m, н=n, о=o[ɔ], ɵ=ø[ø], п=p, р=r, с=s, т=t, у=u[u], ү=ü[u], ф=f, х=x, ɯ=c[tʰ], ч=č[tʃʰ], ш=š[ʃ], ь=ʷ, ы=y[i̯], ь=ʷ, э=e, ю=j[u/jü], я=ja.

² 本稿で扱うチャハル方言の音素目録は次の通りである。母音: /a, æ, ə, i, ɪ, ɔ, œ, ʊ, o, u/. 子音: /b, p, t, d, f, s, ʃ[ʃ], g[ɣ-g-ɣ-ʁ], x[χ-x-q-k], č[ʃ], ʃ[dʒ], m, n, ŋ, r, l, w, j/.

2. データ

(1) 「これは私の本ではない。」 [名詞述語文／コピュラ文の否定]

[Kha.] Энэ миний ном биш.
ene minij nom biš.
これ 1SG.GEN 本 NEG

[Cha.] эн минii нэм биш.
これ 1SG.GEN 本 NEG

(2) 「この部屋には椅子がない。」 [存在文の否定]

[Kha.] Энэ өрөөнд сандал байхгүй.
ene öröön-d sandal baj-x-güj.
これ 部屋-DAT 椅子 ある-VN.NPST-NEG

[Cha.] эн гэр-t sandal баяа-x-гүү.
これ 部屋-DAT 椅子 ある-VN.NPST-NEG

(3) 「この部屋には一つも椅子がない。」 [全部否定・モノ]

[Kha.] Энэ өрөөнд нэг ч сандал байхгүй.
ene öröön-d neg=č sandal baj-x-güj.
これ 部屋-DAT 一=も 椅子 ある-VN.NPST-NEG

[Cha.] эн гэр-t нэг sandal=ja³ баяа-x-гүү.
これ 部屋-DAT 一 椅子=も ある-VN.NPST-NEG

(4) 「その部屋には誰もいない。」 [全部否定・ヒト]

[Kha.] Тэр өрөөнд хэн ч байхгүй.
ter öröön-d xen=č baj-x-güj.
それ 部屋-DAT 誰=も いる-VN.NPST-NEG

[Cha.] тэр гэр-t хэп=жэ баяа-x-гүү.
それ 部屋-DAT 誰=も いる-VN.NPST-NEG

(3)と(4)のチャハル方言の例文では、日本語の「も」に当たる小詞 =č が現れず、漢語要素の=ja が使われている。=č も問題なく使えるが、やや文語っぽく感じるという。

(5) 「その本はこの部屋にない。」 [所在文の否定]

[Kha.] Тэр ном энэ өрөөнд байхгүй.
ter nom ene öröön-d baj-x-güj.
それ 本 これ 部屋-DAT ある-VN.NPST-NEG

³ 中国語「也 yě」からの借用と考えられる。

[Cha.] tər nəm ən gər-t bææ-x-gʊʊ.
 それ 本 これ 部屋-DAT ある-VN.NPST-NEG

(6) 「この犬は大きくない。」 [形容詞文の否定]

[Kha.]

a. Энэ нохой том биш.
 ene noxoj tom biš.
 これ 犬 大きい NEG

b. Энэ нохой томгүй.
 ene noxoj tom-gūj.
 これ 犬 大きい-NEG

[Cha.]

c. эн нэхэе будууј биш.
 これ 犬 大きい NEG

d. эн нэхэе будууј-гуу.
 これ 犬 大きい-NEG

ハルハ方言とチャハル方言では、形容詞文の否定も名詞述語文／コピュラ文の否定と同様に否定辞 *biš* によって表されるほか、非所有・欠如を示す接尾辞 *-gūj/-guu* によって表すことも可能である。その違いに関して両方言の話者はそれほど違わないとしているが、多くの場合ハルハ方言の話者は(6a)を、チャハル方言の話者は(6d)を使うという。

(7) 「この犬はあまり大きくない。」 [形容詞文の部分否定]

[Kha.]

a. Энэ нохой тийм ч том биш.
 ene noxoj tījm=č tom biš.
 これ 犬 そんな=も 大きい NEG

b. Энэ нохой тийм ч томгүй.
 ene noxoj tījm=č tom-gūj.
 これ 犬 そんな=も 大きい-NEG

[Cha.]

c. эн нэхэе дәмii будууј биш.
 これ 犬 あまり 大きい NEG

d. эн нэхэе дәмii будууј-гуу.
 これ 犬 あまり 大きい-NEG

(8) 「この犬はあの犬より大きい。」 [比較級]

[Kha.] Энэ нохой тэр нохойноос том.

ene noxoj ter noxoj-n-oos tom.
 これ 犬 それ 犬-E-ABL 大きい

[Cha.] ən nəxəce tər nəxəce-g-ɔs buduuj.
 これ 犬 それ 犬-E-ABL 大きい

ハルハ方言で、奪格が二重母音終わりの名詞に接続するときには間に *н* が挿入される (山越 2012: 69). チャハル方言の場合、子音 *g* と *n* が挿入可能であり、*nəxəce-n-ɔs* も *nəxəce-g-ɔs* も言えるという。

(9) 「この犬がその犬たちの中で一番大きい。」 [最上級]

[Kha.] Энэ нохой тэр нохойнуудын дотор хамгийн том.
 ene noxoj ter noxoj-nuud-yn dotor xamg-ijn tom.
 これ 犬 それ 犬-PL-GEN 中 最-GEN 大きい

[Cha.] ən nəxəce=n tər dɔtr-ɔŋ xamg-iin buduuj=n.
 これ 犬=3.POSS それ 中-REFL 最も-GEN 大きい=3.POSS

ハルハ方言では、*ene noxoj* の後ろに三人称接辞 *=n* があってもよいという。チャハル方言では、三人称接辞が省略可能であるとしている。

(10) 「今日はあの人は来ない。」 [自動詞文の否定]

[Kha.] Өнөөдөр тэр хүн ирэхгүй.
 öñöödör ter хүн ирe-x-gүй.
 今日 それ 人 来る-VN.NPST-NEG

[Cha.] onoodər tər хuŋ ir-kuu.⁴
 今日 それ 人 来る-NEG.VN.IPFV

(11) 「あの人はその本を持って行かなかった。」 [他動詞文の否定]

[Kha.] Тэр хүн тэр номыг авч яваагүй.
 ter хүн ter nom-yg av-č jav-aa-gүй.
 それ 人 それ 本-ACC 取る-CVB.IPFV 行く-VN.IPFV-NEG

[Cha.] tər хuŋ tər нөm-ii ab-aa⁵ jab-saŋ-gvɔ.
 それ 人 それ 本-ACC 取る-CVB.PFV 行く-VN.PFV-NEG

(12) 「全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。」 [数量の全部否定]

[Kha.] Бүх оюутнууд оролцоогүй.
 бүх оjuutn-uud orolc-oo-gүй.
 すべて 学生-PL 参加する-VN.IPFV-NEG

⁴ この否定接辞 *-kuu* は、非過去形動詞 *-x* に否定接辞 *-guu* を接続した形 *-x-guu* の融合によるものであると考えられる。

⁵ *-aa* は完了副動詞-AAd の *d* が落ちた形である。筆者の観察では、この形はオラド方言やオルドス方言などのモンゴル語のほかの方言にも見られる。本稿では、チャハル方言の完了副動詞は-AAd と-AA との二つの形を取っており、揺れが見られる (例文(19), (28)を参照)。

[Cha.] sʉragĉ-ʉʉd bugdäär-äär ʉrɔlĉ-səŋ-gʉʉ.
 学生-PL 全員-REFL 参加する-VN.PFV-NEG

(13) 「全ての学生が参加したわけではない。」[数量の部分否定]

[Kha.] Бүх оюутнууд оролцсон гэсэн үг биш.
 бүх оюутн-ууд оролц-сон ге-сен үг биш.
 すべて 大学生-PL 参加する-VN.PFV という-VN.PFV 言葉 NEG

[Cha.] sʉragĉ-ʉʉd bugdäär-äär ʉrɔlĉ-səŋ biš.
 学生-PL 全員 REFL 参加する-VN.PFV NEG

(14) 「(私は買わなかった. しかし, 決して) 値段が高いというわけではない。」[文の否定]

[Kha.] Үнэтэй гэсэн үг биш.
 үнетэй ге-сен үг биш.
 値段が高い という-VN.PFV 言葉 NEG

[Cha.] untee gə-səŋ ʉĉir biš.
 値段が高い という-VN.PFV こと NEG

(15) 「走るな！」[禁止]

[Kha.] Битгий гүй.
 bitgij güj.
 PROH 走る(2.IMP)

[Cha.] bitii gui.
 PROH 走る(2.IMP)

(16) 「大きな声を出すな！」[他動詞文の禁止]

[Kha.] Чанга битгий дуугар.
 čanga bitgij duugar.
 大きい PROH 声を出す(2.IMP)

[Cha.] bitii ondər dʉʉ-g-aar jær.
 PROH 高い 音-E-INS 話す(2.IMP)

(17) 「明日は雨は降らないだろう。」[推量の否定]

[Kha.] Маргааш бороо орохгүй байх.
 margaaš бороо оро-х-гүй=bajx.
 明日 雨 降る-VN.NPST-NEG=MDL

[Cha.] magaatar barag bərcəŋ ɔŋ-kʊʊ=wa?⁶
 明日 多分 雨 降る-NEG.VN.IPFV=MDL

(18) 「あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。」[目的節の否定]

[Kha.] Тэр хүнд сонсогдохооргүйгээр зөөлөн дуугаар ярь.
 ter xün-d sons-o-gd-o-xoor-güj-g-eer zöölön duu-g-aar jar'.
 それ 人-DAT 聴く-E-PASS-E-CVB-NEG-E-INS やさしい 声-E-INS 話す(2.IMP)

[Cha.] tər xun-d sɔns-ʊʊl-kʊʊ-g-aar čiməə-guu jær=daa.
 それ 人-DAT 聴く-CAUS-NEG.VN.IPFV-E-INS 音-NEG 話す(2.IMP)=MDL

ハルハ方言の sons-o-gd-o-xoor-güj-g-eer の-xoor は本来、非過去の形動詞に道具格が後続した形(-VN.NPST-INS)であるが、これを固定化した一つの副動詞形として扱う場合があるとされている（東京外国語大学言語モジュール）。上の例では副動詞の後に否定接辞と道具格が後続している。

(19) 「私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。」[否定のスキープの調節]

[Kha.] Би чамайг уурлуулая гэж бодож тэгэж хэлсэн юм биш.
 bi čama-jg uurl-uul-a-ja ge-ž bodo-ž
 1SG.NOM 2SG-ACC 怒る-CAUS-E-1.OPT という-CVB.IPFV 思う-CVB.IPFV
 tege-ž xel-sen =jüm bish.
 そうする-CVB.IPFV 言う-VN.PFV =MDL NEG

[Cha.] bii čam-ææg ʊʊrl-ʊʊl-ji gə-d
 1SG.NOM 2SG-ACC 怒る-CAUS-1.OPT という-CVB.PFV
 tæg-æəd jær-səŋ-gʊʊ.
 そうする-CVB.PFV 言う-VN.PFV-NEG

(20) 「私が昨日買った本はどこ（にある）？」[内の関係の連体修飾節・目的語]

[Kha.] Миний өчигдөр худалдаж авч ирсэн ном хаана байна ?
 minij öčigdör xudalda-ž av-č ir-sen nom
 1SG.GEN 昨日 売る-CVB.IPFV 取る-CVB.IPFV 来る-VN.PFV 本
 хаана baj-na ?
 どこ ある-NPST

[Cha.]
 a. minii očogdər-iij ab-səŋ nɔm xaa bææ-n=bææ?
 1SG.GEN 昨日-GEN 取る-VN.PFV 本 どこ ある-NPST=Q

⁶ 漢語「吧 ba」からの借用と考えられる。

モンゴル語では疑問文の文末に通常疑問小詞が必要とされるが，(20) [Kha.] のように疑問小詞がなくても疑問文になる場合がある。その場合，文末のイントネーションは必ずしも上がり調子ではなく，下がり調子も言えるという。チャハル方言も同様である。

上の例を見ると，連体修飾節は両方言ではいずれも属格主語，形動詞と主要部名詞からなる構造で表されている。しかしチャハル方言で連体修飾節は主格主語を取ることも可能である。その場合，*oċogdär* 「昨日」に後続している属格が必ず落ちる。

[Cha.]

b. *bii* *oċogdär* *ab-səŋ* *nɔm* *xaa* *bææ-n=bææ?*
 1SG.NOM 昨日 取る-VN.PFV 本 どこ ある-NPST=Q

(21) 「その本を持って来た人は誰（か）？」 [内の関係の連体修飾節・主語]

[Kha.] *Tər nomyg avč irsən хүн хэн бэ?*

tər *nom-yg* *av-č* *ir-sen* *xün* *xen=be?*
 それ 本-ACC 取る-CVB.IPFV 来る-VN.PFV 人 誰=Q

[Cha.] *tər* *nɔm-ii* *abčir-j* *og-səŋ* *xuŋ* *xəŋ=bææ?*
 それ 本-ACC 持ってくる-CVB.IPFV あげる-VN.PFV 人 誰=Q

(22) 「この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。」 [内の関係の連体修飾節・場所]

[Kha.] *Энэ өрөө бол бидний ажиллаж байгаа өрөө.*

ene *öröö* *bol* *bid-nij* *ažilla-ž* *baj-g-aa* *öröö.*
 これ 部屋 TOP 1PL-GEN 働く-CVB.IPFV ある-E-VN.IPFV 部屋

[Cha.] *ən=čün* *manɔs-iij* *ažill-ji-g-aa* *gər.*
 これ=2.POSS 1PL-GEN 働く-PROG-E-VN.IPFV 部屋

(23) 「足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。」 [内の関係の連体修飾節・所有者]

[Kha.] *нэг хөл нь хугарчихсан байсан нөгөө сандлыг аль хэдий нь хаячихсан.*

neg *xöl=n'* *xugar-čix-san* *bai-san* *nögöö* *sandl-yg*
 一 足=3.POSS 折れる-PFV-VN.PFV ある-VN.PFV 例の 椅子-ACC

ali+xedij=n' *xaja-čix-san.*
 とつくの前=3.POSS 捨てる-PFV-VN.PFV

[Cha.] *nəg* *xol=n* *xugar-səŋ* *tər* *sandl-ii* *xaj-čix-səŋ.*
 一 足=3.POSS 折れる-VN.PFV それ 椅子-ACC 捨てる-PFV-VN.PFV

(24) 「ドアを叩いている音が聞こえる。」 [外の関係の連体修飾節]

[Kha.] *Хаалга нүдэх дуу сонсогдож байна.*

xaalga *nüde-x* *duu* *sons-o-gd-o-ž* *baj-na.*
 ドア 叩く-VN.NPST 音 聴く-E-PASS-E-CVB.IPFV ある-NPST

[Cha.] uud dɔgʂ-ji-x dʊʊ sɔns-ɔ-gd-ji-n.
 ドア 叩く-PROG-VN.NPST 音 聴く-E-PASS-PROG-NPST

(25) 「あの人が結婚したという噂は本当（か）？」 [外の関係の連体修飾節]

[Kha.] Тэр хүн гэрлэсэн гэсэн цуу яриа үнэн үү.
 ter xün gerle-sen ge-sen cuu+jaria ünən=üü?
 それ 人 結婚する-VN.PFV という-VN.PFV 噂 本当=Q

[Cha.] tər / tər-iig xcerəm xii-çi⁷-læ gə-səŋ čiməə=n unən=uu?
 3SG.NOM/3SG-ACC 結婚 する-PFV-PST という-VN.PFV 消息=3.POSS 本当=Q

(25)のように、チャハル方言では節の主語が主格でも対格でも言える。一方、ハルハ方言の文では、主格を取ったほうがより自然な感じがするという。しかし節の主語がter xün「あの人」ではなく人名になると対格を取っても問題なく言えるという。

(26) 「私はその人が来た時にご飯を食べていた。」 [時間節]

[Kha.] Би тэр хүнийг ирэх үед хоол идэж байсан.
 bi ter xün-ijg ir-e-x üje-d xool ide-ž
 1SG.NOM それ 人-ACC 来る-E-VN.NPST とき-DAT ご飯 食べる-CVB.IPFV
 baj-san.
 ある-VN.PFV

[Cha.] tər xuy/xun-ii irə-x-d bii xool-ɔŋ id-ji-səŋ.
 それ 人/人-ACC 来る-VN.NPST-DAT 1SG.NOM ご飯-REFL 食べる-PROG-VN.PFV

(26)のように、節の主語はハルハ方言で対格で現れるのに対し、チャハル方言では主格と対格の両方が出現可能である。チャハル方言の例文ではxool-ɔŋ(ご飯-REFL)のように再帰接辞がついているが、ハルハ方言の例文では再帰接辞がついていない。両方言においてこの再帰接辞があってもなくても意味は変わらないという。

(27) 「私はその人が待っている所に行った。」 [場所節]

[Kha.] Би тэр хүний хүлээж байсан газар луу явсан.
 bi ter xün-ij xülee-ž baj-san gazar-luu jav-san.
 1SG.NOM それ 人-GEN 待つ-CVB.IPFV ある-VN.PFV 所-LOC 行く-VN.PFV

[Cha.] bii jag tər xuy/xun-ee xulee-ji-səŋ gajar-t ɔč-səŋ.
 1SG.NOM ちょうど それ 人/人-GEN 待つ-PROG-VN.PFV 所-DAT 行く-VN.PFV

ハルハ方言では節の主語が属格で現れるのに対し、チャハル方言では主格と属格の両方が出現可能である。

⁷ -çi は完了を表すアスペクト接辞-çix の x が落ちた形である。

(28) 「私はその人が走っていったのを見た。」 [補文節・視覚]

[Kha.] Би тэр хүнийг гүйгээд явчихсаныг харсан.

bi ter xün-ijg güj-g-eed jav-čix-san-yg хар-сан.
 1SG.NOM それ 人-ACC 走る-E-CVB.PFV 行く-PFV-VN.PFV-ACC 見る-VN.PFV

[Cha.] bii tər xun-ee gui-g-əə jab-san-ii=n
 1SG.NOM それ 人-GEN 走る-E-CVB.PFV 行く-VN.PFV-ACC=3.POSS

ол-ј уј-сəη.
 得る-CVB.IPFV 見る-VN.PFV

(29) 「昨日の夜，私は彼らがしゃべっているのを聞いた。」 [補文節・聴覚]

[Kha.] Өчигдөр орой би тэднийг ярьж байхыг сонссон.

öčigdör oroj, bi tedn-ijg jar'ž bai-x-yg sons-son.
 昨日 夜 1SG.NOM 3PL-ACC 話す-CVB.IPFV ある-VN.NPST-ACC 聴く-VN.PFV

[Cha.] očogdər sun bii ted-nuus-iin ug jær-ji-x-ii ol-ј
 昨日 夜 1SG.NOM 3PL-PL-GEN 言葉 話す-PROG-VN.NPST-ACC 得る-CVB.IPFV

səns-səη.
 聴く-VN.PFV

(30) 「私はその人が昨日ここに来たことを知っている。」 [補文節・知識]

[Kha.] Би тэр хүнийг өчигдөр энд ирсэнийг мэдэж байгаа.

bi ter xün-ijg öčigdör end ir-sen-ijg mede-ž baj-g-aa.
 1SG.NOM それ 人-ACC 昨日 ここに 来る-VN.PFV-ACC 知る-CVB.IPFV ある-E-VN.PFV

[Cha.] bii tər xun-ee očogdər ənd ir-sən-ii məd-ə-n.
 1SG.NOM それ 人-GEN 昨日 ここに 来る-VN.PFV-ACC 知る-E-NPST

(31) 「(昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。」 / 「(昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。」 [補文節・直接発話/間接話法]

[Kha.] Тэр өнөөдөр энд ирсэн гэж хэлсэн. / Тэр, би өнөөдөр энд ирсэн гэж хэлсэн.

ter önöödör end ir-sen ge-ž xel-sen.
 3SG.NOM 今日 ここに 来る-VN.PFV という-CVB.IPFV 言う-VN.PFV

/ter, “bi önöödör end ir-sen.” ge-ž xel-sen.
 3SG.NOM 1SG.NOM 今日 ここに 来る-VN.PFV という-CVB.IPFV 言う-VN.PFV

[Cha.] tər onoodər ənd ir-səη gə-ј xəl-səη.
 3SG.NOM 今日 ここに 来る-VN.PFV という-CVB.IPFV 言う-VN.PFV

/tər “bii onoodər ənd ir-səη.” gə-ј xəl-səη.
 3SG.NOM 1SG.NOM 今日 ここに 来る-VN.PFV という-CVB.IPFV 言う-VN.PFV

モンゴル語の直接発話と間接発話は日本語の「～と」に当たる引用マーカー *ge-ž* (*ge-j*) を用いて表現される。上の例を見ると、直接発話の場合、補文節の主語は両方言でいずれも主格になっている。間接発話の場合、ハルハ方言もチャハル方言も補文節の主語が削除される。あるいは「自分」を意味する再帰代名詞を用いて節の主語を示すことも可能である。

[Kha.] Тэр өөрийгөө өнөөдөр энд ирсэн гэж хэлсэн.

ter	öör-ij-g-öö	önöödör	end	ir-sen	ge-ž	xel-sen.
3SG.NOM	自分-ACC-E-REFL	今日	ここに	来る-VN.PFV	という-CVB.IPFV	言う-VN.PFV

[Cha.] tər oor-ooŋ onoodər ənd ir-səŋ gəj xəl-səŋ.

3SG.NOM	自分-REFL	今日	ここに	来る-VN.PFV	という-CVB.IPFV	言う-VN.PFV
---------	---------	----	-----	-----------	--------------	-----------

(32) 「私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた。」 [内在節・従主・主主]

[Kha.]

a. Би тавган дээр байсан алимыг идсэн.

bi	tavgan	deer	baj-san	alim-yg	id-sen.
1SG.NOM	皿	上	ある-VN.PFV	リンゴ-ACC	食べる-VN.PFV

b. Би алимыг тэр тавган дээр байхаар нь идсэн.

bi	alim-yg	tavgan	deer	baj-xaar=n'	id-sen.
1SG.NOM	リンゴ-ACC	皿	上	ある-CVB=3.POSS	食べる-VN.PFV

c. Би алим тэр тавган дээр байсаныг нь идсэн.

bi	alim	ter	tavgan	deer	baj-sn-yg=n'	id-sen.
1SG.NOM	リンゴ	それ	皿	上	ある-VN.PFV=3.POSS	食べる-VN.PFV

[Cha.]

d. bii pilan dээр bəæ-səŋ ælm-ii id-səŋ.

1SG.NOM	皿	上	ある-VN.PFV	リンゴ-ACC	食べる-VN.PFV
---------	---	---	-----------	---------	------------

e. bii æləm-ii pilan dээр bəæ-xnaar=n id-səŋ.

1SG.NOM	リンゴ-ACC	皿	上	ある-CVB=3.POSS	食べる-VN.PFV
---------	---------	---	---	---------------	------------

f. bii æləm pilan dээр bəæ-səŋ-ii=n id-səŋ.

1SG.NOM	リンゴ	皿	上	ある-VN.PFV-ACC=3.POSS	食べる-VN.PFV
---------	-----	---	---	----------------------	------------

例文(32)の訳として、両方言の話者が最初に発話されたのは、連体修飾節で表された(32a)と(32d)である。(32b)と(32e)のような文も言えるが、日本語に訳すと「皿の上にリンゴが {あったので/あったため}, 私が食べた。」のように、理由などを表す副詞節になってしまうようである。日本語の内在節の例文を直訳すると、(32c)と(32f)のようになる。しかし、日本語の意味は「何個かリンゴがあって、そのうち皿の上にあったのを食べた。」という意味になるという。以下の例文(33)も同様である。

(33) 「私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。」 [内在節・従主・主目]

[Kha.]

a. Би гэрт орж ирсэн муурыг барисан.

bi	ger-t	or-ž	ir-sen	muur-yg	bari-san.
----	-------	------	--------	---------	-----------

- ISG.NOM 家-DAT 入る-CVB.IPFV 来る-VN.PFV 猫-ACC 捕まえる-VN.PFV
- b. Би муурыг гэрт орж ирхээр нь барисан.
 bi muur-yg ger-t or-ž ir-xeer=n' bari-san.
 ISG.NOM 猫-ACC 家-DAT 入る-CVB.IPFV 来る-CVB=3.POSS 捕まえる-VN.PFV
- c. Би муур гэрт орж ирсныг нь барисан.
 bi muur ger-t or-ž ir-sn-yg=n' bari-san.
 ISG.NOM 猫 家-DAT 入る-CVB.IPFV 来る-VN.PFV -ACC=3.POSS 捕まえる-VN.PFV
- [Cha.]
- d. bii gər-t ɔr-ʃ ir-səŋ mʊʊr-ii bær-səŋ.
 ISG.NOM 家-DAT 入る-CVB.IPFV 来る-VN.PFV 猫-ACC 捕まえる-VN.PFV
- e. bii mʊʊr-ii gər-t ɔr-ʃ ir-sən-d bær-səŋ.
 ISG.NOM 猫-ACC 家-DAT 入る-CVB.IPFV 来る-VN.PFV -DAT 捕まえる-VN.PFV
- f. bii mʊʊr gər-t ɔr-ʃ ir-sən-ii =n bær-səŋ.
 ISG.NOM 猫 家-DAT 入る-CVB.IPFV 来る-VN.PFV -ACC=3.POSS 捕まえる-VN.PFV

例文(33)の訳もやはり(33a)と(33d)のような連体修飾節で表されているものが一番自然な感じがするという。(33b)と(33e)を日本語に訳すとそれぞれ「猫が家に入ってきたときに捕まえた。」と「猫が家に入ってきたから捕まえた。」となり、時間や理由を表す副詞節になっている。(33c)と(33f)は「猫が何匹かいて、そのうち家に入ってきたのを捕まえた。」という意味になる。

略号一覧

-	接辞境界	IMP	命令	PL	複数
=	接語境界	INS	道具格	POSS	所有
+	複合語内境界	IPFV	不完了	PROG	進行
1, 2, 3	1, 2, 3 人称	LOC	方向格	PROH	禁止
ABL	奪格	MDL	モダリティ	PST	過去
ACC	対格	NEG	否定	Q	疑問
CAUS	使役	NOM	主格	REFL	再帰所有
CVB	副動詞	NPST	非過去	SG	単数
DAT	与位格	OPT	希求	TOP	主題
E	挿入音	PASS	受身	VN	形動詞
GEN	属格	PFV	完了		

参考文献

山越康裕 (2012) 『詳しくわかるモンゴル語文法』 東京：白水社。

東京外国語大学言語モジュール>モンゴル語>文法モジュール>連用節 (3) 目的

<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/gmod/contents/explanation/084.html> (最終閲覧日: 2019/6/10)

執筆者連絡先: horlo2009@yahoo.co.jp

原稿受理: 2019年5月7日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

エウエン語・ソロン語・ナーナイ語
ーツングース諸語における否定と形容詞、連体修飾ー
Ewen, Solon and Nanai
-Negation and Attributeive clauses in Tungusic languages-

風間 伸次郎
Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨:本稿の目的は、特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号, 東京外国語大学)における33個のアンケート項目に対するエウエン語、ソロン語、ナーナイ語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Ewen, Solon and Nanai data which answers the thirty three survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 23, which focuses on the cross linguistic study of 'negation, adjectives, and compound sentences of adnominal modification'.

キーワード:エウエン語、ソロン語、ナーナイ語、否定、形容詞、連体修飾、複文

Keywords: Ewen, Solon, Nanai, negation, adjective, adnominal modification, compound sentence

1. はじめに

コンサルタントの情報は下記(表1)に示した通りである。エウエン語とナーナイ語は国際電話によってロシア語を媒介言語にして行い、ソロン語は日本在住の話者から日本語を媒介言語にして行った。例文データにおいて、エウエン語は(E)、ソロン語は(S)、ナーナイ語は(N)の略号を以って示す。なおツングース諸語は音対応の観点からI・II・III・IVの4つのグループに分けることが行われているが、エウエン語とソロン語はそのうちのI群に、ナーナイ語はIII群に分類されている。なおエウエン語はカムチャツカにおけるブイストラヤ方言である。

表1: コンサルタントの情報

言語	生年	言語形成期を過ごした場所
エウエン語	1954	カムチャツカ州トゥヴァヤン村
ソロン語	1993	ホロンバイル地区伊敏ソム
ナーナイ語	1938	ハバロフスク州ナイヒン村



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

エウエン語およびナーナイ語におけるロシア語からの借用語、ソロン語における中国語からの借用語はともに斜字体によって示した。なおこれらの言語の概要、文法の大まかな枠組みに関しては、エウエン語については風間 (2015)、ソロン語については風間 (2005)、ナーナイ語については風間 (2010) を参照されたい。なお今回のエウエン語のコンサルタントはロシア語についても豊富な知識を持ち、ロシア語の構文や表現になるべく対応した形でのエウエン語の表現をしようとする強い傾向がある。そのため多くの文例が媒介言語のロシア語の影響を極めて強く受けた表現となって得られている。しかし当然のことながら形態論をはじめ、エウエン語として成り立たないような表現はしていない。このようなバリエーションは他方で言語接触等を研究する際にも貴重な資料となるものである。したがってそのままの形で採録した。ただし、もちろん他言語との対照や類型論的考察を行う際には注意して扱う必要がある。

2. 例文データ

1. これは私の本ではない。[ЭТО НЕ МОЯ КНИГА.] [名詞述語文／コピュラ文の否定]

(E) ərək ə-s-ni min kniga-w bi-s=ə.
 this NEG-V-PTCP.IMP-F-3SG I.GEN book-1SG.POSS be-INF=EMP

(S) əjjəə minii bitxə əntu.
 this I.GEN book different

(N) əi mii daŋsa-ji bi-əsi.
 this I book-1SG.POSS be-NEG.PRS

ソロン語では *əntu* 「違う (形容詞)」を用いるようになっている。ナーナイ語では否定動詞の要素が歴史的に後ろに回って一語化している。

2. この部屋には椅子がない。[В ЭТОЙ КОМНАТЕ НЕТ СТУЛЬЕВ.] [存在文の否定]

(E) ər komnata-la aačča təgənməi-lə.
 this room-LOC nothing chair-AB

(S) əjjəə juud-du sandal aasm.
 this room-DAT chair nothing

(N) əi komnata-do=daa bandan abaa.
 this room-DAT=CUM chair nothing

エウエン語では語順が異なり、*aačča* 「無い」と呼応して名詞に欠格が現れている。ツングース諸語では一般に存在の否定において不変化の語を用いる (風間 (2003: 321))。

3. この部屋には一つも椅子がない。[В ЭТОЙ КОМНАТЕ НЕТ НИ ОДНОГО СТУЛА.] [全部否定・モノ]

(E) ər komnata-la aačča um-ni=l təgənməi.
 this room-LOC nothing one-3SG.POSS=EMP chair

(S) əjjəəjuud-du əmun=kəd sandal aasm.
 this room-DAT one=EMP chair nothing

(N) əi komnata-do əm bandan=daa abaa.
 this room-DAT one chair=CUM nothing

エウエン語における=1 は所有人称接辞の後ろに現れているため強調の小辞として分析したが、例文 2 でみられた欠格である可能性も考えられる。なおナーナイ語の *bandan* はおおもとは漢語であるが、モンゴル語経由のかなり古い借用語と考えられ、話者たちに借用語である意識はない。

4. その部屋には誰もいない。[В той комнате никого нет.] [全部否定・ヒト]

(E) ər komnata-la ŋii=də aáčča.
 this room-LOC who=CUM nothing

(S) tajjaa juud-du awɔ=xad aasm.
 that room-DAT who=EMP nothing

(N) təi komnata-do ui=dəə abaa.
 that room-DAT who=CUM nothing

エウエン語において場所が処格で示されている以外には、ほとんど同じ構文となっている。

5. その本はこの部屋にない。[Этой книги в этой комнате нет.] [所在文の否定]

(E) ər kniga ər komnata-la aáčča.
 this book this room-LOC nothing

(S) tajjaa bitxə əjjəə juud-du aasm.
 that book this room-DAT nothing

(N) əi komnata-do təi daŋsa abaa.
 this room-DAT that book nothing

例文 4 と同様、エウエン語において場所が処格で示されている以外には、ほとんど同じ構文となっている。

6. この犬は大きくない。[Эта небольшая собака.] [形容詞文の否定]

(E) ərək ə-s-ni əgʲən ŋm bi-s.
 this NEG-PTCP-IMP-3SG big dog be-INF

(S) əjjə nniɣin boŋgon əntu.
 this dog big different

(N) əi inda daai=daa bi-əsi.
 this dog big=CUM be-NEG

ツングース諸語のみならずアルタイ諸言語において一般に名詞と形容詞の境界は連続しているが、形容詞文の否定であるこの例文 6 においても、例文 1 における名詞文の否定と同様の構造が用いられることが観察できる。

7. この犬はあまり大きくない。[Это не очень большая собака.] [形容詞文の部分否定]

(E) ərək ə-s-ni əntəkəjə əgʲən bi-su ŋm.
 this NEG-PTCP-IMP-3SG very big be-PTCP-IMP dog

(S) əjjə nniɣin tannagan boŋgon əntu.
 this dog so big different

(N) əi inda kətu daai bi-əsi.
 this dog too big be-NEG

エウエン語の文において修飾語である形容詞と被修飾語の名詞が動詞によって分断された形になっている点が注意をひく。これもロシア語の構文に合わせた結果と考えられるが、一致の多いこの言語において可能になっている語順であると考えられる。

8. この犬はあの犬より大きい。[Эта собака больше, чем та (собака).] [比較級]

(E) ərək ŋm əjə-ndə tadək ŋm-dək.
 this dog big-AUG that.ABL dog-ABL

(S) əjjə nniɣin tajjaa nniɣin-tɣi boŋgon.
 this dog that dog-ABL big

(N) əi inda daai-laa bi-i tawoi inda-doi.
 this dog big-COMP be-PTCP-IMP that dog-COMP

エウエン語における指大辞はロシア語における比較級に対応するものとして用いられたものと考えられる。

9. この犬がその犬たちの中で一番大きい。[Эта собака – самая большая из всех этих собак.] [最上級]

(E) əɾək ŋɪn əjə-ndu-dmur čələ-duk-un əɾə-l-duk ŋɪn-ul-dək.
 this dog big-AUG-COMP all-ABL-3SG this-PL-ABL dog-PL-ABL

(S) əjjə nɪnɪxɪn tar nɪnɪxɪn-sal-nɪ doo-lo xamɣɪn boŋɣon.
 this dog that dog-PL-GEN inside-LOC most big

(N) əi inda təi inda-sal-dola čuu daai.
 this dog that dog-PL-LOC most big

この最上級の文において、エウエン語では指大辞にさらに比較の接辞を取った形が現れている。

10. 今日はあの人はい来ない。[Он сегодня не придёт.] [自動詞文の否定]

(E) noŋan ə-təə-n tiək əm-nə.
 (s)he NEGV-IND.FUT now come-INF

(S) əɾ inig tajjaa bəj ə-si-n əmə-r.
 this day that person NEGV-PTCP.IMPV-3SG come-INF

(N) ŋoani əiniə ji-dəsi.
 (s)he today come-NEG.PRS

11. あの人はその本を持って行かなかった。[Он не взял (с собой) эту книгу.] [他動詞文の否定]

(E) noŋan ə-č ga-d əɾə-mi əɾ-əw kniga-w.
 (s)he NEGV-PTCP.PERF take-INF leave-CVB.COND this-ACC book-ACC

(S) a. tajjaa bəj tar bitxə-w ə-sə əbbu-čči uli-r.
 that person that book-ACC NEGV-PTCP.PERF take-CVB.ANT go-INF

b. tajjaa bəj tar bitxəw əbbu-čči ə-sə uli-r.
 that person that book-ACC take-CVB.ANT NEGV-PTCP.PERF go-INF

a. の文の方がよいが、b. の文のようにも言えるという。意味は同じであるという。

(N) ŋoani təi dansa-wa əčiə japa-ra.
 (s)he that book-ACC NEG.P take-INF

ナーナイ語では、おそらくモンゴル語の影響もあって否定は動詞語幹の後ろにまわっているが、一部の否定はもはや分析のできない小詞として動詞語幹の前に現れ、否定動詞の痕跡を示すような要素も観

察される。上記の例の əčiə はその一つである。

12. 全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。[Никто из студентов не участвовал. / Ни один студент не участвовал.] [数量の全部否定]

(E) a. ɲii=də student-əl-duk ə-či am-moot-ta.
 who=CUM student-PL-ABL NEG-PTCP.PERF participate-HABIT-INF

b. um-ni=l student ə-či am-moot-ta.
 one-3SG=EMP student NEG-PTCP.PERF participate-HABIT-INF

この2つの文は上記のロシア語の2つの文に対応するものとしてそれぞれ提示された。

(S) a. sʊrʊgčɪ xokko-ji ə-sə ii-r.
 student all-INS NEG.PTCP.PERF enter-INF

b. *xokko sʊrʊgčɪ ə-sə ii-r.
 all student NEG.P enter-INF

b. の文のようには言わないという。

(N) student-sal-dola ui=də əčiə uchastvova-la-xa-či.
 student-PL-LOC who=CUM NEG.P join-VLZ-PTCP.PERF-3PL

13. 全ての学生が参加したわけではない。[Это не значит, что все студенты участвовали.もしくは Не все студенты участвовали.] [数量の部分否定]

(E) a. ərək ə-təə-n bi-s, čəəl-j-ur student-əl
 this NEG-IND.FUT-3SG be-INF all-INS-REF.PL.POSS student-PL

am-mooč-ča-wa-tan
 participate-HABIT-PTCP.PERF-ACC-3PL.POSS

b. ə-či-l čəəl-j-ur student-əl
 NEG-PTCP.PERF-PL all-INS-REF.PL.POSS student-PL

am-moot-ta
 participate-HABIT-INF

この a, b の2つの文は上記のロシア語の2つの調査例文に対応するものとしてそれぞれ提示された。

(S) sʉrʉgčɪ xokko-ʝɪ ii-sə gun-čə ug əntu.
 student all-INS enter-PTCP.PERF say-PTCP.PERF word different

(N) poani student-sal uchastvova-la-xa-či.
 some.one student-PL join-VLZ-PTCP.PERF-3PL

14. (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。[Я не купил. Но совсем не потому, что цена была высокая.もしくは Я не купил. Но цена была совсем не высокая.] [文の否定]

(E) a. bii ə-či-wu unii-r, tarmajak əriɲu-n
 I NEG-PTCP.PERF-1SG buy-INF but price-3SG.POSS

 əripči bi-suk-un.
 expensive be-CVB.COND-3SG

b. bii ə-či-wu unii-r, tarma əri-n
 I NEG-PTCP.PERF-1SG buy-INF but price-3SG.POSS

 ə-či əripči bi-s.
 NEG-PTCP.PERF expensive be-INF

この a, b の 2 つの文は上記のロシア語の 2 つの調査例文に対応するものとしてそれぞれ提示された。なおエウエン語の条件法の形はもっぱら順接の理由や継起を示すためによく用いられている。

(S) (bii ə-s-u ga-da. too-soo ʝaarm)
 I NEG-PTCP.PERF-1SG take-INF do.so-PTCP.PERF though

 un-si gun-čəə ug əntu.
 price-PROP say-PTCP.PERF word different

(N) mii əčiə ga-da-ʝi, xoda-ni maŋga=daa bi-əči.
 I NEG.P take-INF-1SG price-3SG expensive=CUM be-NEG.PST

このナーナイ語の文は、「私は買わなかった、(ただし) 値段は高くもなかった (が)」のような表現になっている。

15. 走るな! [He бегать!] [禁止]

(E) ə-ʝək ɲoomaat-ta.
 NEG-IMP run-INF

(S) ə-ji uttulii-r=ə.
 NEG-V-IMP run-INF=EMP

(N) ə-ji tutu-rə.
 NEG-V-IMP run-INF

エウエン語における否定動詞の命令形-jək は、この方言で観察される形式のようである。

16. 大きな声を出すな！ [Громко не разговаривать!] [他動詞文の禁止]

(E) əntəkəjə ə-ʒək təərə-r.
 loudly NEG-V-IMP talk-INF

(S) boŋgon dɪgɡan ə-ʒi juuguu-r=ə.
 big voice NEG-V-IMP put.out-INF=EMP

(N) daai-ʒi ə-ʒi xisaŋgo-ra. / daai-ʒi xisaŋgo-wasi.
 big-INS NEG-V-IMP talk-INF / big-INS talk-IMPS.PTCP.NEG.PRS

ナーナイ語の2つ目の文では非人称形動詞の否定形が用いられている。

17. 明日は雨は降らないだろう。 [Наверное завтра не будет дождя.] [推量の否定]

(E) koč tɪmmaa ə-təə-n ʊd-na.
 probably tomorrow NEG-V-IND.FUT-3SG rain-INF

(S) tɪmaasin ʊdan ə-si-n tʊkkʊ-r=ba.
 tomorrow rain NEG-V-PTCP.PRS-3SG fall-INF=CONF

(N) saina čimana {tugdə-əsi / tugdə anaa osi-i}.
 probably tomorrow rain-NEG.V.PRS / rain nothing become-PTCP.IMP

ナーナイ語における前者の表現は動詞（「雨が降る」）の否定形、後者は名詞（「雨」）の否定表現となっている。

18. あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。 [Говори тихо – чтобы он не услышал.] [目的節の否定]

(E) təərə-li əntukun ə-dəə-n noŋan doldu-r.
 talk-IMP quietly NEG-V-CVB.PURP-3SG (s)he hear-INF

(S) a. tajjaa bəj ə-si-n dooldi-wɔ-r-ji
that person NEGV-PTCP.PRS-3SG hear-PASS-INF-INS

nixun diggan-ji jɪŋji-m#bɔɔ-xa.
small voice-INS talk-CVB.SIM#give-IMP

b. tajjaa bəj ə-si-n dooldi-r-ji
that person NEGV-PTCP.PRS-3SG hear-INF-INS

nixun diggan-ji jɪŋji-m#bɔɔ-xa.
small voice-INS talk-CVB.SIM#give-IMP

a. の文のように訳されたが、b. の文でもほとんど同じ意味で言えるという。a. の文では動詞が受動態になっているのに、その動作主が斜格になっていないが、これで正しい文であるという。

(N) doo-la xisaŋgo-o, ɲoani doolji-asi-ji-a-ni.
inside-LOC talk-IMP (s)he hear-NEG.PRS-INS-OBL-3SG

19. 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。[Я так сказал не потому, что хотел тебя обидеть.] [否定のスコープの調節]

(E) bii əçin gəəŋ-u-w,
I so say-PTCP.IMPF-1SG

jaak inu aas-ɔkan-daa-j.
how you.ACC get.angry-CAUS-CVB.PURP-REF.SG.POSS

(S) a. bii sin-u alɪ-xan-a-n=kən bodo-čči
I you-ACC get.angry-CAUS-PTCP.IMPF-3SG=QUOT think-CVB.ANT

tattɔɔ ə-s-u jɪŋji-r=a.
thus NEGV-PTCP.IMPF-1SG talk-INF=EMP

=kən は guŋkən の縮約形であるという。

b. bii sin-u alɪ-xan-a-n=kən bodo-čči
I you-ACC get.angry-CAUS-PTCP.IMPF-3SG=QUOT think-CVB.ANT

tattɔɔ jɪŋji-saa ug əntu.
thus talk-PTCP.IMPF-1SG word different

このように「そのように言ったことではない」のような b. 表現でもよいという。意味は a. の文とほぼ同じであるという。

- (N) mii tui uŋ-kim-bi, əčiə murči-ə-ji
 I thus say-PTCP.PERF-1SG NEG.P think-INF-1SG
- orki-laa o-dii-wa-si.
 bad-COMP become-PTCP.IMPF-ACC-2SG

20. 私が昨日買った本はどこ（にある）？ [Где книга, которую я вчера купил?] [内の関係の連体修飾節・目的語]

- (E) ilə kniga, irə-w=kə bii tiiniw unii-ri-w.
 where book which-ACC=EMP I yesterday buy-PTCP.IMPF-1SG

エウエン語のみ、関係代名詞のように疑問詞を用いる点で他の言語と異なっている（以下の例文でも同様）。ツングース諸語の中でも、エウエン語およびエウエンキー語ではこのような関係代名詞的な要素の使用がある。ただしこのことは媒介言語のロシア語からの影響も考える必要があり、他の表現によっても言える可能性があると考えられる。今後もこうした例を収集する一方で、既存のテキスト等の複文の分析を行う必要がある。

- (S) a. minii tiinu ga-saa bitxə-wəl iləə bi-si-n.
 I.GEN yesterday take-PTCP-PERF book-1SG.POSS where be-PTCP.IMPF-3SG
- b. minii tiinu ga-saa bitxə, iləə bi-si-n.
 I.GEN yesterday take-PTCP-PERF book where be-PTCP.IMPF-3SG
- c. tiinu ga-saa bitxə-wəl iləə bisin.
 yesterday take-PTCP-PERF book-1SG.POSS. where be-PTCP.IMPF-3SG

上記の 3 つの表現のいずれも可能であるが、一番下の文が一番自然であるという。所有接辞のない 2 番目の文ではポーズが必要であるという。

- (N) xai-do bi-i-ni, čisəniə mii ga-čim-bi daŋsa.
 where-DAT be-PTCP.IMPF-3SG yesterday I take-PTCP.PERF-1SG book

21. その本を持って来た人は誰（か）？ [Кто принёс эту книгу?] [内の関係の連体修飾節・主語]

- (E) ŋii əmu-ri-n, ər-əw kniga-w?
 who bring-PTCP.IMPF-3SG this-ACC book-ACC

- (S) a. tajjaa bitxə-w əbbu-čči əmə-səə bəj awʊʊ tarɪ.
that book-ACC bring-CVB.ANT come-PTCP.PERF person who that
- b. awʊʊ tajjaa bitxə-w əbbu-čči əmə-səə.
who that book-ACC bring-CVB.ANT come-PTCP.PERF

a, b の2つの文の意味はほぼ同じであるという。

- (N) ui təi daŋsa-wa olbiŋ-ki-ni?
who that book-ACC bring-PTCP.PERF-3SG

媒介言語のロシア語の表現がすでにそうになっていることもあり、そのためにエウエン語とナーナイ語では連体修飾複文を得ることはできなかった。

22. この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。[Это (та) комната, в которой мы работаем.] [内の関係の連体修飾節・場所]

- (E) ərək, (tarək) komnata, irək mut gurgəwəči-t-tə-p.
this that room which we work-DUR-IND.NONFUT-1PL.INCL

- (S) əjjəə juu bi-kki munii ajił oo-ji-r juu.
this room be-COND we.GEN job do-PROG-PTCP.IMPF room

- (N) a. əi komnata-do buə jəbo-i-po.
this room-DAT we work-PTCP.IMPF-1PL

- b. əi buə jəbo-i-po komnata.
this we work-PTCP.IMPF-1PL room

a, b のどちらの表現でも意味は変わらないという。

23. 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。[Я уже выкинул тот стул, у которого была сломана ножка.] [内の関係の連体修飾節・所有者]

- (E) bii ʊkal ulə-ri-wu, tar-aw təgənməj-u,
I already throw.away-PTCP.IMPF-1SG that-ACC chair-ACC

- irək ŋii=kkə bi-su-n kawakʊ bəədər-ən.
which who=EMP be-PTCP.IMPF-3SG broken leg-3SG

irək ŋii=kkə はロシア語の文における у которого に対応する句であるという。

(S) a. əmun bəldɪr-nin ədduu-səə tajjaa sandala-w
 one leg-3SG.POSS break-PTCP.PERF that chair-ACC

nʊʊda-čči nəə-s-u.
 throw.away-CVB.ANT put-PTCP.PERF-1SG

b. əmun bəldɪr-nii ədduu-səə tajjaa sandala-w
 one leg-GEN break-PTCP.PERF that chair-ACC

nʊʊda-čči nəə-s-u.
 throw.away-CVB.ANT put-PTCP.PERF-1SG

上の a, b の 2 文、すなわち bəldɪr 「足」が 3 人称の所有をとって主語となっている文と、属格をとって斜格主語となっている文はどちらも言える。しかし下記のようにその両方をとっている文 c は言えないという。

c. *əmun bəldɪr-nii-nin ədduu-səə tajjaa sandala-w
 one leg-GEN-3SG.POSS break-PTCP.PERF that chair-ACC

nʊʊda-čči nəə-s-u.
 throw.away-CVB.ANT put-PTCP.PERF-1SG

(N) bəgʒi-ni boja-xan bandam-ba mii naŋgala-ka-ji.
 leg-3SG.POSS break-PTCP.PERF chair-ACC I throw.away-IND.PST-1SG

mii təi bəgʒi-ni boja-xan bandam-ba naŋgala-ka-ji.
 I that leg-3SG.POSS break-PTCP.PERF chair-ACC throw.away-IND.PST-1SG

主文の主語である mii 「私」の位置は上記の 2 文のいずれの位置でも構わないという。

24. ドアを叩いている音が聞こえる。[Я слышу, что кто-то стучит в дверь.] [外の関係の連体修飾節]

(E) bii dolda-ru-m, ɲii=wut kuŋkə-n urkə-w.
 I hear-IND.NONFUT-1SG who=INDIF knock-IND.NONFUT.3SG door-ACC

(S) ukkə totto-ʒi-r dɪgɡan dooldi-wʊ-ʒi-ra-n.
 door knock-PROG-PTCP.IMPF sound hear-PASS-PROG-IND.PRS-3SG

(N) mii dosoja-i=ka, ui=nuu uikə-wə dukta-i.
 I listen.to-PTCP.IMPF=EMP who=Q door-ACC knock-PTCP.IMPF

ここではエウエン語のみならずナーナイ語の文も、疑問詞による不定表現によっており、連体修飾を用いずに関係節的な表現となっている。ここでも媒介言語のロシア語の影響が及んでいると考えられる。2文による表現とみることもできるだろう。

25. あの人が結婚したという噂は本当(か)? [Слухи о том, что он женился – это правда?] [外の関係の連体修飾節]

(E) tœrə-n tar, atıkan-ča-wa-n noŋan, ərək təjə?
talk-IND.NONFUT.3SG so marry-PTCP.PERF-ACC-3SG (s)he this truth

(S) a. tajjaa bəj xɔdaa oo-soo gun-čəə-nin unən=gi?
that person wedding do-PTCP.PERF say-PTCP.PERF-3.POSS true=Q

b. tajjaa bəj xɔdaa oo-soo gun-čəə ug unən=gi?
that person wedding do-PTCP.PERF say-PTCP.PERF word true=Q

a. の文 (3 人称の人称所有接辞をつけて形動詞を名詞的に用いている文) が最初に自然に出てきた文であるが、b. の文 (形動詞による連体修飾表現を用いた文) も言えるという。他方、「という」にあたる要素 gun-čəə なしの c. は言えないという。

c. *tajjaa bəj xɔdaa oo-soo ug unən-gi?
that person wedding do-PTCP.PERF word true=Q

(N) mii dosoja-xam-bi, tæi nai asi-go-ji baa-xa-ni,
I listen.to-PTCP.PERF-1SG that person wife-DESIG-REF.SG.POSS get-PTCP.PERF-3SG

æi tæjə?
this true

26. 私はその人が来た時にご飯を食べていた。[Я обедал, когда он пришёл.] [時間節]

(E) bii jəb-ud-di-wu inəŋ, ook=ka noŋan əm-ni-n.
I eat-DUR-PTCP.IMPF-1SG noon when=EMP (s)he come-PTCP.IMPF-3SG

(S) a. bii tajjaa bəj əmə-səə ui-du-n
I that person come-PTCP.PERF time-DAT-3SG

xəmə-i jij-ji-s-u.
meal-INDIF.ACC come-PROG-PTCP.PERF-1SG

b. *bii tajjaa bəj əmə-səə-du-n
I that person come-PTCP.PERF-DAT-3SG

xəəmə-i jij-ji-s-u.
meal-INDIF.ACC come-PROG-PTCP.PERF-1SG

形動詞に直接与格をつけた従属節による時間表現 (b) は、非文と判断された。このタイプ (アルタイ型) の言語ではきわめて一般的な構文と思われるが、この場合になぜ成立しないのかは不明である。次のように対格の斜格主語にした表現 (c、モンゴル語に見られる表現) もやはり言えないという。

c. *bii tajjaa bəjə-w əmə-səə-du-n
I that person-ACC come-PTCP.PERF-DAT-3SG

xəəmə-i jij-ji-s-u.
meal-INDIF.ACC come-PROG-PTCP.PERF-1SG

(N) mii sia-xam-bi,
I eat-PTCP.PERF-1SG

ñoani { jī-dii-du-ə-ni / jī-čīn-du-ə-ni }.
(s)he come-PTCP.IMPF-DAT-OBL-3SG / come-PTCP.PERF-DAT-OBL-3SG

従属節の形動詞を未完了形動詞にしても完了形動詞にしても意味の違いはなく、どちらも過去に意味で解釈されるという。

27. 私はその人が待っている所に行った。 [Я пошёл туда, где он меня ждал.] [場所節]

(E) bii ur-ri-w tar-takɪ, ilə=kkə noŋan minu alačɪ-d-dɪ-n.
I go-PTCP.IMPF-1SG that-DIR where=EMP (s)he I.ACC wait-DUR-PTCP.IMPF-3SG

(S) a. bii tajjaa bəjə-nii alaasi-ji-r bʊgʊ-dʊ-n nin-č-u.
I that person-GEN wait-PROG-PTCP.IMPF place-DAT-3SG go-PTCP.PERF-1SG

b. *bii tajjaa bəjə alaasi-ji-r bʊgʊ-dʊ-n nin-č-u.
I that person wait-PROG-PTCP.IMPF place-DAT-3SG go-PTCP.PERF-1SG

c. tajjaa bəjə alaasi-ji-r bʊgʊ-dʊ-n nin-č-u.
that person wait-PROG-PTCP.IMPF place-DAT-3SG go-PTCP.PERF-1SG

a. の文にみるように、コンサルタントが最初に答えた表現において従属節主語は属格で現れた。b. のように主格にするとおえないというが、c. のようにその前にある主節主語の bii 「私」がなければ言えるという。

(N) mii taosi ənə-xəm-bi, ñoani xalači-i-či-a-ni.
 I there go-PTCP.PERF-1SG (s)he wait-PTCP.IMPF-DIR-OBL-3SG

mii taosi ənə-xəm-bi, ñoani xalači-i bəun-či-ə-ni.
 I there go-PTCP.PERF-1SG (s)he wait-PTCP.IMPF place-DIR-OBL-3SG

28. 私はその人が走っていったのを見た。[Я видел, как он убежал.] [補文節・視覚]

(E) bii it-ti-w oon=ka noŋan ñoon-i-n.
 I see-PTCP.IMPF-1SG how=EMP (s)he run-PTCP.IMPF-3SG

(S) a. tajjaa bəj uttulii-ji-r-wə-n isi-č-u.
 that person run-PROG-PTCP.IMPF-ACC-3SG see-PTCP.PERF-1SG

b. bii tajjaa bəjə-nii uttulii-ji-r-wə-n isi-č-u.
 I that person-GEN run-PROG-PTCP.IMPF-ACC-3SG see-PTCP.PERF-1SG

c. bii tajjaa bəjə, uttulii-ji-r-wə-n isi-č-u.
 I that person run-PROG-PTCP.IMPF-ACC-3SG see-PTCP.PERF-1SG

d. ??bii tajjaa bəjə uttulii-ji-r-wə-n isi-č-u.
 I that person run-PROG-PTCP.IMPF-ACC-3SG see-PTCP.PERF-1SG

ここでも例文 27 と同様、文頭に主節の主語と従属節の主語が連続する場合、従属節の主語を属格の斜格主語にすることが好まれる。

(N) mii ičə-kə-ji, ñoani čočə-go-xam-ba-ni.
 I see-IND.PST-1SG (s)he run-REPET-PTCP.PERF-ACC-3SG

29. 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[Вчера вечером я слышал, как они разговаривали.]
 [補文節・聴覚]

(E) tiiniw iisəč'in bii dolda-r-wu,
 yesterday evening I hear-PTCP.IMPF-1SG

oon noŋartan təərə-məči-d-di-tun.
 how they talk-RECIP-DUR-PTCP.IMPF-3PL

(S) tiinu oree taččil-nii xəərəə-ji-səə-wə-n dooldi-s-ɕ.
 yesterday evening they-GEN talk-PROG-PTCP.IMPF-ACC-3PL hear-PTCP.PERF-1SG

(N) čisəniə siksə mii doolji-ka-ji, ŋoanči xisaŋgo-i-wa-či.
 yesterday evening I hear-IND.PST-1SG they talk-PTCP.IMPF-ACC-3PL

30. 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。[Я знаю, что он приходил сюда вчера.] [補文節・知識]

(E) bii aa-ra-m, noŋan əl-ləəč-čə-wə-n əwəski tiiniw.
 I know-IND.NONFUT-1SG (s)he visit-HABIT-PTCP.PERF-ACC-3SG here yesterday

(S) tajjaa bəj tiinu ədu əmə-səə-wə-n
 that person yesterday here come-PTCP.PERF-ACC-3SG

saa-ji-m=e.
 know-PROG-IND.PRS.1SG=EMP

(N) mii saa-ram-bi, ŋoani čisəniə əwəsi pulsi-xəm-bə-ni.
 I know-IND.PRS-1SG (s)he yesterday here visit-PTCP.PERF-ACC-3SG

ここでは3言語とも形動詞が直接対格をとった表現によっている。エウエン語では上記のように、もっぱら関係代名詞的な構文を用いるが、ここでは媒介言語のロシア語の表現からの干渉にもかかわらず形動詞による表現になっている点が注目される。

31. (昨日) 彼は彼が昨日ここに来たと言った。 / (昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。[Вчера он сказал, что приехал сюда вчера. / Вчера он сказал: «Я приехал сюда сегодня.»] [補文節・直接発話／間接話法]

(E) a. tiiniw noŋan gəən-i-n, əm-čə-j əwəski tiiniw.
 yesterday (s)he say-PTCP.IMPF-3SG come-PTCP.PERF-REF.SG here yesterday

b. tiiniw noŋan gəən-i-n,
 yesterday (s)he say-PTCP.IMPF-3SG

“bii əm-ni-w əwəski ər-əw inəŋ-u.”
 I come-PTCP.IMPF-1SG here this-ACC day-ACC

上記の a, b の2文はそれぞれロシア語の2つの文に対応する表現として提示された。すなわち間接話法と直接話法による表現となっていて、間接話法の方は形動詞による表現となっている、

(S) a. tari tiinu, “ər inəŋ ədu əmə-s-u”=kən jɪŋji-saa.
 that yesterday this day here come-PTCP.PERF-1SG=QUOT talk-PTCP.PERF

- b. ?tari tiinu, “bii ər inəg ədu əmə-s-u”=kən jɪŋʃi-saa.
that yesterday I this day here come-PTCP.PERF-1SG=QUOT talk-PTCP.PERF
- c. *tari tiinu məəm-bi ər inəg ədu əmə-səə-wə-n
that yesterday oneself-REF.SG.POSS this day here come-PTCP.PERF-ACC-3
jɪŋʃi-saa.
talk-PTCP.PERF
- d. tari tiinu məəm-bi ər inəg ədu əmə-səə-wi
that yesterday oneself-REF.SG.POSS this day here come-PTCP.PERF-REF.SG.POSS
jɪŋʃi-saa.
talk-PTCP.PERF
- e. tari tiinu məəm-bi ər inəg ədu əmə-səə=kən
that yesterday oneself-REF.SG.POSS this day here come-PTCP.PERF=QUOT
jɪŋʃi-saa.
talk-PTCP.PERF

引用節でなく、形動詞に対格をつけた間接話法的な表現は言えないが、形動詞に再帰所有接辞をつけた表現や、再帰代名詞を引用節中に用いた表現は言えることがわかる。なお b. の文はやや不自然であると判断された。

- (N) čisəniə ŋoani uŋ-ki-ni, čisəniə
yesterday (s)he say-PTCP.PERF-3SG yesterday
jɪjə-xəm-bi=ə=m.
come.REPET-PTCP.PERF-1SG=EMP=QUOT

32. 私はリンゴが(あの)皿の上にあったのを食べた。[Я съел яблоко, которое лежало на тарелке.] [内在節・従主・主目]

- (E) bii jəp-ti-w jablako-w irək dəsči-ri-n aliku-la.
I eat-PTCP.IMPF-1SG apple-ACC which lie-PTCP.IMPF-3SG dish-LOC
- (S) a. bii tajjaa pɪla oroon-dʊ bi-səə pingguo-w jič-č-u.
I that dish top-DAT be-PTCP.PERF apple-ACC eat-PTCP.PERF-1SG
- b. *bii tajjaa pingguo pɪla oroon-dʊ bi-səə-wə-n jič-č-u.
I that apple dish top-DAT be-PTCP.PERF-ACC-3SG eat-PTCP.PERF-1SG

(N) mii sia-xam-bi silia-do bi-čin amtaka-wa.
 I eat-PTCP.PERF-1SG dish-DAT be-PTCP.PERF fruit-ACC

どの言語でも主要部外在型の関係節による文が回答された。ソロン語については主要部内在型の節も聞いてみたが不可と判断された。

33. 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。[Я поймал кошку, которая зашла в дом.] [内在節・従主・主目]

(E) bii əpkən-i-w kərkə-w irək ii-ri-n juu-lə.
 I catch-PTCP.IMPF-1SG cat-ACC which enter-PTCP.IMPF-3SG house-LOC

(S) a. bii juu doo-lo ii-səə tajjaa moorɔ-w jaw-s-ɔ.
 I house inside-LOC enter-PTCP.PERF that cat catch-PTCP.PERF-1SG

b. *bii moorɔ-nii juu doo-lo ii-səə-wə-n jaw-s-ɔ.
 I cat-GEN house inside-LOC enter-PTCP.PERF-ACC-3 catch-PTCP.PERF-1SG

c. bii moorɔ-nii juu doo-lo ii-səə-wə-n ič-č-u.
 I cat-GEN house inside-LOC enter-PTCP.PERF-ACC-3 see-PTCP.PERF-1SG

(N) mii jook-či ii-xən kəksə-wə japa-xam-bi.
 I house-DIR enter-PTCP.PERF cat-ACC catch-PTCP.PERF-1SG

ここでも例文 32 と同様に、主要部外在型の関係節による文のみが得られた。なおナーナイ語では主要部内在型の関係節も成立することが確認されている（風間 2017 参照）。ツングース諸語では一般に、内在節が可能であっても、基本的に外在節の方が自然であり、かつよく使われるようである。

略号・記号

#: 複合語境界

-: 接辞境界

=: 付属語境界

AB: abessive 欠格

ABL: ablative 奪格

ACC: accusative 対格

ANT: anterior (converb) 先行 (副動詞)

AUG: aug(mentative)

CAUS: causative 使役

COMP: comparative 比較級

COMPC: comparative case 比較格

COND: conditional 条件 (副動詞)
CONF: confirmation 確認
CUM: cumulative 累加
CVB: converb 副動詞
DAT: dative 与格
DESIG: designative (case) 指定 (格)
DIM: diminutive 指小辞
DIR: directive (case) 方向 (格)
DUR: dur(ative) 状態継続 (アスペクト)
EMP: emphasis 強調
FUT: future 未来
GEN: genitive 属格
HABIT: habitual 習慣 (アスペクト)
IMP: imperative 命令
IMPS: impersonal 非人称
IMPF: imperfective 未完了
INCL: inclusive (一人称複数) 包括形
IND: indicative 直説法
INDIF: idifinite 不定
INF: infinitive 不定詞
INS: instrumental (case) 道具格
LOC: locative 処格
NEG: negative 否定
NEGV: negative verb 否定動詞
NONFUT: nonfuture 非未来
OBL: oblique 斜格標示
P: particle 小辞
PASS: passive 受身
PERF: perfective 完了
PL: plural 複数
POSS: possessive 所有
PROG: -progressive 進行
PRS: present 現在
PTCP: participle 形動詞
PURP: purposive 目的 (副動詞)
Q: question 疑問
QUOT: quotation 引用
RECIP: reciprocal 相互
SG: singular 単数
SIM: simultaneous 同時 (副動詞)
VLZ: verbalizer 動詞化

参考文献

- 風間伸次郎. 2003. 「アルタイ諸言語の3グループ(チュルク, モンゴル, ツングース) 及び朝鮮語. 日本語の文法は本当に似ているのか—対照文法の試み」アレキサンダー・ボビン・長田俊樹 (共編) 『日本語系統論の現在』日文研叢書 31: 249-340. 京都: 国際日本文化研究センター.
- 風間伸次郎. 2005. 「ソロン語口語コーパスとその分析」風間伸次郎・川口裕司(編) 『言語情報学研究報告 8 フィールド調査による口語資料の収集及びその分析』11-43. 21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」府中: 東京外国語大学.
- 風間伸次郎. 2010. 『ナーナイの民話と伝説 12』ツングース言語文化論集 48. 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 風間伸次郎. 2014. 「エウエン語ブイストラヤ方言の概説とテキスト」北海道大学大学院文学研究科 北方言語ネットワーク(編) 『北方言語研究』5: 83-128.
- 風間伸次郎. 2017. 「アルタイ型言語における主要部内在型関係節について」, 北方研究教育センター(編) 『北方人文研究』10: 3-33.

執筆者連絡先: kazamas@tufs.ac.jp

原稿受理: 2019年5月14日

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

グイ語資料:「否定、形容詞と連体修飾複文」
Glui data: negation, adjectives, and relative clauses

大野 仁美¹, 中川 裕²
Hitomi Ono, Hiroshi Nakagawa

¹麗澤大学外国語学部
Reitaku University, Faculty of Foreign Studies

² 東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Institute of Global Studies

要旨: 本号の特集「否定、形容詞と連体修飾複文」の調査票に基づき収集した、コエ・クワディ語族グイ語の資料を提示する。

Abstract: This article provides Glui data collected by using the questionnaire “Negation, adjectives, and relative clauses” proposed by Shinjiro Kazama for the present issue.

キーワード: コイサン諸語、否定、形容詞、関係節

Keywords: Khoisan, negation, adjective, relative clause

1. はじめに

この報告は調査表(風間2019)に基づくグイ語(Glui)¹資料収集の結果を提示する²。資料収集手順は次の通り: 調査票に列記された33項目の日本語文に対応するグイ語訳暫定案を中川が作成し、それをもとに大野と中川が母語話者2人³との面談調査により、実際の適格なグイ語文およびそれに類似・関連する文などの資料を引き出し記録した。面談はグイ語で行った。なお、風間(2019)に示された調査項目の日本語表現に含まれる、グイ語の社会的文脈に馴染まない単語は以下の通り入れ替えた: (項目2, 3, 4, 5, 22, 33) 部屋→小屋、(項目12, 13) 学生→子供、(項目24) ドア→木、(項目32) リンゴ→食べ物、(項目32) 皿→器、(項目33) ネコ→鳥。次節では、同調査票で用いられた項目とその番号に従って資料を配列する。グイ語表示は音韻論的妥当性を満たす簡略音声表記であり、記号はIPAに基づく。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed/ja>

¹ カラハリ盆地言語帯(aka コイサン諸語)、コエ・クワディ語族、南西カラハリ・コエ語派ガナ語群。ボツワナ共和国ハンシー県・クエネング県で話される。推定話者数は約800人。

音韻体系は約90個の子音、10個の母音、6個の声調メロディーを区別し、さらに極めて歪んだ語根内音素配列をもつ。その概観を素描するだけでもかなりの紙幅を割かねばならないため割愛する。

基本語順はSOV; head finalでdependent markingである。コエ語族はnominal headの人称・性・数をマークするPGN表示と呼ばれる接辞あるいは接語の体系をもつ。グイ語のPGN表示は接語で、格とirrealisも発達させているという特徴をもつ。

² この研究はJSPS科研費の助成(16H01925, 18K18500, 18KK0006, 18K00582, 18H00661)を受けている。

³ N氏(男性・60代)とKG氏(男性・40代)。共にグイ語カデ方言の話者である。

2. 資料

項目 1. これは私の本ではない (a, b)。私の本ではない (c, d)。[名詞述語文／コピュラ文の否定]

- (1a) ɲlĩ cĩ kà ʔɔ́ǰǎ=si cʰĩmā
 this I.GEN of book=3.F.SG.GEN not
 ‘This is not my book.’
- (1b) ɲlĩ cĩ kà ʔɔ́ǰǎ=si cʰĩmā=sà ʔà
 this I.GEN of book=3.F.SG.GEN non=3.F.SG.ACC COP
 ‘This is no book of mine.’
- (1c) cĩ kà ʔɔ́ǰǎ=si cʰĩmā ʔĩ
 I.GEN of book=3.F.SG.GEN not COP
 ‘(It) is not my book.’
- (1d) cĩ kà ʔɔ́ǰǎ=si cʰĩmā=si ʔĩ
 I.GEN of book=3.F.SG.GEN non=3.F.SG.NOM COP
 ‘(It) is not my book/(It) is no my book.’
- (1e) ɲlĩ cúá cĩ kà ʔɔ́ǰǎ=sà
 this not I.GEN of book=3.F.SG.ACC
 ‘This is not my book.’
- (1f) ɲlĩ cúá cĩ kà ʔɔ́ǰǎ=sà ʔà
 this not I.GEN of book=3.F.SG.ACC COP
 ‘This is not my book.’
- (1g) cúá cĩ kà ʔɔ́ǰǎ=si ʔĩ
 not I.GEN of book=3.F.SG.NOM COP
 ‘(It) is not my book.’

グイ語のコピュラ文には以下の(i), (ii), (iii)の構文がある。

(i) 二つの NP の並列(NP1 NP2) : NP1 は主語 (主格)で NP2 は名詞述語 (格表示なしあるいは対格)

(a, e)

(ii) NP とコピュラ(NP1 ʔĩ) : NP1 は主語 (主格) (c, d, g)

(iii) 二つの NP とコピュラ(NP1 NP2 ʔà) : NP1 は主語 (主格)で NP2 は名詞述語 (対格) (b, f)

名詞述語文・コピュラ文の否定には、一般的な否定語である cúá (否定する名詞に先行する)と cʰĩmā (否定する名詞を属格にし、それに後続する)が用いられる。

項目 2. この小屋には椅子がない。[存在文の否定]

- (2a) ɲli=m̄ ɲ!úú=m̄ wà ɲ#úú-ĩ=sì háá-ciè⁴
 this=3.M.SG.GEN hut=3.M.SG.GEN in sit-wood=3.F.SG.NOM exist-not
 ‘In this hut, there is not the (specific) chair.’
- (2b) ɲli=m̄ ɲ!úú=m̄ wà cúá ɲ#úú-ĩ=sì háá
 this=3.M.SG.GEN hut=3.M.SG.GEN in not sit-wood=3.F.SG.NOM exist
 ‘In this hut, there is not the (specific) chair.’

⁴ 不在を表す háá-ciè は、háá (exist)+ciè (否定語) という 2 語連続の後続の否定語が例外的に接尾辞化したものである (NB: 接尾辞には HL の声調は現れない)。この接尾辞化された-ciè はこの不在の háá-ciè にしか確認されていない。

これら(2ab)の例では「椅子」に単数形が用いられている。このような場合で単数形が使われると特定の物(この例では特定の椅子)がないという意味になる。

項目 3. この小屋には一つも椅子がない。[全部否定・モノ]

- (3) η̃li=m̃ η̃!úū=m̃ wà η̃!úú-ĩ=dzi háá-ciè
 this=3.M.SG.GEN hut=3.M.SG.GEN in sit-wood=3.F.PL.NOM exist-not
 ‘In this hut, there is no chair.’

一方で、(3)のように「椅子」に複数形を用いると、特定の椅子ではなく、椅子一般がないという意味を持つことができる(特定の複数の椅子という解釈もある)。全部否定で用いられる代名詞は存在しないが、この複数形を用いた否定は全部否定に類似する意味になる。

項目 4. その小屋には誰もいない。[全部否定・ヒト]

- (4a) ?ā=m̃ η̃!úū=m̃ wà kʰòè-ɣà=ri háá-ciè.
 that=3.M.SG.GEN hut=3.M.SG.GEN in person-associative⁵=3.C.PL.NOM exist-not
 ‘In that hut there are not any people.’
- (4b) ?ā=m̃ η̃!úū=m̃ wà kʰòè-ɣà=ri cúá háá.
 that=3.M.SG.GEN hut=3.M.SG.GEN in person-associative=3.C.PL.NOM not exist
 ‘In that hut there were no people.’
- (4c) lúí=m̃ ?ĩ cé mā kʰòè=bi ?ā=m̃ η̃!úū=m̃
 one=3.M.SG.GEN cop but person=3.M.SG.NOM that=3.M.SG.GEN hut=3.M.SG.GEN
 wà háá-ciè
 in exist-not
 ‘Even a single person is not in the hut.’

項目 5. その本はこの小屋にない。[所在文の否定]

- (5a) η̃!láá=sì tɣájá=sì η̃li=m̃ η̃!úū=m̃ wà háá-ciè
 that=3.F.SG.GEN book=3.F.SG.NOM this=3.M.SG.GEN hut=3.M.SG.GEN in exist-not
 ‘That book does not exist in this hut.’
- (5b) η̃!láá=sì tɣájá=sì cúá η̃li=m̃ η̃!úū=m̃ wà háá
 that=3.F.SG.GEN book=3.F.SG.NOM not this=3.M.SG.GEN hut=3.M.SG.GEN in exist
 ‘That book does not exist in this hut.’

否定語 cúá の位置は文頭(5b')や動詞の直前(5b'')も可能。

- (5b') cúá η̃!láá=sì tɣájá=sì η̃li=m̃ η̃!úū=m̃ wà háá
 not that=3.F.SG.GEN book=3.F.SG.NOM this=3.M.SG.GEN hut=3.M.SG.GEN in exist
 ‘That book does not exist in this hut.’
- (5b'') η̃!láá=sì tɣájá=sì η̃li=m̃ η̃!úū=m̃ wà cúá háá
 that=3.F.SG.GEN book=3.F.SG.NOM this=3.M.SG.GEN hut=3.M.SG.GEN in not exist
 ‘That book does not exist in this hut.’

⁵ associative は、associative dual/plural を形成するために用いられる接辞。

項目 6. この犬は大きくない。[形容詞文の否定]

形容詞（状態自動詞）を述語動詞とする文の否定は、cúá、c^hīmā、ciè の3種類の否定語が使われうる。

(6a) ɲì=m̄ ʔābā=bi cúá g!úŕī.
this=3.M.SG.GEN dog=3.M.SG.NOM not big

‘This dog is not big (but small).’

(6b) ɲì=m̄ ʔābā=bi g!úŕī c^hīmā
this=3.M.SG.GEN dog=3.M.SG.NOM big not

‘This dog is no big (but small).’

(6c) ɲì=m̄ ʔābā=bi g!úŕī ciè
this=3.M.SG.GEN dog=3.M.SG.NOM big not

‘This dog is no big (but small).’

これら(6a-c)はすべてにおいて「大型ではない」だけでなく、「通常より小型である」ことを含意し、(6d)のようにパラフレーズされうる。

(6d) cúá ʔābā=m̄ lāō déē k^hūnā déē
not dog=3.M.SG.GEN usually be.of.size as be.of.size

‘... is not the usual size of a dog’

3つの否定語のうち、cúá は、述語動詞よりも左に現れ、さらに左に比較的自由に移動しうる。文脈がない場合は、通常、(6a)のように述語動詞の直前に現れる。一方、c^hīmā、ciè は述語動詞の直後に現れる。

項目 7. この犬はあまり大きくない。[形容詞文の部分否定]

(7a) ɲì=m̄ ʔābā=bi cúá g!úŕjā-qχ’āi⁶
this=3.M.SG.GEN dog=3.M.SG.NOM not big-excessive

‘This dog is not excessively big.’

「大いに～というわけではない」の意味で cúá g!úŕī-sī ‘lit. not largely’で形容詞（状態自動詞）を修飾することはあるが、これはメタ言語的表現で、特に言語調査面談でよく用いられているものかもしれない。テキストに観察したことはこれまでない。

(7b) ɲì=m̄ ʔābā=bi cúá g!úŕī-sī g!úŕī
this=3.M.SG.GEN dog=3.M.SG.NOM not large-ly big

‘This dog is not quite big.’

項目 8. この犬はあの犬より大きい。[比較級]

比較対象は後置詞 kà で表現できるが、形容詞（状態自動詞）の形態論に比較級の形式はない。

(8) ɲì=m̄ ʔābā=bi ʔāā=m̄ ʔābā=m̄ kà g!úŕī.
this=3.M.SG.GEN dog=3.M.SG.NOM that=3.M.SG.GEN dog=3.M.SG.GEN than be.big

‘This dog is bigger than that dog.’

⁶ (9c)参照。

項目 9. この犬がその犬たちの中で一番大きい。[最上級]

- (9a) ɲli=m̄ ?ābā=bi !ʔúú=n̄ ?ābā=n̄ kà g!úŕi.
 this=3.M.SG.GEN dog=3.M.SG.NOM other=3.C.PL.GEN dog=3.C.PL.GEN than be.big
 ‘This dog is bigger than the other dogs.’

この文は排他的焦点の表示接語 *kī* を用いた構文で、次のようにパラフレーズできる。

- (9b) ɲli=m̄ ?ābā=kī=bi g!úŕi
 this=3.M.SG.GEN dog=FOC=3.M.SG.NOM be.big.
 ‘This dog is big (among the dogs).’

グイ語の形容詞は形態論的には動詞で、状態自動詞と呼ぶべき語類だが、ここでは調査票の用語に合わせて形容詞と呼ぶ。グイ語の形容詞には、形態論的な比較級・最上級の形式はない。その代わり、過剰性 *excessiveness* を表す形式（文法化された接合構文 *junction construction*）はある：形容詞接合形 (*junction form*) に接尾辞化された *-qχ'āi* (< *qχ'ái* ‘be far’) を後続させる。

- (9c) ɲli=m̄ ?ābā=bi g!úŕjā-qχ'āi
 this=3.M.SG.GEN dog=3.M.SG.NOM big-excessive
 ‘this dog is excessively big’

項目 10. 今日はあの人には来ない。[自動詞文の否定]

動作自動詞を述語動詞とする文においても、形容詞文と同様に3種類の否定語(*cúá*, *c'īmā*, *ciè*)を用いることができ、これらは、(6abc)と同様の位置に現れる。否定の形成において動詞と形容詞の間に違いはない。

- (10a) ɲlā=m̄ k'hóè=bi hĩ cúá àà.
 that=3.M.SG.GEN person=3.M.SG.NOM FUT not come
 ‘That man will not come today.’
- (10b) ɲlā=m̄ k'hóè=bi hĩ àà c'īmā
 that=3.M.SG.GEN person=3.M.SG.NOM FUT come not
 ‘That man will not come today.’
- (10c) ɲlā=m̄ k'hóè=bi hĩ àà ciè
 that=3.M.SG.GEN person=3.M.SG.NOM FUT come not
 ‘That man will not come today.’

項目 11. あの人はその本を持って行かなかった。[他動詞文の否定]

他動詞否定文にも同様の3否定語が用いられる。

- (11a) ɲlā=m̄ k'hóè=bi ki ɲli=sì tχájá=sà cúá
 that=3.M.SG.GEN person=3.M.SG.NOM HOD this=3.F.SG.GEN book=3.F.SG.ACC not
 ?úú
 take
 ‘That man did not take this book.’
- (11b) ɲlā=m̄ k'hóè=bi ki ɲli=sì tχájá=sà ?úú
 that=3.M.SG.GEN person=3.M.SG.NOM HOD this=3.F.SG.GEN book=3.F.SG.ACC take
 c'īmā
 not
 ‘That man did not take this book.’

- (11c) ɲlā=r̄m kʰóè=bì kì ɲlì=sì ʔáǰá=sà ʔúú
 that=3.M.SG.GEN person=3.M.SG.NOM HOD this=3.F.SG.GEN book=3.F.SG.ACC take
 ciè
 not
 ‘That man did not take this book.’

項目 12. 全ての子供が参加しなかった／子供は全員参加しなかった。[数量の全部否定]

- (12a) òè=lù lúá=lù cúá láà
 all=3.M.PL.GEN child=3.M.PL.NOM not participate
 ‘No child participated (e.g. in a soccer tournament).’
- (12b) òè=lù lúá=lù láà cʰīmā
 all=3.M.PL.GEN child=3.M.PL.NOM participate not
 ‘No child participated.’
- (12c) òè=lù lúá=lù láà ciè
 all=3.M.PL.GEN child=3.M.PL.NOM participate not
 ‘No child participated.’

項目 13. 全ての子供が参加したわけではない。[数量の部分否定]

部分否定は否定部分に相当する語の直前に移動可能な否定語 cúá を置くことで表現する。

- (13) cúá òè=lù lúá=lù láà
 not all=3.M.PL.GEN child=3.M.PL.NOM participate
 ‘Not all children participated.’

項目 14. (私は買わなかったが、決して) 値段が高いというわけではない。[文の否定]

- (14a) (cìrè ʔēsà lʔáǐ cʰīmā cīmā) cúá ʔēsì dúrú
 (I it.ACC buy not but) not it.NOM be.expensive
 ‘(I didn’t buy it, but) it was not expensive.’
- (14b) ʔēsì dúrú cʰīmā=sà cìrè lʔánā-hā cīmā
 it.NOM be.expensive not=3.F.SG.ACC I know-PRF but
 cìrè ʔēsà lʔáǐ cʰīmā
 I it.ACC buy not
 ‘I know that it was not expensive, but I did not buy it.’

項目 15. 走るな！ [自動詞文の禁止]

グイ語の否定命令文は、通常の否定語 cúá (15a)あるいは、もっぱら非現実(irrealis)節に用いられる否定語 cī (15b)で表現される。後者は、既にやりかけた動作を禁止する場合にしばしば用いられる。

- (15a) cúá lārò
 not run
 ‘Don’t run.’
- (15b) lārò cī
 run not
 ‘Don’t run.’

項目 16. 大きな声を出すな！ [他動詞文の禁止]

他動詞文の否定(16ab)も自動詞(15ab)と同様である。

(16a) cúá tsā júmŋlà †qχ'úāχò
 not you.GEN throat move.out

‘Don’t speak loudly.’

(16b) tsā júmŋlà †qχ'úāχò cī
 you.GEN throat move.out not

‘Don’t speak loudly.’

(16c) †qχ'úú cī
 make.noise not

‘Don’t be noisy.’

項目 17. 明日は雨は降らないだろう。 [推量の否定]

(17a) !?úúsi kà cúú=bì ?ūsi cúá †úū
 tomorrow on rain=3.M.SG.NOM FUT not rain

‘It will not rain tomorrow.’

(17b) !?úúsi kà cúú=bì ?ūsi †úū c'īmā
 tomorrow on rain=3.M.SG.NOM FUT rain not

‘It will not rain tomorrow.’

(17c) !?úúsi kà cúú=bì ?ūsi †úū ciè
 tomorrow on rain=3.M.SG.NOM FUT rain not

‘It will not rain tomorrow.’

推量の否定に特別な表現はなく、(6abc)、(10abc)、(11abc)と同様に3種類の否定語が使われる。

項目 18. あの人の聞こえないように、小さな声で話してくれ。 [目的節の否定]

目的節内の否定には、3つの否定語のうち、c'īmāを使うことができない。

(18a) q'ái-sī qχ'úū nì ?àmà cúá ?ē kúrín
 quiet-ly speak so.that he.IRR not it hear

‘Speak quietly so that he should not hear.’

(18b) *q'ái-sī qχ'úū nì ?àmà ?ē kúrín c'īmā
 quiet-ly speak so.that he.IRR it hear not

(18c) q'ái-sī qχ'úū nì ?àmà ?ē kúrín ciè
 quiet-ly speak so.that he.IRR it hear not

‘Speak quietly so that he should not hear.’

また、目的節内の否定には(15b)と(16b)で見た非現実の否定語を使うことができる。

(18d) q'ái-sī qχ'úū nì ?àmà ?ē kúrín cī
 quiet-ly speak so.that he.IRR it hear not

‘Speak quietly so that he should not hear.’

項目 19. 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。[否定スコープの調節]

この文のグイ語訳は(19a)の表現になる。

- (19a) cirè cúá tsā kùrū-kàχō #ʔāñ jā ʔāā cà míí
 I not you.ACC angry-CAUS want and that QUOT say
 ‘I did not want to make you angry and (therefore) said so.’

ただし、これは「怒らせたくなかったので、(怒らせないように) そう言った」(その結果)「怒らなかった」の意味にしかならない。あるいは、(19b)のように「私がそう言った」「あなたが怒った」「私はあなたを怒らせたくなかった」という3つの内容を等位接続する表現を使う。

- (19b) cirè ʔāā cà míí, tsī jā kùrū. címā cirè cúá tsā
 I that QUOT say you.NOM and be.angry. but I not you.ACC
 kùrū-kàχō #ʔāñ
 angry-CAUS want
 ‘I said so and therefore you got angry, but I did not want to make you angry.’

- (19c) *cirè cúá ʔāā cà míí, tsā kùrū-kàχō ʔāñ kà
 I not that QUOT say, you.ACC be.angry-causative want purposive

項目 20. 私が昨日買ってきた本はどこ (にある) ? [内の関係の連体修飾節・目的語]

- (20a) ʔájá kà cíā cʰū lʔáí=sì máā dā háā
 book which I.GEN HEST buy=3.F.SG.NOM where LOC exist
 ‘Where is the book I bought yesterday?’

- (20b) cíā cʰū lʔáí=sì ʔájá=sì máā dā háā
 I.GEN HEST buy=3.F.SG.GEN book=3.F.SG.NOM where LOC exist
 ‘Where is the book I bought yesterday?’

項目 21. その本を持って来た人は誰 (か) ? [内の関係の連体修飾節・主語]

- (21a) kʰóè kà ŋlì=sì ʔájá=sì lχuà cʰū àà=bi
 person REL this=3.F.SG.GEN book=3.F.SG.GEN with HEST come=3.M.SG.NOM
 máā=mà ʔà
 who=3.M.SG.ACC COP
 ‘Who is the person that came with this book yesterday?’

- (21b) ŋlì=sì ʔájá=sì lχuà cʰū àà=rì
 this=3.F.SG.GEN book=3.F.SG.GEN with HEST come=3.M.SG.GEN
 kʰóè=bi máā=mà ʔà
 person=3.M.SG.NOM who=3.M.SG.ACC COP
 ‘Who is the person that came with this book yesterday?’

項目 22. この小屋が私たちの仕事をしている小屋です。[内の関係の連体修飾節・場所]

- (22a) ŋlì=rì ŋlúū=bi ʔitsèè ci ʔē (ʔò) wà
 this=3.M.SG.GEN hut=3.M.SG.NOM we.EXCL.GEN IPFV it (inside)in

- tséé (=m̄ ŋ!úū) =mà ?à
 work (=3.M.SG.GEN hut) =3.M.SG.ACC COP
 ‘This hut is the one in which we are working.’
- (22b) ŋ!ĩ ?ĩtsèè ci ?ē (?ò) wà tséé=m̄ ŋ!úū=mà ?à
 this we.EXCL.GEN IPFV it (inside) in work=3.M.SG.GEN hut=3.M.SG.ACC COP
 ‘This is the hut in which we are working.’
- (22c) ŋ!ĩ ŋ!úū kà ?ĩtsèè ci ?ē (?ò) wà tséé=mà ?à
 this hut REL we.EXCL.GEN IPFV it (inside) in work=3.M.SG.ACC COP
 ‘This is the hut in which we are working.’

項目 23. 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。[内の関係の連体修飾節・所有者]

- (23a) ?áā=m̄ ŋ!úú-ĩ kà ?ē !?úá k^hūnā-hā=mà cìrè
 that=3.M.SG.GEN sit-wood REL its leg be.broken-PRF=3.M.SG.ACC I
 sēēχōrō-hā
 throw.away-PRF
 ‘I have thrown away that chair whose leg was broken.’
- (23b) ?áā=m̄ ŋ!úú-ĩ kà ?ē !?úá k^hūnā-hā=mà cìrè qχ’ò
 that=3.M.SG.GEN sit-wood REL its leg be.broken-PRF=3.M.SG.ACC I PST
 qχ’ájā sēēχō
 already throw.away
 ‘I threw away a long time ago that chair whose leg was broken.’
- (23c) ?ē !?úá k^hūnā-hā=m̄ ?áā=m̄ ŋ!úú-ĩ=mà cìrè
 its leg be.broken-PRF=3.M.SG.GEN that=3.M.SG.GEN sit-wood=3.M.SG.ACC I
 sēēχōrō-hā
 throw.away-PRF
 ‘I have thrown away that chair whose leg was broken.’
- (23d) ?ē !?úá k^hūnā-hā=m̄ ?áā=m̄ ŋ!úú-ĩ=mà cìrè
 its leg be.broken-PRF=3.M.SG.GEN that=3.M.SG.GEN sit-wood=3.M.SG.ACC I
 qχ’ò qχ’ájā sēēχō
 PST already throw.away
 ‘I threw away a long time ago that chair whose leg was broken.’

項目 24. 木を叩いている音が聞こえる。[外の関係の連体修飾節]

- (24a) ts’òò kà ?àm ci ĩ=mà !qχ’ám (or ʔàm) jì=sà cìrè
 noise REL he.GEN IPFV tree=3.M.SG.ACC hit (or beat) for=3.F.SG.ACC I
 ci kúm̄
 IPFV hear
 ‘I hear the noise with which he is beating a tree.’
- (24b) ?àm ci ĩ=mà !qχ’ám (or ʔàm) jì=si ts’òò=sà
 he.GEN IPFV tree=3.M.SG.ACC hit (or beat) for=3.F.SG.GEN noise=3.F.SG.ACC
 cìrè ci kúm̄
 I IPFV hear
 ‘I hear the noise with which he is beating a tree.’

項目 25. あの人が結婚したという噂は本当 (か) ? [外の関係の連体修飾節]

(25a) bóōrī kà ʔàm kà séékū jì=sì m tsēē
 rumor REL he.GEN of marriage for=3.F.SG.GEN Q true
 ‘Is the rumor which is for his marriage true?’

(25b) bóōrī kà ʔàm c̣hū glāēkò=sà sèè jì=sì m
 rumor REL he.GEN HEST woman=3.F.SG.ACC marry for=3.F.SG.GEN Q
 tsēē
 true
 ‘Is the rumor which is for his marrying a woman yesterday true?’

項目 26. 私はその人が来た時にご飯を食べていた。[時間節]

(26a) cìrè hāci (kōōkā) ʔúú-χò=dzi ʔúú ʔàbi jā àà
 I PROG (still) eat-thing=3.F.PL.ACC eat he and come
 ‘I was still eating food when he came.’

(26b) cíā hāci (kōōkā) ʔúú-χò=dzi ʔúú kà, ʔàbi àà
 I.GENPROG (still) eat-thing=3.F.PL.ACC eat when he come
 ‘While I was still eating food, he came.’

項目 27. 私はその人が待っている所に行った。[場所節]

(27a) cìrè c̣hū ŋlā=m̄ kʰóè=m̄ cíā qχ'úā-hā χò síí
 I HEST that=3.M.SG.GEN person=3.M.SG.GEN I.ACC wait-PRF to.place go
 ‘(Yesterday) I went to the place where that man was waiting for me.’
 cf. *cìrè c̣hū ŋlā=m̄ kʰóè=m̄ cì qχ'úā χò síí

(27b) cìrè c̣hū ŋlā=m̄ kʰóè=m̄ cíā qχ'úā-hā dā síí
 I HEST that=3.M.SG.GEN person=3.M.SG.GEN I.ACC wait-PRF to go
 ‘(Yesterday) I went to the place where that man was waiting for me.’
 cf. *cìrè c̣hū ŋlā=m̄ kʰóè=m̄ cì qχ'úā dā síí

日本語では不要なので項目 27 には表現されていないが、グイ語では「その人が私を待っている場所」のように、誰・何を待っているのかを明示する必要がある。

項目 28. 私はその人が走っていったのを見た。[補文節・視覚]

(28a) cìrè ʔàm ci !ārō-ŋ!áé c̣hā(=sà) múú
 I he.GEN IPFV run-pass NMLZ(=3.F.SG.ACC) see
 ‘I saw him running.’

(28b) cìrè ʔàm ci !ārō-ŋ!áé=sà múú
 I he.GEN IPFV run-pass=3.F.SG.ACC see
 ‘I saw him running.’

項目 29. 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[補文節・聴覚]

(29) cìrè ŋlī ʔàn ci qʰāñ (or qχ'úñ)=sà kúmí
 I last.night.PST they.GEN IPFV talk (or speak)=3.F.SG.ACC hear
 ‘I heard them talking (speaking) last night.’

項目 30. 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。[補文節・知識]

- (30) cirè ʔàm c̥ū ŋlì ɣò àà=sà !ʔánā-hā
 I he.GEN HEST this to.place come=3.F.SG.ACC know-PRF
 ‘I know that he came here yesterday.’

項目 31. (昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。 / (昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。
 [補文節・直接発話 / 間接話法]

- (31a) ʔàbì c̥ū míí, cirè kì ŋlì ɣò àà
 he HEST say I HOD this to.place come
 ‘He said yesterday “I came here today.”’
- (31b) cirè kì ŋlì ɣò àà cà ʔàbì c̥ū míí
 I HOD this to.place come QUOT he HEST say
 ‘He said yesterday “I came here today.”’
- (31c) ʔàm c̥ū àà=sà ʔàbì c̥ū ŋlāē (or cíā bóōrī)
 he.GEN HEST come=3.F.SG.ACC he HEST say (or I.ACC tell)
 ‘He said (or told me) yesterday that he came here yesterday.’

項目 32. 私は食べ物があので器の中にあつたのを食べた。[内在節・従主・主目]

- (32a) cirè ʔúú-ɣò kà (ʔáā=m̄) ŋ!áā=m̄ wà háā=sà ʔúú
 I eat-thing REL (that=3.M.SG.GEN) plate=3.M.SG.GEN in exist=3.F.SG.ACC eat
 ‘I ate the food that was in that plate.’
- (32b) cirè (ʔáā=m̄) ŋ!áā=m̄ wà háā=sì ʔúú-ɣò=sà
 I (that=3.M.SG.GEN) plate=3.M.SG.GEN in exist=3.F.SG.GEN eat-thing=3.F.SG.ACC
 ʔúú
 eat
 ‘I ate the food that was in that plate.’
- (32c) cirè ʔúú-ɣò=sì (ʔáā=m̄) ŋ!áā=m̄ wà háā=sà
 I eat-thing=3.F.SG.GEN (that=3.M.SG.GEN) plate=3.M.SG.GEN in exist=3.F.SG.ACC
 ʔúú
 eat
 ‘I ate the food, which was the one in that plate.’

(32c)のような「内在節」の表現も可能。グイ語には pro-drop が観察されないので、内在節が認められるのは pro-drop の言語に限られる（風間 2019: 32 番、33 番への注）という一般化への反証と言える。従属節内主語 ʔúú-ɣò=sì は属格。

項目 33. 私は鳥が小屋に入ってきたのを捕まえた。[内在節・従主・主目]

- (33a) cirè dzérá kà ŋ!úú=m̄ wà ʔēnā-hā=mà sèè
 I bird REL hut=3.M.SG.GEN in enter-PRF=3.M.SG.ACC catch
 ‘I caught a bird that entered the hut.’

- (33b) *cirè* *ŋ!úū=m̄* *wà* *ʔēnā-hā=m̄* *dzérá=mà* *sèè*
 I hut=3.M.SG.GEN in enter-PRF=3.M.SG.GEN bird=3.M.SG.ACC catch
 ‘I caught a bird that entered the hut.’
- (33c) *cirè* *dzérá=m̄* *ŋ!úū=m̄* *wà* *ʔēnā-hā=mà* *sèè*
 I bird=3.M.SG.GEN hut=3.M.SG.GEN in enter-PRF=M.SG.ACC catch
 ‘I caught a bird that entered the hut.’

(33c)は「内在節」。従属節内主語 *dzérá=m̄* は属格。

Abbreviations:

3: 3rd person, ACC: accusative, C: common, CONJN: conjunction, COP: copula, DU: dual, EXCL: exclusive, F: feminine, FUT: future, GEN: genitive, HEST: hesternal (昨日過去), HOD: hodiernal past (今日過去), INTJ: interjection, IPFV: imperfective, IRR: irrealis, LOC: locative, M: masculine, NMLZ: nominalizer, NOM: nominative, PL: plural, PRF: perfect, PROG: progressive, PST: past, Q: polar question marker, QUOT: quotative, REFL: reflexive, REL: relative, SG: singular

参考資料

風間伸次郎 (2019) 「語研論集 23 号・特集案【否定、形容詞と連体修飾複文】」未刊行資料、語研メーリングリスト 2019 年 1 月 28 日配布版

執筆者連絡先: nhirosi@tufs.ac.jp (中川裕), ono@reitaku-u.ac.jp (大野仁美)

原稿受理: 2019 年 5 月 3 日

<特集「情報標示の諸要素」>

ドイツ語における情報標示の諸要素¹ Markers of informational structure in German

成田 節
Takashi Narita

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨:本稿は特集「情報表示の諸要素」(『語学研究所論集』第22号, 2017, 東京外国語大学)に寄与する。本稿の目的は25個のアンケート項目に対するドイツ語データを与えることである。

Abstract: This report contributes to the special cross-linguistic study on ‘markers of informational structure’ (*Journal of the Institute of Language Research* 22, 2017, Tokyo University of Foreign Studies). The purpose of this paper is to offer German data for the question of 25 phrases.

キーワード:主語卓越型言語, 取り立て表現, 不定表現, 情報の縄張り

Keywords: subject-prominent language, emphasizing expression, indefinite expression, informational territory

諸言語における情報標示の諸要素についての風間(2017)の総論, およびそこに提示されている例文をベースに, ドイツ語での状況を記述し, 若干のコメントをつける。

1. 主題卓越型類型論の軸項について

[1]と[2]は, 日本語の二重主語構文に相当する表現はどうかという点と, 先行文の主題として提示されている名詞を統語的軸項(pivot)として後続文を構成できるか否か, を見る例文である。

[1]「この土地は野菜がよく育つ。だから高い値段で売れるだろう。」

1a Auf dies-em Stück Land wächst Gemüse gut.
on this-DAT plot.DAT land.DAT grow-3SG vegetable.NOM well²
この土地では野菜が良く育つ。

1b Deshalb lässt es sich auch zu ein-em hoh-en Preis verkauf-en.
therefore let-3SG it.NOM REFL.ACC also to a-DAT high-DAT price.DAT sell-INF
だからそれ(=その土地)は高値でも売れる(<土地が自分を売らせる)。



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deedja>

¹ 匿名の査読者から多くの有益な指摘を受けたこと。ここに記して感謝します。

² グロスのスペース節約のために, 冠詞, 形容詞, 名詞の単数形の SG 表記および動詞の現在形の PRS 表記は省略する。

[2] 「私は頭が痛い。だから今日は休む。」

2a Mir tu-t der Kopf weh.
me.DAT do-3SG the.NOM head.NOM sore
私は頭が痛む。

2a' Ich hab-e Kopfschmerz-en.
I.NOM have.1SG headache-PL.ACC
私は頭痛がする (<私は頭痛を持つ。)

2b Deshalb geh-e ich heute nicht zu-r Arbeit.
therefore go-1SG I.NOM today not to-the.DAT work.DAT
だから私は今日仕事に行かない。

[1]の「この土地は野菜が良く育つ」や[2]の「私は頭が痛い」のような日本語の二重主語構文に対応する(二重の主格主語を取るような)構文はドイツ語には存在しない。主題に当る[1]の「この土地は」は前置詞句で、[2]の「私は」は与格で表される。([2]には「私」を主語とする 2a' もあり、むしろこちらの方が使用頻度は高いが、「私は・頭痛を・持つ」という他動詞構文であり、二重主語構文ではない。)いずれにしても、主語卓越型のドイツ語では、先行文の主題を(それが主格主語でない限り)統語的軸項(pivot)として後続文を構成することはできない。先行文の主題は第2文で改めて主格主語として表示される。その際多くの場合、1bのes「それ」(<das Stück Land「その土地区画」)のように代名詞化される。³

なおOgino(1997)によると、中世高地ドイツ語(11世紀中ごろから14世紀中ごろ)では2c mir ist wê und bin gesunt「私は心が痛い¹が身体は元気だ」、あるいは2d des nam in michel wunder / und vuorte si besunder「そのことを彼はとても怪しんで、彼女をわきへ連れて行った」のように、先行文の与格mir「私」や対格in「彼」を主題として、後続文の主格主語を省略することがあった。2cでは並列接続詞undの後にich「私(主格)」が、ii)ではundの後にer「彼(主格)」が省略されている。つまり、中世高地ドイツ語では主題卓越的な(topik-prominent)性格も見られたとのことである。⁴

2c mir ist wê Und bin gesunt
me.DAT be.3SG painful And be.1SG healthy

³ [1]について、「野菜」を主語とする1aよりも、「野菜」を対格目的語として「野菜を栽培できる」とする1a'の方がこの状況には相応しいというインフォーマントの指摘があった。

1a' Auf dies-em Stück Land kann man gut Gemüse anbau-en.
on this-DAT plot.DAT land.DAT can.PRS.3SG one.NOM well vegetable.SG.ACC grow-INF
この土地では野菜を良く育てることができる。

⁴ Ogino(1997)では、「同一指示名詞句削除は現代ドイツ語では通常は主格主語に限られているが、中高ドイツ語では主題が関与する統語的操作だった」(daß die ‚koreferentielle NP-Tilgung‘ im Mhd. (...) eine topikbezogene syntaktische Operation darstellt, während sie im heutigen Deutsch in der Regel auf das nominativische Subjekt beschränkt ist. (201頁))と述べ、言語類型論で論じられる「与格主語」にも言及しているが、中高ドイツ語ではswer nehmen welle golt, / der gedanke mîner leide, und will im immer wesen holt.「黄金のほしい人は私の無念さを考えておくれ。[私は]その人にいつまでも目をかけてあげよう。」のように、先行文中の所有代名詞(mîner = meiner)も同一指示名詞句削除を引き起こすことから、この現象は(与格主語なども含めた)主語が引き起こすと考えられるには無理があるとし、「主題(Topik)」という語用論的カテゴリーが中高ドイツ語の統語構造では「主語」というカテゴリーと並んで極めて重要だった」(daß die pragmatische Kategorie ‚Topik‘ für die syntaktische Struktur des Mhd. neben der Kategorie ‚Subjekt‘ eine ausschlaggebende Rolle spielt. (207頁))と論じている。

2d des nam in michel wunder
this.GEN take.PST.3SG him.ACC much.NOM wonder.NOM
und vuorte si besunder
and lead.PST.3SG her.ACC Aside

2. とりたて表現について

[3] あの人だけ、時間通りに来た。【限定】

Nur der ist pünktlich gekommen.
only he.NOM is.AUX punctually come.PP

[4] これはここでしか買えない。【限定・否定との共起】

Dies kann man nur hier kauf-en.
this.ACC can.3SG one.NOM only here buy-INF
これはここでだけ買える。

[5] その家にいたのは子供ばかりだった。【限定・多数】

In dem Haus war-en nur Kind-er.
in the.DAT house.DAT be.PST-PL only child-PL.NOM
その家には子供だけがいた。

[3]の「あの人」は指示代名詞 *der* で表してある。女性の場合は *die* となる。また、*ist ...gekommen* で *kommen* の現在完了形となっている。[4]の「...しか～ない」は、ドイツ語では「...だけ～(肯定)」のように表現するのが普通である。[5]の「ばかり」には *nur* の他に *lauter* もあり得るが、*lauter* だと限定の意味は弱まり、「子供以外にも人はいた」という含みを持つというインフォーマントの指摘があった。[3]から[5]の限定はいずれも *nur* (*only*) で表現できる。

[6] 次回こそ、失敗しないようにしよう。【限定・強調】

Das nächst-e Mal darf es auf kein-en Fall scheiter-n.
the.ACC next-ACC time.ACC may.3SG it.NOM on no-ACC case.ACC fail-INF
次回、それは絶対に失敗してはならない。

[3]から[5]の限定とは異なり、[6]では「次回」に掛かる「こそ」に相当するような語句は用いられずに、*auf keinen Fall* 「決して～ない」で「他はともかく次回は」という限定・強調の意味を表している。⁵ アクセントは *keinen* に置く。伊藤/クルマス『ドイツ語表現辞典』(1984)の見出し語「～こそ」の例文 i も[6]と同様に「今年はきつと～するぞ」で「今年こそ」という意味を表している。尤も、岩崎(1998:332f.)に挙がっている例文 ii のように *ebenjetzt* 「まさに今」で「今こそ」という意味を表している例もある。

⁵ 査読者から、[6]では、次回だけ失敗しなければよいのではなく、その次以降も失敗しないことを望んでいられるので、この「次回こそ」は「限定」の例というより、失敗が続いたこれまでの状況に対する「対比」の例と考える方が妥当ではないかという指摘を受けた。同様に例文 i の「今年こそ」も去年までとの「対比」と見なせる。

i In dies-em Jahr werd-e ich bestimmt Tagebuch führ-en.
 in this-DAT year.DAT will-1SG I.NOM definitely diary.ACC keep-INF
 「今年こそ日記をつけよう。」(＜今年私はきっと日記をつけるぞ)

ii Eben jetzt brauch-en wir das Geld
 just now need-PL we.NOM the.ACC money.ACC
 「今こそ(＜まさに今), 私たちにはその金が必要なのだ。」

[7] 疲れたね、お茶でも飲もう。【反限定・例示】

a War das anstrengend!
 be.PAST.3SG it.NOM exhausting
 あれは疲れさせることだった!

b Woll-en wir etwas trink-en, Tee oder Etwas ander-es?
 want-PL we.NOM something.ACC drink-INF tea.ACC or something.ACC else-ACC
 私たちは何か飲もうか、お茶あるいは何か別の物を。

[7]では「お茶でも」を「お茶あるいは何か別の物を」として表している。また、伊藤/クルマス(1984:606)の見出し語「～でも」には「こんなとき、中村君でもいてくれたらなあ。」Wenn nur so jemand wie Nakamura jetzt hier wäre. (＜もし中村みたいなそんな誰かが今ここにいてくれさえすればなあ), あるいは「来週にでもあいましょう。」Wir wollen uns nächste Woche oder so treffen!(＜私たちは来週かそのあたりに会おう)のような例文が挙げられている。不定代名詞や oder so 「あるいはそのような」などで「反限定」を表している。

[8] 水さえあれば、数日間は大丈夫だ。【極端・意外】

Wenn du wenigstens/nur Wasser ha-st, kann-st du es einige
 if you.NOM at least/only water.ACC have-2SG can-2SG you.NOM it.ACC some-PL.ACC
 Tag-e aushalt-en.
 day-PL.ACC stand-INF
 君が少なくとも/ただ水を持っていれば、君は数日間耐えられる。

es は形式的な対格目的語, es aushalten で「耐える」という意味を表す。「…さえあれば」をドイツ語では「すくなくとも…があれば」あるいは「ただ…があれば」として表せる。

[9] 小さい子供まで、その仕事の手伝いをさせられた。【極端・意外】

a Bis zu klein-en Kind-er-n muss-te-n all-e Bei der Arbeit
 up to small-PL.DAT child-PL-DAT must-PST-PL all-PL.NOM With the.DAT work.DAT
 helfen.
 help-INF
 小さい子供たちまで全員がその仕事の手伝いをしなければならなかった。

- b Sogar klein-e Kind-er muss-te-n bei der Arbeit helf-en.
even small-PL.NOM child-PL.NOM must-PST-PL with the.DAT work.DAT help-INF
小さい子供たちさえもその仕事の手伝いをしなければならなかった。

a の bis zu は具体的・抽象的な到達点を表す。この例文では「(大人, 青年, 少年... だけでなく) 小さい子供たちに至るまで」という意味を表す。なお, 日本語の「小さい子供まで」は「小さい子供までが」とも言えることから主語と見なせるが, ドイツ語の bis zu kleinen Kindern は統語的に主語ではないので, 別に alle 「全員が」のような主格の表現が必要になる。⁶ b の sogar は, 期待・予測を上回り「それどころか…さえ」という意味を表す。なお, 日本語の使役受身「～させられる」は müssen 「～ねばならない」とドイツ語に訳されることが多い。

[10] 私はお金なんか欲しくない。【反極端・低評価】

- a Ich möchte kein Geld.
I.NOM want.1SG no.ACC money.ACC
私はお金を欲しくない。
- b So etwas Unwichtig-es wie Geld brauch-e ich nicht.
such something unimportant-ACC Like money.ACC need-1SG I.NOM not
お金のように非重要なものを私は必要としない。

ドイツ語では通常, a のように「～なんか」の意味を明示的には表現しないが, 説明的に表現するとしたらたとえば b のような可能性がある。なお, 伊藤/クルマス (667f.) には「僕は (絵さえかいていれば幸せなので,) 金などほしくありません。」 Ich ... habe kein Verlangen nach Geld oder so. (僕は... 金のようなものへの欲求はない) という例が挙げてある。この例では[7]のように対象を非明確化 (反限定) はしているが, 低評価は明示されていない。

[11] 自分の部屋ぐらい、自分できれいにしなさい。【反極端・最低限】

- Du muss-t wenigstens dein eigen-es Zimmer (selber) aufräum-en.
you must-2SG at least your.ACC own-ACC room.ACC (yourself) clear up-INF
君は少なくとも君自信の部屋を (自分で) 片付けなければならない。

最低限の「…ぐらい」は wenigstens 「少なくとも…」で表現できる。伊藤/クルマス (268) の「ひげぐらいはそって出かせなさい。」 Du solltest dich zumindest rasieren, bevor du ausgehst. (君は少なくとも髭をそる方がよい, 君が外出する前に) でも zumindest 「少なくとも」が用いられている。尤も, 同書には「それくらいはだれにでもできる。」 So etwas könnte doch jeder machen. (そんなこと誰でも出来るよ) のように「最低限」という意味を明示しない例も見られる。

⁶ 「なお」から「必要になる」までは, 査読者の指摘を受けて加筆した。

[12] 私にもちょうだい。【類似・類似】

Gib mir bitte Auch so eins!
give.IMP me.DAT please Also such one.ACC
私にもどうかそのようなものを（一つ）下さい。

Ich möchte das auch bitte!
I.NOM want.1SG it.ACC Also please
私もそれが欲しい、どうか。

[13] お父さんもう帰って来たね。お母さんは？【反類似・対比（疑問）】

Dein Vater Ist ja schon zurück. Und dein-e Mutter?
your.NOM father.NOM be.3SG PTCL already Back and your-NOM mother.NOM
君のお父さんはもう戻っているね。それで、君のお母さん？

[12]の「…も」には auch がほぼ対応するが、[13]の対比の「…は」には対応する語はドイツ語にはない。

3. 不定表現について

風間（2017）は Haspelmath による類型論的な記述を基に、諸言語の不定代名詞（不定表現）の類型を概観し、不定代名詞が（ア）「誰」「何」のような疑問代名詞と近い関係を持っている言語、（イ）「人」や「物」のような汎称的名詞（generic nouns）と近い関係を持っている言語、（ウ）そのどちらとも関係のない特別な表現（special expressions）によって表す言語などのタイプに分かれるとまとめている。

ドイツ語で「誰か」に当たる表現としては jemand, irgendjemand, wer, irgendwer, einer, irgendeiner がある。jemand 「誰か/ある人」は元々は je（何らかの）と man（人間）からなる合成語で、語末の d は Epithese で後から添加された（中高ドイツ語 ieman > 現代ドイツ語 jemand）。これは（イ）に当たる。wer は疑問代名詞「誰が」だが、口語で「誰かが」としても用いられる。これは（ア）に当たる。einer は数詞 ein 「ひとつの」が「ある」という意味に転じ、これに男性・単数の語尾 -er が付いて「ある人」となった。女性なら eine という形になる。これは（ウ）ということになるだろう。いずれも前に irgend が付くと「何らかの」という不定性が強められる。

[14] 「誰か（が）電話してきたよ。」【特定未知（specific unknown）】

Jemand ha-t für dich angerufen.
somebody have-3SG for you.ACC call.PP
誰かがあなたに向けて電話した。

jemand の代わりに irgendjemand, irgendwer も可能。einer/eine も可能（口語的）。

[15] 「誰かに聞いてみよう。」【非現実不特定（irrealis non-specific）】

Lass uns jemand-en frag-en.
let us.AKK somebody-ACC ask-INF

jemanden の代わりに irgendjemanden, irgendwen を用いると「誰でもいいから誰かに」という意味がより強く

なる。einen も可能ではあるが、インフォーマントの語感ではやや容認度が落ちるとのこと。

[16] 「私のいない間に誰か来た？」【疑問 (question)】

War jemand da, während ich weg war?
be.PST.3SG anybody.NOM there while I.NOM away be.PST.1SG

[17] 「誰か来たら、私に教えてください。」【条件節内 (conditional)】

Sag mir Bescheid, wenn Jemand komm-t.
say.IMP me.DAT information.ACC if somebody.NOM come-3SG

[16], [17]ともに, jemand の代わりに irgendjemand, irgendwer も可能。einer も可能とのこと。

[18] 「今日は誰も来るとは思わない。／今日は誰も来ないと思う。」【間接 (全部) 否定 (indirect negation)】

a) Ich glaub-e nicht, dass heute jemand komm-t.
I.NOM think-1SG not that today somebody.NOM come-3SG
私は思わない, 今日誰かが来ると。

インフォーマントによると, a)の jemand の代りに irgendjemand あるいは irgendwer とするとより自然に感じるといふ。irgend で不定性が強まった「そもそも誰かが来る」の方が, 「私は…とは思わない」と否定される内容に適しているということなのだろう。なお, einer も可能。

b) Ich glaub-e, dass heute niemand/kein-er komm-t.
I.NOM think-1SG that today nobody.NOM/no one-NOM come-3SG
私は思う, 今日は誰も来ないと。

インフォーマントによると a) 「誰かが来る」と思わないの方が b) 「誰も来ない」と思うより自然とのことだが, これについてはインフォーマントがどのような文脈を想定するかで変わるようである。査読者の指摘を受けて調査した別のインフォーマントは a)より b)の方が自然に感じられるとのことであり, a)は「今日だれか来るよね」などの発言への反応としては極めて自然だが, そのような文脈がなければ b)の方が自然に感じるとのことであった。なお, niemand / keiner は否定の不定代名詞で「誰も…ない」という意味。

[19] 「そこには今誰もいないよ。」【直接 (全部) 否定 (direct negation)】

Da ist jetzt niemand/kein-er.
there be.3SG now nobody.NOM/no one-NOM

[20] 「(それは) 誰でもできる。」【自由選択 (free-choice)】

Das kann jed-er.
that.ACC can.3SG everyone-NOM

[21] 「そんなこと (は)、みんな知っているんじゃないか!?!」【自由選択を示す「みんな」】

a) Das weiß doch jed-er.
that.ACC know.3SG PTCL everyone-NOM

b) Das wiss-en doch alle.
that.ACC know-PL PTCL all-PL.NOM

[22] 「そんなもの、誰が買うんだよ!?!、誰も買うわけじゃないか!」【反語】

Wer kauf-t denn so was? Das kauf-t doch bestimmt
who.NOM buy-3SG PTCL such something.ACC that.ACC buy-3SG PTCL definitely
niemand/kein-er.
nobody.NOM /no one-NOM

誰がいったいそんなものを買うか?それはきっと誰も買わないじゃないか。

[20]の jeder は任意の人を表す不定代名詞で「誰でも」、[21b]の alle は複数形で「みんな・全員」の意味。

4. なわ張り理論について

[23] 「君は英語がうまいね。」

「君 (=聞き手) が英語がうまい」という情報が、神尾 (1990) の「情報のなわ張り理論」の枠組みでの「話し手のなわ張り内」にあり、かつ「聞き手のなわ張り内」にある、つまり当該の情報が話し手と聞き手の両者に帰属するという想定 of 例文である。神尾 (1990: 33f.) によれば、「君が英語がうまい」ということを話し手が直接認識したという点で、この情報は話し手に帰属し、聞き手自身の能力に関するという点で、この情報は聞き手にも帰属する。このような状況で、日本語では「直接形」— すなわち「確定的な断言の形を取る文型」(神尾 1990: 16) — に終助詞「ね」がつく形が用いられる。それに対して英語では、付加疑問を加えて「間接形」— すなわち「断言を避けた不確定な文形」(神尾 1990: 16) — を取ることもあるが、基本的には直接形で問題ないとのことである。ドイツ語でも基本的には直接形で問題ないが、a のように心態詞 ja などを添加することもできる。

a Du kann-st/sprich-st Ja gut Englisch.
you.NOM can-2SG/speak-2SG PTCL (<yes) well English.ACC
君は上手に英語ができるね/英語を話すね。

このような ja を用いた類例を岩崎 (1998: 691ff.) から引用する。

b Was ist mit dir? Du bist ja heute so still.
what.NOM be.3SG with you.DAT you.NOM be.2SG PTCL Today so quiet
きみ、どうしたんだい?きょうは、ばかにおとなしいじゃないか。

b は「平叙文に用いられ、人・事物などに関して、その場で確認したことの意外さについての話し手の驚きを反映して」(岩崎 1998: 691) という用法の例文である。ドイツ語の ja についてのこの記述と同様、日本語の [23] も「その場で確認したことの意外さについての話し手の驚きを反映して」という含みを持ちうると思われる。一方、次の c は「平叙文に用いられ、陳述内容が、聞き手と共通の既知の事柄である、あるいは自明の事

実であるという、話し手の判断を示して」(岩崎 1998: 693) という用法の例文である。「君がそのことを知っている」ということを話し手が認識していて、聞き手もそのことを認識している (はずだ) ということを ja は表している。

c Warum frag-st du? Du weiß-t es ja.
why ask-2SG you.NOM you.NOM know-2SG it.ACC PTCL
なぜ聞くんだ? 君だって知ってるじゃないか。

c では、話し手は「聞き手がそれを知っている」ことを「直接その場で確認」したわけではないので、その点で a や b とは異なる。その違いは、b が「きょうは、ばかにおとなしいね。」と言い換えられるが、c は平叙文だと「君だって知ってるね。」は極めて不自然になることにも見られる。⁷ また、c の ja は「聞き手の予備知識を前提とした (理由づけ) や (反論) などにも、しばしば用いられる」(岩崎 1998: 694) とあるように、b より積極的な意味合いがあると言える。

[24] 「君は退屈そうだね。」

「君 (=聞き手) が退屈している」という情報が、「話し手のなわ張り外」にあり、かつ「聞き手のなわ張り内」にある、つまり当該の情報が聞き手にのみ帰属するという想定 of 例文である。神尾 (1990: 28f., 44f.) によれば、日本語では「退屈そうだ」や「出張のようだ」などの間接形に終助詞「ね」がつく形が用いられ、英語でも「seem, look, appear, may など不確定性を意味する非断定的な動詞または助動詞を含む表現」などの間接形が用いられるとのことである。ドイツ語では a のように、述語動詞は直説法 (indicative) のままで、心態詞 wohl などを用いて表す方法、b のように「~のようだ」という意味の scheinen と zu 不定詞を組み合わせる方法、c のように付加疑問文の類の表現を文末に添える方法が考えられる。いずれも神尾の「間接形」に相当すると言える。a は平叙文の語順を持つ決定疑問文であり、文末は下降調になる。

a Dir ist Wohl langweilig?
you.DAT be.3SG supposedly bored
君は退屈なんだろう? (<推定するところ退屈だ)

b Dir schein-t langweilig zu sein
you.DAT seem-3SG Bored to be.INF
君は退屈しているように見える。

c Dir ist langweilig, nicht wahr/gell?
you.DAT be.3SG Bored aren't you/right?
君は退屈だ、そうでしょう?

[25] 「明日も寒いらしいよ。」

「明日も寒い」という情報が、「話し手のなわ張り外」にあり、かつ「聞き手のなわ張り外」にある、つまり当該の情報が話し手にも聞き手にも帰属しないという想定 of 例文である。神尾 (1990: 30f., 46f.) によれば、この場合日本語では「寒いらしい」や「吉田君はもう退院したんじゃない」のような間接形が用いられ、英語でも I hear winter in Quebec is hard. (ケベックの冬は厳しいらしい) や I think this picture is good. (この絵はいいよ) のような間接形を用いるとのことである。ドイツ語でも a のように「~と聞いた」のような表現や、

⁷ この部分は査読者のコメントを受けて大幅に加筆した。

bのように、「伝聞」を表す話法の助動詞 *sollen* を用いて表す表現などがある。

a Ich hab-e gehört, Dass es morgen kalt (sein) wird.
I.NOM have-1SG hear.PP That it.NOM tomorrow cold (be.INF) will.3SG
明日は寒くなるだろうと聞いた。

b Morgen soll Es auch kalt sein.
tomorrow will.3SG it.NOM Also cold be.INF
明日も寒いとのことだ。

参考文献

- 伊藤小枝子/フロリアン・クルマス (1984), 『会話作文 ドイツ語表現辞典』東京: 朝日出版社
岩崎英二郎 (1998) 『ドイツ語副詞辞典』東京: 白水社
風間伸次郎 (2017) 「特集 情報構造の諸要素 まえがき」東京外国語大学『語学研究所論集』第 22 号, pp.22-45.
神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』東京: 大修館書店.
Ogino, Kurahei (1997), *Mir ist wê und bin gesund – Subjekt- und Topikprominenz im Mittelhochdeutschen*, Hayakawa, T. et. al (Hg.), *Sprache, Literatur und Kommunikation im kulturellen Wandel. Festschrift für Eijiro Iwasaki anlässlich seines 75. Geburtstag*. Tokyo: Dogakusha. 202-215.

執筆者連絡先: narita@tufs.ac.jp

原稿受理: 2019 年 5 月 8 日